

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第295集

北足立郡伊奈町

原／戸崎前／薬師堂根
相野谷／向原／北

上尾都市計画事業伊奈特定土地区画整理事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

— VII —

2004

埼玉県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県は首都近郊にあり、ベッドタウンとして近年人口が増加している地域であります。そのため、高次の都市機能が集中する21世紀型の中核都市の形成を目指し、伊奈町に職住環境が充実したモデルタウンを建設することになりました。現在、その一環として、上尾都市計画事業伊奈特定土地区画整理事業が進められております。

事業地内には、昔の人々がこの地で暮らした足跡が数多く残されております。これら埋蔵文化財の取扱いについては、関係機関が慎重に協議してまいりましたが、一部についてはやむを得ず記録保存の措置を講じることとなりました。

発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、埼玉県伊奈新都市建設事務所の委託を受け、当事業団が実施しました。

本報告書は、原遺跡第7次、薬師堂根遺跡第4次・第5次、戸崎前遺跡第11次・第12次、相野谷遺跡第4次、向原遺跡第12次・第13次、北遺跡第2次の発掘調査報告書であります。

戸崎前遺跡と薬師堂根遺跡からは、縄文時代早期の遺構・遺物が発見されました。なかでも戸崎前遺跡で見つかった大型住居跡は学術的にも注目されております。原遺跡は対岸に位置する北遺跡とともに、この地域を代表する縄文時代中期のムラの姿を示しており、今回の調査でも住居跡から多量の遺物が出土しました。薬師堂根遺跡や相野谷遺跡、向原遺跡からは、中世から近世にかけての遺構が数多く発見されました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行にいたるまで御協力いただきました埼玉県伊奈新都市建設事務所、伊奈町教育委員会、ならびに地元関係各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 桐川卓雄

例 言

- 1 本書は、埼玉県北足立郡伊奈町に所在する原遺跡第7次、戸崎前遺跡第11次・第12次、薬師堂根遺跡第4次・第5次、相野谷遺跡第4次、向原遺跡第12次・第13次、北遺跡第2次の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査に対する指示通知は以下のとおりである。

薬師堂根遺跡
第4次調査 平成11年12月4日付け 教文第2-112号
第5次調査 平成13年11月2日付け 教文第2-87号
戸崎前遺跡
第11次調査 平成13年3月13日付け 教文第2-120号
第12次調査 平成13年11月2日付け 教文第2-86号
向原遺跡
第12次調査 平成13年11月2日付け 教文第2-88号
第13次調査 平成14年10月15日付け 教文第2-66号
相野谷遺跡
第4次調査 平成14年10月15日付け 教文第2-67号
原遺跡
第7次調査 平成14年10月15日付け 教文第2-68号
北遺跡
第2次調査 平成14年10月15日付け 教文第2-69号
- 3 発掘調査は、上尾都市計画事業伊奈特定土地区画整理事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県の委託を受け、財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 各遺跡の発掘調査は、平成11年から平成14年にかけて実施され、橋本勉・木戸春夫・西井幸雄・吉田稔・赤熊浩一・山本靖・岡本健一・栗岡潤が担当した。
整理報告書作成作業は細田が担当した。
- 5 遺跡の基準点測量は中央航業株式会社に委託した。
- 6 発掘調査時の写真撮影は上記調査員が行った。遺物の写真撮影は大屋道則、細田 勝がおこない、橋本勉の協力があった。
- 7 出土品の整理および図版の作成は細田 勝が行い、石器実測・トレースを上野真由美、亀田直美が行った。
- 8 本書の執筆は細田 勝が行い、I-1を埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課が、IV・V・Ⅱ-1を金子直行が行った。
- 9 本書の編集は細田 勝が行い、成田由紀子の協力があつた。
- 10 本書にかかる資料は、平成13年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
- 11 本書の作成にあたり、以下の機関・諸氏からご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表します。
石塚和則 奥野変生 小宮雪晴 末次慎吾 田中和之 中野達哉

凡例

1 遺跡全体におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第Ⅱ系（原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく各座標置を示す。また、各挿図における方位指示はすべて座標北をあらわす。

2 各遺跡のグリッド表示は、現在までに調査された各遺跡の地区割をそのまま延長した。原点はX=1,000、Y=-20,000であり南東方向に10×10mで設定している。呼称は方眼の北西隅の杭名称を用い、南方向はアルファベット、東方向は数値で指数が増加する方法をとった。南北方向は、当初アルファベット一桁、一巡後二桁となるよう設定した。

3 測量、遺物実測の縮尺は以下のとおりである。

遺構	竪穴住居跡……………	1/60
	炉穴・土塼・井戸跡……………	1/60
	掘立柱建物跡……………	1/60
	溝跡……………	1/100
	遺構全体図（付図）……………	1/400
遺物	縄文土器実測図……………	1/3・1/4
	拓影図……………	1/3
	石器実測図……………	1/2・1/3
	土製品実測図……………	2/3・1/2




土師器・須恵器実測図……………1/4

その他、遺跡位置図、周辺地形図、遺構全体図（本文中）にはその都度縮尺率を示した。

4 遺構の表記記号は以下のとおりである。

SJ…………住居跡 SB…………掘立柱建物跡 SK…………土塼 FP…………炉穴 SD…………溝跡 SA…………欄柵

5 挿図で用いた網掛け部分の表示は、以下のとおりである。

-  焼土
-  土器赤色塗彩
-  土器黒色塗彩

なお土器断面に付随した網掛け線は、彩色の範囲を示している。

6 本報告書を刊行するに当たり、各次調査段階で個別に付けていた遺構番号を、各遺跡全体の通し番号に振り替えた。なお、遺構番号の新旧対照表を各遺跡の末尾に掲載した。

7 遺構断面図に表記した水準の記号は、海拔標高である。

8 本書に使用した地図は、建設省国土地理院発行の1/25000、伊奈町発行の都市計画図1/2500を、遺跡調査地点の表示には埼玉県伊奈新都市建設事務所提供の都市計画図1/1000を使用した。

目次

序
例言
凡例
目次

I 調査の概要	1	VI 葉師堂根遺跡第5次調査	139
1. 調査にいたる経過	1	1. 調査の概要	140
2. 発掘調査・報告書の経過	2	2. 検出された遺構と遺物	140
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	10	(1) 住居跡	140
II 遺跡の立地と環境	12	(2) 炉穴	152
III 原遺跡第7次調査	15	(3) 土壌	157
1. 調査の概要	16	(4) 溝跡	163
2. 検出された遺構と遺物	19	(5) 井戸跡・火葬跡	164
(1) 住居跡	19	(6) 掘立柱建物跡・ピット列	165
(2) 土壌	53	3. グリッド出土遺物	165
(3) 道路跡	61	IV 相野谷遺跡第4次調査	171
(4) 井戸跡	61	1. 調査の概要	172
3. グリッド出土遺物	62	2. 検出された遺構と遺物	172
IV 戸崎前遺跡第11次調査	67	(1) 土壌	172
1. 調査の概要	68	(2) 溝跡	181
2. 検出された遺構と遺物	68	(3) 井戸跡	184
(1) 掘立柱建物跡	68	(4) 欄跡	186
(2) 土壌	68	3. グリッド出土遺物	187
(3) 溝跡	77	IX 向原遺跡第12次調査	193
3. グリッド出土遺物	77	1. 調査の概要	194
V 戸崎前遺跡第12次調査	81	2. 検出された遺構と遺物	194
1. 調査の概要	82	(1) 土壌	194
2. 検出された遺構と遺物	84	(2) 溝跡	194
(1) 住居跡	84	X 向原遺跡第13次調査	197
(2) 炉穴	113	1. 調査の概要	199
(3) 土壌	116	2. 検出された遺構と遺物	199
(4) 溝跡	130	(1) 住居跡	199
VI 葉師堂根遺跡第4次調査	135	(2) 土壌	199
1. 調査の概要	136	(3) 溝跡	201
2. 検出された遺構と遺物	136	XI 北遺跡第2次調査	205

1. 調査の概要	206
2. 検出された遺構	206
(1) 土壌	206
(2) 溝跡	206

Ⅱ 調査の成果と課題	210
1. 縄文時代早期条痕文期の住居跡について	210
2. 原遺跡の集落変遷	220
3. 原遺跡出土土器について	223

挿 図 目 次

原遺跡

第1図 区画整理事業関係埋蔵文化財調査地点	3
第2図 原遺跡調査区	4
第3図 戸崎前遺跡調査区	5
第4図 薬師堂根遺跡調査区	6
第5図 相野谷遺跡調査区	7
第6図 向原遺跡調査区	8
第7図 北遺跡調査区	9
第8図 埼玉県の地形	12
第9図 周辺の遺跡	13
第10図 原遺跡全体図	17
第11図 第96・97号住居跡 (1)	18
第12図 第96・97号住居跡 (2)	19
第13図 第96・97号住居跡遺物出土状況	20
第14図 第96号住居跡出土遺物 (1)	23
第15図 第96号住居跡出土遺物 (2)	24
第16図 第96号住居跡出土遺物 (3)	25
第17図 第96号住居跡出土遺物 (4)	26
第18図 第96号住居跡出土遺物 (5)	27
第19図 第96号住居跡出土遺物 (6)	28
第20図 第97号住居跡出土遺物	29
第21図 第98号住居跡	30
第22図 第98号住居跡出土遺物	31
第23図 第99号住居跡	35
第24図 第99号住居跡遺物出土状況	36
第25図 第99号住居跡出土遺物 (1)	37
第26図 第99号住居跡出土遺物 (2)	38
第27図 第99号住居跡出土遺物 (3)	39
第28図 第99号住居跡出土遺物 (4)	40

第29図 第100号住居跡	43
第30図 第100号住居跡遺物出土状況	44
第31図 第100号住居跡	45
第32図 第100号住居跡出土遺物 (1)	45
第33図 第100号住居跡出土遺物 (2)	46
第34図 第100号住居跡出土遺物 (3)	47
第35図 第101号住居跡	49
第36図 第101号住居跡出土遺物	50
第37図 第102号住居跡	51
第38図 第103号住居跡	52
第39図 第103号住居跡出土遺物	52
第40図 土壌 (1)	55
第41図 土壌 (2)	56
第42図 土壌 (3)	57
第43図 土壌 (4)	58
第44図 土壌出土遺物	60
第45図 第1号道路跡	61
第46図 井戸跡	62
第47図 グリッド出土遺物	63

戸崎前遺跡第11次調査

第48図 戸崎前遺跡第11次全体図	69
第49図 第8号掘立柱建物跡	70
第50図 第9号掘立柱建物跡	70
第51図 土壌 (1)	73
第52図 土壌 (2)	74
第53図 土壌 (3)	75
第54図 土壌出土遺物	75
第55図 溝跡	77
第56図 グリッド出土遺物	78

戸崎前遺跡第12次調査

第57図	戸崎前遺跡第12次全体図	82・83
第58図	第93号住居跡	84
第59図	第93号住居跡出土遺物	84
第60図	第94号住居跡	85
第61図	第95号住居跡	86
第62図	第95号住居跡出土遺物	86
第63図	第96号住居跡	87
第64図	第96号住居跡出土遺物	88
第65図	第97号住居跡(1)	90
第66図	第97号住居跡(2)	91
第67図	第97号住居跡出土遺物	92
第68図	第98号住居跡	93
第69図	第99号住居跡	94
第70図	第99号住居跡出土遺物	94
第71図	第100号住居跡	95
第72図	第100号住居跡出土遺物	95
第73図	第101号住居跡	96
第74図	第101号住居跡出土遺物	97
第75図	第102号住居跡	98
第76図	第103号住居跡	98
第77図	第104号住居跡	99
第78図	第105号住居跡	99
第79図	第105号住居跡出土遺物	99
第80図	第106号住居跡	100
第81図	第106号住居跡出土遺物	101
第82図	第107号住居跡	102
第83図	第107号住居跡出土遺物	102
第84図	第108号住居跡	103
第85図	第109号住居跡	104
第86図	第109号住居跡出土遺物	104
第87図	第110号住居跡	105
第88図	第110号住居跡出土遺物	105
第89図	第111号住居跡	106
第90図	第112号住居跡	106
第91図	第112号住居跡出土遺物	106
第92図	第113号住居跡(1)	108

第93図	第113号住居跡(2)	109
第94図	第113号住居跡出土遺物	109
第95図	第114号住居跡	110
第96図	第115号住居跡	110
第97図	第116号住居跡	110
第98図	第117号住居跡	111
第99図	第118・119号住居跡	112
第100図	炉穴(1)	114
第101図	炉穴(2)	115
第102図	炉穴出土遺物	116
第103図	土壇(1)	118
第104図	土壇(2)	119
第105図	土壇(3)	121
第106図	土壇(4)	122
第107図	土壇(5)	124
第108図	土壇(6)	126
第109図	土壇出土遺物	127
第110図	溝跡	129
第111図	グリッド出土遺物(1)	131
第112図	グリッド出土遺物(2)	132
薬師堂根遺跡第4次調査		
第113図	薬師堂根遺跡第4次調査遺構全体図	137
第114図	土壇	138
薬師堂根遺跡第5次調査		
第115図	薬師堂根遺跡第5次調査遺構全体図	141
第116図	第40号住居跡	142
第117図	第40号住居跡出土遺物	142
第118図	第41号住居跡	143
第119図	第42号住居跡	143
第120図	第41・42号住居跡出土遺物	143
第121図	第43号住居跡	144
第122図	第45号住居跡	146
第123図	第45号住居跡出土遺物	147
第124図	第46号住居跡	148
第125図	第46号住居跡出土遺物	149
第126図	第47号住居跡	150
第127図	第47号住居跡出土遺物	150

第128図	伊穴 (1)……………	153	第148図	向原遺跡第12次調査遺構全体図……………	195
第129図	伊穴 (2)……………	154	第149図	溝跡……………	196
第130図	伊穴 (3)……………	155	第150図	土壌……………	196
第131図	伊穴出土遺物……………	156	向原遺跡第13次調査		
第132図	土壌 (1)……………	160	第151図	向原遺跡第13次調査遺構全体図……………	198
第133図	土壌 (2)……………	161	第152図	第97号住居跡……………	200
第134図	溝跡……………	162	第153図	土壌……………	202
第135図	井戸跡・火葬跡……………	163	第154図	溝跡……………	203
第136図	第22号掘立柱建物跡・第1号ピット列……………	164	北遺跡第2次調査		
第137図	グリッド出土遺物……………	166	第155図	北遺跡第2次調査遺構全体図……………	207
相野谷遺跡第4次調査			第156図	土壌・溝跡……………	208
第138図	相野谷遺跡第4次調査遺構全体図……………	173	調査の成果と課題		
第139図	土壌 (1)……………	175	第157図	戸崎前遺跡・薬師堂根遺跡の早期条痕文期の住居跡……………	211
第140図	土壌 (2)……………	177	第158図	埼玉県内の早期条痕文期の住居跡 (1)……………	212
第141図	土壌 (3)……………	178	第159図	埼玉県内の早期条痕文期の住居跡 (2)……………	213
第142図	土壌 (4)……………	179	第160図	早期条痕文系野島式期の大型住居跡……………	216
第143図	土壌 (5)……………	180	第161図	早期各時期の大型住居跡……………	217
第144図	溝跡 (1)……………	182	第162図	原遺跡の集落変遷……………	221
第145図	溝跡 (2)……………	183	第163図	原遺跡出土土器……………	225
第146図	井戸跡・ピット列……………	185	第164図	周辺地域出土器群 (1)……………	227
第147図	土壌・井戸跡・グリッド出土遺物……………	186	第165図	周辺地域出土器群 (2)……………	229
向原遺跡第12次調査			第166図	周辺地域出土器群 (3)……………	231

表 目 次

第1表	各遺跡の調査経過	第12表	戸崎前遺跡第12次調査遺構新旧対照表
第2表	原遺跡第7次調査出土石器観察表	第13表	薬師堂根遺跡第4次調査土壌計測表
第3表	原遺跡第7次調査出土土製品観察表	第14表	薬師堂根遺跡第5次調査伊穴・土壌・溝跡・井戸跡計測表
第4表	原遺跡第7次調査土壌計測表	第15表	薬師堂根遺跡第5次調査ピット計測表
第5表	原遺跡第7次調査ピット計測表	第16表	薬師堂根遺跡第4次調査新旧対照表
第6表	原遺跡第7次調査遺構新旧対照表	第17表	薬師堂根遺跡第5次調査新旧対照表
第7表	戸崎前遺跡第11次調査土壌計測表	第18表	相野谷遺跡第4次調査土壌・溝跡計測表
第8表	戸崎前遺跡第11次調査ピット計測表	第19表	相野谷遺跡第4次調査ピット計測表
第9表	戸崎前調査第11次調査新旧対照表	第20表	相野谷遺跡第4次調査遺構新旧対照表
第10表	戸崎前遺跡第12次調査土壌計測表	第21表	向原遺跡第12次調査土壌・溝跡計測表
第11表	戸崎前遺跡第12次ピット計測表		

第22表 向原遺跡第12次調査遺構新旧対照表
第23表 向原遺跡第13次調査土壌・溝跡計測表

第24表 向原遺跡第13次調査遺構新旧対照表
第25表 北遺跡第2次調査土壌・溝跡計測表

図版目次

原遺跡

図版1 遺跡全景(北東から)(1)
遺跡全景(北西から)(2)
図版2 第96号住居跡遺物出土状況(1)
第96号住居跡遺物出土状況(2)
図版3 第96・97号住居跡遺物出土状況(1)
第96・97号住居跡全景(2)
図版4 第98号住居跡全景(1)
第98号住居跡遺物出土状況(2)
図版5 第99号住居跡遺物出土状況(1)
第99号住居跡遺物出土状況(2)
図版6 第99号住居跡炉体土器検出状況(1)
第99号住居跡全景(2)
図版7 第100号住居跡遺物出土状況(1)
第100号住居跡炉体土器検出状況(2)
図版8 第100号住居跡全景
第101・102号住居跡全景
図版9 第96号住居跡出土土器
第96号住居跡出土土器
図版10 第96号住居跡出土土器
第99号住居跡出土土器
第99号住居跡出土土器
図版11 第96号住居跡(第14図1)
第96号住居跡(第14図2)
第96号住居跡(第14図3)
第96号住居跡(第14図5)
第96号住居跡(第14図6)
第96号住居跡(第14図7)
図版12 第96号住居跡(第15図8)
第96号住居跡(第15図9)
第98号住居跡(第22図1)

第98号住居跡炉体(第22図2)
第98号住居跡(第22図3)
第99号住居跡炉体(第25図1)
図版13 第99号住居跡(第25図2)
第99号住居跡(第26図7)
第99号住居跡(第25図3)
第99号住居跡(第25図3)
第99号住居跡(第26図6)
第99号住居跡(第26図4)
図版14 第99号住居跡(第26図5)
第99号住居跡(第26図8)
第99号住居跡(第27図10)
第99号住居跡(第27図12)
第99号住居跡(第27図11)
第99号住居跡(第27図13)
図版15 第100号住居跡炉体(第32図1)
第100号住居跡(第32図2)
第100号住居跡(第32図3)
第100号住居跡(第32図4)
グリッド出土(第47図2)
グリッド出土(第47図1)
図版16 第314号土壌(第44図17)
第314号土壌(第44図16)
第314号土壌(第44図18)
第314号土壌(第44図20)
第314号土壌(第44図24)
第314号土壌(第44図23)
図版17 第96号住居跡出土遺物(1)
第96号住居跡出土遺物(2)
図版18 第96号住居跡出土遺物(3)
第96号住居跡出土遺物(4)

- 図版19 第96号住居跡出土遺物 (5)
第96号住居跡出土遺物 (6)
- 図版20 第96号住居跡出土遺物 (7) (表面)
第96号住居跡出土遺物 (8) (裏面)
- 図版21 第96号住居跡出土遺物 (9)
第97号住居跡出土遺物
- 図版22 第99号住居跡出土遺物 (1)
第99号住居跡出土遺物 (2)
- 図版23 第99号住居跡出土遺物 (3)
第99号住居跡出土遺物 (4)
- 図版24 第100号住居跡出土遺物 (1)
第100号住居跡出土遺物 (2)
- 図版25 第100号住居跡出土遺物
第101号住居跡出土遺物
- 図版26 グリッド出土遺物 (1)
グリッド出土遺物 (2)
- 戸崎前遺跡第11次調査**
- 図版27 遺跡遠景 (東から) (1)
遺跡遠景 (西から) (2)
- 図版28 第8・9号掘立柱建物跡
第9号掘立柱建物跡
- 戸崎前遺跡第12次調査**
- 図版29 遺跡遠景 (グリッド1～3列東から)
第93号住居跡全景
- 図版30 第95号住居跡全景
第96号住居跡全景
- 図版31 第97号住居跡全景
第100号住居跡全景
- 図版32 第101号住居跡全景 (1)
第101号住居跡地床炉 (2)
- 図版33 第103号住居跡
第104号住居跡
- 図版34 第106号住居跡
第108号住居跡
- 図版35 第109号住居跡遺物出土状況 (1)
第109号住居跡全景 (2)
- 図版36 第110号住居跡全景
- 第111号住居跡全景
- 図版37 第112号住居跡全景
第113号住居跡全景
- 図版38 第115・109号住居跡全景
第117号住居跡全景
- 図版39 第3号炉穴全景
第5号炉穴全景
- 図版40 第6号炉穴全景
第7号炉穴全景
- 図版41 第529号土城
第532号土城
第536号土城
第537号土城
第538号土城
第539号土城
第540号土城
第541号土城
- 図版42 第545号土城
第550号土城
第556号土城
第546・558号土城
第573号土城
第586号土城
第588・589号土城
第591号土城
第498号土城
- 図版43 第498号土城出土遺物
第96号住居跡
第99号住居跡
第106号住居跡
第109号住居跡
第109号住居跡
- 図版44 第93号住居跡
第101号住居跡
- 図版45 第97号住居跡出土遺物 (1)
第97号住居跡出土遺物 (2)
- 図版46 第110号住居跡出土遺物

第112号住居跡出土遺物

図版47 第113号住居跡出土遺物

グリッド出土遺物 (1)

図版48 グリッド出土遺物 (2)

グリッド出土遺物 (3)

葉師堂根遺跡第4次調査

図版49 遺跡全景 (北西から) (1)

遺跡全景 (南から) (2)

葉師堂根遺跡第5次調査

図版50 遺跡全景 (東から) (1)

遺跡全景 (東から) (2)

図版51 第40号住居跡遺物出土状況 (1)

第40号住居跡遺物出土状況 (2)

図版52 第40号住居跡全景 (1)

第40号住居跡掘り方全景 (2)

図版53 第42号住居跡全景

第43号住居跡全景

図版54 第45号住居跡遺物出土状況 (1)

第45号住居跡全景 (2)

図版55 第46号住居跡遺物出土状況 (1)

第46号住居跡全景 (2)

図版56 第47号住居跡全景

第12号炉穴全景

図版57 第13号炉穴全景

第16号炉穴全景

図版58 第17号炉穴全景

土壌群

図版59 ビット列全景

第88号溝全景

図版60 第46号住居跡

第46号住居跡

第46号住居跡

第42号住居跡

第40号住居跡

第40号住居跡

図版61 第45号住居跡出土遺物 (1)

第45号住居跡出土遺物 (2)

図版62 第46号住居跡出土遺物

第17号炉穴出土遺物

図版63 第13号炉穴出土遺物

第17号炉穴出土遺物

図版64 グリッド出土遺物 (1)

グリッド出土遺物 (2)

相野谷遺跡第4次調査

図版65 遺跡全景 (南西から) (1)

遺跡全景 (北東から) (2)

図版66 遺跡全景 (南から) (1)

遺跡全景 (北から) (2)

図版67 第5号溝全景

第2号井戸跡全景

第3号井戸跡全景

第4号井戸跡遺物出土状況

第4号井戸跡全景

図版68 第83号土壌

第20号土壌

第35号土壌

第4号井戸跡

グリッド

グリッド

向原遺跡第12次調査

図版69 遺跡全景 (南東から) (1)

遺跡全景 (北西から) (2)

向原遺跡第13次調査

図版70 遺跡全景 (北東から) (1)

遺跡全景 (南西から) (2)

図版71 第97号住居跡全景

地下式墓

貯蔵穴

第591号土壌

第592号土壌

北遺跡第2次調査

図版72 遺跡全景 (北から)

遺跡全景 (南から)

付 図

付図1 原遺跡第7次調査遺構全体図

付図2 戸崎前遺跡第11次調査遺構全体図

付図3 戸崎前遺跡第12次調査遺構全体図

付図4 葉師堂遺跡第5次調査遺構全体図

付図5 相野谷遺跡第4次調査遺構全体図

付図6 向原遺跡第13次調査遺構全体図

I 調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、伊奈町北部地域において、職・住・遊・学などが集積した中核都市圏の形成に寄与するため、21世紀に向けたモデルタウンの建設を進めている。その一環として乱開発を防止するとともに田園と融和した地域社会の形成を図るための基礎づくりを目的として、上尾都市計画事業伊奈特定土地区画整理事業が計画された。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、こうした各種開発事業に対応するため、開発部局と事前協議を行い、文化財保護と開発事業との調整を進めているところである。

当事業にかかる埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、伊奈新都市建設事務所より文化財保護課長あて、昭和63年1月6日付け伊都建第587号で、埋蔵文化財の所在について照会があった。これに対し、文化財保護課では詳細分布調査を行い、それに基づいて9ヶ所の埋蔵文化財包蔵地の所在を、平成元年6月26日付け教文第444号で回答した。取扱いについては、対象地が広範囲であるため、事業計画との調整を図りながら別途試掘調査を実施することとした。

平成11年度から14年度における薬師堂根、戸崎前、向原、相野谷、原、北遺跡の発掘調査については、調査実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、伊奈新都市建設事務所、文化財保護課の三者により、調査方法、期間、経費等について協議が行われた。

その結果、平成11年度には薬師堂根遺跡第4次調査、平成12年度には戸崎前遺跡第11次調査、平成13

年度には薬師堂根遺跡第5次調査、戸崎前遺跡第12次調査、向原遺跡第12次調査、平成14年度には向原遺跡第13次調査、相野谷遺跡第4次調査、原遺跡第7次調査、北遺跡第2次調査を実施することで協議が整った。

各年度における発掘調査に先立って、埼玉県知事から文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく発掘通知が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団からは同法第57条第1項の規定に基づく発掘調査届が提出され、発掘調査が実施された。

発掘調査届に対する指示通知番号は、次のとおりである。

薬師堂根遺跡

第4次 平成11年12月4日付け 教文第2-112号

第5次 平成13年11月2日付け 教文第2-87号

戸崎前遺跡

第11次 平成13年3月13日付け 教文第2-120号

第12次 平成13年11月2日付け 教文第2-86号

向原遺跡

第12次 平成13年11月2日付け 教文第2-88号

第13次 平成14年10月15日付け 教文第2-66号

相野谷遺跡

第4次 平成14年10月15日付け 教文第2-67号

原遺跡

第7次 平成14年10月15日付け 教文第2-68号

北遺跡

第2次 平成14年10月15日付け 教文第2-69号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

上尾都市計画事業伊奈特定土地地区画整理事業地内に所在する周知の遺跡は、薬師堂根遺跡・戸崎前遺跡・向原遺跡・原遺跡・北遺跡・相野谷遺跡である。各遺跡の発掘調査は、土地地区画整理事業の進展にともない、平成5年度から実施されている。今回報告の対象となった各遺跡の年度ごとの調査期間と調査面積は、第1表のとおりである。

平成11年度

平成11年度は、向原遺跡第9次調査と併せて実施した。調査に先駆けて事務所を設置し、薬師堂根遺跡第4次調査は、2月初旬から重機による表土剥ぎと補助員による遺構確認を実施した。確認できた遺構を順次精査し、遺構・遺物の検出状況を逐次写真撮影・測量によって記録した。12月末に埋戻しを行い、薬師堂根遺跡第4次調査を終了した。

平成12年度

平成12年度は、7月1日から13年3月23日にかけて、向原遺跡第10次・第11次調査を実施した。戸崎前遺跡第11次調査は平成13年3月から、重機による表土剥ぎと基準点測量を行い、その後、補助員による遺構確認を行い、遺構を精査した。遺構・遺物の検出・完掘状況を写真撮影すると共に、測量を行って記録した。3月下旬に埋戻しを行い、調査を終了

した。

平成13年度

平成13年度は、戸崎前遺跡第12次調査・薬師堂根遺跡第5次調査・向原遺跡第12次調査を実施した。

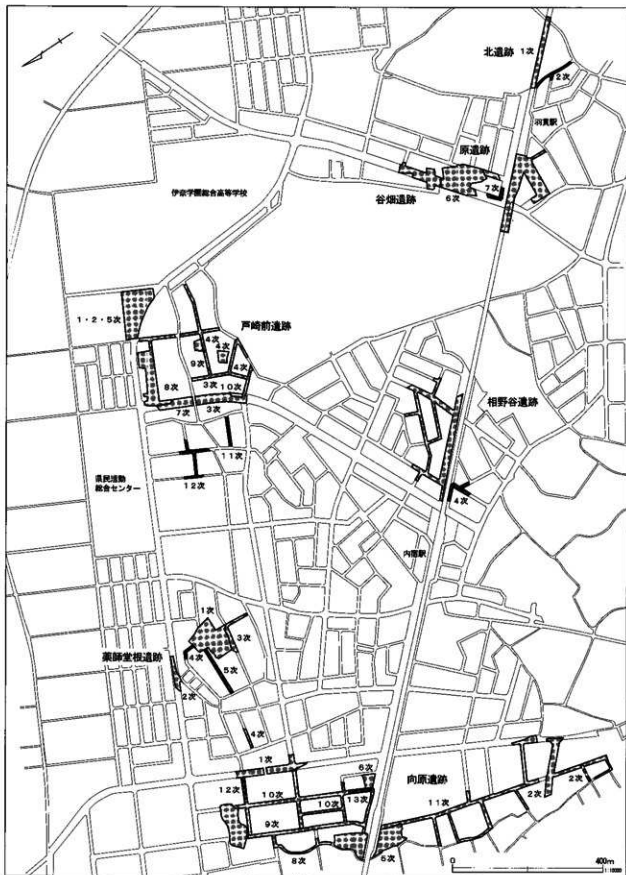
調査事務所の設置と機材搬入後、11月2日から戸崎前遺跡の調査を開始した。調査区の囲柵を行い、11月5日から重機による表土剥ぎを行った。基準点測量と補助員による遺構確認の後に、11月15日から12月20日まで遺構精査を実施した。調査途上で、必要に応じて出土状況・調査状況・完掘状況などを写真撮影し、実測して記録した。12月28日に調査を終了した。

薬師堂根遺跡第5次調査は、平成14年1月4日から2月1日まで行われた。1月4日から調査区の囲柵工事を行い、8日からは重機による表土掘削を開始した。基準点測量を行い、11日から補助員による遺構確認作業を開始した。確認できた遺構を精査するとともに、出土状況・完掘状況などを写真撮影し、実測して記録し、2月1日に調査を終了した。

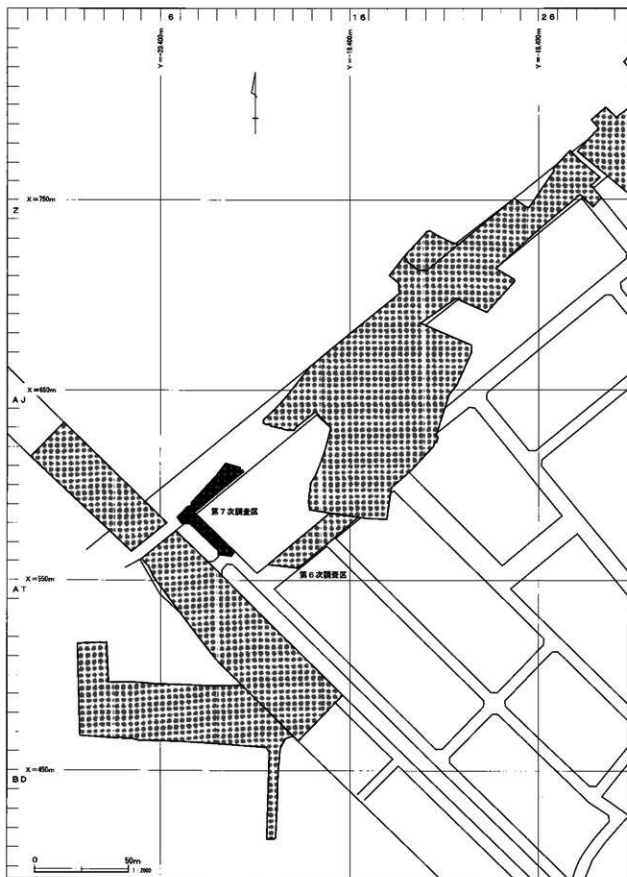
向原遺跡第12次調査は、平成13年2月1日から3月1日にかけて実施した。調査区を囲柵し、4日から重機による表土掘削を開始した。基準点測量の後、7日から補助員による遺構確認を、13日からは遺構精査を開始した。必要に応じて写真撮影、測量を行った。機材の撤収、事務所の撤去を行い、28日で全

第1表 各遺跡の調査経過

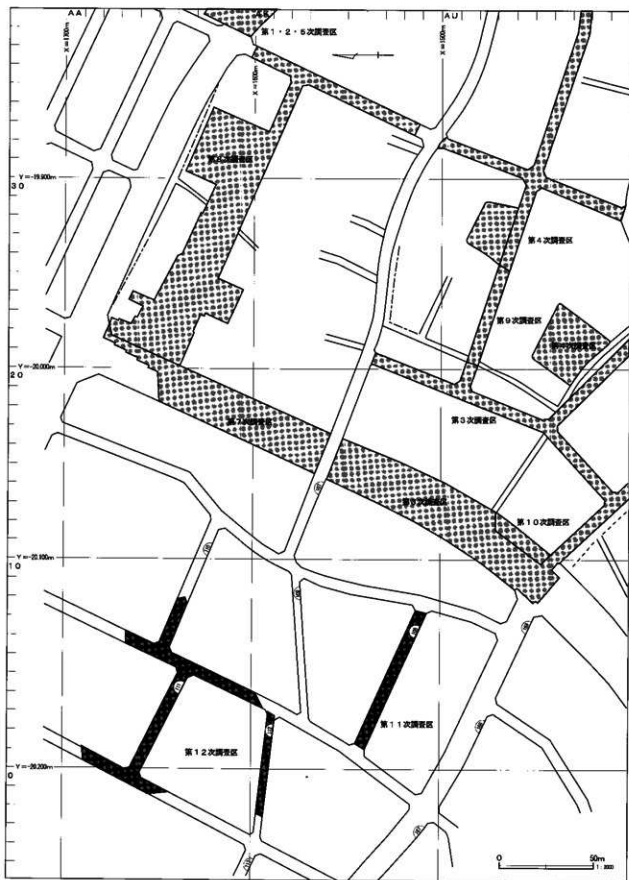
	平成11年度			平成12年度			平成13年度					平成14年度					
	11	12	1	1	2	3	10	11	12	1	2	3	8	9	10	11	12
原遺跡														7次			
戸崎前遺跡					11次			12次									
薬師堂根遺跡		4次									5次						
相野谷遺跡																	4次
向原遺跡												12次					
北遺跡														2次			



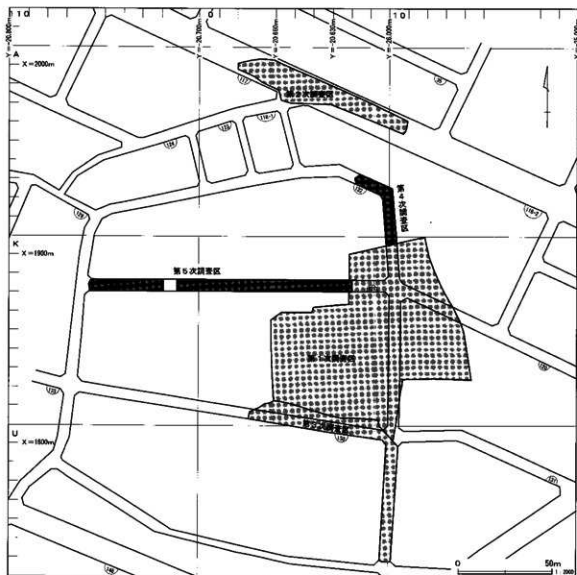
第1図 区画整理事業関係埋蔵文化財調査地点



第2図 原遺跡調査区



第3図 戸崎前道跡調査区



第4図 薬師堂根遺跡調査区

での作業を終了した。

平成14年度

平成14年度は、原遺跡第7次調査・北遺跡第2次調査・向原遺跡第13次調査・相野谷遺跡第4次調査を実施した。

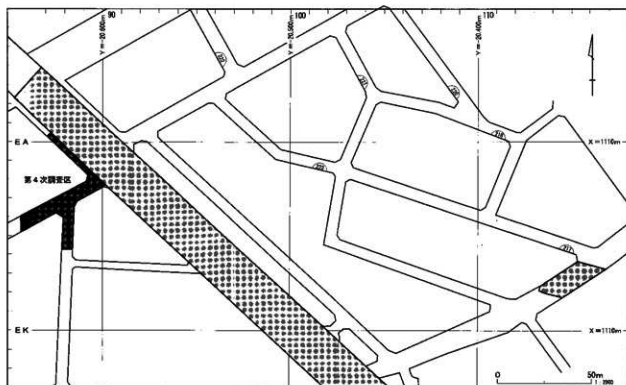
調査に先立ち、事務所設置、機材搬入を行った。重機による表土掘削は、9月中旬から10月中旬と11月中旬に実施し、併せて基準点測量を行った。

原遺跡は10月1日から11月上旬にかけて、補助員による遺構確認と精査を行うとともに、写真撮影や

測量を行い、記録した。11月上旬から向原遺跡第13次調査を開始したため、原遺跡の調査をいったん休止した。11月下旬から再び遺構の精査と記録を作成し、埋戻しを行い11月末をもって原遺跡の調査を終了した。

北遺跡第2次調査は、10月中旬から補助員による遺構確認・遺構精査を行った。調査の進行に合わせて、写真撮影・測量等の記録を作成した。埋戻しを行い、11月上旬に調査を終了した。

向原遺跡第13次調査は、原遺跡の調査を一時休止し、北遺跡の調査終了と共に開始した。11月上旬か



第5図 相野谷遺跡調査区

ら補助員による遺構確認と精査を行い、写真撮影や測量などによる記録を作成して、11月中旬には調査を終了した。

相野谷遺跡の調査は、原遺跡・北遺跡・向原遺跡の終了と共に開始した。既に表土掘削と基準点測量が終了しており、12月1日から、補助員による遺構確認を行うとともに、順次遺構精査を開始した。写真撮影・測量による記録作成が終了した後に埋戻しを行い、12月中旬に調査を終了した。

全ての遺跡の調査が終了した後に機材の撤収と事務所の撤去を行い、12月27日に全ての現場作業を終了した。

(2) 整理・報告書作成

平成15年9月1日から平成16年3月23日まで実施した。

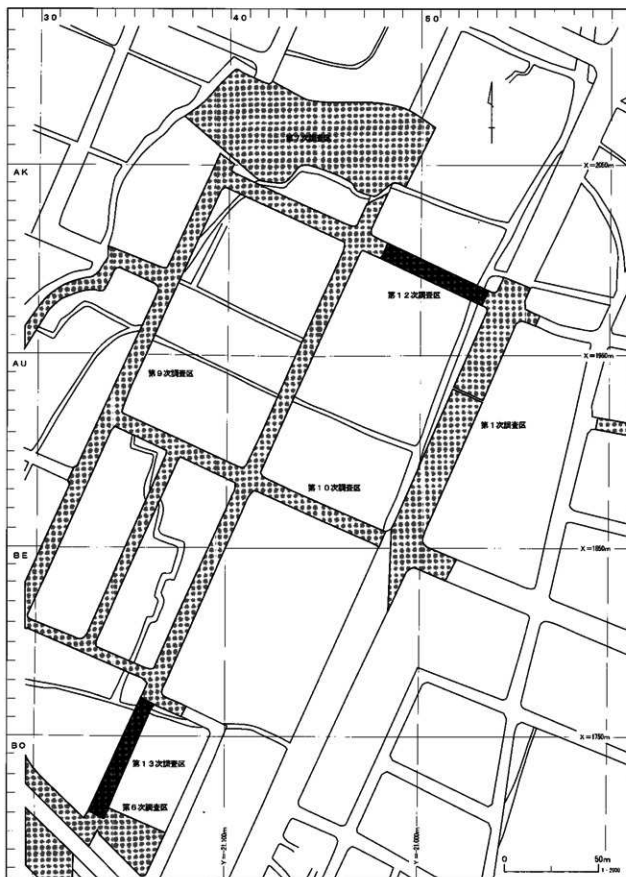
図面整理は原遺跡を9月から10月中旬まで、戸崎前遺跡を10月初旬から下旬まで、薬師堂根遺跡を10月中旬から11月初旬まで、相野谷遺跡・向原遺跡・北遺跡を11月初旬から下旬まで行った。図面修正後

に二次原図を作成し、スキャナーで読み込んだデータをもとに、パソコンによるデジタルトレースを行い、遺構図版を作成した。

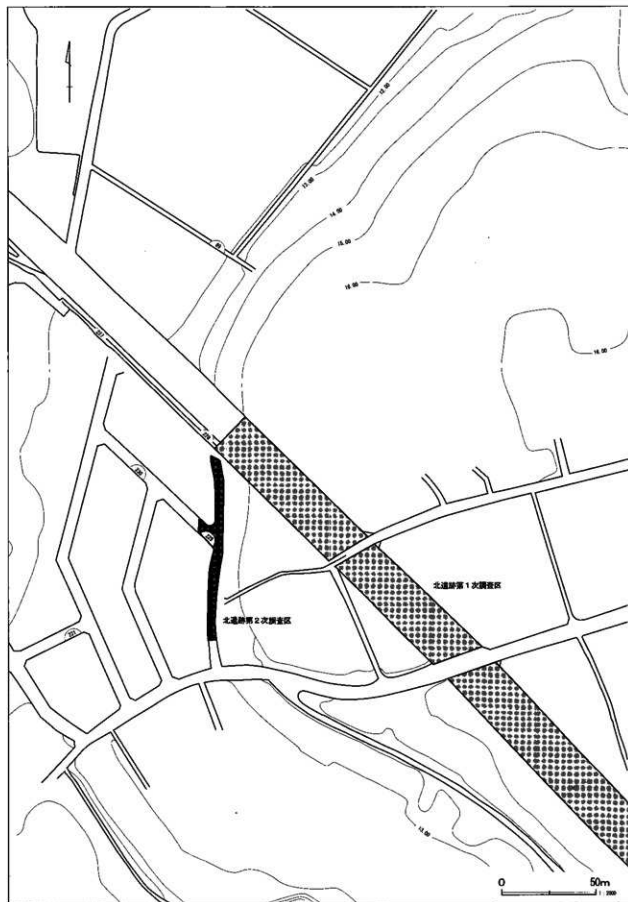
遺物整理は、9月下旬から11月上旬にかけて、原遺跡から開始した。遺構毎に分類し、接合・復元を行い、石器や拓本用の土器を選別した。同様の作業を、戸崎前遺跡、薬師堂根遺跡についても順次行った。

10月上旬からは、復元が終了した土器の実測を開始し、並行して土器破片の採掘作業と断面図の作成を開始すると共に、実測が終了した個体・断面のトレースを開始した。11月中旬からは石器の実測・トレースを開始した。

12月上旬から、遺物のトレースが終了した遺構から版組を行い、遺構図と同様に、版下をスキャナーで読み込み、パソコン上で遺物番号などを付加した。12月下旬から1月上旬に、割付と原稿執筆を行った。その後3月にかけて校正を行い、3月末に本書の印刷を終了した。



第6図 向原遺跡調査区



第7図 北澄跡調査区

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査

平成11年度

理事長 荒井 桂

副理事長 飯塚誠一郎

常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

管理部副部長兼管理課長 関野栄一

庶務課長 金子 隆

主査 田中裕二

主任 江田和美

主任 長滝美智子

主任 福田昭美

主任 腰塚雄二

主任 菊池 久

調査部

調査部長 増田逸朗

調査部副部長 水村孝行

主席調査員 杉崎茂樹

統括調査員 西井幸雄

主任調査員 栗岡 潤

平成12年度

理事長 中野健一

副理事長 飯塚誠一郎

常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

管理部副部長 関野栄一

主席 阿部正浩

主席 野中廣幸

主任 菊池 久

主任 江田和美

主任 長滝美智子

主任 福田昭美

主任 腰塚雄二

調査部

調査部長 高橋 一夫

調査部副部長 石岡憲雄

調査部資料副部長 鈴木敏昭

主席調査員 小野美代子

統括調査員 鈴木孝之

主任調査員 吉田 稔

平成13年度

理事長 中野健一

副理事長 飯塚誠一郎

常務理事兼管理部長 大館 健

管理部

管理幹 持田紀男

主任 菊池 久

主任 江田和美

主任 長滝美智子

主任 福田昭美

主任 腰塚雄二

調査部

調査部長 高橋一夫

調査部副部長 坂野和信

専門調査員 村田健二

統括調査員 橋本 勉

統括調査員 木戸春夫

平成14年度

理事長 桐川卓雄

副理事長 飯塚誠一郎

常務理事兼管理部長 大館 健

管理部

管理幹 持田紀男

主任 江田和美

主任 長滝美智子

主任 福田昭美

主任 腰塚雄二

主任 菊池 久

調査部

調査部長 高橋一夫

調査部副部長 坂野和信

主席調査員 昼間孝志

主任調査員 山本 靖

主任調査員 岡本健一

(2) 整理事業

平成15年度

理事長 桐川卓雄

副理事長 飯塚誠一郎

常務理事兼管理部長 中村英樹

管理部

管理部副部長 村田健二

主席 田中山夫

主任 江田和美

主任 長滝美智子

主任 福田昭美

主任 腰塚雄二

主任 菊池 久

調査部

調査部長 宮崎朝雄

調査部副部長 坂野和信

主席調査員 金子直行

統括調査員 細田 勝

II 遺跡の立地と環境

原遺跡・戸崎前遺跡・薬師堂根遺跡・向原遺跡・相野谷遺跡・北遺跡は、桶川市に隣接する埼玉県北足立郡伊奈町の北東部に位置している。字名は、大針、小針、羽貫での各地区である。

遺跡の立地する大宮台地は、鴻巣市付近に端を発し、荒川と中川の低地に挟まれた南北に長い台地である。

遺跡は、大宮台地の中央部に位置し、東に綾瀬川の谷を望む台地上に形成されている。台地の標高は13～15mで、綾瀬川の侵食によって形成された谷は沖積化が進んでおり、低地に向かって緩やかに傾斜する地形とも相まって、比高差をあまり感じさせない景観である。

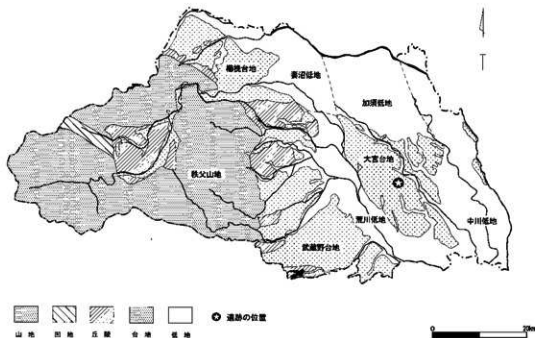
この地で人々の生活が窺えるのは、旧石器時代からである。向原遺跡や戸崎前遺跡、久保山遺跡、大山遺跡などから旧石器時代後期の石器が発見されている。いずれも小規模な遺跡ではあるが、人々が活動した確かな足跡をたどることができる。

縄文時代を迎えても、最古の草創期では発見された遺跡の数は極めて少なく、減少傾向にさえある。

周辺でも、十二番耕地遺跡で隆起線文系・爪形文系・多縄文系土器が発見されているだけである。早期前半でも遺跡数は少なく、数が増えてくるのは早期の後半からである。

この地域は上越新幹線の建設や今回の調査の契機ともなった上尾都市計画事業伊奈特定土地区画整理事業などによって、度重なる発掘調査が行われてきた。すでに戸崎前遺跡や薬師堂根遺跡、向原遺跡などで条痕文期の伊穴が発見されていたが、今回報告する戸崎前遺跡の第12次調査では、早期の大形住居跡が発見されたことは特筆に値する。また薬師堂根遺跡でもこの時期の住居跡が発見されており、早期後半のムラの姿が明らかになりつつある。

縄文前期になると、気候が温暖化し、内陸深くまで海が広がった。山間部や海浜部にも、それぞれの地域に適応した定住性の高いムラが営まれていた。海の恵みを受けた奥東京湾岸にも、貝塚をともなったムラが形成されていた。遺跡の形成と海に深い関係があることは、やがて海が退くと共に、遺跡の形成も下火となることから明らかである。



第8図 埼玉県の地形



- | | | | | | |
|------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 葉師堂根遺跡 | 2. 戸崎前遺跡 | 3. 向原遺跡 | 4. 相野谷遺跡 | 5. 八幡谷遺跡 | 6. 原遺跡・谷畑遺跡 |
| 7. 北遺跡 | 8. 大針貝塚 | 9. 丸山遺跡 | 10. 赤羽遺跡 | 11. 伊奈氏屋敷遺跡 | 12. 久保山遺跡 |
| 13. 大山遺跡 | 14. 小室天神前遺跡 | 15. 志久遺跡 | 16. 氷川神社裏遺跡 | 17. 小貞戸貝塚 | 18. 栗崎貝塚 |
| 19. 井沼遺跡 | 20. 綾瀬貝塚 | 21. 關山貝塚 | 22. 坂堂貝塚 | 23. 棒山遺跡 | 24. 秩父山遺跡 |
| 25. 鳳山台遺跡 | 26. 今羽丸山遺跡 | 27. 十二番耕地遺跡 | 28. 東町二丁目遺跡 | 29. 平塚氷川遺跡 | 30. 谷津下1遺跡 |
| 31. 八番耕地遺跡 | 32. 愛宕山遺跡 | 33. 三番耕地遺跡 | 34. 高台山遺跡 | 35. 奈良瀬戸遺跡 | 36. 在家遺跡 |
| 37. 高井遺跡 | 38. 提灯木山遺跡 | 39. 西通1遺跡 | | | |

第9図 周辺の遺跡

この地域では学史的にも名高い関山貝塚や黒浜貝塚群、坂草貝塚・小貝戸貝塚、原遺跡の対岸にある大針貝塚など、数多くの遺跡が知られている。

この地域に再び大規模なムラが現れるのは、中期の中頃からである。108軒の住居跡が調査された原遺跡や、谷を挟んで対岸に位置し、72軒の住居跡が調査された北遺跡がこの時期の大きなムラとして知られている。原遺跡と北遺跡は、時期的に若干のズレがあり、相互補完的なムラとして考えるべきなのかもしれない。周辺にも秩父山遺跡や蓮田市宿下遺跡などの著名な遺跡がある。環状集落を形成したムラの姿は、前期頃とは異なった社会の姿を映し出しているであろう。

中期でも後半に至るとムラの様相にも変化が現れ、一極集中から分散化へとその姿を変えてくる。戸崎前遺跡や業師堂根遺跡で見つかった中期末～後期前半期の住居跡は、このような様相を反映しているであろう。

調査地域内では後期後半から晩期の遺構は見つかっていない。しかし周辺には雅楽谷遺跡や高井東遺跡、奈良瀬戸遺跡などの著名な遺跡もあり、環状盛土を伴った遺跡も存在する。また沖積地の下に埋没している可能性も考えねばならないだろう。

近年、年代的な位置付けが問題となっている縄文時代晩期末葉から弥生時代初頃にかけて、この地域では、台地上に遺跡の姿は殆ど認められない。

この地域で再びムラが姿を表すのは、古墳時代前期になってからのことである。向原遺跡では、この時期の住居跡が100軒近く見ついている。限られた調査範囲から見ても、かなりの軒数になるであろう。さらに周辺には近年報告された尾山台遺跡のような著名な遺跡がある。沖積地を控え、積極的に水田耕作を営んだムラの姿を髣髴させる。

古墳時代後期以降にも人々はこの地を利用し続けたが、かつての大規模なムラの姿を窺うことはできない。この状態は奈良時代から平安時代に至っても同様で、大規模なムラが頻出する北関東地域とは、質・量ともに対照的である。

業師堂根遺跡は、かつての調査で区西内に多数の墓塚や建物跡をとまなう中世の段切状遺構が見ついている。今回報告の第5次調査でも溝と多数の重複した土壌が発見されており、中世頃の業師堂根遺跡の西限を明らかにすることができた。また相野谷遺跡でも同じような土壌が見ついている。戸崎前遺跡でも、かつての調査で、土橋をもつ塚跡と在地産の皿が見ついている。13～14世紀頃、この地の土地利用は予想以上に活発だったのだろう。伊奈氏屋敷跡もこの頃が始まりとなることが明らかとなっている。

以上が通時的に概観した、この地の人々の足跡である。この他にも数多くの遺跡が残されていることは諸氏の知るところである。

III 原遺跡第7次調査

1. 調査の概要

原遺跡は埼玉県北足立郡伊奈町大字羽貫字原876番地1他に所在する縄文時代の遺跡である。

遺跡は東側に綾瀬川を望む標高12~14mの大宮台地片柳支台上に立地している。遺跡の南側は綾瀬川に注ぐ小支谷によって開析され、半島状にせり出した地形である。原遺跡はその左岸に位置し、およそ楕円形に近い住居配置が予想される。

原遺跡における最初の発掘調査は、上越新幹線建設に先立ち、昭和56年に実施された第1次調査である。この調査において縄文時代中期の住居跡15軒等が発見された。昭和58年には第2次調査が実施されたが、縄文時代の住居跡は検出されなかったことから、原遺跡住居分布の西端がほぼ確定したといえる。新幹線建設事業にともない、今回報告する北遺跡、相野谷遺跡、向原遺跡も最初の発掘調査が実施された。

原遺跡に関するその後の調査はすべて上尾都市計画事業伊奈特定上地区画整理事業にともなうものである。同事業の実施に伴い、平成5年から平成7年にかけて、さらに平成11年に発掘調査が実施された。これらの発掘調査については既に報告書も刊行され、その成果が公表されている。

今回の報告は、同事業にともない平成14年に実施された第7次調査の成果である。調査では縄文時代中期の住居跡8軒、縄文時代から中・近世にかけての上城49基などが発見され、現在までの調査成果によって原遺跡の景観が次第に明らかとなってきた。

原遺跡は綾瀬川に注ぐ小支谷の左岸に営まれた、勝坂末期から加曾利EⅢ式期にかけての集落である。

第7次となる今回の調査は第6次調査区の西側、昭和56年調査区の北側に位置する916㎡が対象となった。調査区は白地のやや奥まった地点にあり、標高は14mでほぼ平坦な地形を呈している。

調査は平成5~7年に実施された発掘調査のグリッド配置に合わせ、10m方眼のグリッドを基準に、

東西方向に7~11、南北方向にM~Rのグリッドを設定した。

住居跡はL字形の調査区域全体に分布するが、調査区北端のM~O-9~11グリッド周辺で特に濃密で、南東側に移るに従い住居の密度は薄くなるようである。

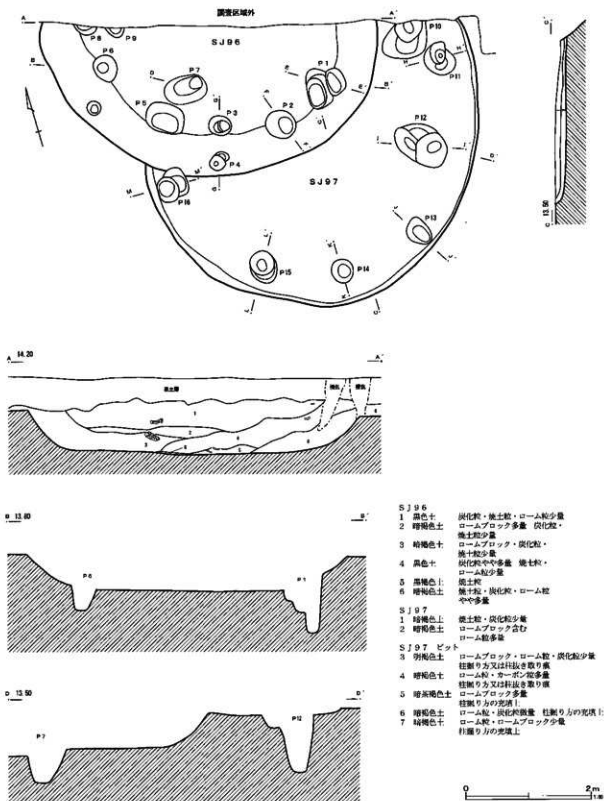
住居跡は97号住居跡が最も古く、井戸尻Ⅰ式段階、第96号、第99号住居跡が井戸尻Ⅱ式から加曾利EⅠ式古段階にかけて、100号住居跡が加曾利EⅠ式古段階、98号住居跡が加曾利EⅠ式新段階に位置付けられる。

住居跡は平成5年から7年にかけての調査されたI区南側から、平成11年の第6次調査地点にかけて濃密に分布しており、I区の北側では遺構の密度が希薄となる。昭和56年調査区の西側では住居跡が検出されなかったことから、この辺りが住居分布の限界となるようである。今回の調査においても、住居跡の濃淡には同じような結果が窺えた。すべてが調査された訳ではないので、推測の域を出ないが、中央部に土壇群や掘立柱建物群をもつ環状あるいは楕円形に近い集落の姿を窺うことができる。

原遺跡の対岸にはやはり中期前半から中葉にかけて、72軒の住居跡が検出された北遺跡がある。調査は部分的で詳細は把握しかねるが、地形から見ても環状集落である可能性は高いといえる。原遺跡と対比すると、お互いの住居の時期に重なる部分や時期差が見られることから、両者には有機的な関連が存在したとも考えられる。

さらに周辺に目を転じると、早期には戸崎前遺跡、薬師堂根遺跡が、前期には原遺跡の北側に谷畑遺跡が、北遺跡の北側には大針貝塚がある。

原遺跡では加曾利EⅡ式以降、集落形成が低調となるが、戸崎前遺跡ではこのころから住居の構築が顕著となっている。



第111図 第96・97号住居跡(1)

2. 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

第96号住居跡 (第11~13区)

第96号住居跡はM-N-10~11グリッドに位置し、第97号住居跡と重複している。今回の調査区では北東端に位置する住居跡である。北半分が調査区域外に延びているために、全容を把握することができなかった。

北東壁際では、住居跡の壁間が5.3mである。調査された部分での平面形態と併せ、おそらく径が5.5m前後の円形あるいは楕円形の住居跡と考えられる。

住居跡は現地表から約0.6m掘り下げて確認できた。確認面から床面までの深さは0.5m前後で、今回調査した住居跡の中では、最も深いものである。

床面はやや起伏をもっており、中央部は踏み固められたような状態であった。伊跡は調査区域外にあ

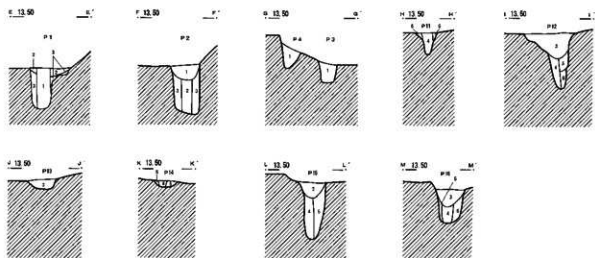
るため検出できなかった。

第96号住居跡の柱穴は、急角度で立ち上がる壁際に廻っている。P1~P3、P5~P6、P8~P9が第1号住居跡の柱穴と思われる。柱穴は径が0.4~0.5mの円形や楕円形で、ほぼ垂直に掘り込まれていた。

柱穴の深さはP1=73cm、P2=99cm、P3=59cm、P5=79cm、P6=69cm、P8=28cm、P9=60cmである。

第96号住居跡からは器形復元可能な7個体を含め、多量の土器が出土した。後述する第99号住居跡とともに、勝坂式木葉の様相を示す良好な資料となった。

第13図には大形破片および復元個体の出土状況を示した。この図からもわかるように、遺物は住居跡の中央部に向かって濃密になっており、壁際に堆積土が形成された後に廃棄されたことがわかる。出土状況からみると、器形復元可能な大形破片や、比較的小型破片などが混在しており、出土状態からは、



ビット1

- 1 暗褐色土 ローム粒微量 柱痕
- 2 暗褐色土 ロームブロック少量 柱廻り方充填土
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量 柱廻り方充填土

ビット2

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 柱抜き取り痕
- 2 暗褐色土 ローム粒少量 柱痕
- 3 暗褐色土 ローム粒少量 柱廻り方充填土

ビット3

- 1 暗褐色土 ローム粒多量 柱穴

ビット4

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量 柱穴

ビット5

- 1 暗褐色土 ローム粒・炭化粒多量 柱抜き取り痕
- 2 暗褐色土 ローム粒少量 柱痕
- 3 暗褐色土 ローム粒少量 柱廻り方充填土

ビット6

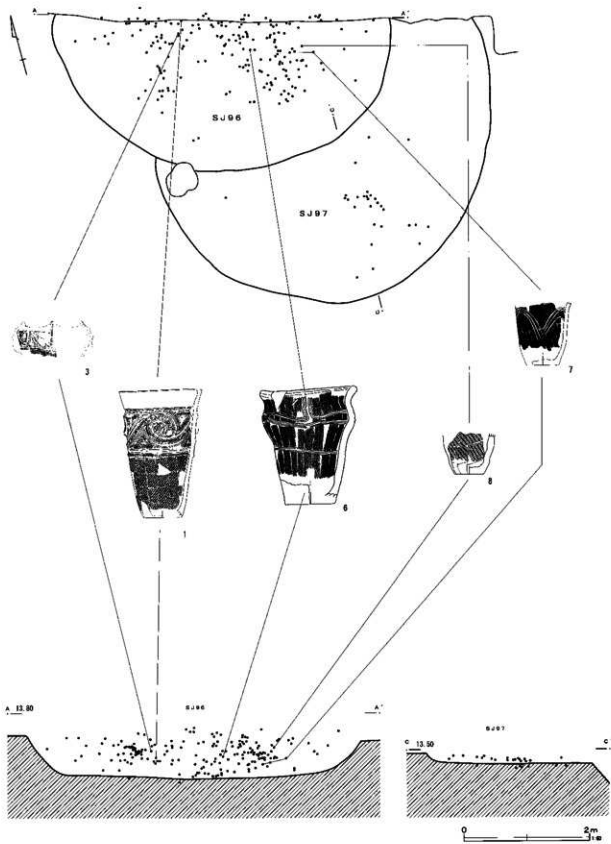
- 1 暗褐色土 ロームブロック多量

ビット7

- 1 暗褐色土 ローム粒・暗褐色土含む
- 2 暗褐色土 ロームブロック含む
- 3 暗褐色土 ややしまり悪い
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量 しまりがあり悪い



第12図 第96・97号住居跡 (2)



第13図 第96・97号住居跡遺物出土状況

廃棄行為が継続的に行われた形跡は認められない。遺物説明で後述するように、この住居跡は、勝坂式木葉に極めて短期間に遺物が投棄されたものと考えてよいであろう。

柱穴は第97号住居跡と同様に壁と平行して廻っており、径は0.5～0.9m前後で、第97号住居跡よりもやや径が大きい。

第96号住居跡出土土器（第14図～第19図）

第14図1は底部から直線的に開く深鉢形土器で、幅広で内面がくの字状に突出する無文帯の下に、一帯の文様帯をもっている。無文部の整形は特徴的で、後述する赤彩された鉢形土器にも共通性が見出せる。

文様帯上端区画は平行沈線間に交互刺突が施され、下端区画は隆帯上に刻みが施されている。文様は隆帯による横S字状の連鎖文で、4単位構成のうちの1単位が渦巻き方向を変え、鉤の手状になっている。隆帯文上には上下方向からの刺突と短沈線が交互に施文されている。

隆帯文に沿って2条の平行沈線が引かれ、文様帯区画線と接し、斜行する隆帯間に形成された空間には、沈線による三叉文と刻み目によって充填されており、密な印象を与える土器となっている。

胴下部にはRL縄文が縦位回転されている。口径22.5cm、底径10.0cm、器高34.2cm。

同図2も1と同様に幅広い無文部をもつ、胴部横帯構成の深鉢形土器である。胴下部で弱く屈曲し、口縁にかけて湾曲気味に立ち上がる。無文帯と胴部との区画は平行沈線間の交互刺突文である。1と同様に、無文帯は若干段を持っている。

口唇上から胴部横帯区画線にかけて、押圧され、波状となる1対の突起が付けられている。裾広がりとなる下端部は、眼鏡状の突起となるのかもしれないが、剥落しており、詳細が不明である。

突起と正対する横帯区画内には、上下の横帯区画線に接して楕円形の貼付文をもつ。貼付文はドーナツ状で、扁平に整形されている。

地文はRL斜位回転。口径16.0cm、底径9.0cm、器高28.0cm。

同図3は、キャリパー形の口縁部をもつ櫛形文系の土器で、口頸部の約1/4の人形破片である。

無文の口唇部はやや外反気味で、4単位波状となる。波頂部からは、沈線が施された鎖状の隆帯が垂下し器面を縦分割するとともに、口縁部文様帯下端区画上の突起に接する。

口縁部文様帯内には上端区画に接して半円形の隆帯文が施文され、この部分が突出している。またこの隆帯文と下端区画上の円形隆帯文とが連結され、隆帯上や隆帯側面には刺突が加えられている。隆帯文の空白部には沈線による渦巻文と三叉文が施文されている。口唇部は「軍ナデ整形が施されており、同図1にも共通する手法である。

胴部地文はRLの横位回転施文である。推定口径36.0cm、現存高22.0cm。

同図4は沈線文と沈線文間の一部に結節沈線が充填された勝坂系の深鉢である。沈線のみで文様描出され、簡略化した様相が見て取れる。最大径14.5cm、現存高6.5cm。

同図5は深鉢形土器の胴部破片である。交互刺突が施された隆帯は、文様帯の下端区画と思われる。

地文にはRLが縦位回転施文されている。最大径17.4cm、現存高12.0cm。

6は口縁部がくの字状に張り、口唇が外反する深鉢である。撚糸地文上には半截竹管による3条1単位の平行沈線文が施文されている。口径と口縁部最大径が等しく14.0cm、現存高17.0cmである。

7は撚糸地文上に3条1単位の逆U字状の沈線文が4単位に施文された深鉢である。僅かに残された痕跡から上半にも同様のモチーフが描かれ、全体に対弧状の文様構成となるようである。底径9.0cm、現存高13.0cmである。

第15図8～9はミニチュア土器である。8は胴上半を欠くが、縄文施文のみの深鉢形土器で、底部直上がヘラケズリされている。現存部最大径8.0cm、

底径4.6cm、現存高6.2cm。

2は4単位波状口縁の手提ね土器で、上げ底を呈している。無文で底部直上には指頭圧痕が観察される。口径4.0cm、底径2.8cm、器高3.3cm。

第15図10～第18図には破片類を掲載した。10～17は横帯構成の土器群である。第14図1と同様の比較的幅狭い横帯区画間に、対弧状に配置された隆帯により、楕円区画文やX字状の区画文が配された土器群である。区画文内には、10のように隆帯による渦巻文が配置されたものもある。隆帯上には刻み目が施された土器が目立つ。

区画文内には沈線による三叉文や渦巻文などが配され、曲線の意匠に富んだものや、14～16のように、区画内に沈線が密に充填されるものもある。

15は鋭角に突出する突起をもつ口縁部破片だが、文様は楕円区画文であろうか。

第15図18～38、第16図39～44には、縦方向の区画文によるパネル状文様をもつと思われる土器群を掲載した。このうち18～26は刻みをもつ隆帯による区画文が認められる土器群で、隆帯上の装飾などが10～17に近似した土器群である。

第16図44は、隆帯による区画文を基調とし、文様構成や文様要素、隆帯上の加飾などが第14図11や第15図10に近いが、隆帯上に刻み目をもたず、第14図4の浮文のように扁平化している点が特徴的である。第16図58の隆帯文もこれに近い土器と考えられる。このような隆帯文の特徴は、第18図に示した鉢形土器の隆帯文とも共通性が窺える。

第15図27～38、第16図39～41は、沈線による区画文が卓越した土器で、器面にナデ整形が顕著となることから、隆帯が扁平化し、隆帯上刻み目などの加飾が廃されてくる土器群である。32～35は同一個体と思われる。第16図41は第14図4に酷似する。第16図42～43は隆帯上に縄文が施文される土器群である。

第16図45～52は口唇直下に幅狭い文様帯をもつと思われる土器で、印象的には第15図27～38に近い。

第16図53～57は、口縁部が、くの字状に屈曲し文

様帯が幅狭い土器群である。

53は口端に円環状の突起が付された口縁部破片である。沈線と交互刺突文で区画された幅狭い口唇部文様帯内には、上下方向の沈線文と渦巻文が描かれている。口縁の屈曲部には横S字状の隆帯文が配され、隆帯上には矢羽根状の刻み目が施されると共に、隆帯上には竹管文が充填されている。タイプは異なるが、同図64は、単独横S字状隆帯文に爪形文が施文された大木系の土器である。

54～57は屈曲部が鐮状にせり出し、交互刺突文や渦巻文が配されるなど、中鉢式土器の特徴を備えた土器である。55～56は地文が燃糸文である。62は器形が共通すると共に、文様には48～51に近い部分がある。

このタイプの土器は、47～52を含めて、第99号住居跡から出土した大形の深鉢形土器（第26図4）の口縁部にも強い共通性が窺える。

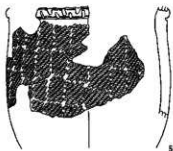
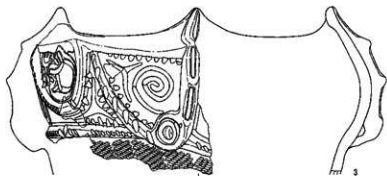
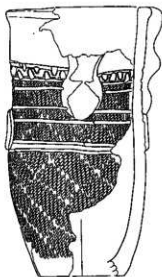
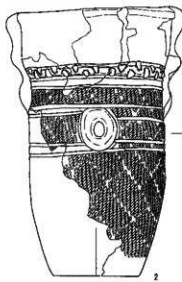
第16図59～第17図71には突起・把手をもつ破片を一括した。形態はさまざまだが、59～60のような橋状のものや、66～70のような眼鏡状突起をもつ類が卓越している。59～60は同一個体と思われる縄文地文の土器である。

71は渦巻状の隆帯が密に配された橋状把手で、勝坂式終末段階の北関東に好例が知られている。

第17図72は未端が区画された縦位沈線文間に単独の横S字状隆帯文をもつと思われる土器である。地文施文後に隆帯が貼付され、隆帯下部にナデ整形された後に縦位沈線が描出されている。沈線未端は区画されている。74は外反した幅狭い口縁下に、半截竹管内面による縦位沈線を持つ個体で、地文は燃糸文である。76にも近い様相が窺える。

77は交互刺突文下に、3本沈線による巻きの強い横S字文が合い向かいに施文された土器である。屈曲の度合いは第16図54～57に類似する。

78～79は外反し幅狭い口唇部と、強く張る胴部の深鉢形土器で、燃糸地文上に沈線文が描かれている。74、76を含めて、時期的に下降する可能性がある。



第14图 第96号住居跡出土物(1)



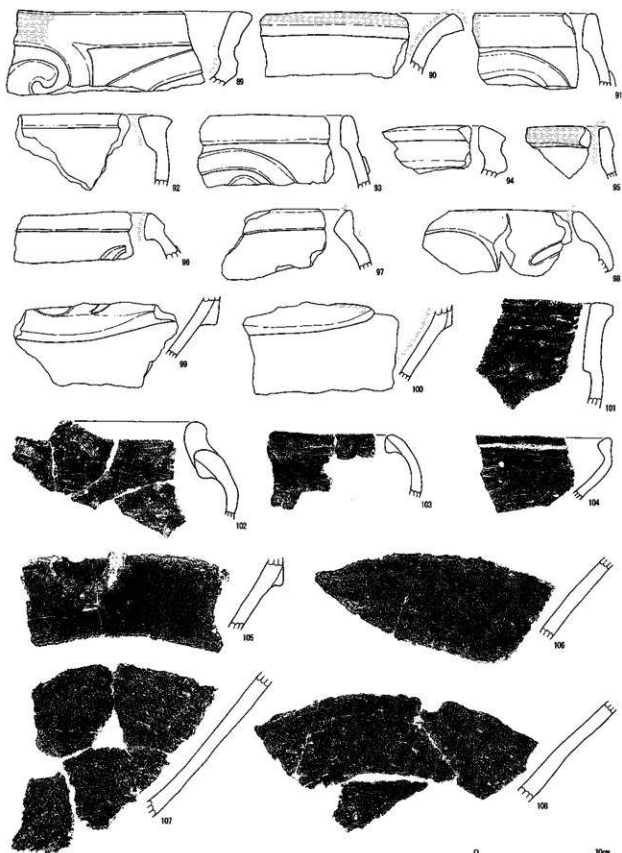
第15图 第96号住居跡出土遺物(2)



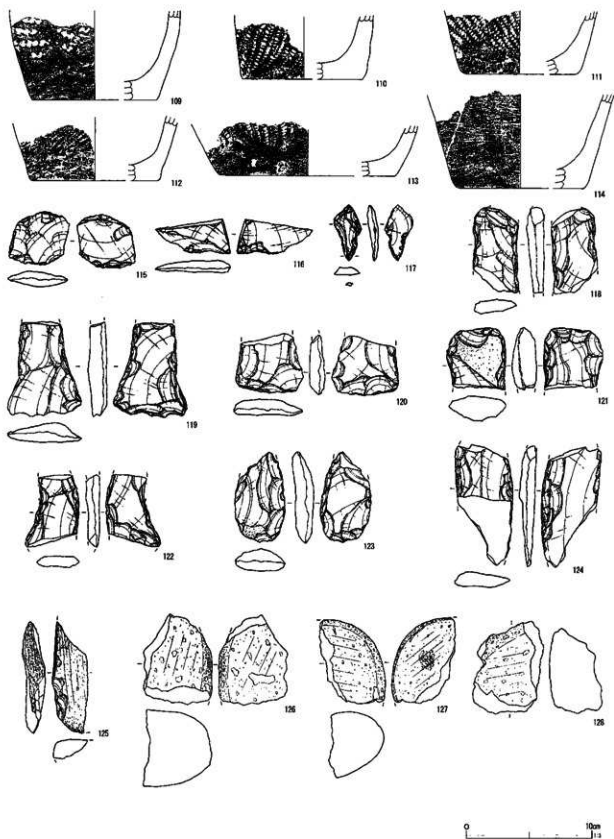
第16图 第96号住居跡出土遺物 (3)



第17图 第96号住居跡出土物(4)



第18图 第96号住居跡出土遺物 (5)



第19圖 第96号住居跡出土遺物 (6)



第20図 第97号住居跡出土遺物

80は口縁に縦位の隆帯が貼付された土器で、加曾利E.I式古段階であろう。

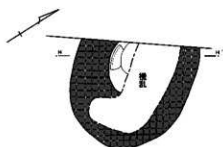
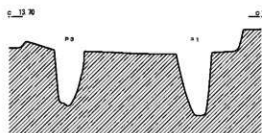
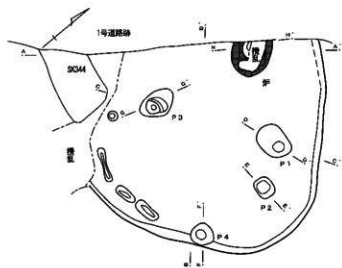
82～88には地文の大形破片を掲載した。81～83は縄文施文の破片で、間隔をあげた縦位施文は勝坂段階であろう。84～88は摺糸地文の土器で、88には沈線による曲線的なモチーフと懸垂文が認められる。

第19図109～114に底部を一括した。109～113は底部直上にヘラナゲが施されている。

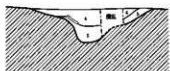
第18図には鉢形土器を一括した。89～90、99～

100は口端が外反し、底部に至る器形と、91～95のように、口端が直立気味で、胴上半部が張るもの、96～98のように、口端が内傾するものなど、幾つかの形がある。

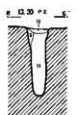
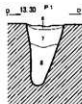
残存部位が少なく、提示した破片の多くがかなり口径が大きな土器であることから、全容を把握することは難しいが、89・91・93・96・98～100のように、段をもつ口唇に接して隆帯文が貼付された個体が目立つ。隆帯文を貼付後に、極めて丁寧なミガキ



h. 13.30



0 50m



- Sj98
- 1 暗褐色土 ローム粒少量
 - 2 明褐色土 ローム粒・炭化粒少量 比較的軟質
 - 3 暗色土 ロームブロック少量 比較的軟質
- Sj99
- 4 暗褐色土 粘土粒・炭化粒やや多い
 - 5 暗褐色土 焼土粒・炭上ブコック多量
 - 6 暗褐色土 ビット1・2・3
 - 7 暗褐色土 ローム粒多量 人為的埋戻し
 - 8 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 人為的埋戻し
 - 9 暗褐色土 ローム粒多量 人為的埋戻し
 - 10 暗褐色土 ローム粒多量 柱礎下方埋戻し
 - 11 暗褐色土 ローム粒多量 柱礎
 - 12 明褐色土 ローム粒多量 ロームブロック少量 炭き取り灰

第21図 第98号住居跡

が施され、全体に光沢を帯びた個体が多いことも特徴である。このような整形手法は、深鉢形土器にも認められ、扁平な隆帯文の上器を生み出したと思われる。

顔料が剥落しており詳細が掴めないが、鉢形土器には、内外面に赤色顔料によって彩色され、隆帯文と相同のモチーフが描かれた個体が多いことも特徴のひとつである。胴上半全体が彩色されたものもありそうだが、体下部には顔料が付着した形跡は認められなかった。

今回の調査では第96号住居跡からこの種の上器が多量に出土した。

第96号住居跡出土石器 (第19図115~128)

搔器 (115~116)

チャート製で、いずれも裏面に主要剥離面を大きく残し、側縁に調整剥離が施されている。116は欠損品。

石鏃 (117)

基部加工に比べ先端部の加工粗く、裏面に主要剥

離面を大きく残すなど、整形が粗雑である。未製品であろうか。黒曜石製。

打製石斧 (118~124)

全て欠損品である。119、122の撥形を除き、他は短冊形に分類される。121、123は片面に自然面を残している。118~120、123~124はホルンフェルス製、121は砂岩製、122は黒色頁岩製である。

磨製石斧 (125)

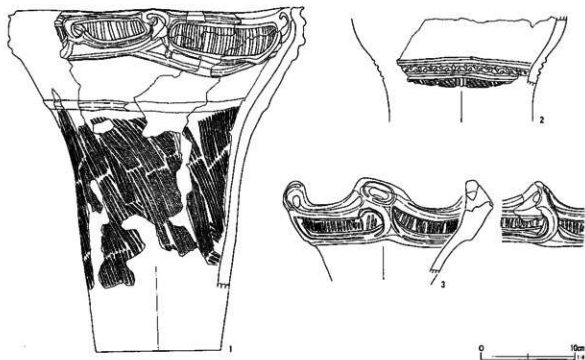
刃部先端のみで他は欠損している。側面には剥離痕と敲打痕を残し、表面には擦痕、刃部には磨耗痕が観察される。

磨石 (126~128)

欠損品であるが、面取りし、形が整えられていたようである。全て安山岩製。

第97号住居跡 (第11~13図)

第97号住居跡は、北半分が調査区域外に伸びているほか、第96号住居跡に壊されているために、全体を把握することができなかった。床面は平坦で、確認面からの深さは平均0.3m程度の浅い住居跡であ



第22図 第98号住居跡出土遺物

る。

現存部の最大径は5.7mで、第96号住居跡よりも若干大型といえよう。検出された範囲から見て楕円形の住居跡と考えられる。

壁に沿って柱穴が廻っているが、第96号住居跡内では、第97号住居跡に帰属すると思われる柱穴を検出することはできなかった。

柱穴の規模は、径が0.3~0.5m前後の円形ないしは楕円形で、第96号住居跡と同様に掘込みが深く、柱痕を残しているなど、遺存状態も良好であった。各柱穴の深さは以下のとおりである。P10=0.65m、P11=0.24m、P12=0.9m、P13=0.18m、P14=0.12m、P15=0.8m、P16=0.68m。このうちP13・P14が位置的に見て、この住居跡の入り口部と推定される。

第97号住居跡出土土器 (第20図)

第97号住居跡は掘込みが極めて浅く、第96号住居跡によって破壊されていたこともあり、遺物量は少ないが、出土土器は、阿玉台Ⅱ式を含んでいることから、第96号住居跡との新旧関係は明らかである。

1~8が隆帯区画文の勝坂系土器である。1は隆帯による区画文上に密な刻みが増えられるほか、隆帯文間に施文された曲線的な沈線文間にも、爪形文が密に充填されている。第96号や99号住居跡出土の勝坂系土器よりも明らかに古相を示し、伴出土器も符合していると思われることから、今回の調査で出土した最も古相の土器といえる。

9~11は同一個体である。屈曲し直線的に開く口頸部をもつ深鉢で、X字状の隆帯文が配され、底部直上で閉塞するようである。口唇直下に半円形の隆帯文が配される。

12は無文の鉢形土器で、補修孔をもつ。13、15は阿玉台系の土器であろう。

第97号住居跡出土土器 (第20図19)

土器は図示した磨石1例のみである。

第98号住居跡 (第21図)

第98号住居跡は、AN-10グリッドに位置し、第96号・第97号住居跡とは直線距離1.2mと、極めて近接した位置関係にある。住居跡の北西半分が調査区域外にあるため遺構の全容が定かではない。加えて第310号、第319号、第344号土壌に破壊されていることや、攪乱を受けて土層が乱れていることなどにより、南西壁を検出することができなかった。

住居跡は現存部分で、長径4.16mで、短径は攪乱部分までで3.6mである。東西断面で壁の立ち上がりが見出されていることから、南壁の中央部に入り口部を持ち、長径が5m程度の隅丸長方形の平面形態をもつものと推定される。

掘込みは壁際でやや浅く、床面中央部に向かって緩やかに傾斜しており、確認面からの深さは南東壁際で約0.25m、床面中央部では0.35mであった。

調査区の北西壁際、住居跡床面の東壁際に寄って地床伊が確認された。伊跡は現存部で径が0.93mであり、遺存状況からみて、長径が1.5m程度の楕円形であると考えられる。伊も攪乱を受けており、伊体土器の約半分が失われていた。

伊は土器埋設後に外側がローム土によって固定されたと考えられるもので、最深部は確認面から0.25mであった。伊体土器は攪乱によって大半が失われたのであろう。

床面からは4個の柱穴が検出されたが、P4は後世のものであろう。床面からの深さはP1=0.98m、P2=1.1m、P3=0.8mと深い。

南壁際には、部分的に壁溝と思われる浅く不連続な掘込みが認められた。

第98号住居跡出土土器 (第22図)

第98号住居跡から出土した遺物は、第22図に示した3点である。他に少量の破片も出土したが、遺物量は極めて少なかった。

1は覆土中から出土した深鉢形土器である。底部から直線的に立ち上がり、頸部無文帯を挟んで内湾

する口縁部に至る。口縁部文様は隆帯による枠状区画文で、端部が渦巻き状に突出する。胴部地文は絡条体rの縦位施文である。推定口径29.0cm、現存高29.0cm、推定高36.0cmである。

2は炉体土器である。攪乱を受けていたためか、大半が失われていた。曾利系の深鉢形土器で、外湾する無文の口頸部をもち、胴部は沈線と交互刺突帯によって区画される。胴部には沈線による懸垂文をもつ。地文はLRである。

3も覆土中から出土した深鉢形土器である。口頸部のみ残存したもので無文帯下には隆帯が剥落した痕跡が窺える。頂部に貫通孔をもつ箱状の大形突起と、波状の小突起が対向して配置され、突起頂部から垂下する隆帯と口縁部文様下端区画の隆帯とが接して、枠状区画文を形成している。隆帯上には沈線が引かれ、区画内には縦位沈線が充填されている。口径16.0～17.0cm、現存高9.0cmである。

第99号住居跡（第23～24図）

AN—AO—10グリッドで検出された。この住居跡も大半が調査区域外となっているため、住居跡のおよそ1/3程度を調査するにとどまった。

住居跡は第317号土壙に北壁の一部が破壊されているほか、北西コーナー部分では床面に達する攪乱を受けている。現存部分での計測値は、東西6.45mで、長軸方向は推定で8m程度と考えられ、おそらく隅丸長方形の平面形態と考えてよいであろう。

確認面から床面までの深さは0.45mから0.5mで、床面中央部にむかって若干傾斜している。今回調査された住居跡では最も深い掘込みを持っている。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、中位から上部では、崩落したために壁際にローム主体の土層が堆積していた。調査し得た範囲には壁溝が廻っていることから、全周していたとみてよいであろう。

覆土は5層からなり、自然堆積による埋没状況をよく示している。壁溝に堆積していた上層は、ロームを主体としており、壁の崩落土と考えられる。

調査区の南東壁に接して地床炉が検出された。奥壁よりで、主軸線から南西にずれた位置にあたる。炉跡は中央部に向かって楕円状の断面形をもち、長径0.84m×短径0.73m、床面からの深さは最深部で0.32mである。第25図1の胴中位以下を欠く勝坂系深鉢形土器を埋設した後に、ローム土等を充填し固定していた。炉体土器内部に焼土の堆積は認められなかった。

柱穴は壁のやや内側にP1～P3が検出された。直径はP1が約0.5m、P2が0.63～0.66m、P3が0.5～0.67m、深さはP1が0.95m、P2が0.87m、P3が0.7mである。何れも掘込みが深く、P1、P2では支柱の埋設にともなう充填土が確認できた。P3では柱の抜き取り痕を確認することができた。

住居跡からは多量の遺物が出土した。第24図は出土状況を示したものであるが、住居跡の中央部に大型破片が集中している。か埋設土器を除くと床面からは殆ど遺物が出土しておらず、掲載資料は覆土第1層に集中している。

第99号住居跡出土土器（第25図～第28図）

第25図～第28図が第99号住居跡出土土器である。

1は炉体土器で、胴下部が欠損している。口頸部は無文で強く開き、口唇は内面が突出する。胴部はパネル文系の文様構成をもち、突起から垂下する隆帯で3単位に区画されている。区画内の主たる文様構成は、突起に接して斜行し、木端が渦巻状となる隆帯文である。隆帯上には矢羽ないしは斜行する刻み目が加えられている。遺存部位が少ないために文様展開が不明瞭だが、パネル内部には、隆帯に付随して沈線による区画文や三叉文が配され、刻み目が付加されているようだ。内面と口唇部が被熱し、剥落している。

2は4単位の山形状の突起を持つ深鉢形土器で、胴中位以下が欠損しているが、底部からやや湾曲気味に立ち上がると考えられる。口縁上部で強く内湾し、口唇無文部はやや内傾している。

無文部は肥厚し、頂部では2段の突起となっている。整形の状況などは、第96号住居跡出土第14図3の櫛形文系上器の口唇無文部や覆土中出土第16図44の隆帯文様上の整形、あるいは中峠系の同図54の口唇部などと酷似しており、同時期性を感じさせる。

口縁部の隆帯文は波状で、波頂部は円形に構成され、波底部は突起から垂下する隆帯が接している。

隆帯文には沈線が付随し、空白部には三叉文が描かれている。胴部地文はRL斜位回転である。口径18.0cm、最大径26.0cm、現存高22.0cm。

3は有孔鋳付き土器である。覆土中に同一個体と思われる破片がまとまっていたが、接合関係に乏しく、器形が異なる可能性あるいは別個体が存在した可能性も否定できない。

復元された個体は、台付で算盤玉状の胴部を持ち、胴上部で外反気味に開く器形を想定した。

対向する2単位の櫛状把手をもち、上端では眼鏡状となり、下端ではそのまま区画の隆帯に接するようである。把手上面には押圧が加えられ、さらに両側に沈線が付随する。

胴下端区画は二条の扁平な隆帯で、上端区画は断面三角形の隆帯で、一箇所のみ盲孔が認められた。胴部には把手の中間に、下端区画から上端区画にかけて曲線的な隆帯が貼付されているが、文様はこの一箇所のみであろう。赤彩された鉢形土器と同様の精選された胎土が用いられ、器面は丁寧に研磨され光沢を帯びている。法量は推定で胴部最大径27cm、底径9.8cm、現存高は21.0cm。

第26図9は今回の調査で出土した最大形の土器である。4単位の山形突起を持つ深鉢形土器で、底部から直線的に開き、胴上部でく字状に屈曲し、直立する幅狭い口縁部をもっており、口縁部文様帯下端のみが刻み目を持つ隆帯で区画される。幅狭い口縁部や屈曲する器形などには、阿玉台式や中峠式に類似した様相が看取される。区画内を覆る平行沈線は両端で渦巻文、中央部で方形区画文を描き、その他は交互刺突が施されている。口唇無文部は丁寧

に研磨されている。胴部地文はRL斜位回転である。口径37.7cm、現存高46.5cm、推定高51.0cmである。

5は内湾する口縁部と外反する幅広い口唇無文部をもつ深鉢形土器である。口縁部文様は4単位渦巻状の突起を挟んで、二条の隆帯により枠状に描かれ、内面には沈線が廻っている。地文はRL横回転である。口径25.3cm、現存高12.0cm。

6は口頸部が内湾気味に立ち上がる深鉢形土器である。器面に絡条体が施文された後に、口唇部と口縁部に隆帯が貼付され、ナデ整形されたため、地文が磨り消されている。

口唇上面は丁寧に研磨されている。口縁部文様は波状の隆帯文で、一部の区画が異なっている。隆帯上部には沈線が付随し、下部ではナデ整形されている。隆帯上には刻み目が加えられている。

口縁部文様は沈線によって雑に区画され、内部が磨り消されている。口径12.4cm、現存高11.5cm。

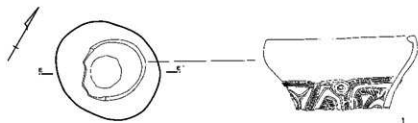
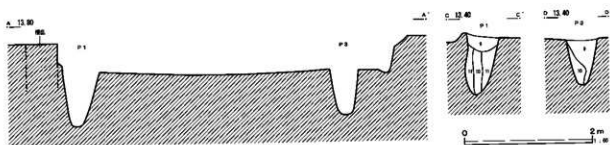
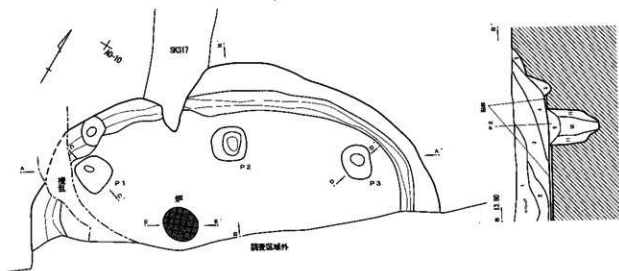
7は勝坂式パネル文系土器で、主文様が幅広扁平で刻み目をもつ隆帯文、充填される沈線文は渦巻き文等の曲線的なモチーフと、直線的な沈線と刺突が組み合わせられた意匠からなる。最大径17.0cm、現存高14.6cm。

8は瓢状の器形が推定された。無文の口唇部は上面が平坦に面取りされている。残存部位が少なく文様構成は不明瞭だが、隆帯による区画文間に沈線文が施文される土器である。地文はLの斜位縦位回転である。推定口径13.0cm、現存高14.5cm。

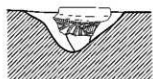
9はRL縦位回転の胴部破片である。現存部最大径13.2cm、現存高11.7cm。

第27図10は鉢形土器である。10は口頸部下がエラ状に突出し、底部に至る鉢形土器である。文様は縄文地文上の隆帯文で、山形の突出部で4単位の区画され、区画内には渦巻きのモチーフが描かれる。隆帯上には円形竹管が施されている。エラ状の突出部には棒状工具による沈線が密に施文されることから、中峠式や阿玉台式の口頸下部と近い印象をうける。

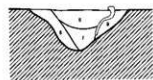
12も4単位枠状区画の鉢形土器で、口唇無文部が



A-12 40



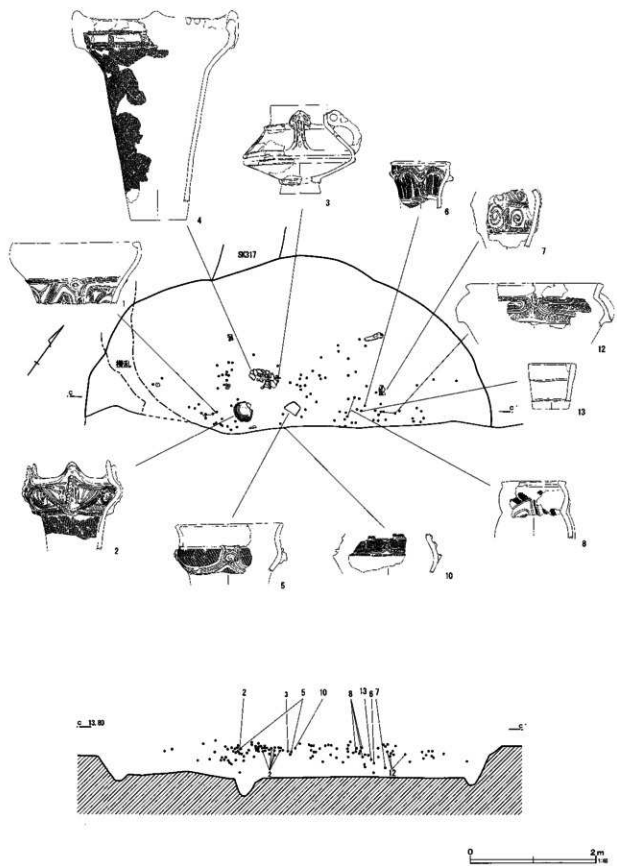
A-13 10



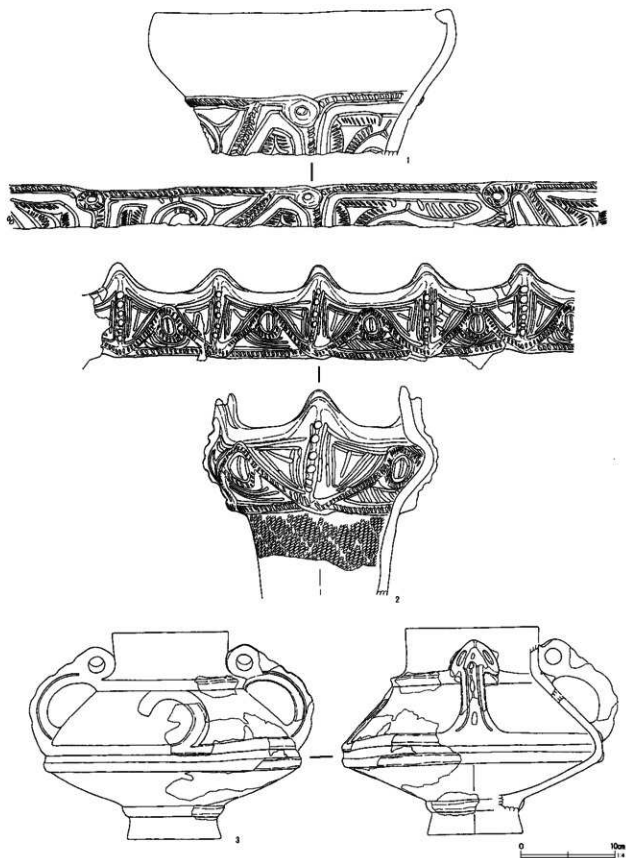
SJ99

- 1 赤褐色土 粘土質・炭化灰・黄褐色土粒多量 土器集中
- 2 暗褐色土 粘土質・炭化灰少量 土器少ない、ロームブロック多量
- 3 暗褐色土 粘土質・炭化灰は2層より少ない、ロームブロック多量 土器少量
- 4 暗褐色土 含有物認められず
- 5 暗褐色土 ローム粒多量
- 6 暗褐色土 ローム粒・焼土和灰層
- 7 赤褐色土 ローム粒・焼土和灰層
- 8 暗褐色土 砂層 砂状土層の形成上
- 9 赤褐色土 ロームブロック少量 柱抜き取り痕
- 10 赤褐色土 柱抜き取り痕
- 11 暗褐色土 ローム粒少量 柱抜き取り痕の光輝土

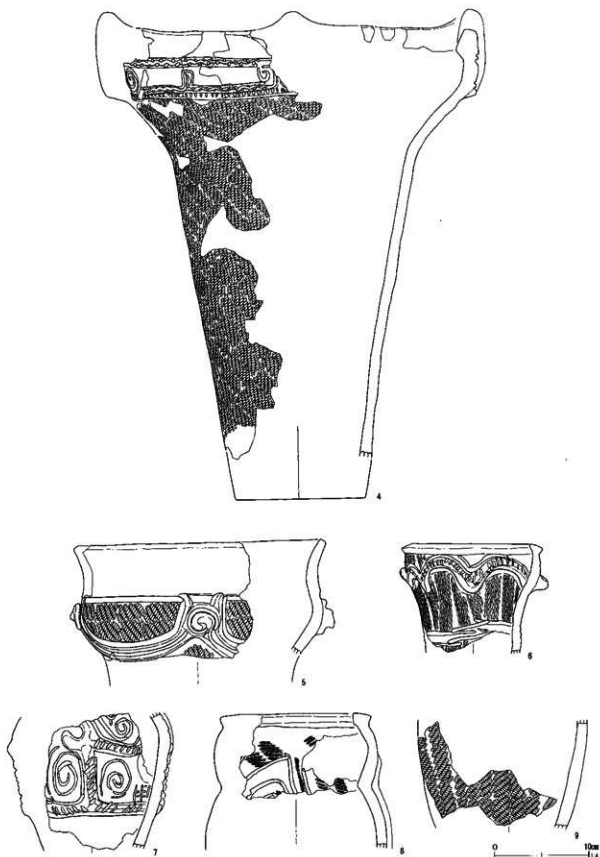
第23図 第99号住居跡



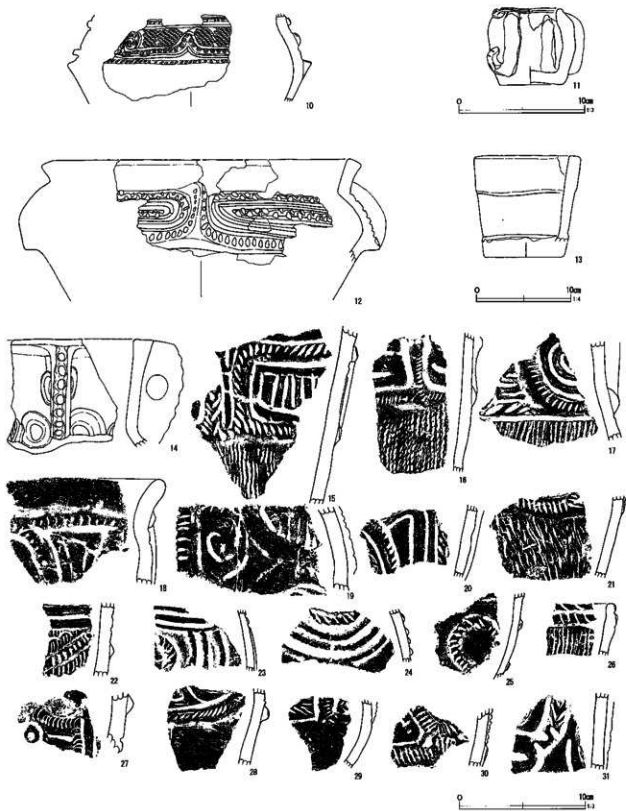
第24图 第99号住居跡遺物出土状況



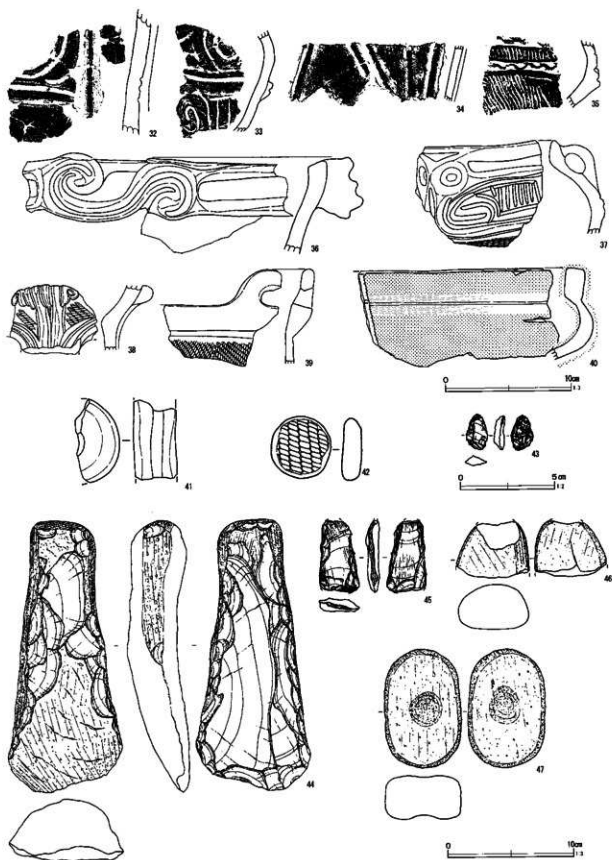
第25图 第99号住居跡出土遺物 (1)



第26図 第99号住居跡出土遺物 (2)



第27图 第99号住居跡出土遺物 (3)



第28图 第99号住居跡出土遺物 (4)

外反する。区画部が突出し、文様帯下端区画の隆帯に接する。隆帯上には刻みに加えられ、区画内部には沈線間に交互刺突が施されている。量量は推定で口径31.0cm、最大径37.8cm、現存高11.3cm。

11は口唇部が内彎する小形の深鉢形土器である。

口唇下の沈線に接して、推定4単位の突起が貼付され、上部から刺突が加えられている。体部文様は沈線直下から棒状とJ字状の隆帯文が垂下し、部分的に沈線が認められる。口唇上面および隆帯文上には刻み目が施されている。推定口径4.6cm、最大径9.7cm、器高7.8cm、底径6.4cm。

13は無文の小形深鉢形土器で、胴上位と下位に段を持つ。器面は丁寧にナデられ、口唇上面は平坦に整形されている。口径11.6cm、現存高9.5cm。

第27図14～第28図40に拓影及び実測図を掲載した。14は把手をもち、外反する幅広い口唇無文部破片である。把手中央部に孔をもち、下部では両側に環状の貼付文が付加されている。突起上には押圧が施されている。

15～18は横帯内に区画文をもつと考えられる破片で、17～18のように楕円形と見られる土器と、15～16のように、方形区画文と考えられる土器がある。隆帯上には刻みが施され、区画文内には沈線文が充填されている。15～17はともに地文は燃糸である。

19～22、27～33はパネル文系の土器であろう。隆帯によって区画され、隆帯上に刻み目が加えられた土器群と、31～33のように沈線主導の構成をもつものが存在する。後者では隆帯上の刻み目が31のように矢羽根となるものもある。22、27は爪形文が施文されており、他の破片との時間差を感じさせる。

23～25は同一個体である。刻み目をもつ円形文の周囲に断面蒲鉾形の隆帯が貼付されており、隆帯間にはナデられている。

第28図34はX字状の文様構成が想起される。胎土や器面整形が32～33に酷似している。隆帯の形態は異なっているが、文様構成の近い破片が97号住居跡からも出土している。

35は燃糸地文上に沈線間の交互刺突が加えられた、いわゆる中韓式的な土器である。

36は隆帯によって区画された幅広い口縁部文様帯にS字状隆帯文を持つ大木系の深鉢形土器である。出土例はこの一点のみで、残存部位からわかるように大形の土器である。

37は口縁部の眼鏡状突起を境に、口縁部文様帯が区画される深鉢形土器である。文様は突起下部で渦巻文が施文され、縦沈線が充填されている。屈曲部下位には縄文が施文されており、幅広い文様帯が想定される。

38は口縁部の突起から隆帯が垂下する。39は無文の口唇上に円形突起をもつ。40は黒色と赤色の顔料によって彩色された鉢形土器である。現存部にはモチーフは認められない。器面は風化が進み、顔料の剥落が顕著である。

第99号住居跡土製品 (第28図41～42)

耳飾り (第28図41)

第99号住居跡からは、耳飾りと土製円盤が出土した。41は滑車形の耳飾りである。中央部に貫通孔をもち、装着部分の断面形は凹状である。今回の調査で出土した耳飾りはこの一例のみである。推定径4.7cm、幅2.2cm。

土製円盤 (第28図42)

42の土製円盤は、土器の周辺を研磨し面取りしたもので、磨耗痕は観察されない。径2.8cm、厚さ0.9cm。

第99号住居跡出土土器 (第28図43～47)

石鏃 (第28図43)

43は黒曜石製の石鏃未製品である。裏面には主要剥離面を多く残し、調整剥離は表面に集中している。打製石斧 (第28図44～45)

44は打製石斧である。44は完形品で片面に自然面を残す。基部には柄に装着するための敲打による刃潰し痕が観察される。

45は基部が若干欠損している。両面に主要剥離面を大きく残す。両側縁が敲打され両面に研磨痕が観察されることから、磨製石斧末製品とも考えられる。磨石(第28図46~47)

46~47はともに磨石である。47は面取りされて形状が整えられており、両面に窪みを持つ。

第100号住居跡(第29図~30図)

AO-8~9グリッドに位置し、住居跡の奥壁側が調査区域外となっている。現存部位では南北長が約5.3m、東西長が5.1mで、未調査部分を勘案し、隅丸長方形の住居跡と考えられる。

確認面から床面までは0.4mで、壁は急角度で立ち上がる。壁に沿って廻る周溝は、深い部分でも床面から約0.1m程度である。覆土は自然堆積で、床面には貼床が検出された。

炉は調査区北東際で検出された埋燵炉で、胴部を欠く深鉢形土器が埋設されていた。当初地床炉として用いられ、その後に土器を埋設して埋燵炉として使用されたようである。長径1.38m×短径0.95mの楕円形で、深さ約0.3mである。

床面には第100号住居跡に伴うと思われる7個の柱穴が検出された。奥壁側の状況が不明だが、柱穴の配置状況と住居跡平面および炉の利用状況などから、拡張された住居跡と考えられる。

柱穴は概して深いものが多い。床面からの深さはP1=0.9m、P2=0.7m、P3=0.84m、P4=1m、P5=0.76m、P6=0.8m、P7=0.65mである。

炉体土器を除く他の遺物は覆土中から出土した。遺物分布は炉の周辺と東壁寄りに集中している。

第100号住居跡出土土器(第45図)

1は炉に埋設されていた土器で、胴下部を欠損している。底部からやや内湾気味に開く胴部と、強く外反する頸部、内湾する口縁部をもつ深鉢形土器である。口縁屈曲部に二条の隆帯で渦巻き状の意匠が描出され、中間には半円形に隆帯が貼付されている。

隆帯文の上部に僅かに残存した沈線は、おそらく口唇下部を廻る沈線であることから、口縁部文様帯幅は極めて狭いと考えられる。

口縁部から垂下し頸部を画する隆帯には押圧が施されている。地文は絡条体で、口頸部では斜位に、頸部下半以下は縦位に施文されている。最大径36.0cm、現存高15.3cm。

2は湾曲気味の胴下部から緩やかに外反する深鉢形土器で、頸部以上が欠損している。胴下部には断面カマボコ形の隆帯が密に貼付され、あたかも曾利系土器の口縁部を想起させる。胴中位は地文上に二条と一条の隆帯により、それぞれ直線と蛇行する懸垂文が描かれている。隆帯側には沈線が付随する。最大径13.2cm、現存高23.5cm、底径8.8cm。

3は口縁部が強く開き、口端が直立する深鉢形土器である。口唇上に緩い4単位の突起を持ち、突起下部から隆帯が垂下する。口唇上と隆帯上には、ベン先状の竹管文が連続押圧されている。口頸部、胴部ともに、素文地上に沈線が垂下するのみである。口径25.0cm、現存高21.6cm。

4も3と近い器形の深鉢形土器で、縦位回転の絡条体地文をもつ。突起は1単位で、欠損しており形状は不明である。二条の平行沈線で区画された口縁部には、波状ないしは鋸歯状の沈線文が描かれている。口径14.0cm、底径6.8cm、器高18.3cm。

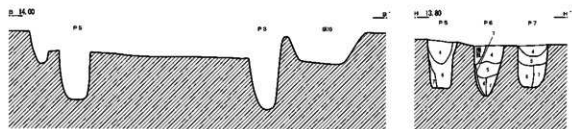
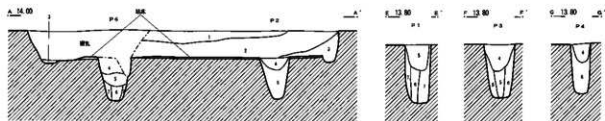
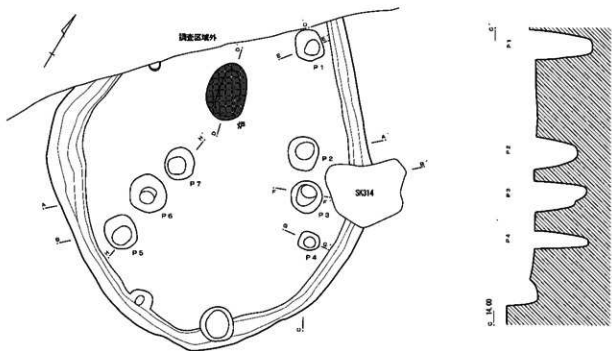
5は絡条体施文の小形深鉢形土器である。底径5.8cm、現存高6.6cm。

第33図6~23に破片を掲載した。6~9は口縁部幅が極めて狭く、無文の頸部をもつ中鉢系の土器である。

10~12は絡条体地文の破片で、12は大木系土器と思われる。

13~19はキャリバー状L縁の加曾利E系深鉢形土器で、13を除き、地文は絡条体である。口縁部には二条の隆帯により、S字状の文様等が描かれている。15は波状L縁である。

20はL唇が屈曲する橢円形土器で、第32図2の



SJ100

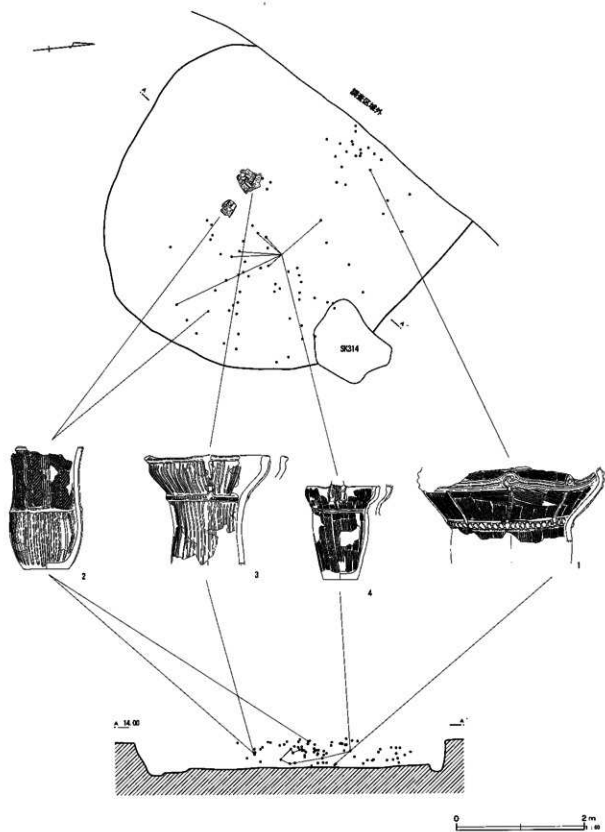
- 1 黒褐色土 ローム粒・炭化粒多量 少量の土器片を含む
- 2 新褐色土 ロームブロック・ローム粒・炭化粒多量 人為的埋戻し
- 3 明褐色土 ローム粒多量

ピット 1~9

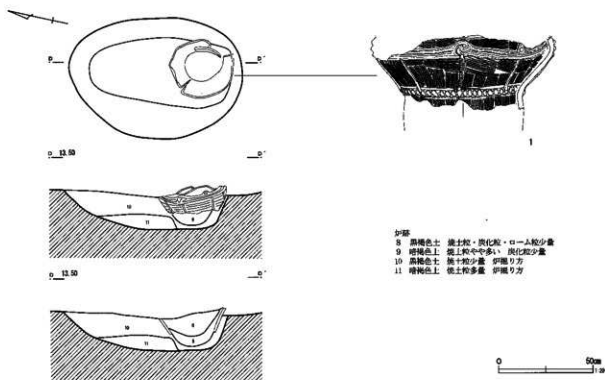
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量 柱抜き取り痕の埋戻
- 5 黒褐色土 ロームブロック多量
- 6 赤色土 炭化粒少量 粒面
- 7 黒褐色土 ロームブロックやや多い 柱抜き方定積土

0 2m
1cm

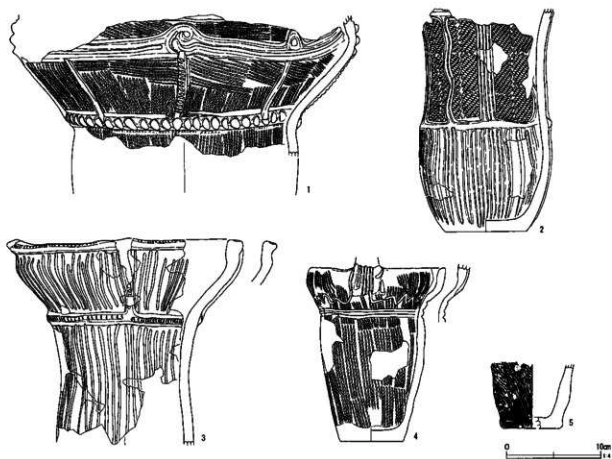
第29図 第100号住居跡



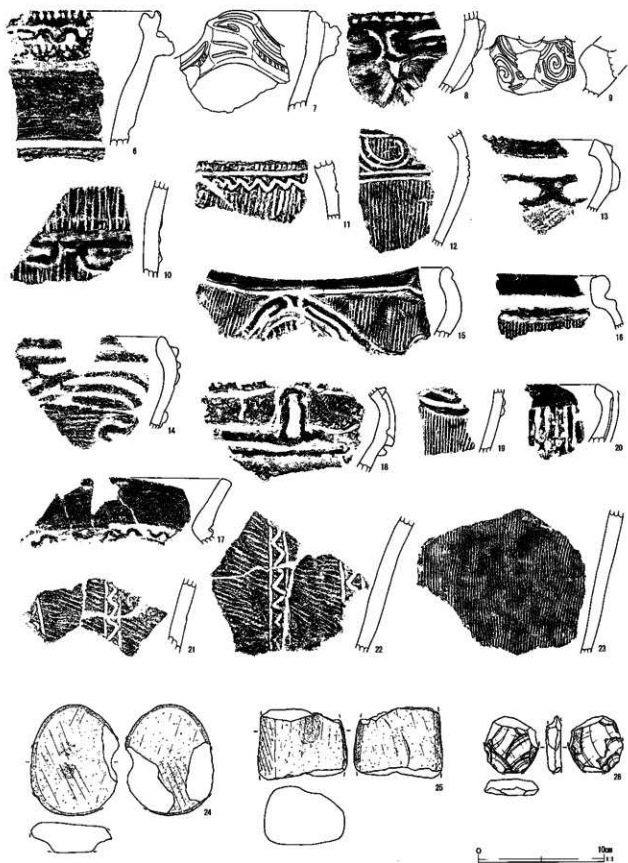
第30图 第100号住居跡遺物出土状况



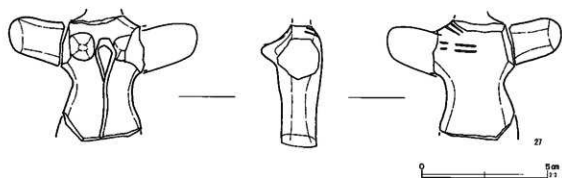
第31図 第100号住居炉跡



第32図 第100号住居跡出土遺物(1)



第33图 第100号住居跡出土遺物 (2)



第34図 第100号住居跡出土遺物(3)

胴部と比較して、本来の部分に施文された土器である。

17は無文L口唇部下に交互刺突が廻る個体、21~22は同一個体で、地文上に垂下する平行沈線間に、鋸歯文が描かれる深鉢形土器胴部破片である。23は地文のみの破片。

第100号住居跡出土石器(第33図24~26)

第100号住居跡から出土した石器は少なく、図示できる資料は3点のみである。

磨石(第33図24~25)

24~25は磨石である。24は円形盤状、25は角棒状である。24は扁平な河原石を素材としたと考えられるが、いずれも面取りされ形状が整えられている。25は片面に窪みをもつ。

打製石斧(第33図26)

26は小形の打製石斧で、基部の大半が欠損している。

第100号住居跡出土土偶(第34図)

今回の調査で出土した唯一の土偶であり、原遺跡の調査を通じても2例目の出土である。括れをもつ胴部から、上方に広げたような腕をもつ。胴と腕は接合しない。乳房は粘上粒の貼付け揃んだような整形で表現されている。乳房の間でループ状となる沈線が垂下する。背面には左肩から背中にかけて、細い平行沈線が引かれている。肩部以上と胴下部が欠損しており、胴下部は欠損後に研磨された形跡が窺える。最大長4.6cm、胴下部最大幅3.0cm、最大幅7.3cm。

第101号住居跡 (第35図)

AP-10グリッドに位置し、後述する第102号住居跡と重複関係にある。住居跡は南西壁の一部が調査区域外に伸びている。加えて土壌や井戸跡が掘込まれ、さらには攪乱されて床面が破壊されていたが、今回の調査では全形を確認できる唯一の住居跡でもある。

住居跡は長径5.6m×短径4.3mの隅丸長方形である。主軸方はN-63°-Eを示し、地形との位置関係でみると、ほぼ等高線に直行し、遺跡の北側にある谷に入り口部が設けられている。

掘込みの浅い住居跡で、確認面からの深さは0.2mである。掘り方上面にはロームを主体とする貼り床が確認できた。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁際には周溝が廻っている。周溝は幅が0.2m前後で、部分的に途切れており、南西壁側では幅狭くなっている。床面からの深さは0.1m程度である。

主軸線上の奥壁寄りに位置する地床炉は、第5号井戸跡によって南半が破壊されていたが、推定長径1m前後、短径0.7mで、楕円形であろう。

検出された柱穴は7本で、P5・P6は近接しており、6本柱穴の住居と考えられる。床面からの深さは、P1=0.93m、P2=0.56m、P3=0.82m、P4=0.53m、P5=0.67m、P6=0.46m、P7=0.26mである。

第101号住居跡出土土器 (第36図)

第101号住居跡は掘込みも浅く、第102号住居跡や土壌、井戸等と重複していることから、遺物は極めて少なかった。

1は阿玉台系、2-10は勝坂系の土器である。3はベン先状爪形文施文例、4-8は区画内充填施文が密で、第96・99号住居跡出土土器よりも古相を示している。

11-12は曾利系、13-21は加曾利E系である。11は無文の口頸部をもつ深鉢形土器で、胴部隆帯区画のみ、12は口唇内面が突出し、外面に渦巻文をもつ

幅狭い口縁部の土器である。地文上に懸垂文をもつ。

加曾利E系土器は13、15-18のように、11-12に伴う段階の土器群と、14、19-22のように明らかに新しい土器群があり、後者は第102号住居跡に帰属する可能性がある。14は微隆起線文の架懸文系土器、20-22は鉢形土器である。23もこの時期の底部であろう。

第102号住居跡 (第37図)

AP-7-8グリッドに位置する。当該グリッドには中-近世の土壌や井戸が密集しており、第101号住居跡とも重複関係にある。第102号住居跡は壁が検出されなかったために、炉跡と柱穴配列から規模を推定した。

第102号住居跡の柱穴と考えられるものは、P1-P7で、配置から奥壁よりに炉をもつ壁柱穴タイプの住居跡が予想される。柱穴の深さはP1=0.44m、P2=0.66m、P3=0.52m、P4=0.33m、P5=0.08m、P6=0.17m、P7=0.23mである。

炉は地床炉であるが、焼土の分布が認められた程度で、掘込みは確認できなかった。

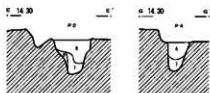
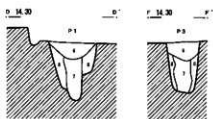
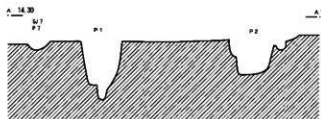
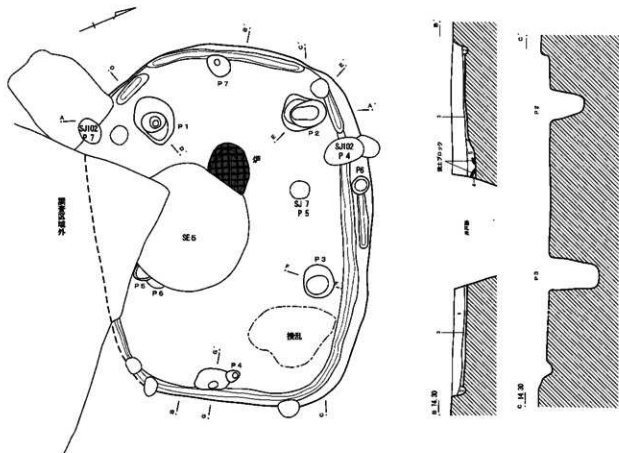
住居跡からは遺物出土しなかった。しかし、第101号住居跡覆土内から出土した資料の一部が、第102号住居跡に伴う可能性が考えられることから、時期的には中期末-後期初頭段階を考慮してもよいであろう。

第103号住居跡 (第38図)

AQ-9グリッドに位置する。住居跡の西側が調査区域外にあるため、全容は明らかでない。検出できた部分では西壁側で3.44mで、住居跡の北西壁が直線的であることから、隅丸方形の住居跡と考えられる。

確認面から床面までの深さは、南東壁側で0.1m程度で極めて浅く、北西壁側ではかろうじて壁が検出できた程度である。

炉は調査区境界の壁よりで検出されたが、攪乱を



SJ101

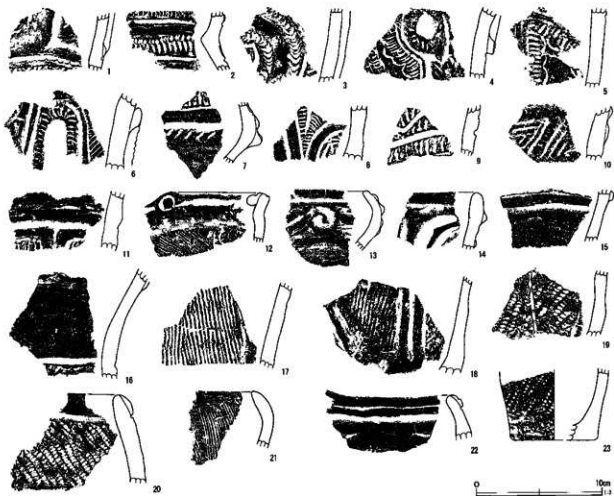
- 1 明褐色土 ローム粒・炭化粒多量 ロームブロック少量
- 2 明褐色土 ローム粒微量 ロームブロック少量 炭粒
- 3 暗黄褐色土 ローム七粒層 粘り床
- 4 黄褐色土 粘土粒・炭化粒少量
- 5 暗褐色土 一部炭土化

ピット

- 6 黄褐色土 ローム粒・炭化粒少量 柱抜き取り痕の埋設
- 7 明褐色土 ローム粒少量 柱敷
- 8 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量 柱廻り方光填土

0 2m

第35図 第101号住居跡



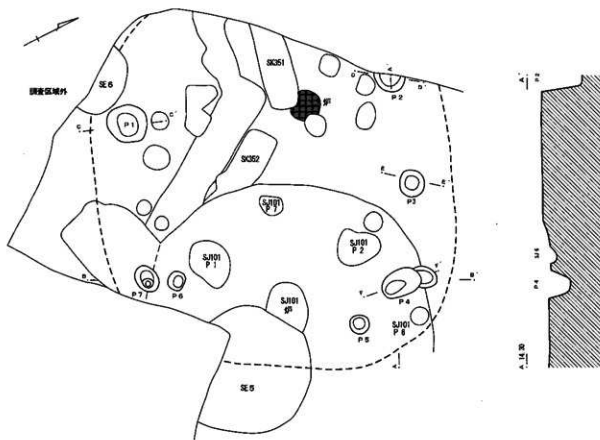
第36図 第101号住居跡出土遺物

受けていることもあり、挿込みは殆ど確認できなかった。

住居跡に伴う柱穴は3本である。径が0.3m前後で、床面からの深さはP1=0.67m、P2=0.24m、P3=0.48mである。

第103号住居跡出土土器 (第39図)

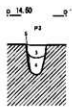
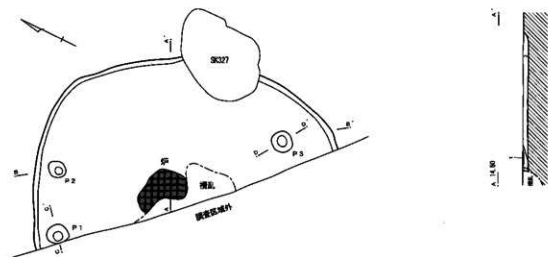
住居から出土した遺物は極めて少量である。1は阿玉台系、2は縄文地文の小破片、3は縦位回転施文で、中期末～後期に、4～5は胎土・整形から3と同時期と思われる。



- SJ102 ビット
- 1 暗褐色土 炭化粒微量 ローA粒・ロームブロック少量
柱跡を取り戻す層位
 - 2 黒褐色土 炭化粒・ローム粒微量 柱跡
 - 3 暗褐色土 ローA粒少量 炭化粒・硝子粒微量 柱廻り方穴土
 - 4 黒褐色土 ロームブロック少量 柱廻り方穴土



第37図 第102号住居跡



S J 103

- 1 明褐色土 焼土粒含む
- 2 明褐色土 ロームブロック・焼土粒少量
- 3 暗緑色土 ローム多量 炭灰粒少量 硬土下部ないしは貼り床
- 4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック含む
- 5 暗黒褐色土 ロームブロック多量 しまり床



第38図 第103号住居跡



第39図 第103号住居跡出土遺物

(2) 土壌

今回の調査で検出した土壌は総数49基である。遺物が殆ど出土しなかったため、帰属時期が明確でないものが大半を占める。

第305・306号土壌 (第40図、第44図1～4)

AN-10グリッドに位置する。第305号土壌は径が2.66×0.77mの長方形土壌で、第306号土壌、第347号土壌と重複関係にある。深さは第305号土壌が0.1m、第306号土壌が0.2mである。平面形などからも縄文時代でないことは明らかである。

第44図1～4が第305号土壌出土土器である。1～3が管利系、4が連弧文系土器である。第306号土壌は遺物が出土しなかった。

第307号土壌 (第40図)

AN-10グリッドに位置する。径が0.78×0.62m、深さ0.11mの楕円形である。北東端に小ピットを持つ。

第308・312・313・320号土壌 (第40図、第44図5)

AN-9～10グリッドに位置する。土層観察による新旧関係は、320→308・312→313の順となる。第312号土壌からは第44図5の石織未製品が出土した。

第44図5は第312号土壌から出土した石織で、調整剝離を施している途中で欠損したために、放棄されたものと思われる。

第309号土壌 (第40図)

AN-10グリッドに位置し、第308号土壌に隣接する。径は1.14×0.78m、深さはピット下部で0.5mである。

第310号土壌 (第40図)

AN-10グリッドに位置する方形の土壌で、径が1.16～1.24m、深さ0.4mである。底面から急角度で立ち上がる。

第311号土壌 (第40図)

AN-10グリッドに位置する。径が0.6～0.7m、深さ0.16mの浅い方形の土壌である。

第314号土壌 (第41図、第44図16～24)

AO-9グリッドに位置し、第100号住居跡と重複している。径が1.2～1.4m前後の不整形で、底面は0.8mの円形である。深さは約0.5mで、覆土は埋め戻されている。

第44図16は小形の皿で、内面と外面口唇端部に軸をもつ。内面と口唇上に煤が付着し、灯明皿として用いられたものであろう。口径9.0cm、底径3.3cm、器高1.8cm。

17、18は灯明皿である。いずれも内面と外面口唇下に軸をもつ。17は口径9.0cm、底径4.5cm、器高2.0cm。18は口径10.0cm、底径4.2cm、器高2.0cmである。

19は須弥で、底部直上に3単位の粘土瘤が貼付されている。内外面ともに底部直上まで釉が掛けられている。口径6.5cm、底径6.6cm。

20は摺鉢である。口唇が肥厚し、内外面に沈線が廻っている。口径30.0cm、底径13.0cm、器高12.0cm。

21～24は染付け碗である。法量は21が口径10.8cm、底径3.8cm、器高6.0cm。22は口径11.2cm、底径5.2cm、器高5.8cm。23は口径10.4cm、底径4.2cm、器高6.3cm。24は口径11.4cm、底径4.6cm、器高6.3cmである。

第315号土壌 (第41図)

AO-9グリッドに位置し、ピットと重複している。長径1m×短径0.86mの楕円形で、ピット底面までの深さは0.6mである。

第316号土壌 (第41図)

AO-9グリッドに位置する。径が0.7m前後の円形で小ピットに破壊されている。深さ0.2m。

第317号土壌 (第41図)

AN~AO-10グリッドに位置し、第99号住居跡の壁を壊している。径は3.1×0.93m、深さ1.14mである。

第318号土壌 (第41図)

AO-9~10グリッドに位置する。径は1.16×0.94m、小ピット底面までの深さは0.37mである。

第319号土壌 (第41図)

AN-10グリッドに位置し、第98号住居跡と重複している。覆土はローム主体で、埋め土であろう。

第321号土壌 (第41図)

AP-8グリッドに位置する。径が0.8×0.6mの楕円形で、深さは0.17m。皿状の断面形を呈する。

第322号土壌 (第41図)

AO-9グリッドに位置する。一辺が0.7m前後の方形で、深さ約0.2mである。

第323号土壌 (第41図、第44図6~7)

AO-9グリッドに位置し、一部は攪乱を受け壊されている。径が0.8~0.9mの楕円形と思われ、深さは0.35mである。

第44図6は磨消し懸垂文の加曾利E系胴部、7は絡条体施文の胴部破片である。

第324号土壌 (第41図)

AQ-9グリッドに位置する。径が1.14×1.04m、深さは0.24mである。底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。

第325号土壌 (第41図)

AQ-9グリッドに位置する。第310号住居跡、第330号土壌と重複し、南西側は調査区域外に延びる。長径は推定1.8m、短径1.24m、深さ0.2m前後であ

る。

第326号土壌 (第42図、第44図8)

AQ-9グリッドに位置し、第101号住居跡と接している。不定形の土壌で重複していた可能性もある。径が約1.1m、深さ0.24m。

第44図8は波状口縁の勝坂系浅鉢で、口唇部が肥厚する。

第327・328・335号土壌 (第42図、第44図9~11)

3基の重複で、335→328→327号土壌の順となる。第335号土壌は長楕円形で、幅0.84m、深さ0.65m。第328号土壌は幅1.2m、深さ0.4m。第327号土壌は2基の重複で、327b土壌は径が1.25×0.9mの楕円形で、深さが0.77mである。

第327号土壌からは、第44図9~11の破片が出土した。9は加曾利Eキャリパー系の口縁部、10は連弧文系、11は磨消し懸垂文の破片で、時期が異なっている。

第329・338・339号土壌 (第42図、第44図14)

AQ~AR-9グリッドに位置する。円形ないしは楕円形の土壌3基の重複である。第324号土壌は径が1×0.9m、第338号土壌は径が0.7mで、深さはいづれの土壌も0.7m程度である。

第44図14は、第338号土壌出土土器である。地文上に懸垂文をもつ加曾利E系胴部破片である。

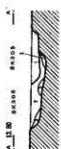
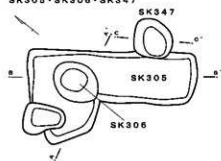
第330号土壌 (第42図)

AQ-9グリッドに位置し、第325号土壌と重複している。大半が調査区域外にあり、形状不明。深さ0.33mである。

第331号土壌 (第42図)

AQ-9~10グリッドに位置する。径が0.9m前後のほぼ円形の土壌で、深さは0.16mと浅い。

SK305・SK306・SK347



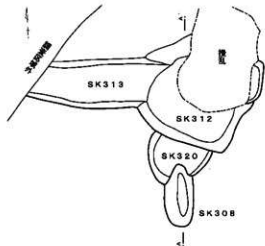
- SK305
1 黒色土 ロームブロック・粘褐色土
ブロック含む
床面に黒色の硬化層あり
- SK306
1 明褐色土 ロームブロック・ローム粒少量
2 黄褐色土 ロームブロック多量



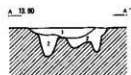
- SK307
1 明褐色土 ローム粒少量
2 黄褐色土 ローム粒多量



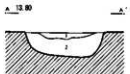
SK308・SK312・SK313・SK320



- SK308
1 明褐色土 ローム粒・炭化粒少量
2 黄褐色土 ロームブロック多量
- SK313
3 明褐色土 ロームブロック多量 人為的埋出し
- SK312
4 明褐色土 ローム粒少量
5 明褐色土 ロームブロック少量
- SK320
6 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒少量



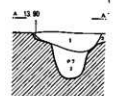
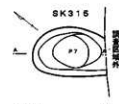
- SK309
1 明褐色土 ローム粒・ローム
ブロック少量
2 黄褐色土 ローム粒・ローム
ブロック多量



- SK310
1 明褐色土 ローム粒・焼土粒・炭
化粒少量
2 明褐色土 ローム粒・ロームブ
ロック・焼土粒少量

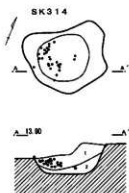


- SK311
1 明褐色土 ローム粒・炭化粒少量

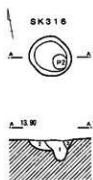


- SK315
1 明褐色土 ロームブロック・炭化粒少量
2 黄褐色土 ロームブロック多量
ビット
3 粘褐色土 ロームブロック少量

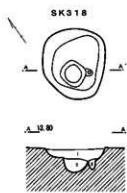
0 2m



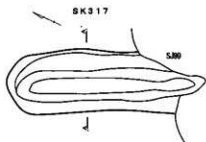
SK314
1 黄褐色土 ロームブロック多量 人為的増殖
2 黒褐色土 ロームブロック多量 人為的増殖



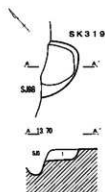
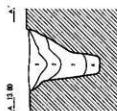
SK316
1 暗褐色土 ローム粒多量 ビット礫土
2 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量



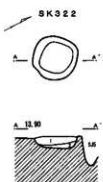
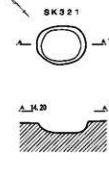
SK318
1 暗褐色土 炭化粒・ローム粒含む
2 暗褐色土 ロームブロック混入



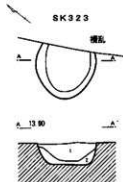
SK317
1 暗褐色土 炭化粒・ローム粒混入
2 暗褐色土 炭化粒・ローム粒多量
3 暗黄褐色土 ローム粒非常に多く混入
4 黒褐色土 ロームブロック混入



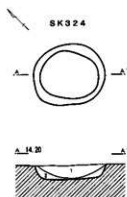
SK319
1 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒少量



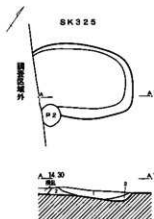
SK322
1 暗褐色土 ローム粒含む
2 暗褐色土 1層よりもローム粒多量



SK323
1 暗赤褐色土 粘土粒多量 ローム粒・炭化粒含む
2 暗褐色土 ローム粒含む



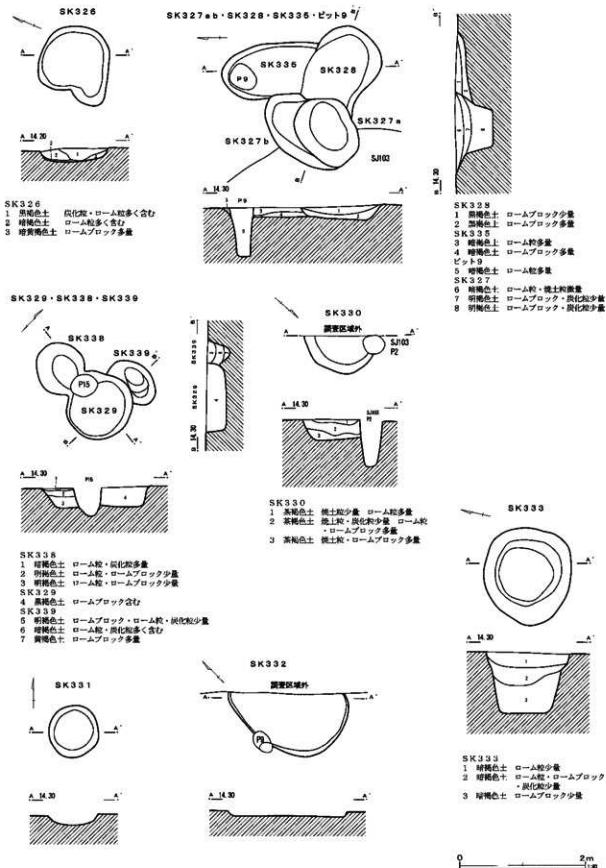
SK324
1 暗褐色土 ローム粒・炭化粒含む
2 暗褐色土 ローム粒1層よりも多量



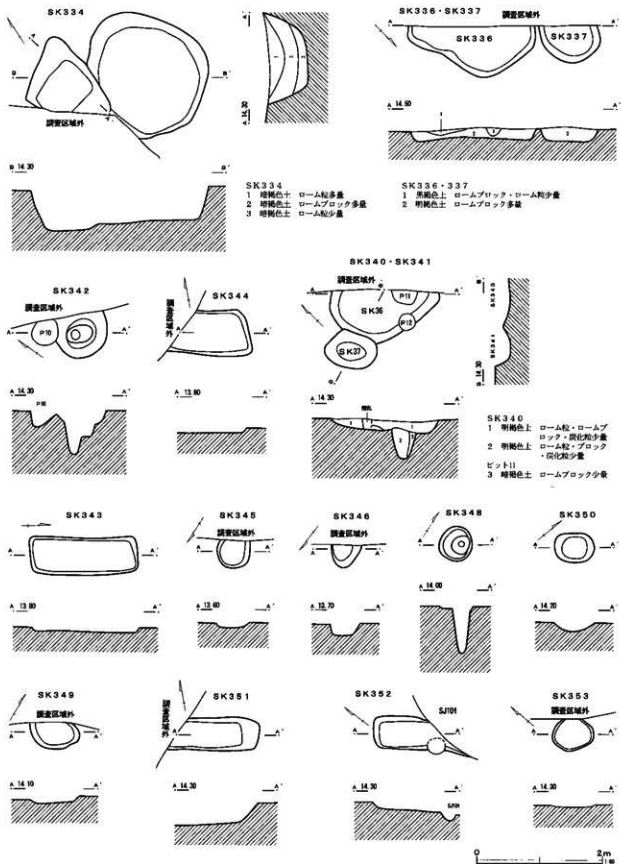
SK325
1 暗褐色土 赤褐色の粘土粒を多く含む
2 暗褐色土 ローム粒多く含む



第41図 土壌 (2)



第42図 土壌 (3)



第43図 土壕 (4)

第332号土壌 (第42図)

AR-10グリッドに位置する。調査区域外に伸びるが 2×1.5 m程度の隅丸長方形の土壌であろう。掘込みは極めて浅い。

第333号土壌 (第42図)

AR-9グリッドに位置する。径が1.35~1.5mの楕円形土壌で、底径が0.75m、深さは0.93mである。

第334号土壌 (第43図、第44図12)

AR-10グリッドに位置し一部は調査区域外に伸びる。径が2m前後の円形土壌で、深さは0.6mである。

第44図12は土壌から出土した深鉢で、口端が内傾する勝坂系土器である。波状隆帯文間に渦巻き状沈線文が施文されている。

第336・337号土壌 (第43図、第44図13)

AR-9グリッドに位置する。大半が調査区域外にあたり、詳細は不明だが、32は隅丸方形、33は楕円形の土壌であろう。深さ0.2m前後である。

第336号土壌からは、第44図13の石鏃が一点出土した。長さ3.2cm、幅1.7cmで、片面に自然面を残している。

第342号土壌 (第43図)

AQ-9グリッドに位置する。一部が調査区域外に伸びるが、径が約0.8mの円形土壌と見られる。深さは0.7mである。

第344号土壌 (第43図)

AN-10グリッドに位置し、第98号住居跡と重複している。調査区域外に伸びるが、長方形土壌で、幅が0.7m、深さは0.1mと極めて浅い。

第340・341号土壌 (第43図、第44図15)

AQ-9グリッドに位置する。第103号住居跡は調

査区域外に伸びるが、径が1.3m程度の楕円形の上土壌であろう。底面では土壌に先行する柱穴が検出された。第341号土壌は時期的に第340号土壌に後続すると考えられる。

第44図15は、第36号土壌から出土した勝坂系の無文鉢形土器である。口端でやや屈曲し、補修孔をもっている。

第343号土壌 (第43図)

AN-10グリッドに位置する。1.7m \times 0.6mの長方形土壌で掘込みが極めて浅い。

第345号土壌 (第43図)

AN-11グリッドに位置し、調査区域外に伸びる。浅く、形状等詳細は不明である。

第346号土壌 (第43図)

AN-11グリッドに位置し、調査区域外に伸びる。第345号土壌と同様に浅く、形状等詳細は不明である。

第348号土壌 (第43図)

AO-9グリッドに位置する。径が0.5m前後の円形で、深さは0.85mである。

第350号土壌 (第43図)

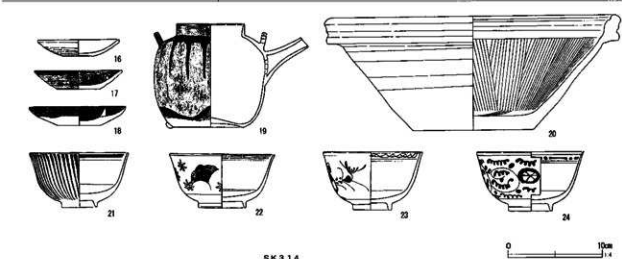
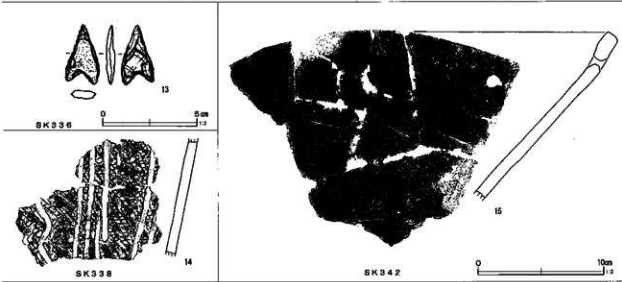
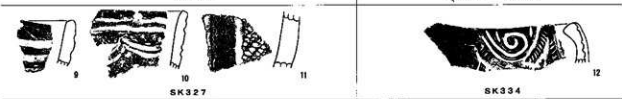
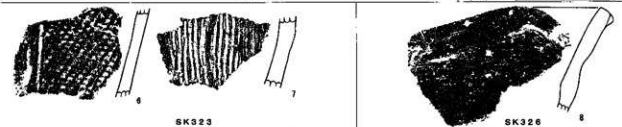
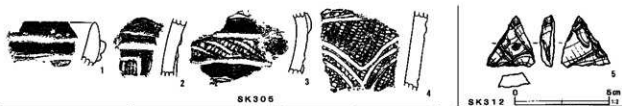
AP-8グリッドに位置する。径が0.45~0.6mの楕円形で、皿状の掘込みをもつ。

第349号土壌 (第43図)

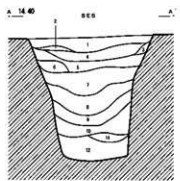
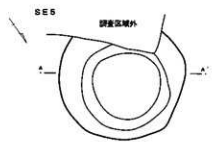
AP-8グリッドに位置する。調査区域外に伸びるため、形状等詳細は不明である。

第351号土壌 (第43図)

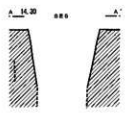
AP-8グリッドに位置する。第343号土壌と同様の形状であろう。確認面からは約0.3mで、このタイプとしては最も深い。



第44图 土坑出土遗物



- S.F.5
- | | |
|---------|--------------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒・粘土質・炭化物多量
人為的埋戻し |
| 2 暗褐色土 | ローム粒多量 人為的埋戻し |
| 3 暗褐色土 | ローム粒少量 人為的埋戻し |
| 4 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒多量
人為的埋戻し |
| 5 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒多量
人為的埋戻し |
| 6 暗褐色土 | ロームブロック主体 人為的埋戻し |
| 7 暗褐色土 | ロームブロック主体 人為的埋戻し |
| 8 暗褐色土 | ローム粒多量 ロームブロック微量 |
| 9 暗褐色土 | ロームブロック主体 |
| 10 暗褐色土 | ロームブロック多量 |
| 11 暗褐色土 | ローム粒多量 |
| 12 暗褐色土 | ロームブロック主体 |



第46図 井戸跡

3. グリッド出土遺物

(1) 縄文土器 (第47図1~24)

1は曾利系土器で、外反する無文の口頸部内面がくの字状に突出する。胴部は鋸歯状浮線文間の竹管文以下に、地文上に半放竹管の懸垂文が描かれている。括れ部の小突起の単位は不明。口径21.5cm、現存高11.8cmである。

2は加曾利E系キャリバー形土器で、口縁部が内湾し、無文の頸部をもつ。口縁部文様は凹形と端部が渦巻き状となる杓状区画文である。

3~24に破片を掲載した。3~5は角押文施文の阿玉台系土器、6~10が勝坂系で、より簡略化した印象を受ける8~9、地文上に沈線が描出された10などがある。11~12、16は勝坂末葉であろう。

13~14が加曾利EⅠ式古段階の土器で、二条の隆帯によりS字文が描出される。17~18は隆帯の扁平化と磨消しが特徴となる。20の磨消し連弧文も同時期であろう。15、19は沈線地文の曾利系土器である。

21~24は中期末葉から後期の土器であろう。21は鉢形土器で、胴下部が条線文の施文、22は波状口縁のキャリバー系土器、23~24は原体や口唇下の浅い沈線、波状口縁の形態などから、前者よりも新しい段階が想定される。

(2) 石器

磨石 (第47図25~26)

25は磨石の欠損品で、端部に敲打痕が認められる。26は基部、両側縁が丁寧な面取りされ、表面には研磨された形跡が残る。敲打痕が観察されないことから、丁寧な研磨が施されたか、あるいは自然石を選んで成形している可能性が考えられる。

打製石斧 (第47図27~28)

27~28は打製石斧である。ともに片面に自然面を大きく残し、剥離も粗い。27は欠損後に刃部を再生した可能性がある。



第47図 グリッド出土遺物

第2表 原遺跡第7次調査出土石器観察表

図版番号	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
7	S J 96	掻器	2.8	3.05	0.8	6.8	チャート	
8		掻器	1.85	4	0.7	4.6	チャート	
9		石鎌	2.95	1.5	0.6	1.4	黒曜石	
10		打斧	6.8	3.75	1.4	47.1	ホルンフェルス	
11		打斧	7.45	5.85	1.55	64.6	ホルンフェルス	
12		打斧	4.7	5.3	1.3	37.3	ホルンフェルス	
13		打斧	4.9	4.7	2	59.8	砂岩	
14		打斧	5.75	4.3	1.15	29.3	黒色頁岩	
15		打斧	7.1	3.95	1.75	50.9	ホルンフェルス	
16		打斧	9.5	4.7	1.3	53.8	ホルンフェルス	
17		打斧	8.8	2.8	1.8	40.8	?	
18		磨石	7.2	5.4	6.1	269.3	安山岩	
19		磨石	6.8	5.15	5.3	180.6	安山岩	
20		磨石	5.6	7.4	4.2	185.2	安山岩	
19	S J 97	磨石	5	6.55	4.5	206.7	安山岩	
1	S J 99	磨斧?	21.8	9.2	4.9	953.1	ホルンフェルス	
2		磨斧未製品	5.7	3.2	1.1	29.2	頁岩	
3		磨石	4.5	5.8	3.65	121.8	閃緑岩	
4		磨石	9.5	6.2	3.55	333.7	安山岩	
5		石鎌未製品	1.9	1.2	0.55	1	黒曜石	
18	S J 100	磨石	8.7	7	2.55	184.3	安山岩	
19		磨石	5.6	7.05	4.8	281.9	閃緑岩	
20		打斧	4.5	4.3	1.3	30.5	ホルンフェルス	
5	S K 312	石鎌未製品?	2.7	2.6	0.8	4.3	チャート	
13	S K 336	石鎌	3.15	1.75	0.5	2.4	ホルンフェルス	
25	グリッド	磨石	6.4	5.1	3.7	162.3	砂岩	
26		磨斧	6.1	3.85	1.05	24.6	砂岩	
27		打斧	9.7	5.7	1.5	94.8	ホルンフェルス	
28		打斧	6.2	3.8	1.5	50.4	黒色頁岩	

第3表 原遺跡第7次調査出土土製品観察表

図版番号	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	S J 99	耳飾				19.2	滑車型・欠損
2		円盤				10.4	完形
1	S J 100	土偶				28.2	欠損・腕は同一個体

第4表 原遺跡第7次調査土壌計測表

土壌番号	所在グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)	主軸方向
S K 305	A N-10	77	27	18	N-40°-W
S K 306	A N-10	78	62	11	-
S K 307	A N-10	96	62	39	N-23°-W
S K 308	A N-10	96	46	19	N-2°-E
S K 309	A N-10	114	78	51	N-25°-W
S K 310	A N-10	124	116	40	N-2°-W
S K 311	A N-10	72	64	16	N-71°-W
S K 312	A N-10	130	124	12	-
S K 313	A N-9・10	170	70	20	N-85°-W
S K 314	A O-9	136	120	48	N-84°-E
S K 315	A O-9	100	86	62	N-42°-W
S K 316	A O-9	68	66	18	N-34°-W
S K 317	A N-10 A O-10	216	108	12	N-25°-W
S K 318	A O-9	116	94	37	N-42°-E
S K 319	A N-10	90	56	16	-
S K 320	A N-10	90	74	11	-

上端番号	所在グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)	主軸方向
S K 321	A P-8	74	70	17	N-49°-W
S K 322	A O-9	72	62	18	N-50°-E
S K 323	A O-9	94	80	35	N-50°-E
S K 324	A Q-9	114	104	24	N-44°-W
S K 325	A Q-9	174	124	15	N-75°-W
S K 326	A Q-9	114	108	24	N-60°-E
S K 327	A Q-9	140	110	77	N-62°-E
S K 328	A Q-9	122	116	36	N-70°-E
S K 329	A Q-9 A R-9	102	90	19	-
S K 330	A Q-9	74	66	31	-
S K 331	A Q-9・10	82	76	17	-
S K 332	A R-10	164	96	6	N-18°-W
S K 333	A R-9・10	164	148	96	-
S K 334	A R-10	206	170	59	-
S K 335	A Q-9	134	84	65	N-2°-E
S K 336	A R-9	124	110	16	N-10°-W
S K 337	A R-9	78	76	18	-
S K 338	A Q-9	72	70	43	N-84°-W
S K 339	A Q-9	84	40	38	N-80°-W
S K 340	A Q-9	142	70	68	N-75°-E
S K 341	A Q-9	68	60	24	N-10°-W
S K 342	A Q-9	84	84	70	-
S K 343	A N-10	168	58	8	N-0.5°-E
S K 344	A N-10	118	70	11	N-79°-E
S K 345	A N-11	54	46	8	-
S K 346	A N-10	42	38	18	-
S K 347	A N-10	70	56	10	-
S K 348	A O-9	54	50	85	-
S K 349	A P-8	70	44	10	N-65°-W
S K 350	A P-8	58	56	16	N-40°-E
S K 351	A P-7・8	96	52	30	N-80°-W
S K 352	A P-8	106	56	13	N-31°-W
S K 353	A R-10	58	56	4	-

第5表 原道跡第7次調査ビット計測表

ビット番号	所在グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)
P1	A N-10	38	34	38
P2		14	14	14
P3		34	34	12
P4		46	44	13
P5		50	40	11
P6		40	26	16
P1	A O-8	30	26	19
P2		34	32	65
P3		26	24	15
P1	A O-9	58	32	17
P2		22	22	21
P3		44	40	30
P4		42	40	19
P5		40	38	20
P6		44	38	17
P7		54	46	16
P8		38	22	15
P1	A O-10	44	34	18
P1	A M-10	38	14	58
P2		28	16	60

ビット番号	所在グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)
P1	A P-8	36	34	8
P2		40	34	8
P3		46	44	18
P4		34	30	10
P5		36	34	16
P6		32	30	13
P7		38	36	13
P8		40	32	28
P9	S J 7ビット			
P10		30	30	14
P11		28	26	25
P12		74	46	22
P13		42	40	15
P14		22	22	25
P15		26	22	36
P16		32	26	27
P17		22	18	22
P18		32	28	67
P19		34	30	14
P20		42	30	18
P21		24	24	23

ピット番号	所在グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)
P22	A P-8	28	24	27
P23		28	28	19
P24		34	34	44
P25		40	38	66
P26		26	26	16
P1	A P-9	40	30	30
P2		30	28	55
P3		40	36	30
P4		26	26	57
P1	A Q-8	30	26	19
P2		46	44	42
P1	A Q-9	28	26	19
P2		40	38	36
P3		30	28	19
P4		30	24	26
P5		44	36	25
P6		26	26	25
P7		28	26	33
P8		42	38	52
P9		36	32	22
P10	48	38	25	

ピット番号	所在グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)
P11	A R-9 A R-10	34	18	47
P12		26	26	53
P13		24	22	14
P14		26	22	30
P1		28	26	14
P1		42	24	28
P2		40	36	18
P3		34	32	23
P4		36	34	15
P5		16	14	16
P6		30	30	18
P7		24	20	11
P8		28	20	25
P9		18	18	32
P10	34	32	17	
P11	50	32	15	
P12	34	32	21	
P13	24	20	15	
P14	36	34	36	

第6表 原遺跡第7次調査遺構新旧対照表

新遺構番号	旧遺構番号	新遺構番号	旧遺構番号
S J 96	S J 1	S K 326	S K 22
S J 97	S J 2	S K 327 a	
S J 98	S J 3	S K 327 b	S K 23
S J 99	S J 4	S K 328	S K 24
S J 100	S J 5	S K 329	S K 25
S J 101	S J 6	S K 330	S K 26
S J 102	S J 7	S K 331	S K 27
S J 103	S J 8	S K 332	S K 28
S K 305	S K 1	S K 333	S K 29
S K 306	S K 2	S K 334	S K 30
S K 307	S K 3	S K 335	S K 31
S K 308	S K 4	S K 336	S K 32
S K 309	S K 5	S K 337	S K 33
S K 310	S K 6	S K 338	S K 34
S K 311	S K 7	S K 339	S K 35
S K 312	S K 8	S K 340	S K 36
S K 313	S K 9	S K 341	S K 37
S K 314	S K 10	S K 342	S K 38
S K 315	S K 11	S K 343	S K 39
S K 316	S K 12	S K 344	S K 40
S K 317	S K 13	S K 345	S K 41
S K 318	S K 14	S K 346	S K 42
S K 319	S K 15	S K 347	S K 43
S K 320	S K 16	S K 348	S K 44
S K 321	S K 17	S K 349	S K 45
S K 322	S K 18	S K 350	S K 46
S K 323	S K 19	S K 351	S K 47
S K 324	S K 20	S K 352	S K 48
S K 325	S K 21	S K 353	S K 49

新遺構番号	旧遺構番号
S E 5	S E 1
S E 6	S E 2

IV 戸崎前遺跡第11次調査

1. 調査の概要

戸崎前遺跡第11次調査区は、第3次・第10次調査区の南側に位置し、台地の中央部から南西にわずかに傾斜する幅6mの道路用地が調査の対象となった。調査面積は500㎡である。

平成12年度の伊奈特定土地区画整理事業関係の発掘調査は、向原遺跡第10次・第11次も併せて実施されており、このうち戸崎前遺跡の発掘調査は、2月中旬から3月下旬にかけて実施された。

調査は事業地内で継続して行われている埋蔵文化財発掘調査において設定されたグリッド呼称に従い、10m方眼の大グリッドを設定した。呼称は、グリッド杭の北西隅を基準に、北からアルファベット表示でAP-ATを、西から数字を用いて1-6のグリッド番号を設定した。

最初に重機によって表土・木の根などを掘削・除去し、その後調査補助員による遺構確認を実施し

た。遺構確認に続いて精査を行い、必要に応じて、記録保存のための写真撮影や遺構の測量作業を行った。前回の調査では縄文時代中期後半の良好な遺構・遺物が検出されていたため、今回の調査にも期待がもたれた。

今回の調査で検出された遺構は、中～近世の掘立柱建物跡2棟、縄文時代早期と中～近世の土壌44基、近世の溝1条で、縄文時代の遺構分布域からは外れた位置であった。遺物は縄文時代早期の土器、中～近世の陶磁器類が出土した。

今回の調査地点は、旧小針内宿村の村社である氷川神社が存在した場所とみられている。検出された掘立柱建物跡は、神社関連施設であった可能性が考えられる。境内とされる場所では、部分的に硬化面も確認されている。

2. 検出された遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

第8号掘立柱建物 (第50図)

AR-3グリッドに位置する。(1)×2間の総柱建物跡で、規模は長径(2.50)m、短径4.18mである。

P1の深さは0.59mである。P2の深さは0.44mである。P3は長径0.56m、短径0.50m、深さ0.42mである。P4は長径0.62m、短径0.46m、深さ0.68mである。

第9号掘立柱建物 (第50図)

AR-3グリッドに位置する。(3)×(2)間の総柱建物跡で、規模は長径(3.08)m、短径5.75mである。

P1は深さ0.12m、P2は深さ0.42m、P3は深さ0.33m、P4は深さ0.14m、P5の規模は長径0.35m、短径0.28m、深さ0.14mである。P6は長径0.58m、短径0.58m、深さ0.31mで、P7の深さは0.22mである。

(2) 土壌

第486号土壌 (第51図)

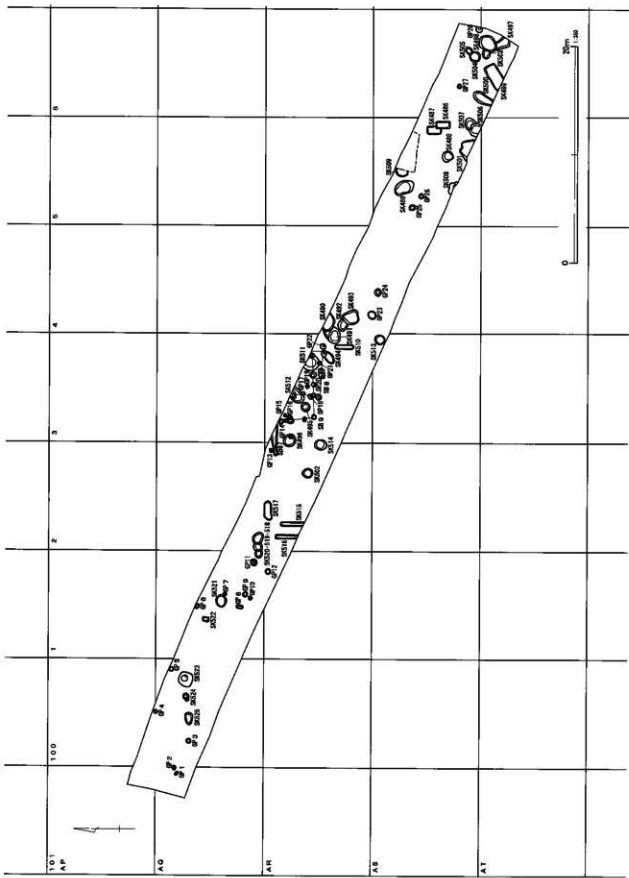
AS-5グリッドに位置する。第487号土壌と重複する。プランは長方形で、主軸方向はN-2°-Wである。規模は長径1.32m、短径0.66m、深さ0.24mである。

遺物は出土していない。

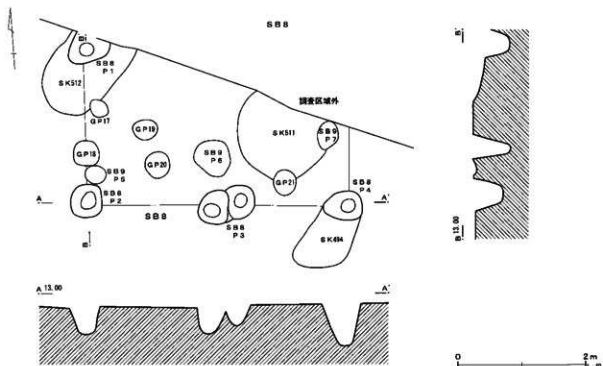
第487号土壌 (第51図)

AS-5グリッドに位置する。第486号土壌と重複する。プランは長方形で、主軸方向はN-2°-Wである。規模は長径1.32m、短径0.74m、深さ0.26mである。

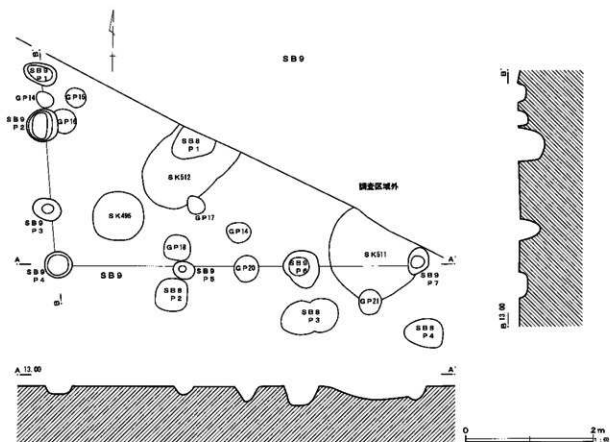
遺物は出土していない。



第48図 戸崎前遺跡第11次全体図



第49图 第8号掘立柱建物跡



第50图 第9号掘立柱建物跡

第488号土壌 (第51図)

AS-5グリッドに位置する。プランは不整形である。規模は長径1.00m、短径0.94m、深さ0.21mである。

遺物は出土していない。

第489号土壌 (第51図)

AS-5グリッドに位置する。プランは不整形で、主軸方向はN-33°-Wである。規模は長径1.91m、短径1.18m、深さ0.16mである。

遺物は出土していない。

第490号土壌 (第51図)

AR-4グリッドに位置する。第491号土壌と重複する。西側の大半が調査区域外に位置しており、プランは楕円形で、主軸方向はN-36°-Wである。規模は長径1.34m、短径(1.02)m、深さ0.72mで、西側は調査区域外となる。

遺物は出土していない。

第491号土壌 (第51図)

AR-3・4グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-5°-Eである。規模は長径1.45m、短径1.10m、深さ0.53mである。

遺物は出土していない。

第492号土壌 (第51図)

AR-4グリッドに位置する。第493号土壌と重複する。プランは楕円形で、主軸方向はN-38°-Eである。規模は長径0.84m、短径(0.82)m、深さ0.18mである。

遺物は出土していない。

第493号土壌 (第51図)

AR-4グリッドに位置する。第492号土壌と重複する。プランは不整形で、主軸方向はN-23°-Wである。規模は長径1.41m、短径1.27m、深さ0.38m

である。

遺物は出土していない。

第494号土壌 (第51図)

AR-3グリッドに位置する。第8号掘立柱建物のP4と重複する。プランは長楕円形で、主軸方向はN-47°-Wである。規模は長径1.53m、短径0.72m、深さ0.13mである。

遺物は出土していない。

第495号土壌 (第51図)

AR-3グリッドに位置する。プランは円形である。規模は長径0.83m、短径0.81m、深さ0.21mである。

遺物は出土していない。

第496号土壌 (第51図)

AR-2・3グリッドに位置する。プランは円形で、主軸方向はN-70°-Wである。規模は長径1.17m、短径1.10m、深さ0.08mである。南東隅に小ピットを有する。

遺物は出土していない。

第497号土壌 (第52図)

AT-6グリッドに位置する。第498号土壌と重複している。遺構の一部が調査区域外に位置する。プランは不整形で、主軸方向はN-25°-Wである。規模は長径(1.24)m、短径0.80m、深さ0.12mである。

遺物は出土していない。

第498号土壌 (第52図、第54図)

AS・AT-6グリッドに位置する。第497号土壌・第503号土壌と重複する。プランは楕円形で、主軸方向はN-47°-Eである。規模は長径1.75m、短径1.38m、深さ0.18mである。

遺物は熔烙鍋が二点出土している。第54図1は器高の低い熔烙鍋破片で、推定口径35.0cm、器高34.0cm、底径34.0cmを測る。2は口縁部が外折して平坦

面を呈する。推定口径38.4cm、底径37.0cm、器高5.0cmを測る。

第499号土壙 (第52図)

AS・AT-6グリッドに位置する。遺構の一部が調査区域外にかかるが、プランは長方形で、主軸方向はN-53°-Eである。規模は長径(2.08)m、短径1.18m、深さ0.24mである。

遺物は出土していない。

第500号土壙 (第52図)

AS・AT-6グリッドに位置する。遺構の一部が調査区域外にかかるが、プランは長楕円形で、主軸方向はN-62°-Wである。規模は長径(1.84)m、短径0.80m、深さ0.13mである。

遺物は出土していない。

第501号土壙 (第52図)

AS-5グリッドに位置する。遺構の一部が調査区域外にかかっており、プランは不整形で、主軸方向はN-23°-Eである。規模は長径(2.04)m、短径(0.98)m、深さ0.41mである。

遺物は出土していない。

第502号土壙 (第52図)

AR-2グリッドに位置する。プランは円形で、主軸方向はN-14°-Wである。規模は長径0.94m、短径0.78m、深さ0.24mである。

遺物は出土していない。

第503号土壙 (第52図)

AS・AT-6グリッドに位置する。第498号土壙と重複する。プランは楕円形で、主軸方向はN-84°-Wである。規模は長径(0.73)m、短径0.73m、0.16mである。

遺物は出土していない。

第504号土壙 (第52図)

AS-6グリッドに位置する。第505号土壙と重複する。プランは円形である。規模は長径1.00m、短径1.00m、深さ0.16mである。

遺物は出土していない。

第505号土壙 (第52図)

AS-6グリッドに位置する。第504号土壙と重複する。プランは楕円形で、主軸方向はN-47°-Eである。規模は長径(0.66)m、短径0.56m、深さ0.10mである。

遺物は出土していない。

第506号土壙 (第52図)

AS-5グリッドに位置する。第507号土壙と重複する。プランは不整形で、主軸方向はN-72°-Wである。規模は長径1.18m、短径(0.82)m、深さ0.70mである。

遺物は出土していない。

第507号土壙 (第52図)

AS-5・6グリッドに位置する。第506号土壙と重複する。プランは楕円形で、主軸方向はN-40°-Wである。規模は長径0.99m、短径(0.72)m、深さ(0.22)mである。

遺物は出土していない。

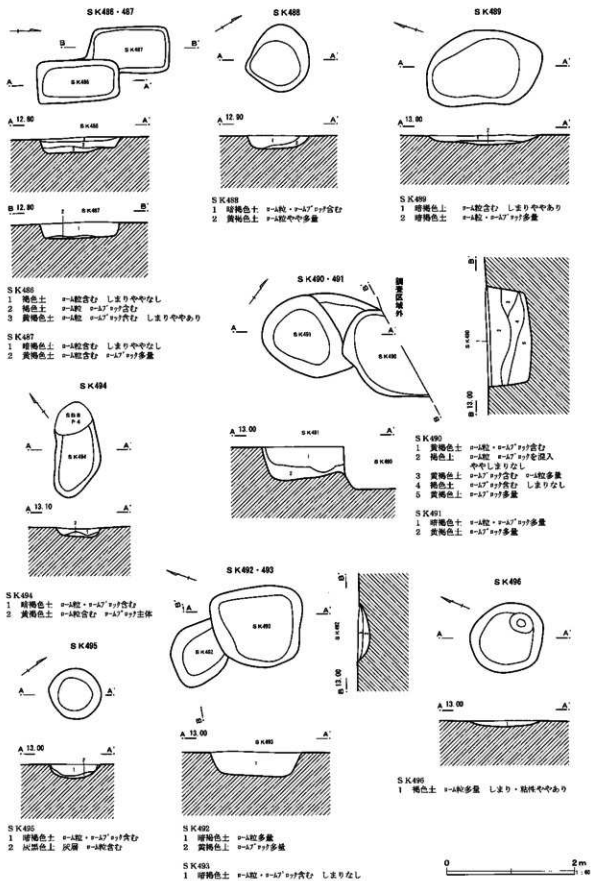
第508号土壙 (第52図)

AS-5グリッドに位置する。遺構の大半が調査区域外にかかるが、プランは不整形で、主軸方向はN-58°-Wである。規模は長径(1.24)m、短径(0.40)m、深さ0.76mである。

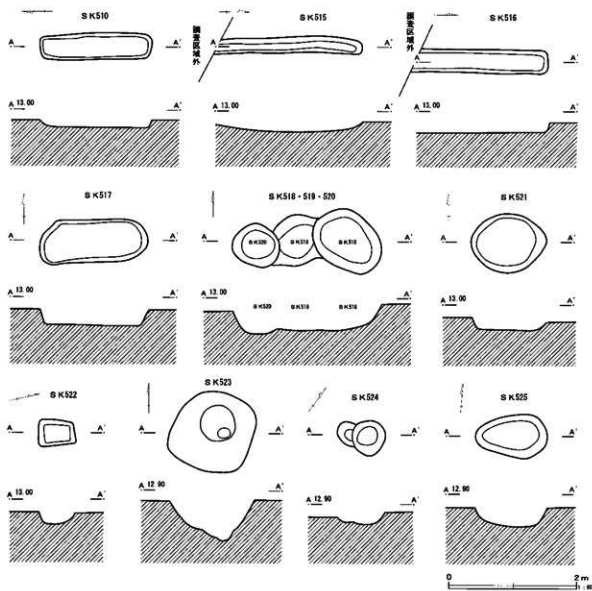
遺物は出土していない。

第509号土壙 (第52図)

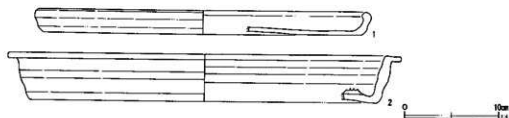
AS-5グリッドに位置する。遺構の半分は攪乱を受けており、プランは楕円形で、主軸方向はN-12°-



第51図 土壌 (1)



第53図 土壌 (3)



第54図 土壌出土遺物

Eである。規模は長径1.12m、短径(0.62)m、深さ0.42mである。

遺物は出土していない。

AR-3グリッドに位置する。プランは長方形で、主軸方向はN-0°-Eである。規模は長径1.80m、短径0.42m、深さ0.14mである。

遺物は出土していない。

第510号土壌 (第53図)

第511号土壌 (第52図)

AR-3グリッドに位置する。第9号掘立柱建物のP7、ピット状遺構P21と重複する。遺構の一部が調査区域外に位置し、プランは楕円形で、主軸方向はN-79°-Wである。規模は長径1.54m、短径(1.20)m、深さ0.22mである。

遺物は出土していない。

第512号土壌 (第52図)

AR-3グリッドに位置する。第8号掘立柱建物のP1、ピット状遺構P17と重複する。遺構の一部が調査区域外に位置し、プランは楕円形で、主軸方向はN-37°-Eである。規模は長径(1.34)m、短径1.04m、深さ(0.20)mである。

遺物は出土していない。

第513号土壌 (第52図)

AS-3グリッドに位置する。調査区域外に近接し、プランは円形で、主軸方向はN-45°-Eである。規模は長径0.94m、短径0.91m、深さ0.24mである。

遺物は出土していない。

第514号土壌 (第52図)

AR-2・3グリッドに位置する。プランは円形で、主軸方向はN-8°-Wである。規模は長径1.13m、短径0.96m、深さ0.20mである。

遺物は出土していない。

第515号土壌 (第53図)

AR-2グリッドに位置する。南側は調査区域外に延び、プランは長方形で、主軸方向はN-3°-Wである。規模は長径2.36m、短径0.26m、深さ0.14mである。

遺物は出土していない。

第516号土壌 (第53図)

AR-2グリッドに位置する。南側は調査区域外に

延び、プランは長方形で、主軸方向はN-0°-Eである。規模は長径2.14m、短径0.38m、深さ0.16mである。

遺物は出土していない。

第517号土壌 (第53図)

AQ・AR-2グリッドに位置する。プランは長楕円形で、主軸方向はN-87°-Eである。規模は長径1.76m、短径0.66m、深さ0.26mである。

遺物は出土していない。

第518号土壌 (第53図)

AQ-2グリッドに位置する。第519号土壌と重複し、プランは楕円形で、主軸方向はN-45°-Wである。規模は長径1.13m、短径0.88m、深さ0.39mである。

遺物は出土していない。

第519号土壌 (第53図)

AQ-1・2グリッドに位置する。第518号土壌・第520号土壌と重複し、プランは楕円形で、主軸方向はN-12°-Wである。規模は長径0.78m、短径(0.54)m、深さ0.36mである。

遺物は出土していない。

第520号土壌 (第53図)

AQ-1グリッドに位置する。第519号土壌と重複し、プランは円形で、主軸方向はN-90°-Eである。規模は長径0.76m、短径0.68m、深さ0.38mである。

遺物は出土していない。

第521号土壌 (第53図)

AQ-1グリッドに位置する。規模は長径1.22m、短径0.94m、深さ0.18mである。

遺物は出土していない。

第522号土壌 (第53図)

AQ-1グリッドに位置する。プランは長方形で、

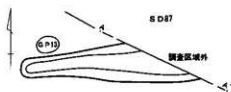
主軸方向はN-12°-Eである。規模は長径0.59m、短径0.40m、深さ0.19mである。

遺物は出土していない。

第523号土壙 (第53図)

AQ-100グリッドに位置する。プランは楕円形で、底部はテラス状に2段の掘り込みがある。主軸方向はN-65°-Eである。規模は長径1.49m、短径1.32m、深さ0.64mである。

遺物は出土していない。



第55図 溝跡

第524号土壙 (第53図)

AQ-100グリッドに位置する。プランは円形で、主軸方向はN-40°-Wである。規模は長径0.56m、短径0.53m、深さ0.16mである。

遺物は出土していない。

第525号土壙 (第53図)

AQ-100グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-85°-Eである。規模は長径1.16m、短径0.64m、深さ0.30mである。

遺物は出土していない。

(3) 土壙

第87号溝 (第55図)

AR-2・3グリッドに位置する。東西に横たわる溝で、底部の形状は箱型である。東側が調査区域外

に続き、調査できた規模は長径(2.80)m、短径0.62m、深さ0.07mである。

(4) グリッド出土遺物

土器 (第56図1~7)

第56図1~7は縄文時代早期後葉の条痕文土器群である。胎土に繊維を含み、内外面に条痕を施文するものである。

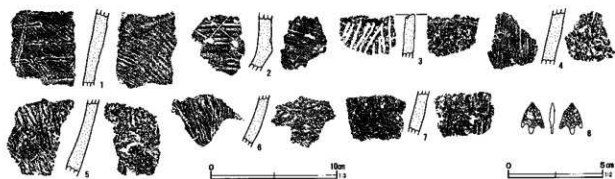
1は内外面に貝殻条痕整形を施し、横位の細隆起線を4段施文するものである。文様帯が幅広く設定されていることから、横位の細隆起線と縦位のグリッド西細隆起線が組み合うものと思われる。白色粒子と細砂粒を多く含み、繊維を少量含む。野鳥式に比定され、その古段階に位置付けられる。

2は胴部で大きく括れる器形を呈し、内外面に貝殻条痕整形を比較的強く施す。表面には切り込むような細沈線で斜格子目文を描き、交点付近に円形の刺突文を施す。繊維をやや多めに含み、細砂粒を少

量含む。鶴ガ島台式に比定される。

3は角頭状口縁が緩く開く器形を呈し、胴部で屈曲するかは不明である。口唇部には角頭状工具による斜位異方向の刻みを施す。文様帯には多載竹管による、角状集合沈線グリッド画充填手法の鋸歯状文を描いている。器面の整形は粗いが、貝殻条痕整形と思われる。胎土に繊維と白色粒子を少量含む。野鳥式に比定される。

4~7は文様の施文されない所謂無文土器片で、有文土器の無文部分の可能性もある。4は外面に繊維の基束で施したような擦痕整形を施し、内面には条痕整形を施す。暗赤褐色を呈し、繊維を少量、白色粒子をやや多く含む。野鳥式に位置付けられる可能性が高い。5は内外面とも明瞭な貝殻条痕整形を



第56図 グリッド出土遺物

施し、繊維をやや多く、白色粒子を多く含む。胎土と整形の特徴から、瀬ガ島台式に比定される可能性が高い。6は内外面とも植物の茎状工具による粗い擦痕状条痕整形を施している。繊維を若干含み、細砂粒と白色粒子を多く含む。野島式に比定されようか。7は内面に条痕整形、外面に擦痕状整形を施すもので、胎土に若干の繊維と、白色粒子、細砂粒を

多く含む。野島式に比定されよう。

石器 (第56図 8)

8はチャート製の中子を持つ石鏃である。中子と返しの一部が欠損する。縦 (1.63) cm、横 (1.32) cm、重さ0.7 gを測る。

第7表 戸崎前遺跡第11次土壌計測表

上層番号	所在グリッド	長さ (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)	主軸方向
SK486	AS-5	132	66	24	N-2°-W
SK487	AS-5	132	74	26	N-2°-W
SK488	AS-5	100	94	21	-
SK489	AS-5	191	118	16	N-33°-W
SK490	AR-4	134	(102)	72	N-36°-W
SK491	AR-3・4	145	110	53	N-5°-E
SK492	AR-4	84	(82)	18	N-38°-E
SK493	AR-4	141	127	38	N-23°-W
SK494	AR-3	153	72	13	N-47°-W
SK495	AR-3	83	81	21	-
SK496	AR-2・3	117	110	8	N-70°-W
SK497	AT-6	(124)	80	12	N-25°-W
SK498	AS・AT-6	175	138	18	N-47°-E
SK499	AS・AT-6	(208)	118	24	N-53°-E
SK500	AS・AT-6	(184)	80	13	N-62°-W
SK501	AS-5	(204)	(98)	41	N-23°-E
SK502	AR-2	94	78	24	N-14°-W
SK503	AS・AT-6	(73)	73	16	N-84°-W
SK504	AS-6	100	100	16	-
SK505	AS-6	(66)	56	10	N-47°-E
SK506	AS-5	118	(82)	70	N-72°-W
SK507	AS-5・6	99	(72)	(22)	N-40°-W
SK508	AS-5	(124)	(40)	76	N-58°-W
SK509	AS-5	112	(62)	42	N-12°-E
SK510	AR-3	180	42	14	N-0°-E
SK511	AR-3	154	(120)	22	N-79°-W
SK512	AR-3	(134)	104	(20)	N-37°-E
SK513	AS-3	94	91	24	N-45°-E
SK514	AR-2・3	113	96	20	N-8°-W
SK515	AR-2	236	26	14	N-3°-W
SK516	AR-2	214	38	16	N-0°-E
SK517	AQ・AR-2	176	66	26	N-87°-E
SK518	AQ-2	113	88	39	N-45°-W
SK519	AQ-1・2	78	(54)	36	N-12°-W
SK520	AQ-1	76	68	38	N-90°-E
SK521	AQ-1	122	94	18	N-90°-E
SK522	AQ-1	59	40	19	N-12°-E
SK523	AQ-100	149	132	64	N-65°-E
SK524	AQ-100	56	53	16	N-40°-W
SK525	AQ-100	116	64	30	N-85°-E

第8表 戸崎前遺跡第11次調査ビット計測表

ビット番号	所在グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)
GP1	A Q-101	36	26	16
GP2	A Q-100・101	42	33	15
GP3	A Q-100	44	40	27
GP4	A P・A Q-100	36	35	19
GP5	A Q-100	43	43	13
GP6	A Q-1	41	33	24
GP7	A Q-1	36	29	30
GP8	A Q-1	64	31	22
GP9	A Q-1	47	46	24
GP10	A Q-1	38	38	13
GP11	A Q-1	64	55	32
GP12	AR-1	56	47	23
GP13	AR-2	35	26	10
GP14	AR-3	30	24	18

ビット番号	所在グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)
GP15	AR-3	32	31	37
GP16	AR-3	39	38	45
GP17	AR-3	32	26	15
GP18	AR-3	42	40	62
GP19	AR-3	40	32	24
GP20	AR-3	42	40	25
GP21	AR-3	40	36	21
GP22	AR-3	50	43	36
GP23	AR・AS-4	80	68	5
GP24	AS-4	68	62	25
GP25	AS-5	60	53	8
GP26	AS-5	46	41	11
GP27	AS-6	40	38	24
GP28	AS-6	61	(46)	54

第9表 戸崎前遺跡第11次調査

新遺構番号	旧遺構番号
SB8	SB1
SB9	SB2
SK486	SK1
SK487	SK2
SK488	SK3
SK489	SK4
SK490	SK5
SK491	SK6
SK492	SK7
SK493	SK8
SK494	SK9
SK495	SK10
SK496	SK11
SK497	SK12
SK498	SK13
SK499	SK14

新遺構番号	旧遺構番号
SK500	SK15
SK501	SK16
欠	SK17
SK502	SK18
SK503	SK19
SK504	SK20
SK505	SK21
SK506	SK22
SK507	SK23
SK508	SK24
SK509	SK25
欠	SK26
SK510	SK27
SK511	SK28
欠	SK29
SK512	SK30

新遺構番号	旧遺構番号
SK513	SK31
SK514	SK32
SK515	SK33
SK516	SK34
SK517	SK35
SK518	SK36
SK519	SK37
SK520	SK38
SK521	SK39
SK522	SK40
欠	SK41
SK523	SK42
SK524	SK43
SK525	SK44
SD87	SD1

V 戸崎前遺跡第12次調査

1. 調査の概要

戸崎前遺跡第12次調査区は、第11次調査区の南西側に位置し、北側に沖積地を望む台地の先端部に位置している。標高は13mで、低地との比高差は約3mである。調査区は幅6mの道路用地で、西に向かって傾斜している。調査面積は733㎡である。

平成13年度の伊奈特定土地区画整理事業関係の発掘調査は、戸崎前遺跡のほか、今回報告の対象となった、薬師堂根遺跡第5次調査、向原遺跡第12次調査も併せて実施された。戸崎前遺跡の発掘調査は、10月末から12月末にかけて実施された。

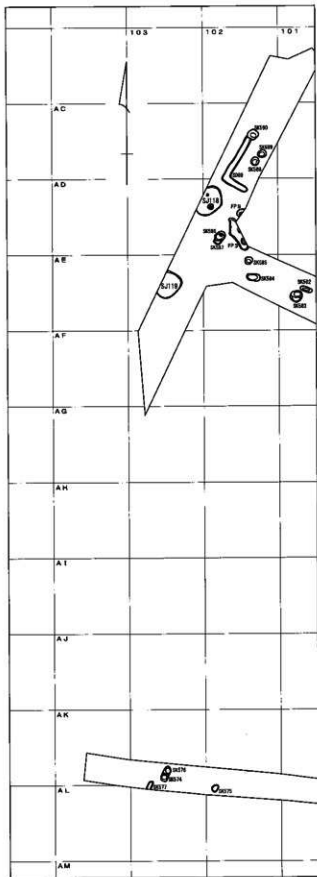
調査は事業地内で継続して行われている埋蔵文化財発掘調査において設定されたグリッド呼称に従い、10m方眼の大グリッドを設定した。呼称は、グリッド杭の北西隅を基準に、北からアルファベット表示でAB～ALを、東西には起点0から東に向かって7列を、西に向かって101から103までのグリッド番号を設定した。

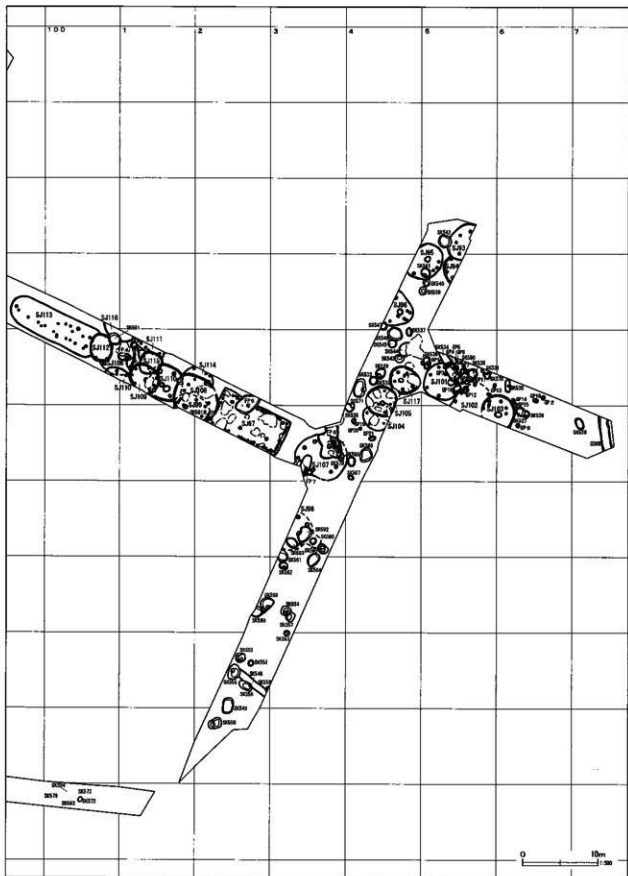
最初に重機によって表土・木の根などを掘削・除去し、その後調査補助員による遺構確認を実施した。遺構確認に続いて精査を行い、必要に応じて、記録保存のための写真撮影や遺構の測量作業を行った。

今回の調査では、0列から西側では台地が傾斜しており、遺構・遺物共に散漫な状況であった。

0列から東側では、縄文時代の遺構が密集した状態で検出された。

検出された遺構は、縄文時代早期の炉穴8基、縄文時代早期の住居跡2軒、縄文時代中期の住居跡13軒、縄文時代の上層16基、古墳時代前期の住居跡3軒、平安時代の住居跡2軒、炭窯3基、中～近世の掘立柱建物跡2棟、土壇78基、溝12条、井戸跡1基など多彩であった。縄文時代早期と中～近世の土壇44基、近世の溝1条で、縄文時代の遺構分布域からは外れた位置であった。特に縄文時代早期では大形住居跡が検出されたことは注目に値する。

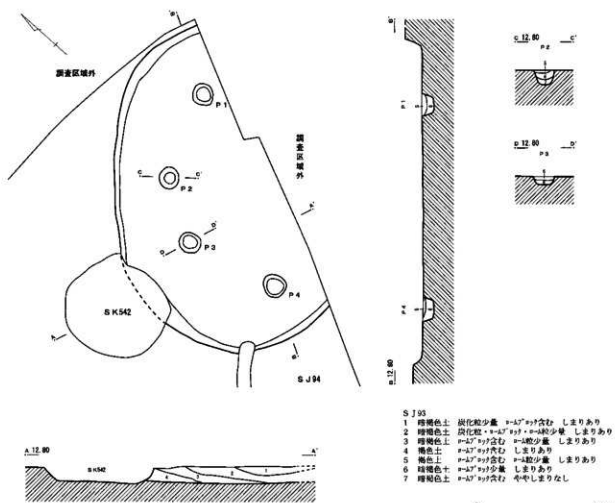




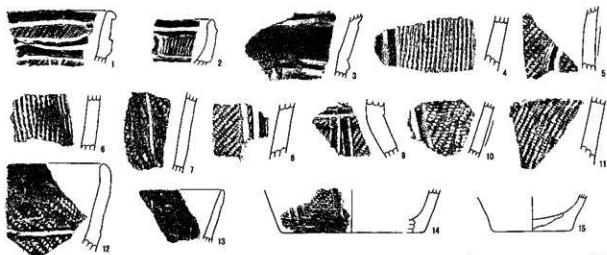
第57図 戸崎前遺跡第12次全体図

2. 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡



第58図 第93号住居跡



第59図 第93号住居跡出土遺物

第93号住居跡 (第58・59図)

AD-AE-5グリッドに位置する。南側で第94号住居跡、西側で第542号土坑と重複する。住居跡東側から南側にかけての部分が、調査区域外に位置するが、長軸が北東方向に細長い楕円形のプランを呈するものと思われる。調査した範囲内では長径5.14m、短径2.44m、深さ0.23mを測る。

炉および壁溝は検出されなかった。ピットは4本検出され、壁よりやや内側で、プランに沿って廻るものと推定される。深さはP1=0.19m、P2=0.22m、P3=0.14m、P4=0.18mを測る。

遺構に付属する土器が存在しないため、住居跡の帰属時期は不明である。

遺物は縄文時代中期の土器片が少量出土した(第59図)。1~11は加曾利E式系のキャリバー形土器群である。1、2は口縁部と胴部文様帯で構成されるキャリバー系土器の口縁部破片で、1は隆帯でやや幅狭の口縁部文様帯を区画し、胴部に不明瞭であるが磨消懸垂文風の2本対の沈線懸垂文を垂下する。

地文は単節RLを、口縁部から胴部にかけて縦位施文する。2は低いカマボコ状の隆帯で幅狭の口縁部文様帯を区画し、渦巻文を配する構成を採るものと思われる。地文は燃糸Lである。

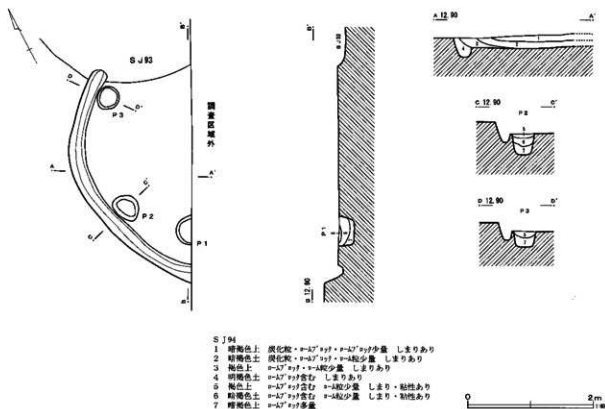
3はキャリバー系土器の頸部無文帯部分の破片である。隆帯で区画し、胴部に2本対の隆帯懸垂文を垂下する。

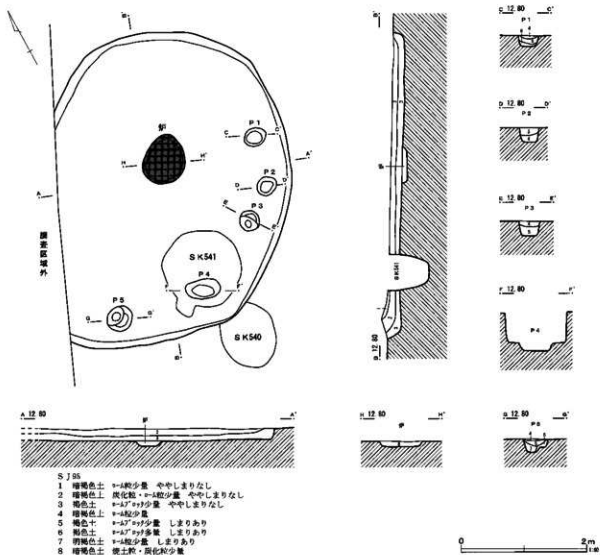
4から11は胴部破片である。4、10は2本対の隆帯懸垂文を、5は蛇行隆帯懸垂文を、7~9は沈線懸垂文を垂下する。地文は4、6が燃糸L、5、7~11は単節RLである。

12はやや内湾する口縁部が開く器形の深鉢形土器で、口縁部を横位の沈線で区画する。地文は単節RLを横位施文する。

13は無文の口縁部破片で、14、15は底部破片である。

以上、加曾利E I式終末からE II式前半に比定される土器群である。





第61図 第95号住居跡



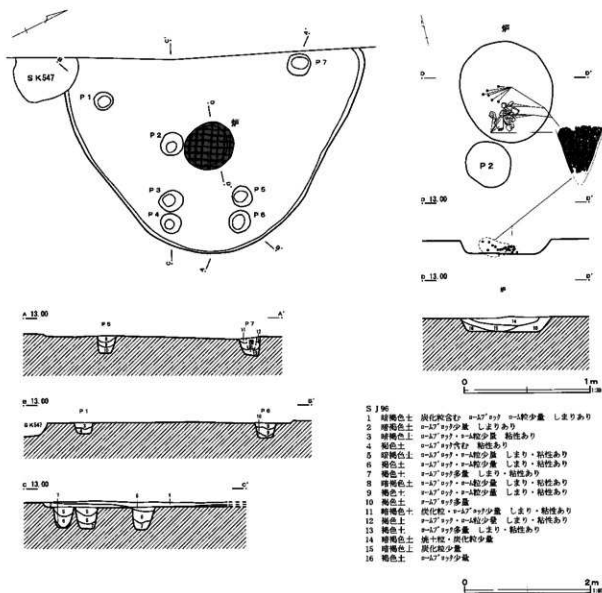
第62図 第95号住居跡出土遺物

第94号住居跡 (第60図)

AE-5グリッドに位置する。住居跡東側の半分以上が調査区域外に位置し、北側で第93号住居跡と重複する。楕円形のプランを呈するものと思われるが、長軸方向も決定し得ない。調査した範囲では長径3.45m、短径1.93m、深さ0.22mを測る。

炉は検出されないが、壁溝は全周するものと思われ、幅約0.24m、深さ0.13mを測る。ピットは3本検出され、深さはP1=0.24m、P2=0.33m、P3=0.24mを測る。

住居跡の帰属時期は不明であり、遺物も出土しなかった。



第63図 第96号住居跡

第95号住居跡 (第61・62図)

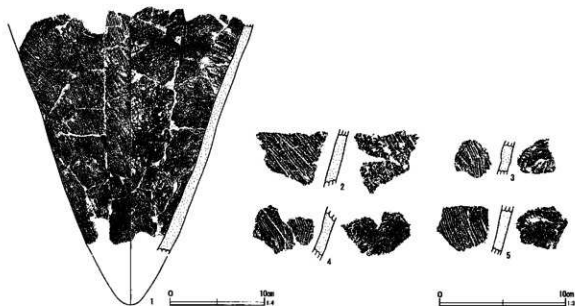
AD~AE-4~5グリッドに位置する。西側の一部が調査区域外に位置し、南側で第540・541号土壇と重複する。長軸が北東方向に細長い楕円形のプランを呈し、調査範囲内では長径4.84m、短径3.76m、深さ0.20mを測る。

炉は地床炉で、長軸上中央部よりやや奥壁側に位置し、長径0.81m、短径0.66m、深さ0.07mを測る。壁溝は検出されなかった。ピットは5本検出され、壁よりやや内側を廻るものと推定されるが、住居跡の北西側では検出できなかった。深さはP1=0.17

m、P2=0.23m、P3=0.23m、P4=0.60m、P5=0.22mを測る。

遺構に付属する土器が存在しないため、住居跡の帰属時期は不明である。

遺物は覆土より第62図1~3が出土した。1は加曾利E式キリバー系土器の胴部破片で、隆帯懸垂間を隆帯の横S字状文が繋ぐ構成を採る。地文は燃糸Lである。加曾利E I式終末に比定されよう。6は口縁部の開く深鉢形土器で、口唇部に沈線を廻らし、円形の刺突文を部分的に施す。後期の堀之内式



第64図 第96号住居跡出土遺物

に比定されよう。地文はLRの横位施文である。

3はチャート製の石炭の未製品で、縦2.7cm、横2.3cm、厚さ0.9cm、重さ4.6gを測る。

第96号住居跡 (第63・64図)

AE-4グリッドに位置する。西側半分が調査区域外に位置する。南壁で第547号土塊と重複する。隅丸方形、もしくは不整形のプランを呈するものと思われ、調査した範囲内では長径4.60m、短径3.50m、深さ0.10mを測る。

炉は地床炉で、中央部やや東壁寄りに検出され、長径0.82m、短径0.72m、深さ0.12mを測る。ピットは7本検出され、コーナー付近に位置する傾向がある。深さはP1=0.27m、P2=0.36m、P3=0.34m、P4=0.33m、P5=0.27m、P6=0.23m、P7=0.28mを測る。

炉内から第64図1が出土していることから、住居跡は縄文時代早期後葉の条痕文期に比定される。

遺物は炉内のみから出土しており、第64図1～5は同一個体である。1は胴下半部が現存する尖底土器で、先端部分を欠損するが、鋭角な鋭い尖底を呈するものと思われる。胎土に若干の繊維を含み、白

色粒子と細砂粒を多く含む。外面は細かな条痕整形を行うが、内面には条痕整形を施さず、指頭整形痕が残る。条痕は非常に細かいもので、絡条体条痕の可能性が高い。最大径26.0cm、現存高24.4cmを測る。胎土および条痕整形手法から、子母口式もしくは野島式の前段階に比定されよう。

第97号住居跡 (第65～67図)

AF-2、AG-2～3グリッドに位置する。南側の壁が調査区域外に位置する他は、調査区内にほぼ全形が納まり、西壁で第99・108号住居跡と、北壁で第5号炉穴と重複する。プランは東西方向に細長い長方形を呈し、長径10.20m、短径5.02m、深さ0.24mを測る。

炉は検出されなかった。ピットは主柱穴、壁柱穴合わせて合計49本検出された。P46～P49が主柱穴と思われ、桁方向に対峙する6本柱の構造と思われる。ピットの深さはP1=0.30m、P2=0.19m、P3=0.18m、P4=0.26m、P5=0.28m、P6=0.38m、P7=0.32m、P8=0.24m、P9=0.26m、P10=0.31m、P11=0.36m、P12=0.78m、P13=0.19m、P14=0.29m、P15=0.21m、P16=0.32m、P17=

0.22m、P18=0.30m、P19=0.24m、P20=0.25m、
P21=0.22m、P22=0.24m、P23=0.21m、P24=
0.36m、P25=0.21m、P26=0.21m、P27=0.34m、
P28=0.29m、P29=0.30m、P30=0.25m、P31=
0.27m、P32=0.18m、P33=0.20m、P34=0.35m、
P35=0.33m、P36=0.14m、P37=0.24m、P38=
0.29m、P39=0.19m、P40=0.17m、P41=0.18m、
P42=0.22m、P43=0.16m、P44=0.27m、P45=
0.69m、P46=0.33m、P47=0.30m、P48=0.38m、
P49=0.19mを測る。

住居跡の構築時期は不明と言わざるを得ないが、
覆土出土遺物がほぼ縄文時代早期後葉の条痕文系土
器群で、鵜ガ島台式の最初頭に位置付けられるため、
住居跡の構築もおおよそ近い時期に比定されよう。

出土遺物は、図示し得るもの(第67図)の殆どが
条痕文系土器群である。

1は丸頭状で先細りする口縁部が直線的に開く器
形を呈し、器内外面に貝殻条痕文整形を施す。裏面
の条痕文は器面が荒れているため、不鮮明である。
口縁部の幅状文様帯に、細い燃糸Rを密に絡めた絡
条体圧痕文を、縦位よりもやや右傾に連続して施文
する。胎土は細砂粒と白色粒子を多く含み、繊維を
少量含む。3は内外面とも擦痕状整形を施し、水平
の細隆起線を2本施文する。胎土に繊維と白色粒子
を少量含む。以上、野島式古段階に位置付けられる
上器群である。

2、4~13は細隆起線で文様帯を分割、区画し、
さらに沈線で細区画した区画内に集合太沈線を充填
施文する土器群である。2は口縁部破片で波状口縁
を呈し、2本対の細隆起線がやや斜めに垂下して文
様帯を区画し、集合太沈線を充填するが、右側の区
画では太沈線で細区画が施され、その内部に集合太
沈線を充填する構成を採る。外面は条痕文を地文状
に明瞭に施文するが、内面は擦痕状整形を施す。繊
維を少量含む、焼成良く、堅緻な土器である。

5は波状口縁の波頂部分で、丸棒状工具の押圧に
よる小波状が、左右対称形を成すものと思われる。

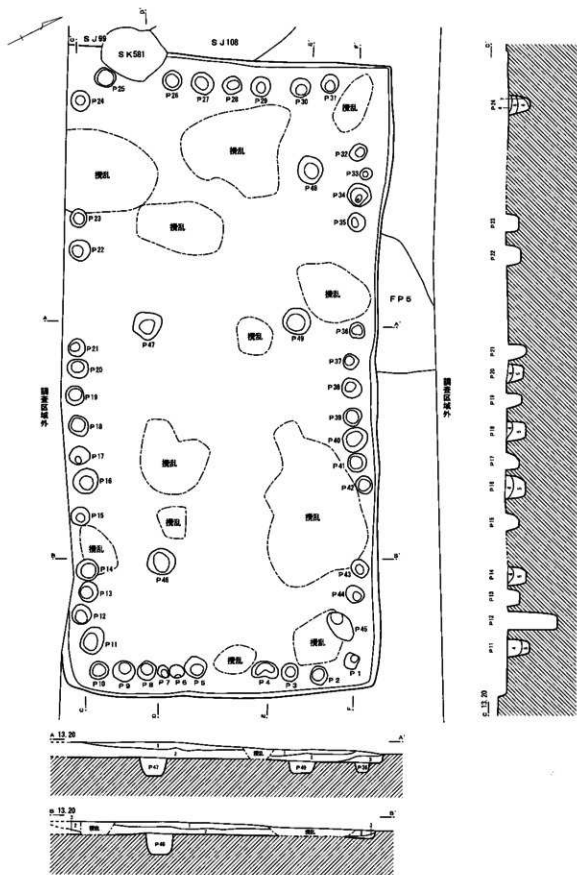
口縁部は角頭状を呈し、文様は太沈線区画内に集合
太沈線を充填施文するものである。胎土、整形とも
2に類似し、同一個体と思われる。6は波状口縁の
波頂部破片で、波頂部から細隆起線が垂下して文様
帯を分割し、口唇部直下から集合太沈線を施文す
る。垂下する細隆起線上には、太沈線と同一工具に
よる刻みを等間隔に施文する。7は口唇部が角頭状
を呈する口縁部破片で、区画内充填文と思われる集
合太沈線を横位に施文する。

4は胴屈曲部の破片で、細隆起線で屈曲部を区画
し、上半部と下半部の文様帯上下端をそれぞれ水平
に分帯する。区画内は集合太沈線を充填施文する。

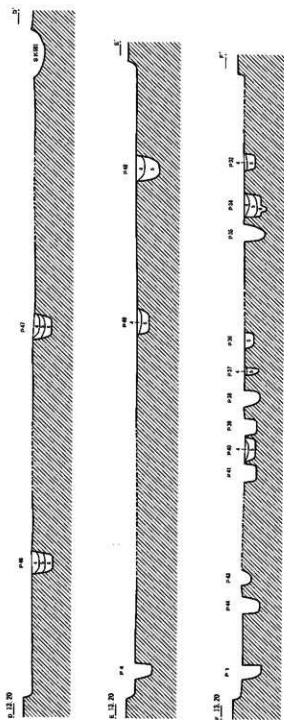
8は刻みを施す細隆起線を垂下して文様帯を分割
し、さらに2本対の平行細隆起線で分割内を襷状に
区画し、区画内に集合太沈線を充填施文する。10、
13は同様に、細隆起線区画内に集合太沈線を施文
するものである。10は細隆起線に刻みを施す。い
ずれの内面も貝殻条痕整形が顕著である。

9は上半部文様帯の下部部に相当する破片で、器
形の屈曲状態から、下半部にも文様帯を構成するも
のと思われる。縦位の区画線は不明瞭であるが、斜
位の襷状区画は平行する細沈線で区画し、それぞれ
区画内に集合太沈線を施文する。通常、区画線に
対して直交、あるいは角度を付けて充填文を施文す
るが、9の上側の細沈線区画内は区画線と平行状態
に充填している。また、区画の交点部には、太沈線
と同一工具の刺突状の刻みを施す。

11は平行細隆起線で区画するものと思われるが、
充填の集合太沈線が被さるため、区画線が不明瞭
である。12は太沈線の区画内に、集合太沈線を充
填施文する。いずれも内面の貝殻条痕整形は明瞭で
あり、外面の条痕文は平行する区画線内では磨消し
ている。以上、文様構成や区画交点への刺突文が不
十分であるなどを考慮すると、野島式の終末段階と
は明瞭に区分されないものの、上下の文様帯が分帯
分されることや、区画交点への刺突や刻み手法が成
立していることから、鵜ガ島台式として認定しうる



第65图 第97号住居跡 (1)



- SJ97
- | | | | | |
|---|------|-------------|----------|---------|
| 1 | 暗褐色土 | 砂・砂礫・砂礫少量 | やや赤色粘りむ | ややしまりなし |
| 2 | 暗褐色土 | 炭化粒・砂礫・砂礫少量 | やや赤色 | ややしまりなし |
| 3 | 褐色土 | 砂礫少量 | しまりあり | |
| 4 | 暗褐色土 | 砂礫少量 | しまり・粘性あり | |
| 5 | 褐色土 | 砂礫少量 | しまり・粘性あり | |
| 6 | 褐色土 | 砂礫少量 | しまり・粘性あり | |
| 7 | 褐色土 | 砂礫少量 | しまり・粘性あり | |

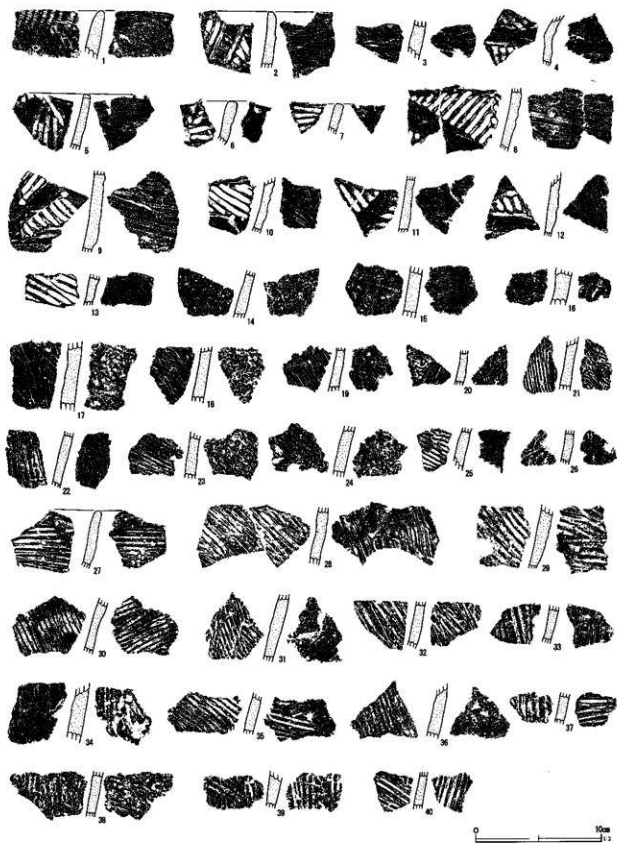
第66図 第97号住居跡 (2)

ものである。

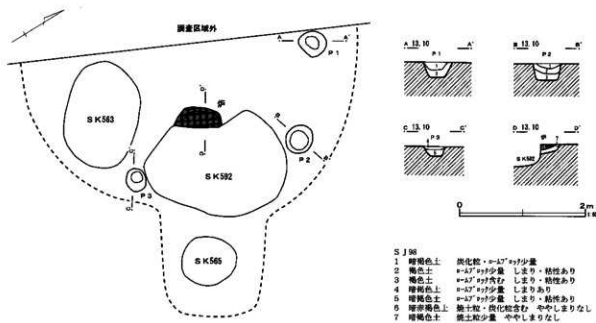
14~21、23、24、31は擦痕状の整形もしくは、細かな条痕整形を施すもので、繊維を少量含み、白色粒子、細砂粒を多く含む点で共通する。特に裏面は、指頭状整形痕が残るなど、古段階の様相を兼備して

いる。おそらく1と同様の、野島式古段階に位置付けられるものと思われる。

また、22、25~30、32~40は器面の荒れで不明瞭になっている部分もあるが、大半は明瞭な貝殻条痕整形を内外面に施しており、繊維はやや多く含むが



第67图 第97号住居跡出土遺物



第68図 第98号住居跡

白色粒子を多く含み、暗橙褐色を呈するなど2、9の破片と共通する部分が多い。鵜ガ島台式の古段階に比定されるものであろう。

第98号住居跡（第68図）

AH-3グリッドに位置する。炉と柱穴のみが現存する住居跡で、炉より奥壁側が調査区域外に位置する。第563・565・592号土塊と重複する。プランは張り出しを持つ柄鏡形を呈するものと思われるが、確証はない。調査範囲内では長径5.37m、短径4.36mを推定する。

炉は地床炉で、大半が第592号土塊によって攪乱される。現存部で長径0.76m、短径0.30m、深さ0.16mを測る。ピットは3本検出され、深さはP1=0.24m、P2=0.26m、P3=0.16mを測る。

出土遺物は無く、時期は不詳である。

第99号住居跡（第69・70図）

AF-AG-1-2グリッドに位置する。南側半分が調査区域外に位置する。西壁で第100号住居跡、北

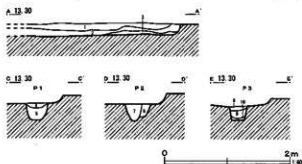
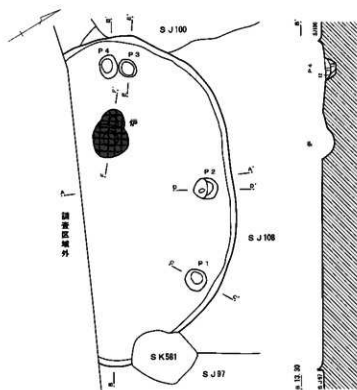
壁で第108号住居跡、東壁で第97号住居跡、第581号土塊と重複する。北西方向に細長い楕円形を呈し、調査範囲内では長径5.11m、短径2.44m、深さ0.21mを測る。

炉は埋燗炉で、長軸上中央部より奥壁側に位置しており、長径0.78m、短径0.57m、深さ0.20mを測る。ピットは4本検出され、壁に沿って甕の傾向がある。深さはP1=0.27m、P2=0.25m、P3=0.22m、P4=0.21mを測る。

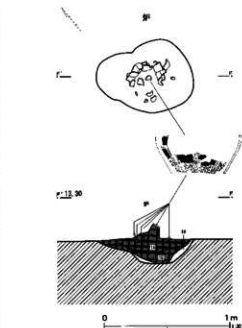
住居跡は炉体土器から、縄文時代中期の加曾利EⅢ式期の所産と思われる。

遺物は炉体土器と、大形破片が出土している。第70図1は炉体土器で、口縁部文様帯が内湾して開く鉢形土器である。口縁部文様帯はわずかに残るのみで、大半は胴部破片であり、底部は欠損する。胴部は口縁部区画線下で、箱状磨消懸垂文と、蕨手状沈線懸垂文が垂下する。地文は口縁部が単節L Rの縦位施文、胴部が単節L Rの横位施文と刺突文を施文する。推定最大径45.6cm、現存高26.4cmを測る。

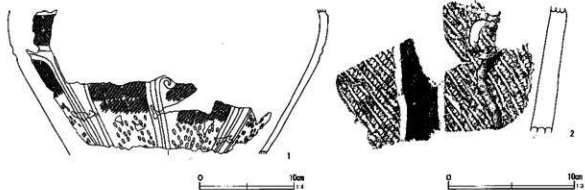
2はキャリパー系深鉢形土器の胴部破片で、磨消



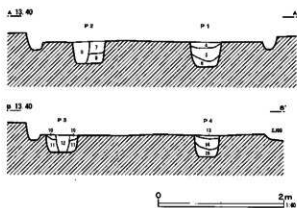
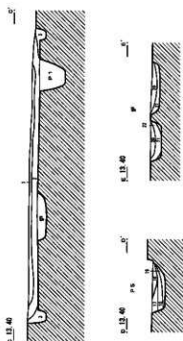
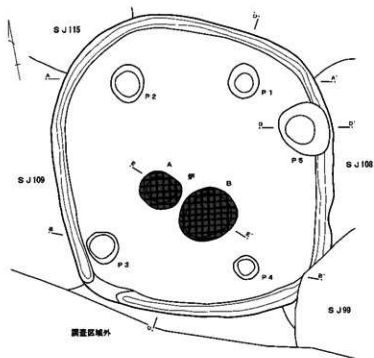
第69図 第99号住居跡



- S J 99
- 1 埴輪色土 灰化土・s-27・s1少量 s-4粒含む ややしまりなし
 - 2 埴輪色土 s-27・s1含む s-4粒少量 ややしまりなし
 - 3 埴輪色土 s-27・s1多量
 - *人為的埋め戻し
 - 4 埴輪色土 s-27・s1少量 しまりあり
 - 5 埴輪色土 s-27・s1少量 しまりあり
 - 6 埴輪色土 s-27・s1含む
 - 7 埴輪色土 s-27・s1少量 しまりなし
 - 8 埴輪色土 s-27・s1含む しまりあり
 - 9 埴輪色土 s-27・s1少量 しまりあり
 - 10 埴輪色土 s-27・s1含む しまりあり
 - 11 埴輪色土 s-27・s1含む しまりあり
 - 12 埴輪色土 s-27・s1少量 しまりあり
 - 13 埴輪色土 s-27・s1少量 ややしまりなし
 - 14 埴輪色土 灰土・s1・s2少量 しまりなし
 - 15 明赤褐色土 灰土・s1・s2少量 しまりなし
 - 16 褐色土 s-27・s1少量

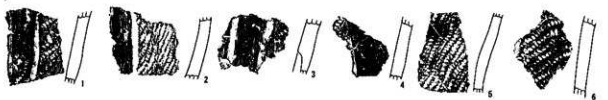


第70図 第99号住居跡出土遺物



第71図 第100号住居跡

- S J 100
- 1 暗褐色土 炭化灰・F-A?opf少量 ややしりあり
 - 2 暗褐色土 F-A?opf含む ややしりあり
 - 3 褐色土 F-A?opf含む しりあり
 - 4 暗褐色土 F-A?opf少量 しりあり
 - 5 暗褐色土 F-A?opf少量 しりあり
 - 6 暗褐色土 F-A?opf少量 しりあり
 - 7 暗褐色土 F-A?opf少量 しりあり
 - 8 暗褐色土 F-A?opf含む しりあり
 - 9 褐色土 F-A?opf少量 しりなし
 - 10 暗褐色土 F-A?opf少量 しりあり
 - 11 暗褐色土 F-A?opf含む しりあり
 - 12 褐色土 F-A?opf少量 ややしりなし
 - 13 褐色土 F-A?opf含む しりあり
 - 14 暗褐色土 F-A?opf少量 しりあり
 - 15 暗褐色土 F-A?opf少量 しりあり
 - 16 暗褐色土 F-A?opf少量 しりなし
 - 17 暗褐色土 F-A?opf少量 しりあり
 - 18 暗褐色土 F-A?opf含む しりあり
 - 19 暗褐色土 F-A?opf含む しりあり
 - 20 暗褐色土 炭化灰土を含む 炭化灰少量 しりあり
 - 21 暗褐色土 炭化灰少量 F-A?opf含む しりあり
 - 22 褐色土 F-A?opf含む しりあり



第72図 第100号住居跡出土遺物

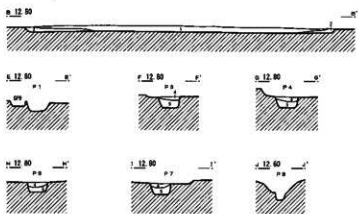
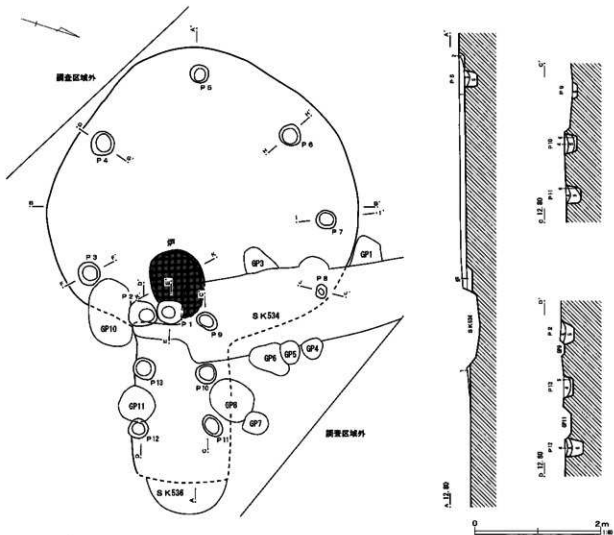
懸垂文と蕨手状蛇行沈線懸垂文が垂下する。地文は付加条縄文風であるが、細太の燃り合わせによる単節LRの縦位施文である。

第100号住居跡 (第71・72図)

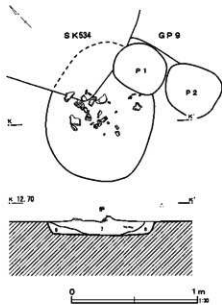
AF-1グリッドに位置する。西壁で第109号住居

跡、北壁で第115号住居跡、東壁で第99・108号住居跡と重複する。隅丸方形のプランを呈し、長径4.66m、短径4.64m、深さ0.15mを測る。

炉は地床布で、中央部やや南壁寄りの2箇所に検出され、Aは長径0.66m、短径0.57m、深さ0.18m、Bは長径0.93m、短径0.81m、深さ0.14mを測る。



- S J 101
- 1 埴輪色土 灰⁺砂⁺含む 灰⁺砂⁺少量 しまりあり
 - 2 埴輪色土 灰⁺砂⁺少量 灰⁺砂⁺少量 粘性あり
 - 3 埴輪色土 灰⁺砂⁺含むに含む ややしまりなし
 - 4 埴輪色土 灰⁺砂⁺少量 ややしまりなし
 - 5 埴輪色土 灰⁺砂⁺少量 ややしまりなし
 - 6 褐色土 灰⁺砂⁺少量 ややしまりなし
 - 7 埴輪色土 灰⁺砂⁺少量 灰⁺砂⁺少量
 - 8 褐色土 灰⁺砂⁺少量 灰⁺砂⁺少量



第73図 第101号住居跡



第74図 第101号住居跡出土遺物

ピットは5本検出され、コーナー付近に位置するP1～P4を主柱穴とする。深さはP1=0.41m、P2=0.36m、P3=0.26m、P4=0.33m、P5=0.21mを測る。壁溝はほぼ全周し、南西コーナーのみ検出されなかった。幅約0.25m、深さ0.13mを測る。

住居跡は出土遺物から、中期加曾利EⅢ式古段階の所産と思われる。

遺物は土器片が出土している。第72図1～6はキャリバー系深鉢形土器の胴部破片で、1～4は磨消懸垂文が垂下する。5、6は一部に沈線懸垂文が見られる。地文は全て単節RLの縦位施文である。

遺物は4内の覆土から出土している。第74図1は口縁部の内湾する管利式の口縁部破片と思われ、地文に単節LRを横位施文する。2、3は頸部に蛇行隆帯を添付する管利式系の深鉢形土器で、地文に沈線を施文する。

4～6は加曾利E式のキャリバー系深鉢形土器で、4は口縁部破片で、幅狭の口縁部に隆帯の渦巻文と区西文を連結するモチーフを構成する。5は胴部破片で、単節RL地文上に2本の沈線懸垂文と1本の蛇行懸垂文を垂下する。6は口縁部文様帯の下端部分で、胴部に単節RLを縦位施文する。

7～10は鉢形土器の胴部破片と思われ、同一個体である。0段多条の単節LRを縦横方向に施文し、羽状を構成する部分もある。

第101号住居跡 (第73・74図)

AF-5グリッドに位置する。住居跡のプランは柄鏡形を呈するものと思われるが不明瞭で、柄の付け根部分に第534号土壌や多くのピット状遺構による攪乱を受けている。また、柄の先端部と思われるところで第536号土壌と重複する。長径7.40m、短径4.99m、深さ0.09mを測る。

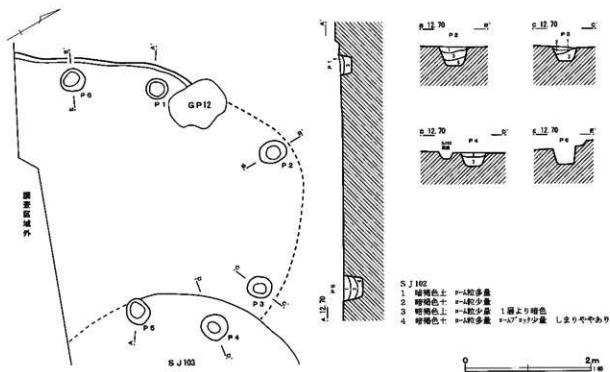
炉は地床炉で、中央部より柄の付け根近くに検出され、長径1.08m、短径0.84m、深さ0.10mを測る。ピットは13本検出され、深さはP1=0.15m、P2=0.22m、P3=0.18m、P4=0.15m、P5=0.20m、P6=0.14m、P7=0.17m、P8=0.30m、P9=0.09m、P10=0.20m、P11=0.24m、P12=0.29m、P13=0.15mを測る。壁溝は検出されなかった。

第102号住居跡 (第75図)

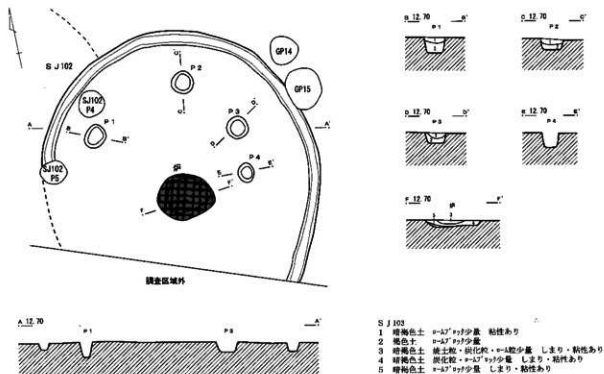
AF～AG-5グリッドに位置する。壁の一部と、柱穴のみ検出された住居跡である。東壁で第103号住居跡、北壁で第12号ピットと重複する。プランは楕円形を呈するものと思われるが、不明である。調査範囲内では長径4.59m、短径3.66mを測る。

炉、壁溝は検出されず、ピットは6本検出された。深さはP1=0.20m、P2=0.29m、P3=0.21m、P4=0.22m、P5=0.30m、P6=0.27mを測る。

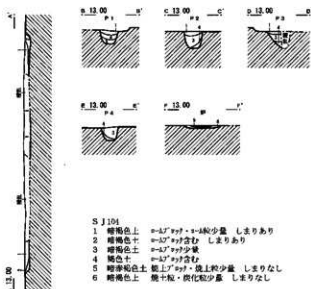
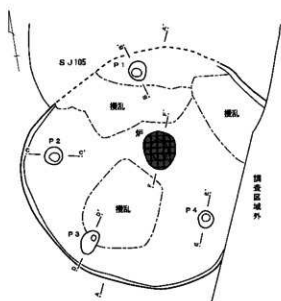
出土遺物は無く、時期は不詳である。



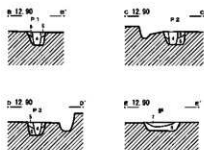
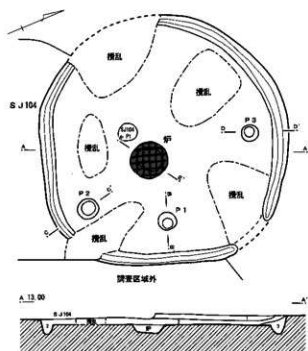
第75図 第102号住居跡



第76図 第103号住居跡

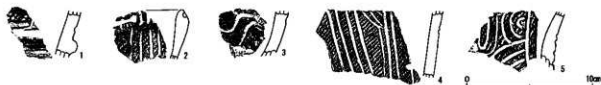


第77図 第104号住居跡

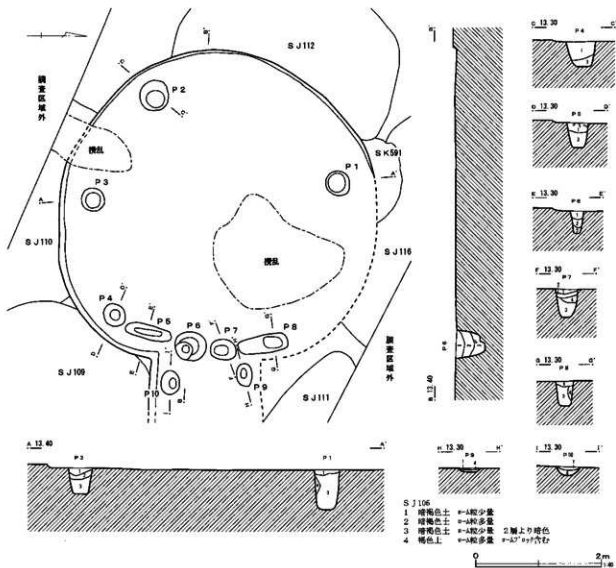


- S J 105
- 1 暗褐色土 黒色土粒・=A²砂粒少量 しまりなし
 - 2 暗褐色土 =A²砂粒多量 しまりなし
 - 3 褐色土 =A²砂粒多量 しまりなし
 - 4 暗褐色土 =A²砂粒少量 ややしまりなし
 - 5 褐色土 =A²砂粒少量 ややしまりあり
 - 6 暗褐色土 焼土粒・炭化粒少量 しまり、粘性あり
 - 7 暗褐色土 焼土粒・炭化粒少量 しまり、粘性あり
 - 8 褐色土 =A²砂粒少量 しまり、粘性あり

第78図 第105号住居跡



第79図 第105号住居跡出土遺物



第80図 第106号住居跡

第103号住居跡 (第76図)

AF~AG-5~6グリッドに位置する。住居跡の南壁が調査区域外に位置する。北東壁で第15号ピットと、西壁付近で第102号住居跡のP4・5と重複する。プランは円形もしくは南北方向に細長い楕円形を呈するものと思われ、壁は検出されなかった。調査範囲内では長径4.88m、短径3.70mを測る。

炉は地床炉で、中央部やや南寄りに検出され、長径0.93m、短径0.74m、深さ0.12mを測る。壁溝は全周するものと思われ、幅約0.22mで、深さ0.10mを測る。ピットは4本検出され、深さはP1=0.25m、P2=0.15m、P3=0.15m、P4=0.22mを測る。

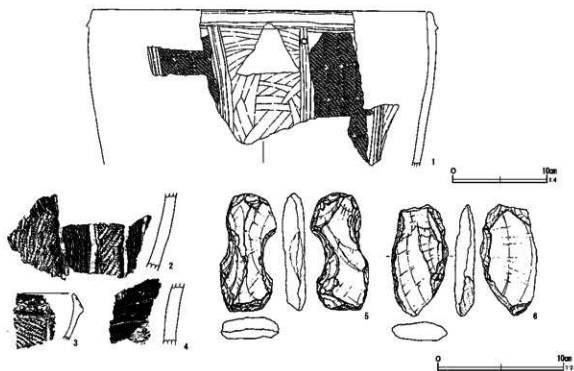
出土遺物は無く、時期は不詳である。

第104号住居跡 (第77図)

AF~AG-4グリッドに位置する。住居跡の南東壁が調査区域外に位置する。北東壁で第105号住居跡と重複するが、本住居跡の方が新しい。プランは円形もしくは隅丸方形を呈するものと思われ、調査範囲内では長径3.96m、短径3.50m、深さ0.09mを測る。

炉は地床炉で、中央部やや東寄りに検出され、長径0.60m、短径0.51m、深さ0.04mを測る。壁溝は検出されなかった。ピットは4本検出され、深さはP1=0.20m、P2=0.27m、P3=0.27m、P4=0.21mを測る。

出土遺物は無く、時期は不詳である。



第81図 第106号住居跡出土遺物

第105号住居跡 (第78・79図)

AF~AG-4グリッドに位置する。住居跡の東壁がかるうじて調査区際に検出された。南壁で第104号住居跡と中央部で第104号住居跡のP1と重複する。プランは円形もしくは西に張り出す隅丸五角形を呈し、長径3.96m、短径3.94mを測る。

炉は地床炉で、中央部やや南東寄りに検出され、長径0.60m、短径0.57m、深さ0.13mを測る。壁溝は全周するものと思われ、幅約0.26mで、深さ0.15mを測る。ピットは3本検出され、深さはP1=0.21m、P2=0.20m、P3=0.20mを測る。

時期は中期の所産と思われるが、後期の土器片も出土していることから不詳である。

遺物は第79図1~5の土器片であり、1は中期の加曾利E式キャリバー系土器の口縁部破片で、隆帯によって口縁部下端部を区画する。地文は単節LRの縦位施文である。

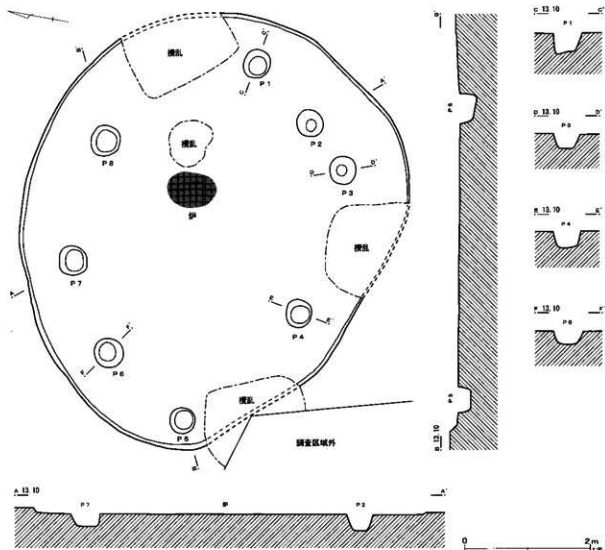
2~5は後期前葉堀之内式土器である。2は小波状を呈する口縁部破片で、波頂部から多条加した沈

線を垂下する。やや肥厚する口唇部には沈線を廻らし、波頂部には縦位の沈線と円形刺突文を施す。地文は単節LRの横位施文である。3は無地文上に曲線沈線文を施文する。4、5は単節LR縄文地文上に多条沈線の懸垂文と曲線文を組み合わせている。以上は、堀之内I式の最新段階に比定されよう。

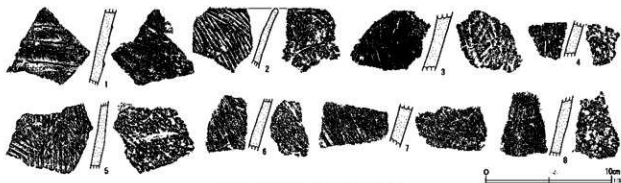
第106号住居跡 (第80・81図)

AF-100~1グリッドに位置する。多くの住居跡との重複部分に位置し、第109・110・111・112・116号住居跡、第591号土塊に取り囲まれるように重複する。プランは柄鏡形を呈するものと思われ、柄の先端部分が不明瞭となっている。調査範囲内では長径6.00m、短径5.06m、深さ0.06mを測る。

炉および壁溝は検出されなかった。ピットは9本検出され、柄付け根部分で対ピット状となる。深さはP1=0.64m、P2=0.39m、P3=0.41m、P4=0.39m、P5=0.35m、P6=0.46m、P7=0.44m、P8=0.38m、P9=0.04mを測る。



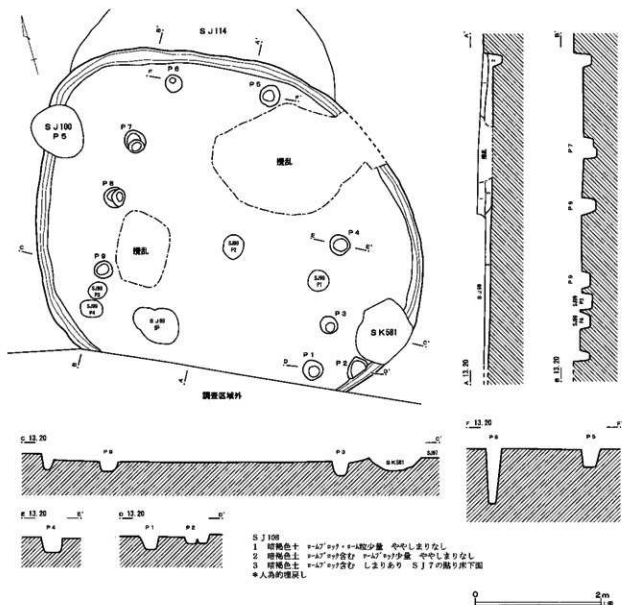
第82図 第107号住居跡



第83図 第107号住居跡出土遺物

遺物は第81図1～4の土器と、5、6の石器が出土した。1は加曾利EIV式系の深鉢形土器で、口縁部無文帯を微隆帯で区画し、同種の隆帯を区画隆帯から垂下して、胴部を縦位区画する。垂下降帯の無

文部分は丁寧なナデを施し、垂下降帯の一部に押圧状の刻みを施す。地文は単節LRを縦位施文する。器壁の薄く、堅緻な大形土器で、推定口径37.5cm、現存高20.6cmを測る。後期初頭、称名寺式段階の加



第84図 第108号住居跡

曾利EⅣ式系土器である。

2は磨消懸垂文の垂下する胴部破片で、地文は単節RLの縦位施文である。3は内湾する口縁部が開くキャリパー形の深鉢形土器で、幅狭口縁部文様帯を微隆帯で区画する。口縁部には円形刺突文列を2列施文する。口縁部から縦位の磨消懸垂文を垂下し、単節LRを縦位施文する。4は無文土器である。

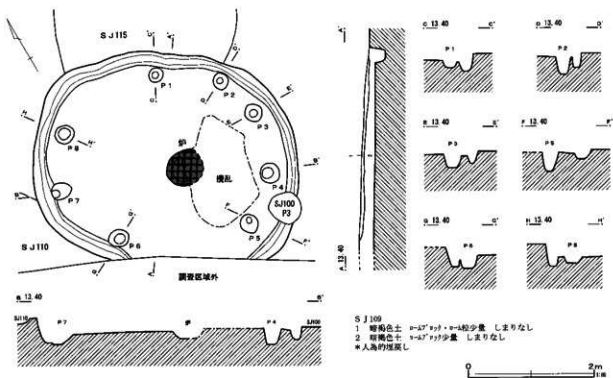
5、6は打製石斧である。5は安山岩製で、縦9.7cm、横4.2cm、厚さ1.8cm、重さ111.4gである。6は緑泥片岩製の2次加工のある剥片で、縦9.3cm、横4.6cm、厚さ1.5cm、重さ88.3gである。

第107号住居跡 (第82・83図)

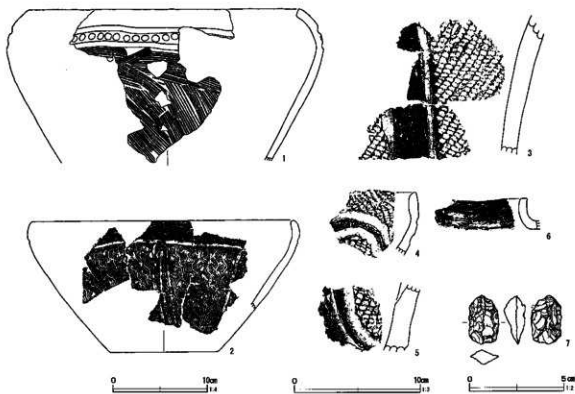
AG-3-4グリッドに位置する。プランは北西方向に細長い楕円形、もしくは不整楕円形を呈する。長径6.93m、短径5.70m、深さ0.12mを測る。

炉は地床炉で、中央部やや東壁寄りに検出され、長径0.78m、短径0.57m、深さ0.02mを測る。壁溝は検出されなかった。ピットは8本検出され、プランに沿って楕円形に配列する。深さはP1=0.29m、P2=0.25m、P3=0.23m、P4=0.26m、P5=0.20m、P6=0.22m、P7=0.20m、P8=0.26mを測る。

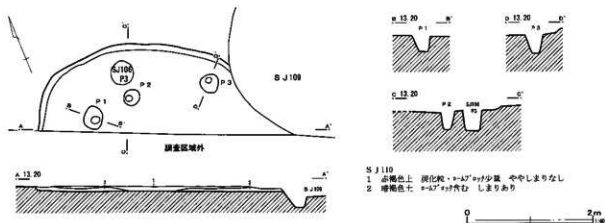
住居跡は出土遺物から、縄文時代早期後葉の条痕



第85図 第109号住居跡



第86図 第109号住居跡出土遺物



第87図 第110号住居跡



第88図 第110号住居跡出土遺物

文期の所産と思われる。

出土遺物は第83図1～8の土器片である。1は横位水平の細隆起線を3本施文する構成で、内外面ともに擦痕状整形を施すが、外面の細隆起線間には擦痕を磨消する。繊維を若干含む、白色粒子、細砂粒を多く含む、堅緻な土器である。

2～8は文様を持たない無文土器で、繊維を少量含む、条痕や擦痕整形を施すものである。2は丸頭状口縁部が外反気味に開き、内外面とも条痕整形を施し、外面の条痕文は明瞭である。3、5、6、8は内外面に条痕整形を施し、4は内外面とも擦痕整形、7は外面に条痕整形、内面に擦痕整形を施す。

第108号住居跡（第84図）

AF～AG-1～2グリッドに位置する。南壁の一部が調査区域外に位置する。北壁で第114号住居跡、西壁で第100号住居跡P5、床面で第99号住居跡P、P1～4、東壁で第581号土塊と重複する。プランは南北方向に細長い楕円形を呈し、調査した範囲内

は長径6.75m、短径5.61m、深さ0.23mを測る。

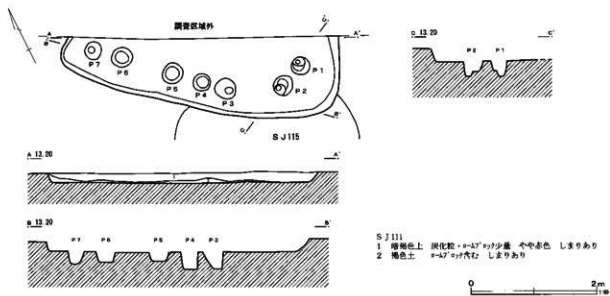
炉は検出されず、壁溝は全周するものと思われる。幅約0.24m、深さ0.16mを測る。ピットは9本検出され、深さはP1=0.21m、P2=0.13m、P3=0.21m、P4=0.24m、P5=0.28m、P6=0.87m、P7=0.21m、P8=0.23m、P9=0.15mを測る。

出土遺物は無く、時期は不詳である。

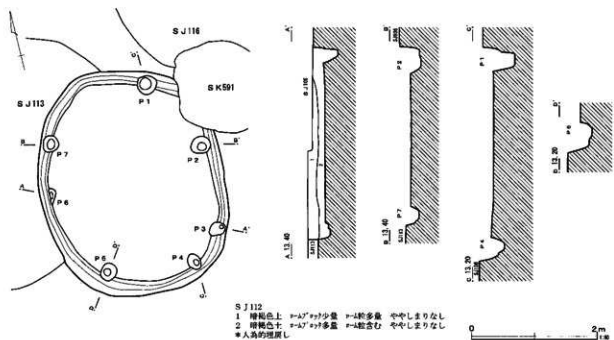
第109号住居跡（第85・86図）

AF-1グリッドに位置する。南壁の一部が調査区域外に位置する。北壁で第115号住居跡、西壁で第106・110号住居跡、南壁で第100号住居跡P3と重複する。プランは北西方向に細長い楕円形を呈し、調査した範囲内では長径4.26m、短径3.38m、深さ0.17mを測る。

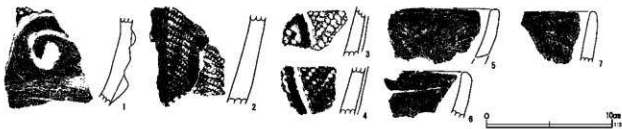
炉は地床炉で、中央部やや南寄りに検出され、半分以上が攪乱をうけている。現存部では長径0.57m、短径0.28m、深さ0.14mを測る。壁溝は全周するものと思われ、幅約0.27m、深さ0.14mを測る。ピッ



第89図 第111号住居跡



第90図 第112号住居跡



第91図 第112号住居跡出土遺物

トは8本検出され、壁溝に沿って配列する傾向がある。深さはP1=0.11m、P2=0.30m、P3=0.22m、P4=0.26m、P5=0.30m、P6=0.21m、P7=0.14m、P8=0.11mを測る。

出土土器から、中期加曾利EⅢ式期の所産と思われる。

出土遺物は第86図1～7の土器と石器である。1は口縁部が内湾する浅鉢形土器で、幅狭口縁部無文帯を2本沈線で区画し、沈線間に円形刺突文列を扶む。地文は条線を施文する。推定口径37.0cm、現存高20.6cmを測る。

2は口縁部がやや内湾する浅鉢形土器で、口縁部無文帯を沈線で区画し、胴部に沈線懸垂文を垂下し、蛇行条線を全面に施文する。推定口径35.7cm、現存高12.5cmを測る。

3はキャリバー系深鉢形土器の胴部破片で、磨消懸垂文を垂下し、単節RLを縦位施文する。4は古井城山系のキャリバー形土器の口縁部破片で、磨消沈線で波状文を描く。地文は単節RLである。6は隆帯渦巻文系の胴部破片で、地文に単節RLを施文する。6は壺形土器の口縁部で、無文となる。以上、中期終末の加曾利EⅢ式に比定される土器群である。

7はチャート製の2次加工のある判片である。長さ2.9cm、幅1.8cm、厚さ1.2cm、重さ5.4gである。

第110号住居跡 (第87・88図)

AF-100-1グリッドに位置する。住居跡の大半が調査区域外に位置する。東壁で第109号住居跡、床面で第106号住居跡P3と重複する。プランは楕円形を呈するものと思われるが、不詳である。調査した範囲内では長径3.98m、短径1.42m、深さ0.09mを測る。

炉、および壁溝などの付属施設は検出されなかった。ピットは3本検出され、深さはP1=0.24m、P2=0.27m、P3=0.29mを測る。

出土遺物から、中期終末の加曾利EⅢ式期の所産と思われるが、不詳である。

出土遺物は第88図1～4の土器片である。1～3は同一個体で、壺形土器の肩の部分である。隆帯の渦巻文を連結するモチーフ構成で、渦巻文を貫通して紐掛けの孔を穿つ。

4はキャリバー系深鉢形土器の胴部破片で、磨消懸垂文を垂下し、地文に単節RLを浅く施文する。以上加曾利EⅢ式に比定される土器群である。

第111号住居跡 (第89図)

AF-1グリッドに位置する。住居跡の大半が調査区域外に位置する。南壁で第115号住居跡と重複する。プランは方形に近い形状と思われるが、不詳である。調査した範囲内では長径4.47m、短径1.26m、深さ0.16mを測る。

炉および他の付属施設は検出されなかった。ピットは7本検出され、深さはP1=0.24m、P2=0.24m、P3=0.28m、P4=0.28m、P5=0.13m、P6=0.17m、P7=0.20mを測る。

出土遺物は無く、時期は不詳である。

第112号住居跡 (第90・91図)

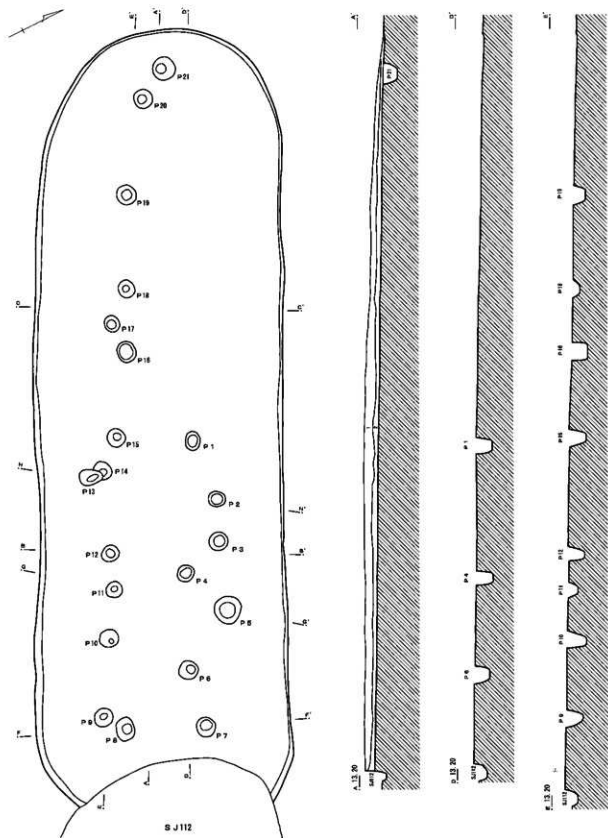
AF-100グリッドに位置する。北壁で第591号土塊、西壁で第113号住居跡と重複する。プランは南北方向に細長い楕円形を呈し、長径3.58m、短径2.96m、深さ0.28mを測る。

炉は検出されなかった。壁溝は全周し、幅約0.19m、深さ0.12mを測る。ピットは壁溝上に7本検出され、深さはP1=0.34m、P2=0.18m、P3=0.23m、P4=0.22m、P5=0.18m、P6=0.08m、P7=0.12mを測る。

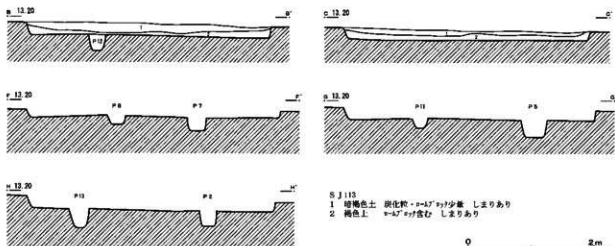
出土土器から、中期加曾利EⅢ式期の所産と思われる。

出土遺物は第91図1～7の土器片である。1、2はキャリバー系深鉢形土器で、1は低隆帯の渦巻文を施文する口縁部破片、2は磨消懸垂文を垂下する胴部破片である。地文は単節LRの縦位施文である。

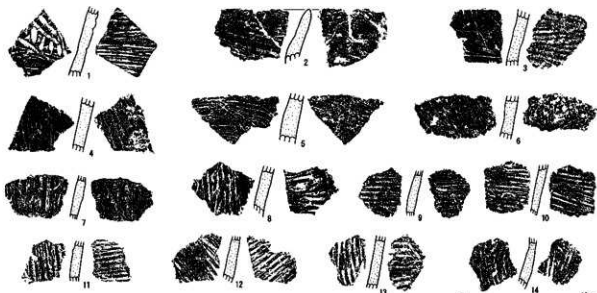
3、4は隆帯文の付く胴部破片で、地文に単節R



第92图 第113号住居跡 (1)



第93図 第113号住居跡 (2)



第94図 第113号住居跡出土遺物

Lを施文する。5～7は同一個体で、器台の脚部である。5は円孔を持つ。以上、加曾利EⅢ式に比定される土器群である。

第113号住居跡 (第92～94図)

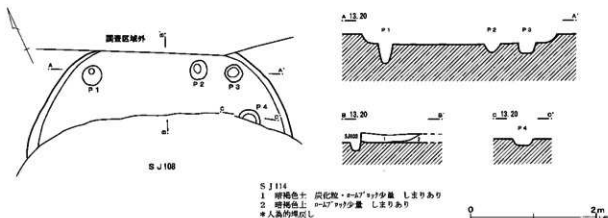
AE～AF-101～100グリッドに位置する。東壁で第112号住居跡と重複する。プランは、西壁部分が不明瞭であるが、東西方向に細長い長楕円形を呈するものと思われ、現存部分では長径12.33m、短径3.96m、深さ0.21mを測る。

がおよび壁溝は検出されなかった。ピットは合計

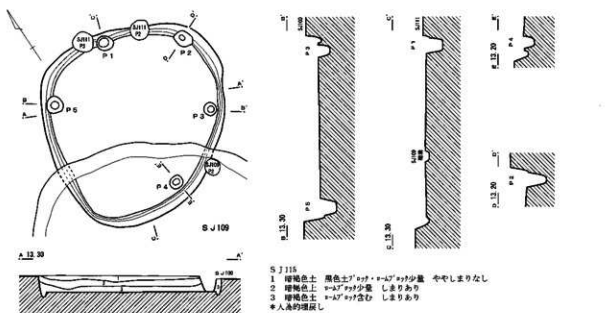
21本検出され、深さはP1=0.27m、P2=0.24m、P3=0.27m、P4=0.28m、P5=0.26m、P6=0.25m、P7=0.21m、P8=0.14m、P9=0.27m、P10=0.31m、P11=0.16m、P12=0.26m、P13=0.30m、P14=0.26m、P15=0.27m、P16=0.26m、P17=0.22m、P18=0.11m、P19=0.20m、P20=0.19m、P21=0.23mを測る。

出土遺物から、縄文時代早期後葉の条痕文期の所産と思われる。

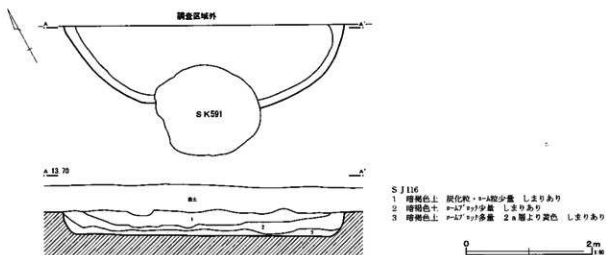
出土遺物は第94図1～14の土器片である。いずれも胎土に繊維を含み、内外面に条痕整形を施すもの



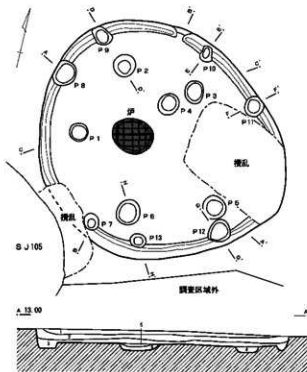
第95図 第114号住居跡



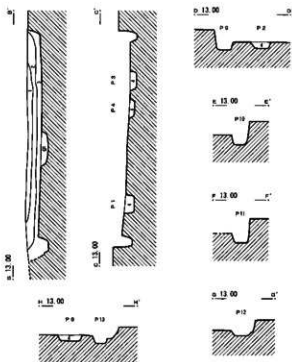
第96図 第115号住居跡



第97図 第116号住居跡



- S J 117
- 1 黒褐色土 黒色土・A7'砂が含む P-A7'砂少量 しまりあり
 - 2 暗褐色土 P-A7'砂少量 しまり・粘性あり
 - 3 褐色土 P-A7'砂少量 しまり・粘性あり
 - 4 緑色土 P-A7'砂少量 しまりなし 粘性あり
 - 5 暗褐色土 粘土粒・炭化粒・P-A7'砂少量 しまりなし 粘性あり
 - 6 暗褐色土 P-A7'砂少量 しまりなし 粘性あり



第98図 第117号住居跡

である。1は太沈線区画内に、集合太沈線を充填施工するもので、内外面に条痕文が明瞭である。

2は先細りする口縁部がやや内湾気味に開く器形を呈し、繊維をやや多く含む。口縁部内外面に、横位の条痕整形を施す。3～14は胴部破片で、5、6は外面に擦痕状の細かい条痕整形を施し、他は内外面とも明瞭な条痕整形を施す。以上、有文土器1の特徴や、他の土器群の特徴から、野島式終末期に位置付けられる土器群と思われる。

第114号住居跡 (第95図)

AF-1-2グリッドに位置する。北壁が調査区域外に位置し、住居跡の大半が第108号住居跡と重複する。プランは円形を呈するものと思われるが、不詳である。調査した範囲内では長径4.26m、短径0.94m、深さ0.18mを測る。

が、および壁溝などの付属施設は検出されなかつ

た。ピットは4本検出され、深さはP1=0.31m、P2=0.14m、P3=0.16mを測る。

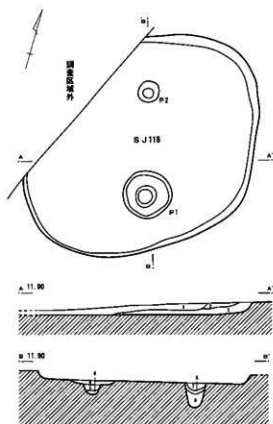
出土遺物は無く、時期は不詳である。

第115号住居跡 (第96図)

AF-1グリッドに位置する。住居跡南側で第109号住居跡と重複し、北壁で第111号住居跡P2・3と重複する。プランは南北方向に細長い不整形円形を呈し、長径3.06m、短径2.92m、深さ0.27mを測る。

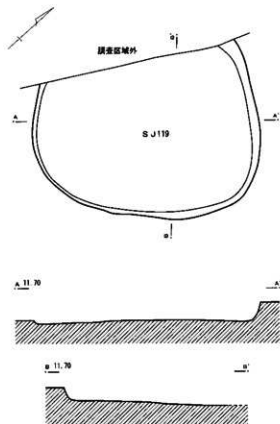
がは検出されなかった。壁溝は全周し、幅約0.18m、深さ0.06mを測る。ピットは壁溝上および壁溝に沿って5本検出され、深さはP1=0.26m、P2=0.32m、P3=0.18m、P4=0.18m、P5=0.26mを測る。

出土遺物は無く、時期は不詳である。



S J 118

- 1 暗褐色土 灰化状・黒色土層のわずかなり しまりあり
- 2 暗褐色土 灰化状・わずかなり しまりあり
- 3 褐色土 わずかなり しまり・腐植あり
- 4 暗褐色土 わずかなり しまりあり
- 5 暗褐色土 わずかなり しまりあり
- 6 暗褐色土 わずかなり しまりあり
- 7 暗褐色土 わずかなり ややしまりあり
- 8 暗褐色土 わずかなり ややしまりあり
- 9 暗褐色土 わずかなり ややしまりあり



第99図 第118・119号住居跡

第116号住居跡 (第97図)

AE-100、AF-100-1グリッドに位置する。住居跡北側の大半が調査区域外に位置する。南壁で第591号土塊と重複する。プランは楕円形を呈するものと思われるが、不詳である。調査範囲内では長径4.48m、短径1.23m、深さ0.39mを測る。

炉および壁溝、ピットなどの付属施設は検出されなかったが、掘り込みが深く、床面も平坦であるため、住居跡として認識した。

出土遺物は無く、時期は不詳である。

第117号住居跡 (第98図)

AF-4グリッドに位置する。南壁と東壁の一部に

攪乱を受けている。プランは北西方向に細長い楕円形を呈し、長径4.02m、短径3.54m、深さ0.21mを測る。

炉は中央部やや北寄りに位置し、長径0.67m、短径0.53m、深さ0.12mを測る。壁溝はほぼ全周し、幅約0.19m、深さ0.09mを測る。ピットは壁溝上と主柱穴状に13本検出され、深さはP1=0.16m、P2=0.10m、P3=0.10m、P4=0.08m、P5=0.10m、P6=0.09m、P7=0.15m、P8=0.09m、P9=0.13m、P10=0.15m、P11=0.15m、P12=0.08m、P13=0.10mを測る。

出土遺物は無く、時期は不詳である。

第118号住居跡 (第99図)

AD-103~102グリッドに位置する。西壁の一部が調査区域外に位置する。プランは不整形を呈するものと思われ、調査範囲内では長径3.36m、短径3.44m、深さ0.18mを測る。

炉および壁溝などの付属施設は検出されなかった。ピットは2本検出され、深さはP1=0.22m、P2=0.38mを測る。

出土遺物は無く、時期は不詳である。

(2) 炉穴跡

第3号炉穴 (第100図、第102図1~3)

AD-102グリッドに位置する。東壁の一部が調査区域外に位置するが、北西方向に細長い楕円形を呈し、主軸方向はN-26°-Wである。規模は長径4.68m、短径1.22m、深さ0.29mを測る。炉床を2ヶ所に持つ。

遺物は第102図1~3が出土している。1~3は縄文時代早期の条痕文系土器群で、1は角頭状の口縁外端部に縦位の貝殻縁文を施文し、幅狭口縁部文様帯を形成する。内外面とも貝殻条痕整形を施し、繊維を若干、細砂粒、白色粒子を多く含む。

2は太沈線区画内に集合太沈線を充填施文するもので、内面の条痕は顕著である。1と類似する胎土であるが、白色粒子の割合が少ない。

3は内外面に条痕整形を施すが、外面はモチーフ状に条痕文を施文する。1に胎土に類似する。以上、野島式に比定される土器群で、1、3は古段階に位置付けられる。

第4号炉穴 (第100図、第102図4~12)

AF-1グリッドに位置する。第105・106・109・110・111号住居跡と重複し、残存するプランは不整形である。主軸方向はN-5°-Eである。規模は長径3.82m、短径3.02m、深さ0.23mである。炉床は1ヶ所である。

遺物は第102図4~12が出土している。4~12は

第119号住居跡 (第99図)

AE-103グリッドに位置する。住居跡西壁が調査区域外に位置する。プランは不整形を呈するものと思われるが、不詳である。調査範囲内では長径3.62m、短径2.62m、深さ0.31mを測る。

炉および壁溝、ピットなどの付属施設は検出されなかったが、掘り込みが深く、床面も平坦であるため、住居跡として認識した。

出土遺物は無く、時期は不詳である。

早期の条痕文系土器群である。

4は沈線区画内に異方向の集合沈線を組み合わせ、鋸歯状に施文するもので、内外面に条痕整形を施す。若干の繊維と、細砂粒、白色粒子を多めに含む堅固な土器である。

5は沈線の幾何学的な区画内に集合太沈線を充填施文する。繊維を少量、細砂粒を多く含むが、白色粒子は目立たない。

6~12は条痕整形のみ見られる無文土器で、6はやや先細りの角頭状口縁を呈し、内外面に横位の条痕整形を施す。

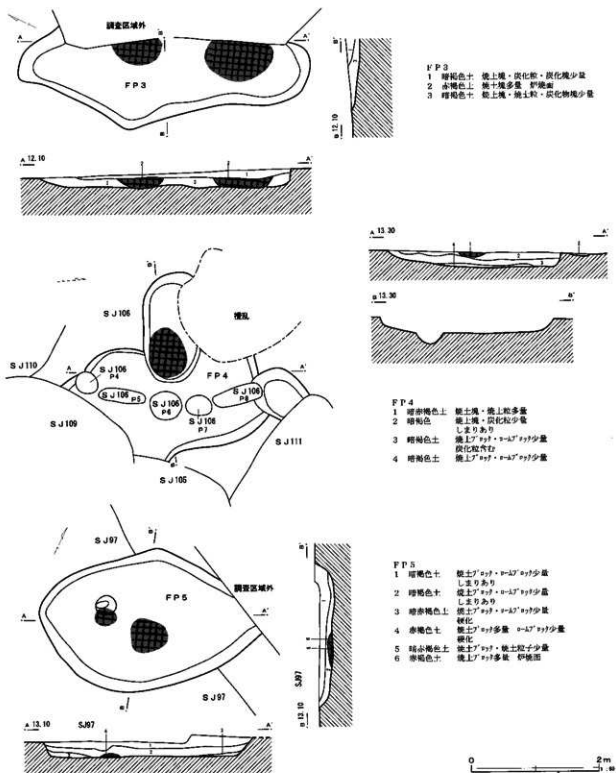
7は丸頭状口唇部が外反気味に開く器形を呈する。外面は縦位の整然とした条痕文が見られるが、内面は擦痕状となる。

8は先細りの口縁部が開く器形で、内外面とも横位の条痕整形を施す。

9から12は胴部破片で、10は底部に近い破片である。いずれも繊維を少量、細砂粒を多く含む、8以外は白色粒子を多く含む。

第5号炉跡 (第100図)

AF・AG-2グリッドに位置する。第97号住居跡と重複し、一部調査区外にかかるが、プランは不整形楕円形を呈し、主軸方向はN-62°-Eである。規模は長径3.64m、短径2.22m、深さ0.22mを測る。2ヶ所の炉床を持つ。遺物は出土していない。



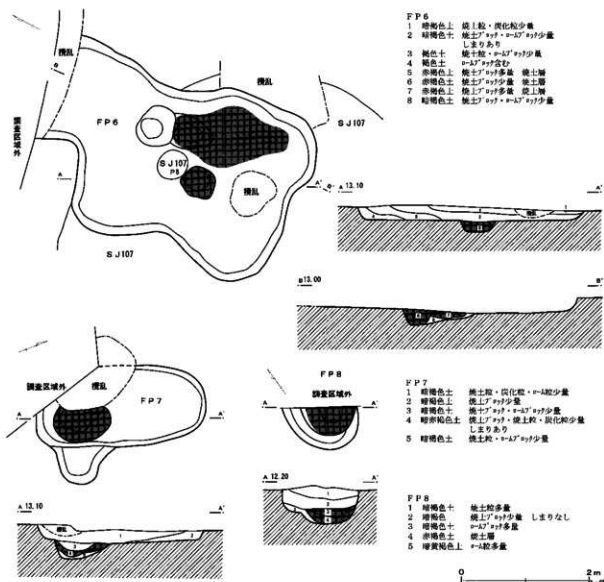
第100図 炉穴 (1)

第6号炉跡 (第101図・第102図13~15)

AG-3グリッドに位置する。第107号住居跡と重複し、遺構の北側は攪乱を受け、残存するプランは不整形を呈し、主軸方向はN-0°-Eである。規模は

長径4.02m、短径2.60m、深さ0.23mである。2ヶ所のか床を持つ。

遺物は第102図13~15が出土している。13~15は早期の条痕文系土器群で、文様を施文しない無文土



第101図 炉穴 (2)

器である。13は先細りの口縁部が外反する器形で、内外面に擦痕状整形を施す。繊維を少量含み、白色粒子は目立たない。

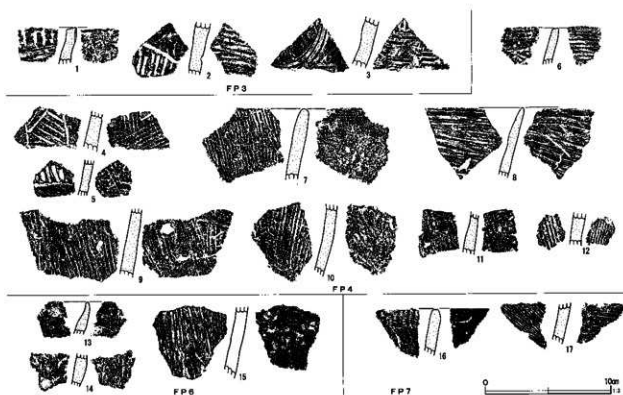
14、15は内外面に条痕整形を施す胴部破片で、繊維を少量、白色粒子を多く含む堅緻な土器である。以上、土器群の特徴から、野島式に比定されるものと思われる。

第7号炉跡 (第101図、第102図16・17)

AG-3グリッドに位置する。遺構の一部が調査区

外および攪乱にかかるが、残存するプランは楕円形を呈し、主軸方向はN-22°-Eである。規模は長径2.70m、短径1.28m、深さ0.23mを測る。

遺物は第102図16、17が出上している。16は若干肥厚して丸頭状を呈する口縁部が開器形を呈し、口縁外端部に絡条体圧痕文をやや斜位に施文して、幅状口縁部文線帯を形成している。施文原体は不明瞭であるが、燃系Lの絡条体と思われる。外面に斜位の貝殻条痕整形を施し、裏面は擦痕整形である。繊維を若干含み、細砂粒と白色粒子を多く含む。



第102号 炉穴出土遺物

17は胴部破片で、外面に絡条体条痕と思われる細かい条痕整形を施し、内面には擦痕状の整形を施す。若干の繊維を含み、細砂粒、白色粒子を多く含む、非常に堅緻な土器である。以上、野島式の古段階に比定される土器群と思われる。

第8号炉跡（第101図）

AD-102グリッドに位置する。遺構の半分が調査区域外に位置し、残存するプランは円形を呈し、主軸方向はN-15°-Wである。規模は長径0.62m、短径(0.56)m、深さ0.60mを測る。遺物は出土していない。

(3) 土墳

第526号土墳（第103図）

AG-7グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-22°-Wである。規模は長径1.53m、短径は0.94m、深さは0.19mである。

遺物は出土していない。

第527号土墳（第102図）

AG-6グリッドに位置する。第528号土墳と重複し、プランは円形で、主軸方向はN-20°-Wである。規模は長径1.23m、短径1.09m、深さ0.26mである。

遺物は出土していない。

第528号土墳（第103図）

AG-6グリッドに位置する。第527号土墳と重複し、プランは円形で、主軸方向はN-26°-Wである。規模は長径0.96m、短径(0.62)m、深さ0.13mである。

遺物は出土していない。

第529号土墳（第103図）

AF-4グリッドに位置し、プランは楕円形で、主軸方向はN-42°-Eである。規模は長径1.44m、短径1.22m、深さ0.18mである。

遺物は出土していない。

第530号土壌 (第103図)

AF-6グリッドに位置する。プランは長方形で、主軸方向はN-3°-Wである。規模は長径1.68m、短径0.62m、深さ0.11mである。中央に小ピットを持つ。

遺物は出土していない。

第531号土壌 (第103図)

AF-5グリッドに位置する。東半分が調査区域外に位置し、プランは不整形で、主軸方向はN-71°-Wである。規模は長径1.36m、短径0.56m、深さ0.56mである。

遺物は出土していない。

第532号土壌 (第103図)

AF-4グリッドに位置する。プランは円形で、主軸方向はN-35°-Eである。規模は長径1.13m、短径1.10m、深さ0.16mである。

遺物は出土していない。

第533号土壌 (第103図、第109図)

AF-4グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-13°-Eである。規模は長径2.50m、短径1.44m、深さ0.25mである。

遺物は縄文時代中期の土器と石器が出土している。1は中期末葉の連弧文土器の口縁部破片で、燃糸R地文上に2本沈線と弧線を描く。2は磨消懸垂文を垂下する胴部破片で、単節RLを縦位施文する。3はガラス質黒色安山岩製の核器で、長さ7.2cm、幅4.5cm、厚さ2.4cm、重さ89.1gを測る。

第534号土壌 (第103図、第109図)

AF-5グリッドに位置する。第101号住居跡、第1～6・9号ピットと重複している。プランは長方形で、主軸方向はN-22°-Wである。規模は長径4.14m、短径1.28m、深さ0.24mである。炭化物層が形成されているため、炭焼窯と判断される。

遺物は第109図14が出土している。14は鳩山窯産の須恵器環で推定口径13.0cm、底径7.2cm、器高4.0cmを測る。9世紀の前半に位置付けられよう。

第535号土壌 (第104図)

AF・AG-4グリッドに位置する。第571号土壌と重複し、遺構の一部が調査区域外に位置する。プランは長方形で、主軸方向はN-50°-Wである。規模は長径1.07m、短径0.9m、深さ0.14mである。

遺物は出土していない。

第536号土壌 (第104図)

AF-5グリッドに位置する。プランは円形で、主軸方向はN-19°-Eで規模は長径1.38m、短径1.34m、深さ0.24mである。

遺物は出土していない。

第537号土壌 (第104図)

AE・AF-4グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-6°-Eである。規模は長径1.11m、短径0.76m、深さ0.15mである。

遺物は出土していない。

第538号土壌 (第104図)

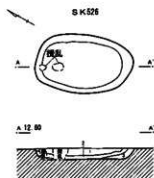
AF-5グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-3°-Wである。規模は長径1.63m、短径0.94m、深さ0.21mである。底部中央に小ピットを持つ。

遺物は出土していない。

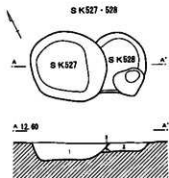
第539号土壌 (第104図)

AE-4・5グリッドに位置する。プランは円形で、主軸方向はN-25°-Eである。規模は長径1.10m、短径0.94m、深さ0.27mである。

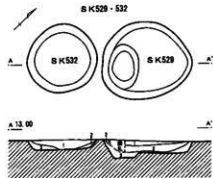
遺物は出土していない。



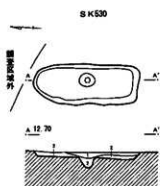
- SK526
- 1 褐色土 炭化粒・ π -4粒少量 ややしりなし
 - 2 褐色土 炭化粒・ π -4粒少量 π -43 π 少少量 ややしりなし
 - 3 暗褐色土 π -43 π 少少量 ややしりなし



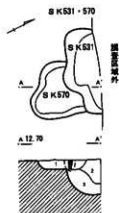
- SK527・528
- 1 暗褐色土 黒色土 π 少 π ・ π -43 π 多量 しまりなし
 - 2 暗褐色土 π -4粒 π -43 π 少少量 しまりなし
 - 3 褐色土 π -4粒多量 しまりなし



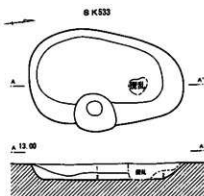
- SK529
- 1 灰白色土 灰白サツサツの火山灰含む しまりあり
 - 2 暗褐色土 黒色土 π 少 π -43 π 少少量 しまりあり
 - 3 褐色土 π -43 π 含む しまりあり
- SK532
- 1 暗褐色土 黒色土 π ・ π -4粒少量 しまりあり
 - 2 褐色土 π -43 π 多量 しまりあり



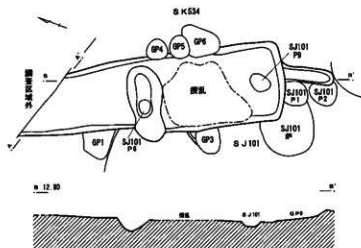
- SK530
- 1 暗褐色土 π -4粒少量 しまりなし
 - 2 褐色土 π -4粒少量 しまりなし



- SK531・570
- 1 褐色土 π -4粒多量 しまりなし
 - 2 暗褐色土 黒色土 π 少 π 多量 π -4粒少量 しまりなし
 - 3 褐色土 π -43 π 少少量 π -43 π 多量 しまりなし



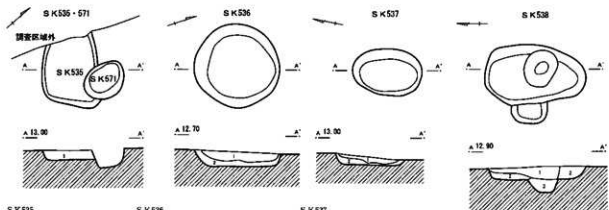
- SK533
- 1 暗褐色土 紅土粒混へ含む π -43 π 少少量 しまりあり
 - 2 褐色土 π -43 π 含む π -4粒少量 しまりあり



- SK534
- 1 暗褐色土 π -43 π 多量 炭化粒少量 しまりなし
 - 2 暗褐色土 炭化粒・ π -4粒少量 しまりなし
 - 3 黒色土 焼土粒含む しまりなし 底面しまりあり
 - 4 褐色土 π -43 π 少少量 π -4粒多量 しまりなし

0 2m

第103図 土坑(1)

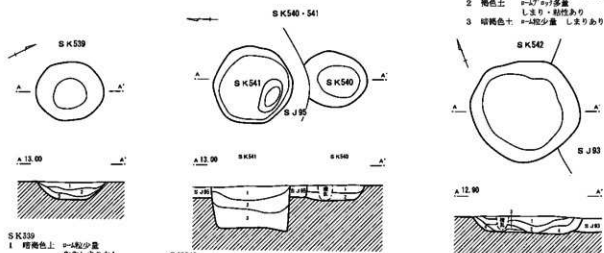


S K535
1 暗褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 含む
しまりなし

S K536
1 暗褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 少量
しまりあり
2 褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 多量
しまり・粘性あり

S K537
1 暗褐色土 炭化粒・ $\mu=47$ $\sigma=7$ ・ $\mu=4$ 粒少量
しまりあり
2 褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 含む
しまりあり

S K538
1 暗褐色土 炭化粒中に含む
 $\mu=47$ $\sigma=7$ 少量
しまりあり
2 褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 多量
しまり・粘性あり
3 暗褐色土 $\mu=4$ 粒少量
しまりあり

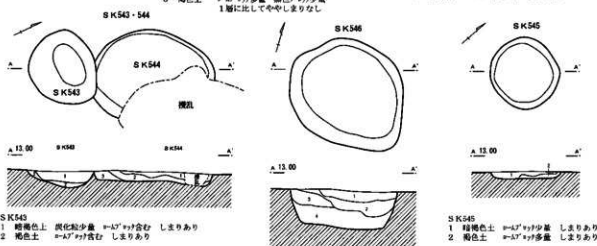


S K539
1 暗褐色土 $\mu=4$ 粒少量
ややしまりなし
2 褐色土 炭化粒少量
しまりあり
3 褐色土 $\mu=4$ 粒・ $\mu=47$ $\sigma=7$ 少量
しまりあり

S K540
1 暗褐色土 炭化粒中に含む
 $\mu=47$ $\sigma=7$ 少量
しまりあり
2 褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 少量
しまりあり

S K541
1 暗褐色土 炭化粒・ $\mu=4$ 粒少量
 $\mu=47$ $\sigma=7$ 含む
しまりあり
2 暗褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 少量
炭化土 $\mu=7$ 少量
しまりあり
3 褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 多量
炭化 $\mu=7$ 少量
1層に比してややしまりなし

S K542
1 暗褐色土 炭化粒・ $\mu=47$ $\sigma=7$ 少量
 $\mu=47$ $\sigma=7$ ・ $\mu=4$ 粒少量
しまりあり
2 褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 含む
 $\mu=4$ 粒少量
しまりあり
3 褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 少量
しまりあり
4 褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 少量
しまりあり



S K543
1 暗褐色土 炭化粒少量 $\mu=47$ $\sigma=7$ 含む
しまりあり
2 褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 含む
しまりあり

S K544
1 暗褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ ・ $\mu=4$ 粒少量
ややしまりなし
2 褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 含む
しまりあり
3 明褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 含む
しまりあり

S K545
1 暗褐色土 炭化土 $\mu=7$ 少量
 $\mu=47$ $\sigma=7$ 多量
しまりあり
2 暗褐色土 炭化土 $\mu=7$ 少量
 $\mu=47$ $\sigma=7$ 少量
しまりあり
3 暗褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 多量
しまりあり
4 暗褐色土 炭化土 $\mu=7$ 少量
 $\mu=47$ $\sigma=7$ 含む

S K546
1 暗褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 少量
しまりあり
2 褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 少量
しまりあり

S K545
1 暗褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 少量
しまりあり
2 褐色土 $\mu=47$ $\sigma=7$ 多量
しまりあり



第104図 土壌 (2)

第540号土壌 (第104図)

AE-5グリッドに位置する。第95号住居跡と重複し、プランは楕円形で、主軸方向はN-0°-Eである。規模は長径0.93m、短径0.86m、深さ0.23mである。

遺物は出土していない。

第541号土壌 (第104図)

AE-5グリッドに位置する。第95号住居跡と重複するが、本土壌の方が新しい。プランは円形で、主軸方向はN-3°-Wである。規模は長径1.28m、短径1.22m、深さ0.72mである。

遺物は出土していない。

第542号土壌 (第104図)

AD-5グリッドに位置する。第93号住居跡と重複するが、本土壌の方が新しい。プランは円形で、主軸方向はN-70°-Wである。規模は長径1.75m、短径1.60m、深さ0.28mである。

遺物は出土していない。

第543号土壌 (第104図)

AF-4グリッドに位置する。第544号土壌と重複する。プランは楕円形で、主軸方向はN-85°-Eである。規模は長径1.21m、短径1.05m、深さ0.27mである。

遺物は出土していない。

第544号土壌 (第104図)

AF-4グリッドに位置する。遺構の一部に攪乱を受ける。プランは楕円形で、主軸方向はN-30°-Wである。規模は長径1.60m、短径(1.00)m、深さ0.18mである。

遺物は出土していない。

第545号土壌 (第104図)

AF-4グリッドに位置する。プランは円形で、主軸方向はN-52°-Wで規模は長径1.14m、短径1.11m、

深さ0.11mである。

遺物は出土していない。

第546号土壌 (第104図)

AE・AF-4グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-53°-Wである。規模は長径1.97m、短径1.74m、深さ0.60mである。

遺物は出土していない。

第547号土壌 (第105図)

AE・AF-4グリッドに位置する。第96号住居跡と重複する。プランは円形で、主軸方向はN-25°-Eである。規模は長径0.97m、短径0.66m、深さ0.26mである。

遺物は出土していない。

第548号土壌 (第105図)

AJ-2グリッドに位置する。プランは円形で、主軸方向はN-52°-Wである。規模は長径4.30m、短径0.92m、深さは0.09mである。炭化物層が形成されているため、炭焼窯と判断される。

遺物は出土していない。

第549号土壌 (第105図)

AJ・AK-2グリッドに位置する。プランは長方形で、主軸方向はN-8°-Eである。規模は長径2.06m、短径1.36m、深さ0.28mである。

遺物は出土していない。

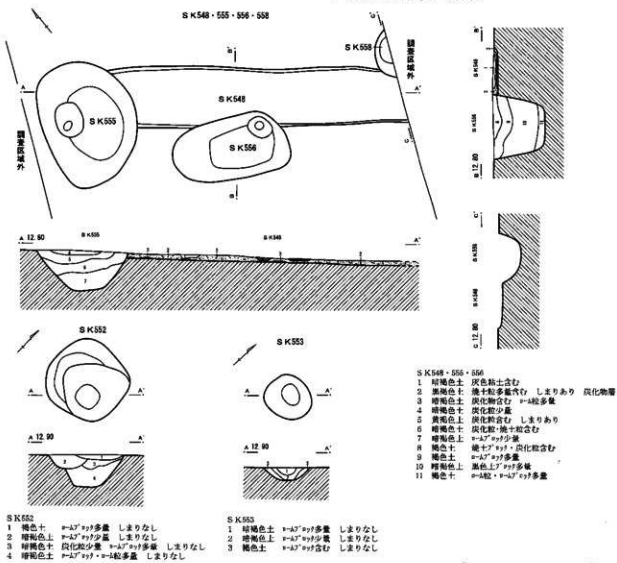
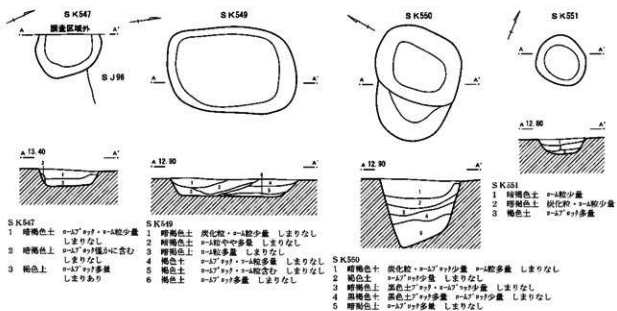
第550号土壌 (第105図)

AK-2グリッドに位置する。プランは長方形で、主軸方向はN-10°-Wである。規模は長径1.76m、短径1.41m、深さ1.09mである。

遺物は出土していない。

第551号土壌 (第105図)

AJ-2グリッドに位置する。プランは円形で、主



第105河 土壌 (3)

軸方向はN-81°-Wである。規模は長径0.80m、短径0.75m、深さ0.24mである。

遺物は出土していない。

第552号土壌 (第105図)

AJ-2グリッドに位置する。プランは円形で、主軸方向はN-86°-Eである。規模は長径1.25m、短径1.19m、深さ0.52mである。

遺物は出土していない。

第553号土壌 (第105図)

AI・AJ-3グリッドに位置する。プランは円形で、主軸方向はN-77°-Wである。規模は長径0.73m、短径0.68m、深さ0.20mである。

遺物は出土していない。

第554号土壌 (第106図)

AI-3グリッドに位置する。第557号土壌と重複する。プランは方形で、主軸方向はN-66°-Wである。規模は長径1.40m、短径1.14m、深さ0.66mである。

遺物は出土していない。

第555号土壌 (第105図)

AJ-2グリッドに位置する。第548号土壌と重複する。プランは楕円形で、主軸方向はN-12°-Eである。規模は長径1.98m、短径1.52m、深さ0.64mである。

遺物は出土していない。

第556号土壌 (第105図)

AJ-2グリッドに位置する。第548号土壌と重複する。プランは楕円形で、主軸方向はN-62°-Wである。規模は長径1.86m、短径0.99m、深さ0.84mである。

遺物は出土していない。

第557号土壌 (第106図)

AI-3グリッドに位置する。第554号土壌と重複する。プランは方形で、主軸方向はN-30°-Eである。

規模は長径1.18m、短径1.01m、深さ0.75mである。

遺物は出土していない。

第558号土壌 (第105図)

AJ-2グリッドに位置する。大半が調査区域外に位置し、第548号土壌と重複する。プランは円形で、主軸方向はN-24°-Eである。規模は長径0.78m、短径0.26m、深さは0.34mである。

遺物は出土していない。

第559号土壌 (第106図、第109図)

AI-2・3グリッドに位置する。プランは不整形円で、主軸方向はN-44°-Eである。規模は長径1.62m、短径1.42m、深さ0.37mである。

遺物は第109図4、5が出土している。4、5は加曾利E式キャリパー系土器の口縁部破片と胴部破片で、5は磨消懸垂文を垂下する。

第560号土壌 (第106図、第109図)

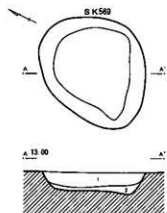
AI-2グリッドに位置する。約半分が調査区域外に位置する。プランは不整形形で、主軸方向はN-25°-Eである。規模は長径1.37m、短径1.06m、深さ0.90mである。

遺物は第109図6、7が出土している。6、7とも早期条痕文系土器群で、内外面に条痕整形を施す。6は先細り状の口縁部が外反する器形で、沈線区画内に集合沈線を充填する。繊維をやや多く含む、白色粒子を多く含む。7は底部付近の破片である。以上、野鳥式に比定されよう。

第561号土壌 (第106図、第109図)

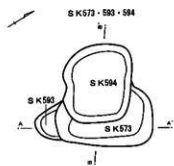
AH・AI-3グリッドに位置する。一部調査区域外に位置する。プランは不整形円で、主軸方向はN-16°-Eである。規模は長径1.56m、短径1.15m、深さ0.76mである。

遺物は第109図8、9が出土している。8、9は条痕文系土器群で、繊維を少量、白色粒子を多く含

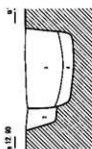


S K569

- 1 暗褐色土 黒色土⁷多量・ α - β 多量含む
 α - β 粒少量 しまりなし
- 2 暗褐色土 α - β 多量 しまりなし

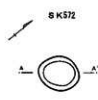


A 12.90



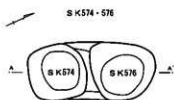
S K573・593・594

- 1 褐色土 α - β 粒多量 しまりなし
- 2 暗褐色土 α - β 粒・砂粒少量 しまりなし
- 3 暗褐色土 α - β 多量 しまりなし
- 4 暗褐色土 α - β 多量・ α - β 粒多量 しまりなし

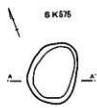


S K572

- 1 暗褐色土 炭化粒・ α - β 粒少量
- 2 褐色土 α - β 粒多量

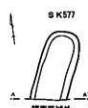


S K574・576



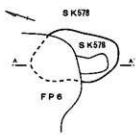
S K575

- 1 暗褐色土 褐色土⁷多量
 α - β 多量
- 2 暗褐色土 α - β 多量・ α - β 粒少量



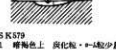
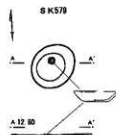
S K577

- 1 暗褐色土 α - β 粒多量
- 2 暗褐色土 褐色土⁷多量
 α - β 粒少量



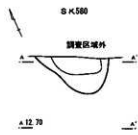
S K578

- 1 暗褐色土 粘土粒少量
- 2 暗褐色土 粘土⁷多量 しまり硬化
- 3 暗赤褐色土 粘土⁷多量
粘土粒・炭化粒多量
- 4 赤褐色土 粘土⁷多量 焼土層



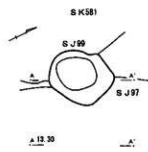
S K579

- 1 暗褐色土 炭化粒・ α - β 粒少量



S K580

調査区域外



S K581

- 1 暗褐色土 α - β 多量・ α - β 粒少量
- 2 明褐色土 α - β 多量・ α - β 粒少量
ややしまりなし
- 3 褐色土 α - β 多量
ややしまりなし



第107図 土坑 (5)

み、内外面に条痕整形を施す。

第562号土壌 (第106図)

AI-3グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-82°-Wである。規模は長径1.10m、短径0.88m、深さ0.18mである。

遺物は出土していない。

第563号土壌 (第106図)

AH-3グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-51°-Wである。規模は長径1.70m、短径1.16m、深さ0.26mである。

遺物は出土していない。

第564号土壌 (第106図)

AH・AI-3グリッドに位置する。プランは不整楕円形で、主軸方向はN-50°-Eである。規模は長径1.83m、短径1.22m、深さ0.56mである。

遺物は出土していない。

第565号土壌 (第106図)

AH-3グリッドに位置する。プランは円形で、主軸方向はN-20°-Eである。規模は長径0.88m、短径0.78m、深さ0.14mである。

遺物は出土していない。

第566号土壌 (第106図)

AH-3グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-44°-Wである。規模は長径1.40m、短径1.12m、深さ0.74mである。

遺物は出土していない。

第567号土壌 (第106図)

AG-4グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-61°-Wである。規模は長径0.82m、短径0.54m、深さ0.28mである。

遺物は出土していない。

第568号土壌 (第106図)

AG-4グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-5°-Wである。規模は長径1.24m、短径1.08m、深さ0.13mである。

遺物は出土していない。

第569号土壌 (第107図)

AG-4グリッドに位置する。プランは不整形で、主軸方向はN-32°-Eである。規模は長径1.96m、短径1.60m、深さ0.36mである。

遺物は出土していない。

第570号土壌 (第103図)

AF-5グリッドに位置する。第531号土壌と重複する。プランは不整形で、主軸方向はN-85°-Eである。規模は長径0.95m、短径0.67m、深さ0.14mである。

遺物は出土していない。

第571号土壌 (第104図)

AF・AG-4グリッドに位置する。第535号土壌と重複し、プランは楕円形で、主軸方向はN-0°-Eである。規模は長径0.71m、短径0.55m、深さ0.30mである。

遺物は出土していない。

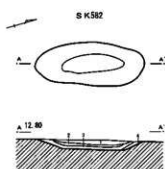
第572号土壌 (第107図)

AL-100グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-47°-Eである。規模は長径0.66m、短径0.54m、深さ0.17mである。

遺物は出土していない。

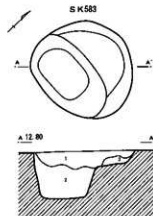
第573号土壌 (第107図)

AL-100グリッドに位置する。第593・594号土壌と重複している。プランは長方形で、主軸方向はN-34°-Eである。規模は長径1.55m、短径0.94m、深さ0.52mである。



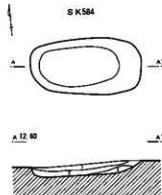
S K582

- 1 暗褐色土 炭化粒・ $n=13'$ $n=13'$ 少量
 褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 含む
 2 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 少量
 3 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 少量
 4 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 多量



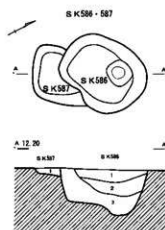
S K583

- 1 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 少量 しまりあり
 2 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 多量 しまりあり
 3 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 多量 $n=13'$ $n=13'$ 少量
 ややしまりなし



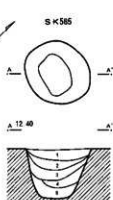
S K584

- 1 暗褐色土 炭化粒・ $n=13'$ $n=13'$ $n=13'$ 少量
 しまりあり
 2 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 少量 しまりあり
 3 褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 含む 粘性あり



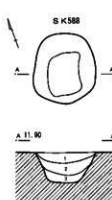
S K585

- 1 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ $n=13'$ 少量
 しまりあり
 2 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 含む しまりあり
 3 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 多量 ややしまりなし
 S K587
 1 褐色土 $n=13'$ 少量 しまりあり



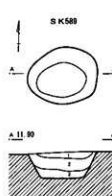
S K586

- 1 暗褐色土 炭化粒少量 $n=13'$ $n=13'$ 少量
 ややしまりあり
 2 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 含む
 ややしまりあり
 3 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 少量
 ややしまりあり
 4 褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 少量
 ややしまりあり
 5 黒褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 少量
 ややしまりあり



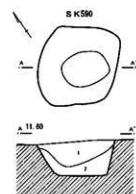
S K588

- 1 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 含む
 $n=13'$ 少量
 しまりあり
 2 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 多量
 しまりあり
 3 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 多量
 しまりあり



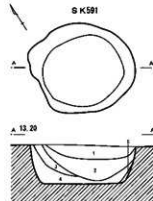
S K589

- 1 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 少量
 しまりあり
 2 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 含む $n=13'$ 少量
 しまりあり
 3 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 多量
 しまりあり



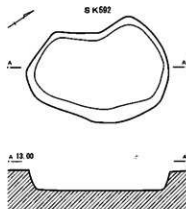
S K590

- 1 黒褐色土 $n=13'$ 含む $n=13'$ $n=13'$ 少量
 しまり・粘性あり
 2 暗褐色土 炭化粒少量 $n=13'$ $n=13'$ 多量
 しまり・粘性あり

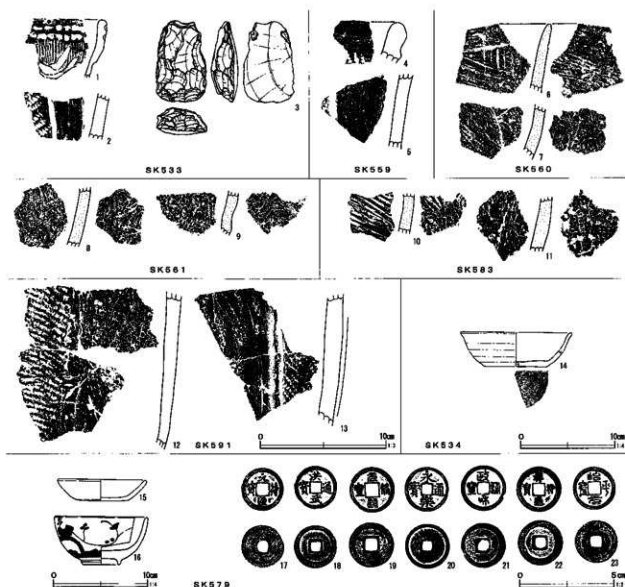


S K591

- 1 暗褐色土 褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 含む しまりあり
 2 黒褐色土 褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 多量
 3 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 少量 ややしまりなし
 4 暗褐色土 炭化粒・ $n=13'$ $n=13'$ 少量
 ややしまりなし
 5 暗褐色土 $n=13'$ $n=13'$ 含む ややしまりなし



第108図 土壌 (6)



第109図 土壌出土遺物

遺物は出土していない。

径0.76m、深さ0.20mである。

遺物は出土していない。

第574号土壌 (第107図)

AK-103グリッドに位置する。第576号土壌と近接しており、プランは円形で、主軸方向はN-17°-Eである。規模は長径0.92m、短径0.88m、深さ0.64mである。

遺物は出土していない。

第576号土壌 (第107図)

AK-103グリッドに位置する。第574号土壌と近接している。プランは不整楕円形で、主軸方向はN-77°-Eである。規模は長径1.05m、短径1.03m、深さ0.66mである。

遺物は出土していない。

第575号土壌 (第107図)

AL-102グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-37°-Eである。規模は長径0.98m、短

第577号土壌 (第107図)

AK・AL-103グリッドに位置する。北側が調査

区域外に位置する。プランは長方形で、主軸方向はN-25°-Eである。規模は長径(1.13)m、短径0.59m、深さ0.25mである。

遺物は出土していない。

第578号土壌 (第107図)

AG-3グリッドに位置する。第6号炉穴と重複している。プランは楕円形で、主軸方向はN-18°-Wである。規模は長径0.76m、短径(0.58)m、深さ0.51mである。

遺物は出土していない。

第579号土壌 (第107図、第109図)

AL-100グリッドに位置する。プランは円形で、主軸方向はN-55°-Eである。規模は長径0.75m、短径0.63m、深さ0.06mである。

遺物は第109図15、16が出土している。15はかわらけで約7割を現存する。推定口径9.2cm、底径3.8cm、器高2.2cmを測る。16は丸形の中脛で、梅花文を描く。肥前系の18世紀前半代の所産と推定される。古銭が7枚出土している。

第580号土壌 (第107図)

AF-5グリッドに位置する。遺構の大半が調査区域外に位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-68°-Wである。規模は長径1.16m、短径0.57m、深さ0.53mである。

遺物は出土していない。

第581号土壌 (第107図)

AG-2グリッドに位置する。第97号住居跡と第99号住居跡と重複する。プランは楕円形で、主軸方向はN-18°-Eである。規模は長径1.00m、短径0.86m、深さ0.30mである。

遺物は出土していない。

第582号土壌 (第108図)

AE-101グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-16°-Eである。規模は長径1.75m、短径0.66m、深さ0.15mである。

遺物は出土していない。

第583号土壌 (第108図、第109図)

AE-101グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-90°-Eである。規模は長径1.58m、短径1.48m、深さ0.75mである。遺構北側に方形の深い掘り込みがある。

遺物は第109図10、11が出土している。10、11とも早期の条痕文系土器群で、繊維を少量含み、内外面に貝殻条痕整形を施す。

第584号土壌 (第108図)

AE-102グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-85°-Wである。規模は長径1.78m、短径は0.85m、深さは0.19mである。

遺物は出土していない。

第585号土壌 (第108図)

AE-102グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-73°-Wである。規模は長径1.02m、短径0.96m、深さ0.78mである。

遺物は出土していない。

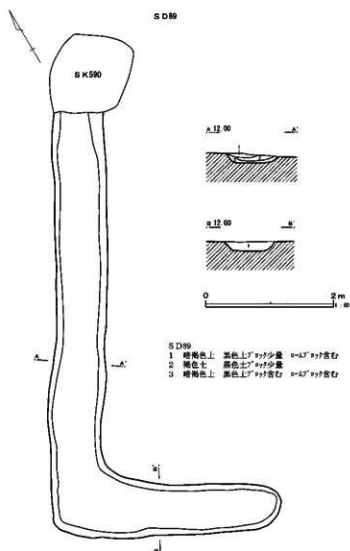
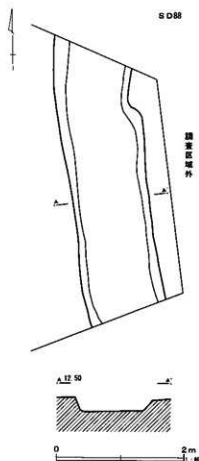
第586号土壌 (第108図)

AD-102グリッドに位置する。第587号土壌と重複する。プランは長方形で、主軸方向はN-67°-Eである。規模は長径1.36m、短径1.06m、深さ0.71mである。遺構北側に小ピットを持つ。

遺物は出土していない。

第587号土壌 (第108図)

AD-102グリッドに位置する。第586号土壌と重複する。プランは長方形で、主軸方向はN-57°-Wである。規模は長径0.90m、短径0.78m、深さ0.14m



第110図 溝跡

である。

遺物は出土していない。

第588号土墳 (第108図)

AC-102グリッドに位置する。プランは長方形で、主軸方向はN-22°-Eである。規模は長径1.11m、短径0.99m、深さ0.47mである。

遺物は出土していない。

第589号土墳 (第108図)

AC-102グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-83°-Eである。規模は長径1.13m、短径0.91m、深さ0.42mである。

遺物は出土していない。

第590号土墳 (第108図)

AC-102グリッドに位置する。プランは楕円形で、主軸方向はN-65°-Wである。規模は長径1.30m、短径1.24m、深さ0.55mである。

遺物は出土していない。

第591号土墳 (第108図、第109図)

AF-100グリッドに位置する。プランは円形で、主軸方向はN-80°-Wである。規模は長径1.53m、短径1.47m、深さ0.63mである。

遺物は第109図12、13が出土している。12、13は

加曾利EⅣ式系の深鉢形土器の胴部破片である。12は微隆帯状の低隆帯が垂下して無文帯を区画し、地文に単節LRを縦位施文する。13は背の高い微隆帯を垂下して無文帯を区画し、単節LRを縦位施文する。

第592号土壌 (第108図)

AH-3グリッドに位置する。プランは不整楕円形で、主軸方向はN-33°-Eである。規模は長径2.28m、短径1.42m、深さ0.31mである。

遺物は出土していない。

(4) 溝

第88号溝 (第110図)

AG-7グリッドに位置する。断面形状は箱型で、主軸方向はN-7°-Wである。規模は長さ4.12m、幅1.22m、深さ0.23mである。

遺物は出土していない。

(5) グリッド出土遺物

土器 (第111図1~39)

1は縄文時代早期初頭の燃糸文土器で、細かな単節RL縄文を縦走させる。

2~21は早期後葉の条痕文系土器群である。4、6は細隆起線でモチーフを描くものである。両者とも外面に擦痕整形を施し、内面は条痕整形である。3は刻みを施す2本対の隆帯を垂下して文縁帯を分割する。5、7は沈線区画内に集合太沈線を充填施文するものである。9は口縁部破片で、2本対の太沈線区画内に、集合太沈線を梯子状に充填施文するものである。いずれも繊維を少量含み、細砂粒と白色粒子を多く含むが、7、9は白色粒子が目立たない。

8、10~21は条痕のみ見られる無文土器で、14が口縁部破片、他は胴部破片である。8、11~13は細かな擦痕状の整形を施すもので、いずれも細砂粒と

第593号土壌 (第107図)

AL-100グリッドに位置する。第573号土壌と重複する。プランは楕円形で、主軸方向はN-73°-Wである。規模は長径0.54m、短径0.32m、深さ0.11mである。

遺物は出土していない。

第594号土壌 (第107図)

AL-100グリッドに位置する。第573号土壌と重複する。プランは長方形で、主軸方向はN-58°-Wである。規模は長径1.26m、短径1.04m、深さ0.78mである。

遺物は出土していない。

第89号溝 (第110図)

AC・AD-102グリッドに位置する。南側で東方向へ直角に折れる。断面形状は箱型で、主軸方向はN-30°-Eである。規模は長さ6.67m、3.68m、幅0.83m、深さ0.15mである。

遺物は出土していない。

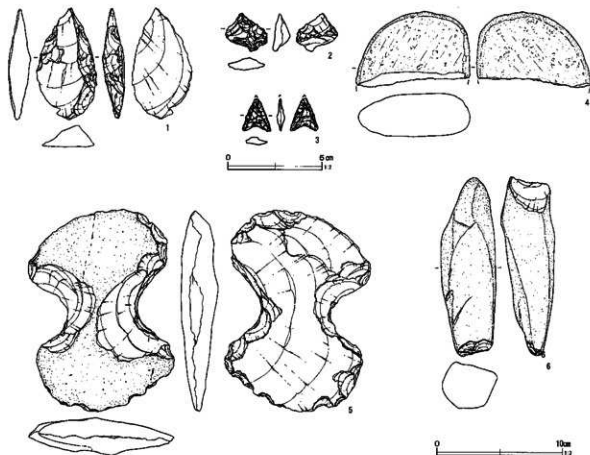
白色粒子を多く含み、繊維を若干含む堅緻な土器である。10、14~21は内外面に貝殻条痕整形を施すもので、条痕が明瞭なものである。繊維をやや多めに含む傾向にある。以上、野島式に比定されるが、古段階と新段階のものが存在する。

22~39は縄文時代中期後葉の加曾利E式系の土器群である。22はキャリバー系土器の口縁部破片で、隆帯の区画内に単節RLを施文する。23は2本隆帯懸垂文の垂下する胴部破片で、地文は単節RLである。24、25、32は磨消懸垂文を垂下するもので、地文は単節RLである。27、28は微隆帯の懸垂文を垂下するもので、地文は単節LRである。29は2本沈線の渦巻文を施文する。地文は単節LRの充填施文である。

26、30、31はキャリバー形の深鉢土器で、26は胴部に、30は口縁部に2列の円形刺突文列を施文する。



第111図 グリッド出土遺物(1)



第112図 グリッド出土遺物(2)

31は口縁部から沈線懸垂文が垂下する。地文は26が条線、30が単節LR、31が単節RLである。33~35は条線を地文に施文する胴部破片である。

36~39は無文土器で、36は頸部無文帯部分と思われる。37は曾利式系の口縁部無文帯、28は無文浅鉢の口縁部、39は無文の鉢形土器の口縁部破片と思われる。

以上、加曾利EⅢ式段階の土器群を中心とし、23、36がEⅠ式~Ⅱ式にかけて、27、28、39はEⅣ式段階の土器群と思われる。

石器(第110図1~6)

1は旧石器時代の刮器である。ガラス質安山岩製で、縦8.7cm、横4.4cm、厚さ1.7cm、重さ51.5gである。

2はチャート製石鏃未製品で、縦2.0cm、横2.2cm、厚さ0.9cm、重さ2.6gである。3はチャート製石鏃で、縦1.7cm、横1.4cm、厚さ0.4cm、重さ0.6gである。4は磨石である。斑レイ岩製で、縦6.0cm、横9.0cm、厚さ3.4cm、重さ254.7gである。5は打製石斧である。砂岩製で、縦16.2cm、横11.1cm、厚さ3.0cm、重さ548.3gである。6は礫器である。砂岩製で、縦14.0cm、横4.3cm、厚さ3.9cm、重さ295.1gである。

第10表 戸崎前遺跡第12次調査土壌計測表

上層番号	所在グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)	主軸方向
S K 526	A G-7	153	94	19	N-22°-W
S K 527	A G-6	123	109	26	N-20°-W
S K 528	A G-6	96	(62)	13	N-26°-W
S K 529	A F-4	144	122	18	N-42°-E
S K 530	A F-6	168	62	11	N-3°-W
S K 531	A F-5	136	56	56	N-71°-W
S K 532	A F-4	113	110	16	N-35°-E
S K 533	A F-4	250	144	25	N-13°-E
S K 534	A F-5	414	128	24	N-22°-W
S K 535	A F・A G-4	107	90	14	N-50°-W
S K 536	A F-5	138	134	24	N-19°-E
S K 537	A E・A F-4	111	76	15	N-6°-E
S K 538	A F-5	163	94	21	N-3°-W
S K 539	A E-4・5	110	94	27	N-25°-E
S K 540	A E-5	93	86	23	N-0°-E
S K 541	A E-5	128	122	72	N-3°-W
S K 542	A D-5	175	160	28	N-70°-W
S K 543	A F-4	121	105	27	N-85°-E
S K 544	A F-4	160	(100)	18	N-30°-W
S K 545	A F-4	114	111	11	N-52°-W
S K 546	A E・A F-4	197	174	60	N-53°-W
S K 547	A E・A F-4	97	66	26	N-25°-E
S K 548	A J-2	430	92	9	N-52°-W
S K 549	A J・A K-2	206	136	28	N-8°-E
S K 550	A K-2	176	141	109	N-10°-W
S K 551	A J-2	80	75	24	N-81°-W
S K 552	A J-2	125	119	52	N-86°-E
S K 553	A I・A J-3	73	68	20	N-77°-W
S K 554	A I-3	140	114	66	N-66°-W
S K 555	A J-2	198	152	64	N-12°-E
S K 556	A J-2	186	99	84	N-62°-W
S K 557	A I-3	118	101	75	N-30°-E
S K 558	A J-2	78	(26)	34	N-24°-E
S K 559	A I-2・3	162	142	37	N-44°-E
S K 560	A I-2	137	106	90	N-25°-E
S K 561	A H・A I-3	156	115	76	N-16°-E
S K 562	A I-3	110	88	18	N-82°-W
S K 563	A H-3	170	116	26	N-51°-W
S K 564	A H・A I-3	183	122	56	N-50°-E
S K 565	A H-3	88	78	14	N-20°-E
S K 566	A H-3	140	112	74	N-44°-W
S K 567	A G-4	82	54	28	N-61°-W
S K 568	A G-4	124	108	13	N-5°-W
S K 569	A G-4	196	160	36	N-32°-E
S K 570	A F-5	95	67	14	N-85°-E
S K 571	A F・A G-4	71	55	30	N-0°-E
S K 572	A L-100	66	54	17	N-47°-E
S K 573	A L-100	155	94	52	N-34°-E
S K 574	A K-103	92	88	64	N-17°-E
S K 575	A L-102	98	76	20	N-37°-E
S K 576	A K-103	105	103	66	N-77°-E
S K 577	A K・A L-103	(113)	59	25	N-25°-E
S K 578	A G-3	76	(58)	51	N-18°-W
S K 579	A L-100	75	63	6	N-55°-E
S K 580	A F-5	116	57	53	N-68°-W
S K 581	A G-2	100	86	30	N-18°-E
S K 582	A E-101	175	66	15	N-16°-E
S K 583	A E-101	158	148	75	N-90°-E
S K 584	A E-102	178	85	19	N-85°-W

十續番号	所在グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)	主軸方向
S K 585	A E-102	102	96	78	N-73°-W
S K 586	A D-102	136	106	71	N-67°-E
S K 587	A D-102	90	78	14	N-57°-W
S K 588	A C-102	111	99	47	N-22°-E
S K 589	A C-102	113	91	42	N-83°-E
S K 590	A C-102	130	124	55	N-65°-W
S K 591	A F-100	153	147	63	N-80°-W
S K 592	A H-3	228	142	31	N-33°-E
S K 593	A L-100	54	32	11	N-73°-W
S K 594	A L-100	126	104	78	N-58°-W

第11表 戸崎前遺跡第12次調査ビット計測表

ビット番号	所在グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)
GP 1	A F-5	(47)	47	11
GP 2	A F-5	121	40	40
GP 3	A F-5	(46)	44	16
GP 4	A F-5	33	32	-
GP 5	A F-5	36	(31)	22
GP 6	A F-5	(68)	48	32
GP 7	A F-5	36	34	52
GP 8	A F-5	74	60	28
GP 9	A F-5	(78)	23	5
GP 10	A F-5	105	70	15
GP 11	A F-5	57	54	11

ビット番号	所在グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)
GP 12	A F-5	90	64	10
GP 13	A F-5	46	31	8
GP 14	A F-6	45	44	16
GP 15	A F・AG-6	66	56	28
GP 16	A F-6	65	55	15
GP 17	A F-6	53	52	22
GP 18	A F-6	55	50	31
GP 19	AG-4	70	54	20
GP 20	AG-4	35	32	8
GP 21	AG-4	87	49	19

第12表 戸崎前遺跡第12次調査遺構新旧対応表

新遺構番号	旧遺構番号
S J 93	S J 1
S J 94	S J 2
S J 95	S J 3
S J 96	S J 4
S J 97	S J 5
S J 98	S J 6
S J 99	S J 7
S J 100	S J 8
S J 101	S J 9
S J 102	S J 10
S J 103	S J 11
S J 104	S J 12
S J 105	S J 13
S J 106	S J 14
S J 107	S J 15
S J 108	S J 16
S J 109	S J 17
S J 110	S J 18
S J 111	S J 19
S J 112	S J 20
S J 113	S J 21
S J 114	S J 22
S J 115	S J 23
S J 116	S J 24
S J 117	S J 25
S J 118	S J 26
S J 119	S J 27
FP 3	FP 1
FP 4	FP 2
FP 5	FP 3
FP 6	FP 4
FP 7	FP 5
FP 8	FP 6
S K 526	S K 1
S K 527	S K 2

新遺構番号	旧遺構番号
S K 528	S K 3
S K 529	S K 4
S K 530	S K 5
S K 531	S K 6
S K 532	S K 7
S K 533	S K 8
S K 534	S K 9
S K 535	S K 10
S K 536	S K 11
S K 537	S K 12
S K 538	S K 13
S K 539	S K 14
S K 540	S K 15
S K 541	S K 16
S K 542	S K 17
S K 543	S K 18
S K 544	S K 19
S K 545	S K 20
S K 546	S K 21
S K 547	S K 22
S K 548	S K 23
S K 549	S K 24
S K 550	S K 25
S K 551	S K 26
S K 552	S K 27
S K 553	S K 28
S K 554	S K 29
S K 555	S K 30
S K 556	S K 31
S K 557	S K 32
S K 558	S K 33
S K 559	S K 34
S K 560	S K 35
S K 561	S K 36
S K 562	S K 37

新遺構番号	旧遺構番号
S K 563	S K 38
S K 564	S K 39
S K 565	S K 40
S K 566	S K 41
S K 567	S K 42
S K 568	S K 43
S K 569	S K 44
S K 570	S K 45
S K 571	S K 46
S K 572	S K 47
S K 573	S K 48
S K 574	S K 49
S K 575	S K 50
S K 576	S K 51
S K 577	S K 52
S K 578	S K 53
S K 579	S K 54
S K 580	S K 55
S K 581	S K 56
S K 582	S K 57
S K 583	S K 58
S K 584	S K 59
S K 585	S K 60
S K 586	S K 61
S K 587	S K 62
S K 588	S K 63
S K 589	S K 64
S K 590	S K 65
S K 591	S K 66
S K 592	S K 67
S K 593	S K 68
S K 594	S K 69
S D 88	S D 1
S D 89	S D 2

VI 薬師堂根遺跡第4次調査

1. 調査の概要

薬師堂根遺跡第4次調査は、第1次調査区の北側にのびる幅6mの道路用地が調査の対象となった。調査面積は325㎡である。

発掘調査は、第1次調査で設定されたグリッド設定に従い、10m方眼の大グリッドを設定した。呼称は、グリッド杭の北西隅を基準に、北からアルファベット表示でG～Kを、西から数字を用いて8～10のグリッド番号を設定した。

2. 検出された遺構

土壌 (第114図)

第844号土壌

H-9グリッドに位置する。長径1.3m×短径0.7mの長方形で、確認面からの深さは0.16m、主軸方位はN-22°-Eである。覆土は2層からなり、下層には多量のロームブロックが含まれていた。

第845号土壌

H-10グリッドに位置し、後述する第846・847・848号土壌と近接している。

長径0.7m×短径0.45～0.58mで、台形状を呈している。確認面からの深さは0.1m程度と浅い土壌である。覆土は第844号土壌と同様である。

第846号土壌

I-10グリッド北西端に位置する。径が0.4～0.5mの楕円形といえる土壌で、掘り込みが極めて浅いことから、底面に近い部分と思われる。

第847号土壌

I-9～10グリッドに位置する。径が1.92～1.94mの円形土壌で底面が段を持って掘り込まれている。深さは0.33mである。土層の状況から、人為的に埋められたものと考えられる。

第848号土壌

前回の調査では、古墳時代の集落と中世の墓城が発見されており、集落や墓城の広がりが予想された。今回の調査において検出された遺構は、中～近世の土壌9基である。調査区全体には攪乱を受けていた部分が多かった。

遺物は遺構に伴うものはない。古墳時代の土師器などが含まれていたが、いずれも小破片で、図示できる資料はなかった。

I-10グリッドに位置する。開口部の径が1.22～1.28m、底径は0.9mの円形土壌である。深さは0.9mで、壁の中央部に弱い段を持つ。

第849号土壌

I-10グリッドに位置し、土壌の東側が調査区域外に延びている。検出できた範囲では、南北壁際で2.7m、東西で1.5m、深さ0.1mである。住居跡の可能性が考えられた土壌である。

第850号土壌

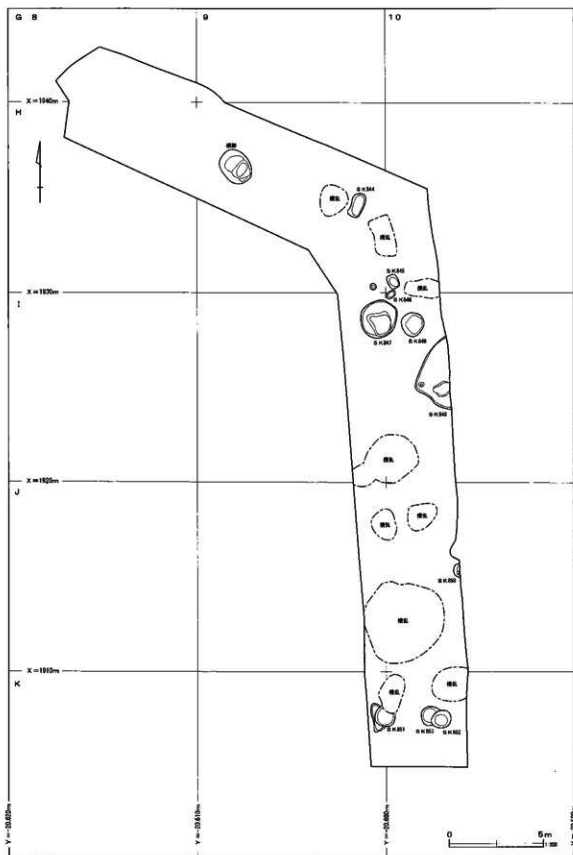
J-10グリッドに位置する。東側が調査区域外にあり、全容不明。南北長は0.7m、深さが0.8mである。

第851号土壌

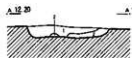
K-9～10グリッドに位置する。攪乱を受け、北側部分が失われていた。長径1.08m×短径0.8mで、深さが0.1mの浅い土壌である。覆土の状況から、人為的な埋戻しと考えられる。

第852号土壌

K-10グリッドに位置する。2基の重複からなり、852a号土壌は径が0.9～1m、深さ0.3mの楕円形、852b号土壌は径が1.1～1.2m程度、深さ0.15mの楕円形であろう。覆土の状況から、前後関係は852a→852bとなる。



第113図 薬師堂根遺跡第4次調査遺構全体図



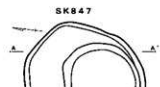
SK844
1 暗褐色土 ロームブロック含む
2 黄褐色土 ロームブロック含む



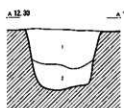
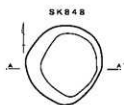
SK845
1 暗褐色土 ロームブロック含む
2 黄褐色土 ロームブロック多量



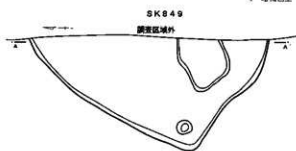
SK846
1 暗褐色土 上面に焼土含む



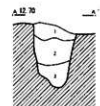
SK847
1 高褐色土 ロームブロック含む
2 黄褐色土 棕色土をブロック状に含む
3 暗褐色土 ロームブロック含む
4 暗褐色土



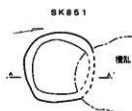
SK848
1 暗褐色土 ロームブロック多量
2 黒褐色土 細粒



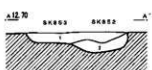
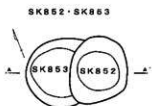
SK849
1 暗褐色土 ロームを含む
2 黄褐色土 ローム多量



SK850
1 紫色土
2 暗褐色土 ロームブロック含む
3 黒褐色土 ロームブロック含む



SK851
1 暗褐色土 紫色土とローム粒の互層



SK852・SK853
1 暗褐色土 ロームを含む
2 黄褐色土 ローム多量



VII 業師堂根遺跡第5次調査

1. 調査の概要

葉師堂根遺跡第5次調査は、第1次調査区の西側へ直線的に伸びる幅6mの道路用地が対象となった。調査面積は814m²である。

発掘調査は、第1次調査で設定されたグリッド設定に従い、10m方眼の大グリッドを基準に調査を進めた。呼称は、グリッド杭の北西隅を基準に、北から南にアルファベット表示を、西から東に数字を付加している。南北列は今回の調査区が東西に直線的な道路部分で幅が狭いこともあり、M列のみであった。東西列は、東に向かって0から8を設定したが、当初に設定されたグリッド表示の0列を超えているために、0列を境に西へ101から106のグリッド番号を設定した。

遺跡は北に沖積地を臨む台地の先端部に位置している。標高が13mで、低地との比高差は約3mである。第5次調査区は台地の肩部にあたり、西に向かって緩やかに傾斜している。

調査はまず、重機によって表土などを除去した後、人力による遺構確認を行った。その後、遺構精査の進捗にとまらぬ、適宜写真撮影・測量などによる記録を作成しながら調査を進めた。

2. 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

第40号住居跡 (第116図)

M-0~1グリッドに位置する平安時代の住居跡で、第862号土壌・第14号が穴と重複している。

住居跡の主体部は径が3.5m×3.2mで、南北がやや長い隅丸の住居跡である。

西壁の中央部やや南よりにカマドが構築されていた。カマドは煙道部の長さが1m、最大幅が0.7mで、焚口部が床面よりも若干低くなる程度であった。主体部とカマド覆土の区別はなく、土層観察では、住居埋没時には、天井部などは既に破壊されていたと思われる。

カマド全面を除き、主体部を全周する壁溝は、土

今回の調査では、縄文時代早期の住居跡2軒、が穴6基、縄文時代中期末葉の住居跡1軒、土壌1基、古墳時代前期の住居跡3軒、平安時代の住居跡2軒、中~近世の土壌43基、溝12条、掘立柱建物跡2棟、ビット列1基、井戸跡1基のほか、調査区全体に多数のビットが検出された。

縄文時代の遺構は、調査区全体で検出され、住居跡は、調査区幅の関係で全容を把握できたものはなかった。早期の住居跡は戸崎前遺跡でも2軒の大形住居跡を含め、炉穴などが検出されている。また中期末の住居跡も戸崎前遺跡で検出されており、原・谷畑遺跡や対岸の大針貝塚、北遺跡が前期前半と中期中葉を中心とした遺跡であることをみても、遺跡の時間的な配置関係や大形集落の分散化などに興味が注がれるところである。

中~近世の遺構は、第1次調査区に近い東側に集中しており、特に墓墳は著しい重複を伴って6列から東に集中する傾向がみられた。第4次調査では墓墳が検出されなかったことや、第1次調査の成果と併せて、中世墓墳の北と西の限界がほぼ確定できたと考えられる。

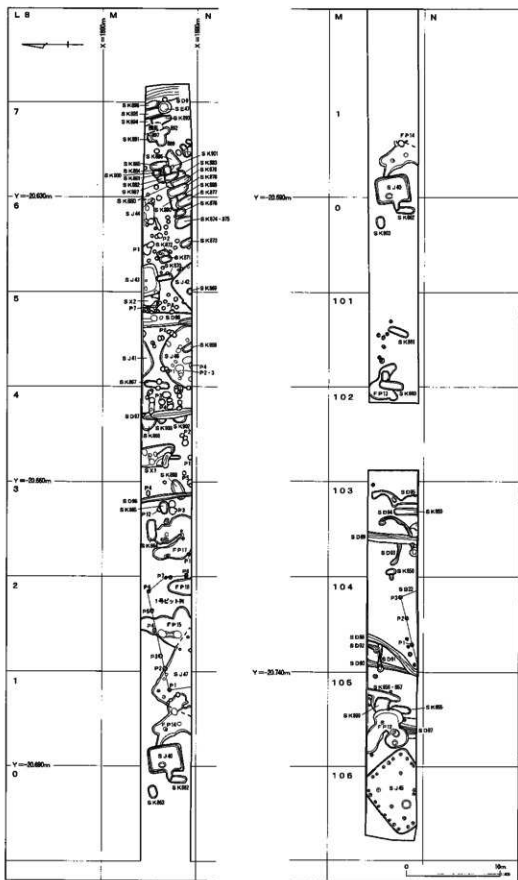
止めなど何らかの処置が加えられ、居住時には埋められていたようである。覆土は自然堆積で、下層にはローム粒とブロック土が多く含まれていた。

掘り方は住居跡主体部中央から壁側にかけてほりこまれたもので、床面と同レベルまでのロームを主体とする充填土が確認できた。

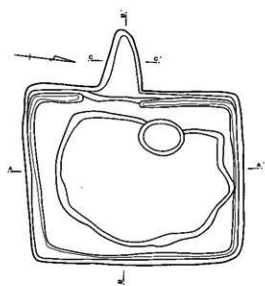
遺物は床面から覆土中に検出されたが、特にカマド焚口から周辺部にかけてまとまっていた。

第40号住居跡出土土器 (第117図)

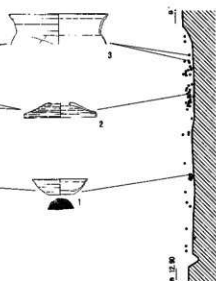
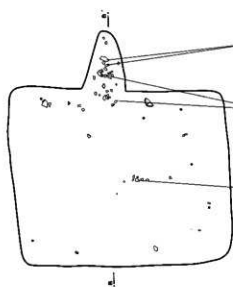
1は須恵器環である。灰白色で少量の小礫と白色針状物質を含んでいる。底部は回転糸切で周辺調整はない。口径11.9cm、底径5.0cm、器高3.3cmである。



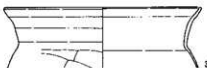
第115図 薬師堂根遺跡第5次調査遺構全体図



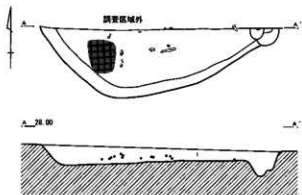
- SJ40
- | | |
|--------|------------------------|
| 1 赤褐色土 | ローム粒・ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量
壁溝埋土 |
| 4 暗褐色土 | 炭土粒・炭化粒多量 |
| 5 暗褐色土 | 炭土粒・炭化粒・ローム粒少量 |
| 6 暗褐色土 | ローム粒・炭土粒・炭化粒多量 |
| 7 暗褐色土 | ローム粒多量 盛り方層土 |



第116図 第40号住居跡



第117図 第40号住居跡出土遺物

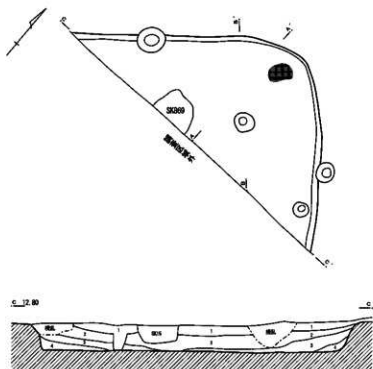


SJ 41

1 暗褐色土 炭化粒少量 ロームブロック含む

0 2m

第118図 第41号住居跡

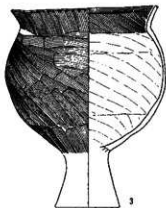


SJ 42

1 暗褐色土 炭化粒・ローム粒・ロームブロック少量
2 暗褐色土 ロームブロック多量
3 暗褐色土 ロームブロック多量 焼土粒・焼土ブロック少量
4 暗褐色土 ローム小ブロック多量 ローム粒少量

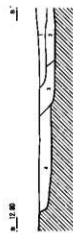
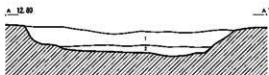
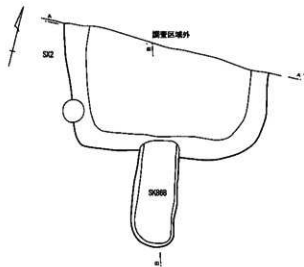
0 2m

第119図 第42号住居跡



0 10cm

第120図 第41・42号住居跡出土土器



S143

- 1 灰褐色土 ローム粒少量
- 2 赤褐色土 ローム粒・ロームブロック少量 粘り床
- 3 灰褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
- 4 赤褐色土 ロームブロック・ローム小ブロック少量 ローム粒多量

0 2m

第121図 第43号住居跡

2は須恵器蓋で、比較的丁寧なつくりである。灰色で少量の小礫を含むが、良好な胎土である。白色針状物質が目立つ。つまみは欠損している。口径15.6cm、現存高3.0cmである。

3はカマドから出土したコの字状口縁の甕である。口唇下部と胴部直上がヨコナデされ、口唇部から内面にかけて丁寧なナデが施されている。胴部はヘラケズリされる。推定口径21.0cm。明褐色で砂粒を多く含む。

第41号住居跡 (第118図)

M-5グリッドに位置する。住居跡は約半分が調査区域外に位置しており、南コーナーを頂点とした三角形部分が調査された。おそらく隅丸方形の住居跡と考えられるが、規模等の詳細は不明である。

確認面からの深さは0.3mで、床面は平坦である。壁は急角度で立ち上がり、一部がビットで壊されていた。

覆土は炭化物とロームブロックを含む暗褐色土1

層のみであった。南西壁際には焼土の堆積が認められたが、覆土中や床面にも遺構の掘り込みが検出されなかったことから、人為的に投棄されたものであろう。

遺物は床面上と覆土内から少量の土器や被熱した礫片が出土したに過ぎないが、台付甕と器台の脚部とにより、古墳時代前期の住居跡と判明した。

第41号住居跡出土土器 (第120図1-2)

時期判別可能な土器は2点のみであった。1は台付甕の脚部で、内外面に木口状工具により密なハケメが施されている。底径9.0cm、現存高6.7cm。

2は円形の透をもつ器台脚部で、1よりも脚部が長く、密なハケメが施されている。底径9.2cm、現存高7.7cm。

第42号住居跡 (第119図)

M-5-6グリッドに位置する。住居跡の大半が南側の調査区域外に伸びており、北コーナーを頂点

とした住居跡の約4割ほどが調査されたに過ぎない。遺存部位が少なく規模等の詳細は不明である。

壁は垂直に立ち上がり、確認面からの深さは0.35mで、床面はほぼ平坦である。覆土は自然堆積で4層が確認された。北コーナー近くでは焼土が確認されたが、遺構に伴う物ではない。中世と考えられる第869号土壌は、覆土上面に掘り込まれたもので、床面にまでは達していない。

床面からは2基の柱穴が検出できた。深さは0.45mで、掘り方もしっかりしており、この住居跡に伴うとみてよいであろう。

第42号住居跡は遺物が極めて少なかったが、床面上からは、器形がわかる台付甕が1点出土した。

第42号住居跡出土土器 (第120図3)

3は「く」の字状に外反する口頸部と球形胴部をもつ台付甕である。口唇端部は丁寧にナデ整形され、外面には木口状工具による刻み目が全周する。同様の工具による密なハケメが、口頸部では縦位に、胴部では横位から斜位に施されている。

内面は口唇端が横位に、以下は斜位にハケメが施され、胴部はヘラナデである。口径23.0cm、胴部最大径25.0cm、推定器高30.0cmである。

第43号住居跡 (第121図)

M-5-6グリッドに位置する。遺構の多くが調査区北側に延びており、規模等の詳細は不明である。調査された範囲では、東西長が3.24mで、北に向かってやや広がるようである。確認面から床面までの深さは0.25mで、検出された掘り方は、最深度で0.1mほど掘り込まれていた。

遺構からは遺物が出土しなかったため、時期を把握しかねるが、土層観察では、中世と考えられる第870号土壌を壊して構築されていることから、中世から近世の遺構と予測され、住居跡とするには問題もあろう。

第45号住居跡 (第122図)

調査区最西端のM-105-106グリッドに位置する縄文時代早期の住居跡である。北コーナー部と南側が調査区域外に延びていたため、全容を明らかにすることはできなかった。

住居跡は南北7.25m×東西6.2mの隅丸長方形で、比較的大形の住居跡といえる。主軸方位はN-49°-Eである。

確認面から床面までの深さは0.2m程度の浅い住居跡で、覆土は少量のローム粒やロームブロック混じりの七層と、壁際ではロームブロック主体の壁崩落土の3層が確認された。

住居跡の主軸線上で西壁寄りに位置する地床炉が検出された。炉は径が0.85mの円形で掘り込みが浅く、覆土には少量の炭化物が含まれていた。

床面には5本の主柱穴と19本の壁柱穴が検出された。調査部位から推定して主柱穴は6本であろう。主柱穴の深さは0.25-0.3mで、壁柱穴はそれよりも若干浅い。

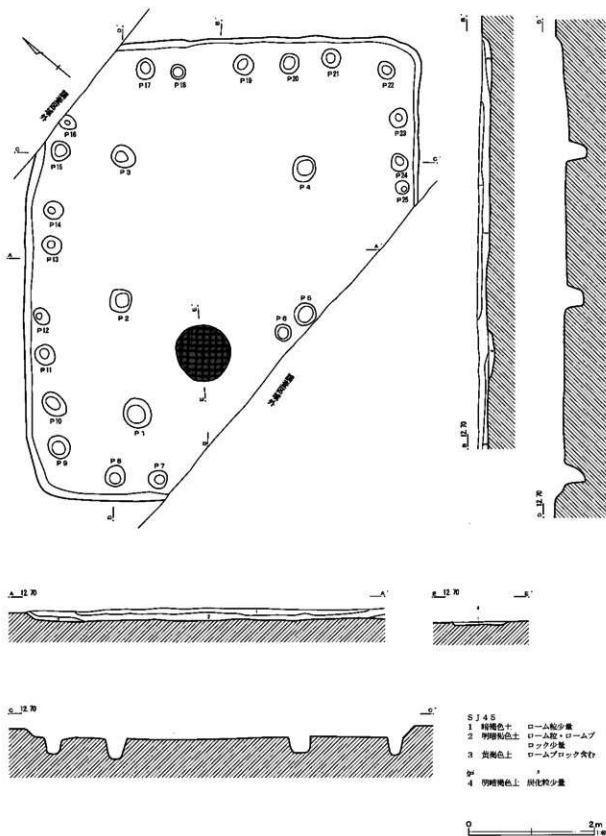
第45号住居跡出土土物 (第123図)

住居跡から出土した土器はすべて条痕文系土器である。文様・器面整形・繊維含有などから、型式学的に前後する時期を含んでいる。

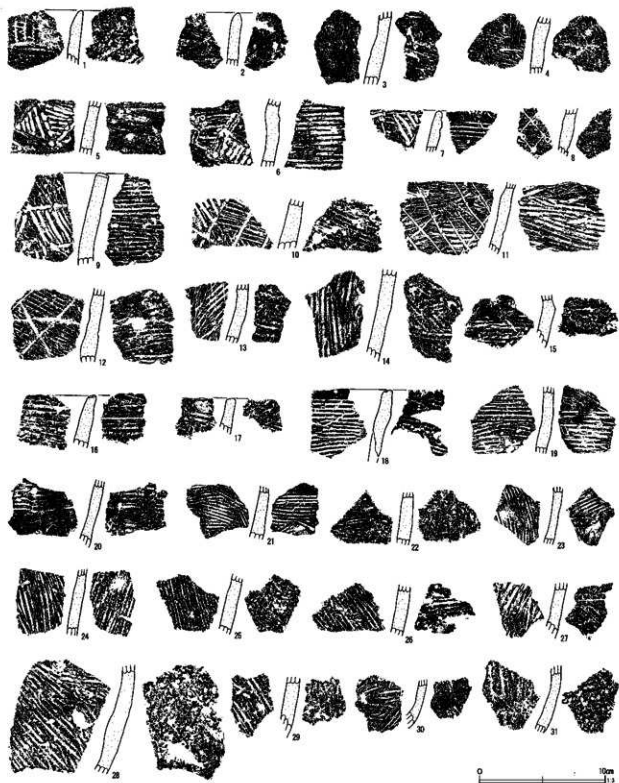
1は波状口縁で、内削ぎ状の口唇をもつ。条痕施文後に貝殻腹縁による圧痕文が縦位施文される木の根A類に対比される。内面の条痕は顕著ではない。2-4は無文で2の口唇は内削ぎ状である。繊維を含む密な胎土である。型式学的には5以下に先行する土器であろう。

5-6は微隆起線と刺突によるモチーフ間に竹管文が充填される土器である。5は内面が密な条痕施文。繊維を含む密な胎土である。

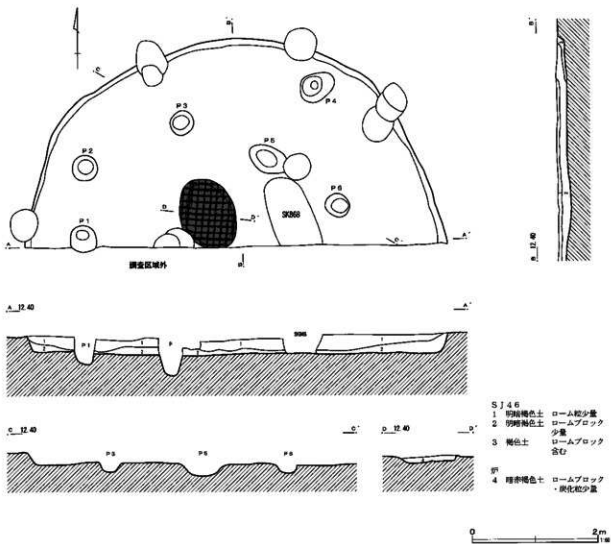
7-12は沈線によるモチーフ構成をもち、接点に刺突が施された土器群である。7、9-10、12-13は5-6に近いモチーフを沈線で描き、充填も沈線で行われている。8、11は細い沈線によって格子目



第122図 第45号住居跡



第123图 第45号住居跡出土遺物



第124図 第46号住居跡

状のモチーフが描かれた土器で、8は接点に刺突が施されている。14は内面にモチーフを意図した条痕施文例、14は屈曲する有文土器の胴部であろう。

16以下には条痕施文のみの土器を一括した。16～18は口縁端部が平坦に整形され、16、18には押圧が加えられている。19～29は胴部破片で、型式学的な特徴に乏しいが、22は1と胎土が類似し、同一個体の可能性がある。他も繊維を含むが比較的密で、9～13の有文土器と類似した印象を受ける。

第46号住居跡（第124図）

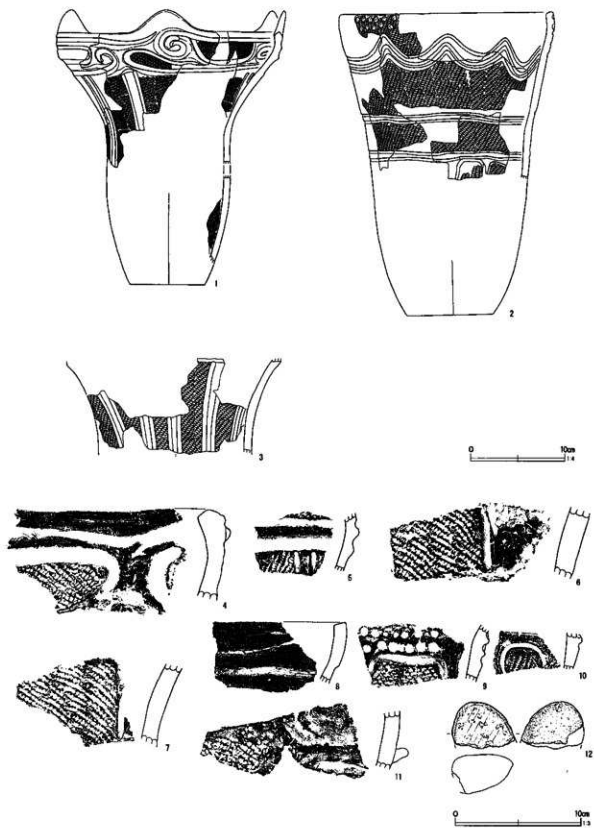
M-5～6グリッドに位置する。住居跡のほぼ南

半分が調査区域外にのびており、規模を把握しがたいが、確認できた範囲からみて、径が約6.5mの円形住居跡と推定される。土壌やピットなどに床や壁が壊されており、遺存状態はよくなかった。

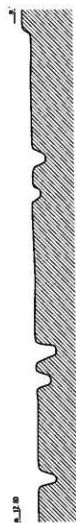
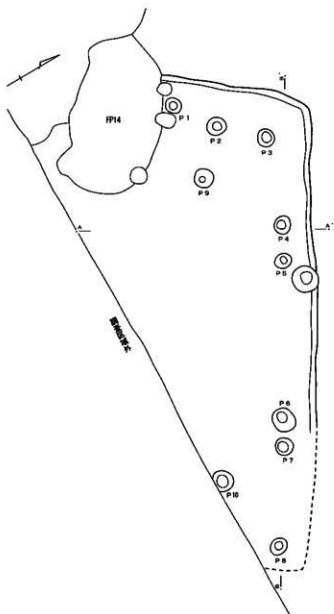
確認面から床面下では平均0.3mで、壁も垂直に立ち上がり、この時期では比較的掘り込みが深い部類といえる。

検出された炉は地床炉で、住居跡のほぼ中央部に位置すると思われる。長径1.2m×短径0.9mの楕円形である。

柱穴は壁寄りに廻っているが、0.2m前後と全て浅い柱穴である。遺物は器形復元可能な3個が出土



第125图 第46号住居跡出土遺物



- SJ 47
- 1 暗褐色土 炭化粒・ローム粒少量
 - 2 暗褐色土 ロームブロック・炭化粒少量
 - 3 明瞭暗褐色土 ロームブロック少量



第126図 第47号住居跡



第127図 第47号住居跡出土遺物

した。

第46号住居跡出土遺物 (第125図)

1はキャリパー形の加曾利E系深鉢形土器で、3単位波状口縁である。胴曲部が明瞭で口縁部文様帯が狭く、沈線主導の文様構成でありながらも古い様相を残している。

文様は端部が渦巻文の枠状区画を上下に配置している。地文はLRI斜縄文である。

胴部は平行沈線による懸垂文で、沈線間が磨消されている。口径23.4cm、推定器高30.0cmである。

2は連弧文系土器で、口唇部に2列の刺突列をもち、二条1単位の平行沈線による口頸部区画内に、三条1単位の沈線による連弧文が描かれる。胴部は二条1単位の平行沈線により区画され、単沈線による逆U字状の沈線文が描かれる。沈線間は地文が磨消されている。推定口径23.0cm、現存高18.0cm、推定器高33.0cmである。

3は加曾利E系深鉢形土器の胴部で、地文上の懸垂文間が磨消されている。最大径23.5cm、現存高10.3cmである。

4～7は加曾利E系深鉢形土器である。6～7は磨消懸垂文の幅が広く、型式学的には1～3よりも

やや新しい様相が看取される。

9は磨消連弧文、13は胴部架懸文系で、新しい様相を示しているよう。

石器は12に示した磨石1点のみである。

第47号住居跡 (第126図)

M-1～2グリッドに位置し、東西でそれぞれ第14・15号炉穴と重複している。第45号住居跡とは直線距離にして60m東に位置している。いずれも、土器を含め出土遺物が零細で、前後関係は判断しがたい。

住居跡は主軸方向がN-53°-Wで、第45号住居跡とは方向を異にしている。規模は7.5m程度で、確認面からの深さは0.15m程度である。壁のやや内側に柱穴P1～P8が廻っており、P9・P10が支柱穴と考えられる。他の柱穴や炉跡は検出できなかった。

第47号住居跡出土土器 (第127図)

住居からの遺物は極めて少なく、図示できた資料は4点に留まった。いずれも条痕施文の土器で、口縁部破片は1のみである。1は器壁が薄く、口唇は内削ぎ状である。胎土には砂粒が多く、他の3点とは趣を異にし、第45号住居跡1に近い。

(2) 炉穴

第12号炉穴 (第128図)

M-105グリッドに位置する。第87号溝と第855号・899号土壌に破壊されているが、ほぼ全容を把握することができた。厳密にはa-dまで4基の重複と見られる。

12a号炉穴は3.5m×2.45mの楕円形と推定される。深さは0.25m前後である。炉穴の南西壁寄りに燃焼部の焼土が認められた。

12b号炉穴は12a号と主軸が直交し、4m×1.25mの長楕円形と考えられる。東側に緩やかに傾斜し、最深部で0.3mである。12a号に壊されており、12a号の北東壁寄りに燃焼部が認められた。

12c号は、2.5m×1.7mで、深さが0.4mの楕円形と推定される炉穴である。12a号に壊されており、西壁際に焼土の堆積が認められた。

12d号炉穴は調査区外に延び、第87号溝に壊されているため、全容不明だが、東西方向に主軸をもつ長楕円形の炉穴であろう。東壁際に燃焼部を持ち、最深部が0.35mである。

第12号炉穴出土土器 (第131図1~9)

覆土中から出土し、各炉穴との対応関係は把握できなかった。1は器面条痕が細かく、あるいは絡条体と思われる。2は隆帯上に貝殻圧痕が施されたもの。3は屈曲部上に、円形刺突を伴う幾何学的モチーフ間が充填されている。4は無文部を扶んで格子目状の沈線文が描かれた例。5~9が条痕施文のみの破片で、有文土器に比較し、内外面ともに条痕が深く明瞭である。

第13号炉穴 (第128図)

M-101~102グリッドに位置する。第860号土壌に壊されるなど平面形が不安定だが、焚口部を共有する2基の重複とも考えられる。焚口部と考えられる焼土面下部の深さは0.35mである。

第13号炉穴出土土器 (第131図10~15)

出土土器は全て条痕のみの破片で、器面に比較し、内面には条痕が施文されないか浅い物が多い。纖維を含むものの、15を除き胎土が密な印象を受ける。

第14号炉穴 (第129図)

M-1グリッドに位置し、平安時代の第40号住居跡、縄文時代早期の第47号住居跡と重複している。中~近世の土壌に攪乱されており、平面形が不安定で、焚口部も明瞭ではない。あるいは2基の重複であろうか。

第14号炉穴出土土器 (第131図16~18)

16は同一工具でモチーフと充填が施された破片で、内面に稜をもつ。17~18は内外面条痕施文のみの破片である。

第15号炉穴 (第129図)

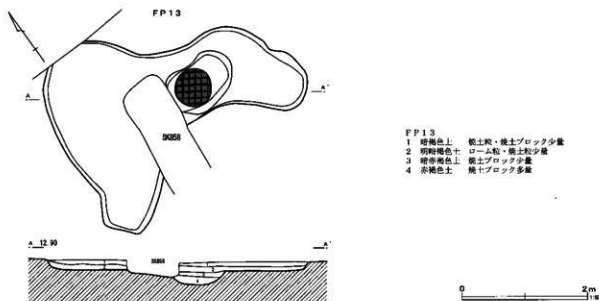
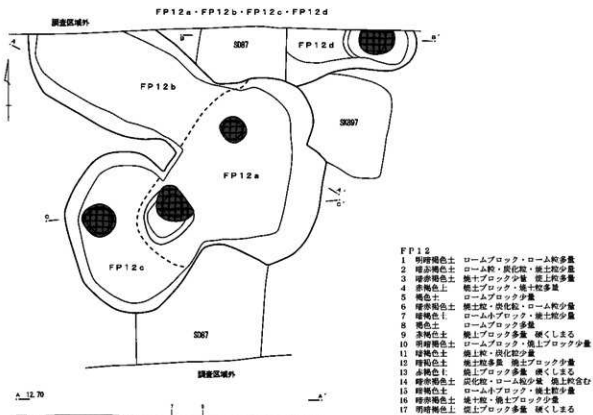
M-2グリッドに位置し、第47号住居跡と重複関係にある。2箇所焼土が堆積した浅い掘り込みが確認されたことから、2基の重複か主軸方位をずらして造り替えた可能性も考えられる。焼土下面までの深さはそれぞれ0.13mと0.2mである。

第15号炉穴出土土器 (第131図19~23)

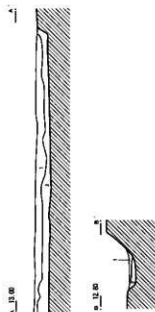
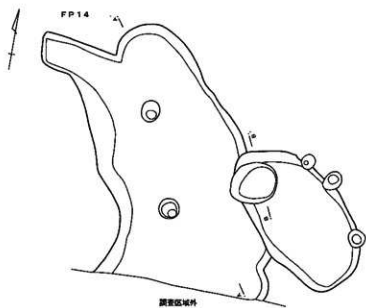
早期の第47号住居跡と重複しており、有文土器に共通性があることから、炉穴に帰属するか否か不明確であった。有文土器は19のみで、他は全て条痕施文の破片である。

第16号炉穴 (第130図)

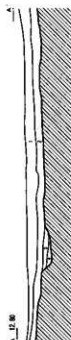
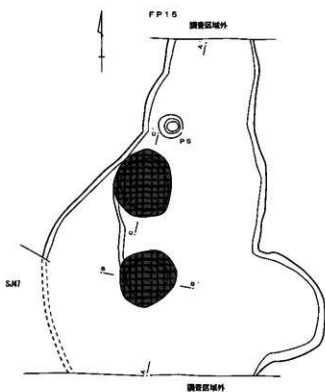
M-2グリッドに位置する。覆土の共通性から炉穴と判断した。調査区域外に延びるが、長楕円形の炉穴であろう。最深部は0.2mで、南側に向かい浅くなっている。遺物は出土しなかった。



第128図 伊穴 (1)



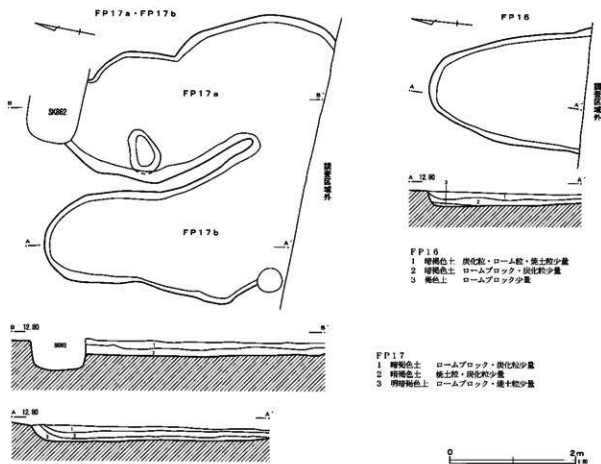
FP 14
 1 暗褐色土 炭化粒・粘土粒少量
 2 黄褐色土 ロームブロック・炭化粒・粘土粒少量



FP 15
 1 暗褐色土 焼土ブロック・粘土粒・炭化粒少量
 2 暗褐色土上 ロームブロック・炭化粒少量 焼土粒含む
 3 赤褐色土 焼土ブロック・粘土粒多量
 4 黄褐色土上 焼土ブロック多量



第129図 炉穴 (2)



第130図 炉穴 (3)

第17号炉穴 (第130図)

M-3グリッドに位置し、一部は第864号土域に壊されている。北に向かい放射状に延びる2基が確認できたが、前後関係は把握できなかった。いずれも長楕円形で、焚口部は調査区域外に存在するのであろう。深さは0.25mである。

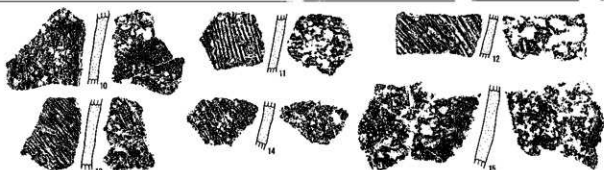
第17号炉穴出土土器 (第131図24~31)

検出された炉穴では最も遺物量が多かった。1~2は口縁部破片で同一個体である。推定4単位の山形状小波状口縁で、内外面の条痕が深く明瞭。

27~30も条痕は24~25と同様で、胎土も脆い印象がある。31は器面が被熱し剥落している。



FP12



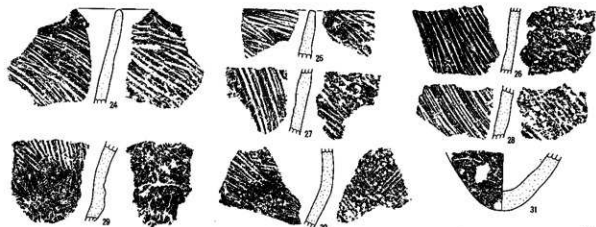
FP13



FP14



FP15



FP17



第131图 伊穴出土遺物

(3) 土壌

薬師堂根遺跡からは総数44基の土壌が検出された。特に第1次調査で検出された第9号溝の西側では、2箇所土壌群が発見されている。第1次調査で検出された溝に囲まれた土壌群よりもやや小振りな土壌が多いようである。形態上ではA類—楕円形土壌、B類—方形ないしは長方形で長軸が短いもの、C類—長方形でB類に比べ長軸が長いものの3類に区分できた。特にC類は検出された土壌の中で主体を占めている。

このため、分類を優先して土壌図面を掲載した。また重複が著しいM-6~7、M-7グリッドの2箇所の土壌群については、分類項目を踏まえ一括して記載した。

土壌からは資料がまったく出土しなかったため、時期を決定することはできなかった。しかしながら、第1次調査でも同種の土壌が数多く検出され、伴出遺物などから中世に比定されていることや、調査地点が隣接していることなどから、今回の調査で検出された特にB・C類土壌に関しても、同時期と考えられるであろう。検出された土壌は、覆土の堆積状況も比較的単純である。ローム粒やロームブロック土の多寡によって分層できたが、黒褐色土を基調としており、人為的な埋め戻しが想定できる土壌も少なからず存在する。

A類

第866号土壌 (第132図)

M-4グリッドに位置する。調査区域外に延びるほか第97号溝に壊されているため、遺存部分から形状を推定した。深さ0.2m。

第898号土壌 (第132図)

M-3~4グリッドに位置し、一部が第96号溝に壊されている。長径1.38m×短径0.60mの菱形に近い形状で、深さは0.15mである。

B類

第859号土壌 (第132図)

M-105グリッドに位置する。長径0.92m×短径0.66mの長方形で、土壌底部分のみ遺存したためか、極めて浅い。

第863号土壌

M-0グリッドに位置する。長径1.28m×短径0.66mで、壁の立ち上がりが緩く、深さ0.1mの浅い土壌である。

第865号土壌 (第132図)

M-3グリッドに位置する。長径1.3m×短径1.0mの長方形土壌で、裾広がり長方形を呈する。深さ0.24mである。

第871・872号土壌 (第132図)

M-6グリッドに位置し、新旧関係は872→871号である。いずれも壁は垂直か急傾斜で立ち上がる。

第871号土壌は、長径1.26m×短径0.74m、深さ0.45mである。

第876号土壌 (第132図)

M-6グリッドに位置する。長径1.14m×短径0.72mで、第863号土壌とほぼ等しい。深さ0.24mである。

M-7グリッド重複群 (第132図)

調査区東端にあり、第1次調査(B)区で検出された第9号溝の西側に集中する土壌群である。

B類に属するのは第889・891・892・897号土壌で、C類土壌に隣接して重複していると思われる。

第889号土壌は、第892号に壊され、攪乱を受けているが、長径2.0m、短径が1.1m前後の上層と推定される。重複や攪乱、さらには調査区域外に延びるため、個別の詳細が不明瞭であった。覆土はいずれ

も埋め戻された状況である。

第891号土壌、897号土壌は、短径がそれぞれ0.4mと0.6mで、長径は不明である。新旧関係は、891号→897号→889号→892号で、第889号土壌のみ軸方向が異なっている。

第892号土壌は、長径1.4m×短径0.62m、深さ0.23mである。他の土壌もほぼ同じ深さであった。

第896号土壌は、第9号溝と重複するが、前後関係が不明確であった。

M-6～7重複群 (第133図)

M-6重複群の西側で重複する土壌群である。第887・888・900号土壌がB類に該当するが、重複が激しく、平面形が確認できなかつた土壌もある。第900号土壌は、径が0.8m程度の方形で、他とは横相を異にする。深さは0.1mである。

第887号土壌は、中央で弱く屈曲していることから、あるいは2基が重複していた可能性もあるが、覆土での判別はできなかつた。長径1.46m×短径0.72mで、横底部が検出されたに過ぎない。

第888号土壌は、長径1.38m×短径0.6m、深さ0.15mである。

C類

M-7グリッド重複群 (第132図)

第893・894・895・896号土壌がC類に該当すると思われる。B類土壌に隣接して重複した土壌である。いずれも調査区域外に延びているために、全容が把握できるものはなく、B類との境界も不明瞭である。

第893号土壌は第894号土壌に壊され、攪乱を受けているため、詳細不明。第893号土壌は裾広がりの長方形とも考えられる。短径0.8m前後、深さ0.31mである。第894号土壌は横底部のみが遺存したらしく、極めて浅い。

第895号土壌は、短径0.9m、深さ0.2mである。第893・895号と、第994・896号はそれぞれ主軸方向が近似している。

M-6～7グリッド重複群 (第133図)

第877・878・879・890・881・882・883・885・886号土壌が重複群の中でC類に該当する土壌である。重複が著しいため、正確な形状や前後関係について把握し難い部分があった。

第877号土壌は、一部が調査区域外に延びている。長径は2.0m程度、短径0.74m、深さ0.3mである。第890号土壌を壊している。

第878号土壌は、長径2.34m×短径0.92m、深さ0.4mである。第879・888号土壌に壊されている。形状は第879・885・886号土壌に近い。第880号土壌は主軸が異なるが、同規模であろう。

第879号土壌は第878・883号土壌を壊している。長径2.06m×短径0.64m、深さ0.3mで、覆土は人為的な埋土と考えられる。

第886号土壌は第901号土壌と重複するが、前後関係不明。横底部に小ピットが検出された。長径2.18m×短径1.3m、深さ0.2m程度で、人為的な埋土である。

第885号土壌は第881号土壌に壊されている。長径1.92m×短径0.76m、深さ0.3mで、壁は急傾斜で立ち上がる。覆土は1層で、人為的な埋土と考えられる。

他の土壌は重複が著しく、詳細は把握しがたいが、残存部位から形状を推定した。土層はほとんどがロームブロックを含む黒褐色土で、人為的な埋土と考えられる。

第880・884号土壌は形状を明らかにし得なかつた。

第855号土壌 (第133図)

M-105グリッドに位置する。長径2.08m×短径0.66mの長方形で、横底部が残存したに過ぎず、僅かに掘り込みが確認できる程度の極めて浅い土壌であった。

第856号・857号土壌 (第133図)

M-105グリッドに位置し、第857号土壌は調査区

域外に延びている。覆上の状況から、第857号は溝の可能性も否定できない。短径0.64m、深さが0.18mである。

第856号土壌は第857号土壌を壊しており、北壁の立ち上がりが緩やかである。長径1.36m×短径0.5m、墳底は北に緩く傾斜し、最深部で0.26mである。

第860号土壌 (第133図)

M-102～103グリッドに位置し、第13号伊穴を壊している。長径2.5m×短径0.7mで、深さ0.2m前後である。C類のなかでは最も形が整った土壌といえる。

第861号土壌 (第133図)

M-101グリッドに位置する。長径2.2m×短径0.6mで、墳底部が検出されたために、極めて浅い掘り込みであった。

第862号土壌 (第133図)

M-0グリッドに位置する。第863号土壌に近接し、主軸が直交する。第40号住居跡のカマド煙道部を壊して構築されている。長径1.88m×短径0.68mで、墳底部が検出されたために、極めて浅い掘り込みであった。

第864号土壌 (第133図)

M-3グリッドに位置し、第17号伊穴を壊して構築されている。長径2.2m×短径0.84mである。深さは0.5mで、検出された土壌の中では最も深く、形も整っている。壁は垂直に掘り込まれ、墳底部も平坦である。覆土はローム粒やブロックを含む黒褐色

上で、下層にはロームが多く含まれていた。

第867号土壌 (第133図)

M-4～5グリッドに位置し、東西両壁が小ピットによって壊されていた。長径2.6m×短径0.62mの長方形土壌であるが、墳底近くが残存していたため、極めて浅い土壌であった。

第868号土壌 (第124図)

M-5グリッドに位置し、第46号住居跡を壊して構築された。調査区域外に延びているが、残存部からC類と判断した。墳底は住居跡の床面まで達しており、深さ0.3mで、壁は垂直に掘り込まれている。

第869号土壌 (第119図)

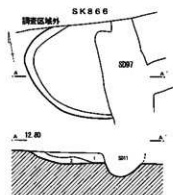
M-5～6グリッドに位置し、第42号住居跡を壊して構築されている。調査区域外に延びるが、現存部からC類と判断した。深さ0.58mである。

第873号土壌 (第133図)

M-6グリッドに位置し、調査区域外に延びているため、長径は不明である。短径0.64mで、墳底近くが検出されたため極めて浅い土壌である。残存部位からみてもC類であることは明白である。

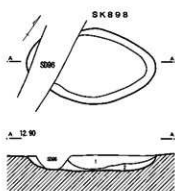
第874号・875号土壌 (第133図)

M-6グリッドに位置し、重複群に隣接する。いずれも調査区域外に延びているため全容は不明だが、残存部位からC類と判断した。前後関係は875号→874号である。第874号土壌は、最大幅0.7m、深さ0.2mである。



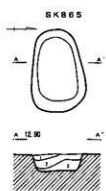
SK866

- SK866
1 赤褐色土 ローム粒多量 ロームブロック少量
2 暗褐色土 ローム粒多量 ロームブロック少量



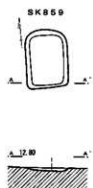
SK898

- SK898
1 暗褐色土 ローム小ブロック・ローム粒少量
2 褐色土 ロームブロック少量



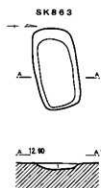
SK865

- SK865
1 赤褐色土 ローム粒多量 ロームブロック少量
2 赤褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量



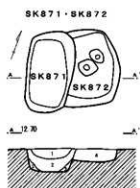
SK859

- SK859
1 赤褐色土 ロームブロック多量



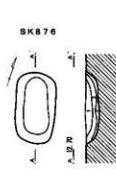
SK863

- SK863
1 暗褐色土 ローム粒多量



SK871・872

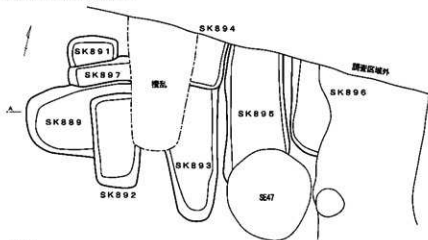
- SK871・872
1 赤褐色土 ローム粒多量 ローム小ブロック少量
2 赤褐色土 ローム粒多量 ロームブロック少量
3 黄褐色土 ロームブロック多量
4 赤褐色土 ローム粒多量 ロームブロック含む



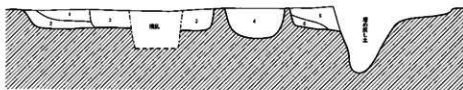
SK876

- SK876
1 赤褐色土 ローム粒多量 ローム小ブロック含む
2 赤褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
3 暗褐色土 ロームブロック含む

SK889・SK891~SK897



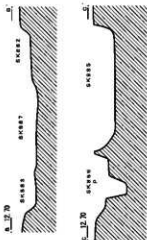
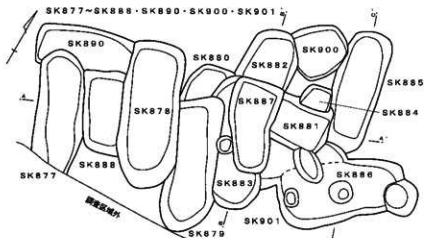
A_12.90



SK889・891~897

- SK889・891~897
1 赤褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
2 暗褐色土 ローム粒少量 ロームブロック多量
3 赤褐色土 ローム粒少量
4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
5 赤褐色土 ローム粒少量
6 赤褐色土 ロームブロック少量

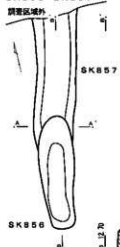
第132図 土壌 (1)



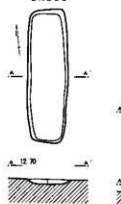
SK877~SK885・SK890・SK900・SK901

- 1 黒褐色土 ローム粒少量
- 2 黒褐色土 ローム粒含む ローム小ブロック多量
- 3 黒褐色土 ローム小ブロック少量 ローム粒多量
- 4 黒褐色土 ローム粒多量 ローム小ブロック含む
- 5 黒褐色土 ローム粒多量
- 6 黒褐色土 ローム小ブロック多量
- 7 黒褐色土 ローム小ブロック・ローム粒多量
- 8 黒褐色土 ローム粒少量
- 9 黒褐色土 ローム粒少量
- 10 黒褐色土 ローム小ブロック少量 ローム粒含む

SK855・SK857



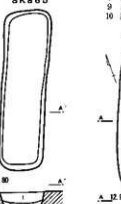
SK855



SK855

- 1 黒褐色土
- 多量 粗土

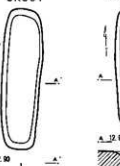
SK860



SK860

- 1 黒褐色土
 - 2 黒褐色土
- ローム粒多量
ローム小ブロック多量

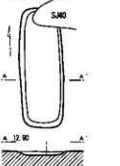
SK861



SK861

- 1 黒褐色土
- ローム粒多量

SK862



SK862

- 1 黒褐色土
- ローム粒多量

SK856



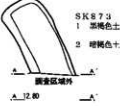
SK856

- 1 黒褐色土
 - 2 黒褐色土
- ローム粒多量 ローム小ブロック含む
ローム小ブロック多量

SK857

- 3 黒褐色土
 - 4 黒褐色土
- ローム粒・ローム小ブロック多量
ローム小ブロック多量

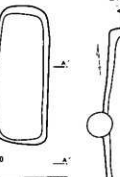
SK873



SK873

- 1 黒褐色土
 - 2 黒褐色土
- ローム小ブロック少量
ローム粒含む
ローム粒多量
ローム小ブロック含む

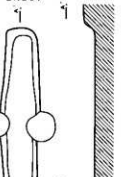
SK864



SK864

- 1 黒褐色土
 - 2 黒褐色土
 - 3 黒褐色土
- ローム粒多量 ローム小ブロック少量
ローム粒・ローム小ブロック多量
ローム粒・ローム小ブロック多量

SK867



SK867

- 1 黒褐色土
- ローム粒多量

SK874・SK875



SK874・SK875

- 1 黒褐色土
 - 2 黒褐色土
 - 3 黒褐色土
 - 4 黒褐色土
- ローム粒多量 ローム小ブロック少量
ローム小ブロック少量
ローム粒含む
ローム粒・ローム小ブロック少量

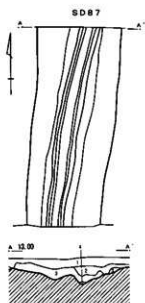
SK874・H75

- 5 黒褐色土
- ローム小ブロック少量

SK874・H75

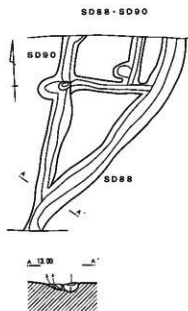
- 6 黒褐色土
- ローム小ブロック少量

第133圖 土壤 (2)



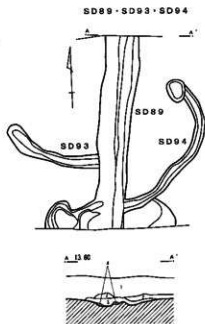
SD87

- 1 灰褐色土 焼土粒・炭化粒・白色粒 (炭灰A?) 珪砂作土
- 2 暗褐色土 焼土粒・ロームブロック少量 埴土
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量
- 4 褐色土 ローム粒含む 埴土



SD88・90

- 1 黄褐色土 ロームブロック含む 埴土
- 2 黒褐色土 ローム粒多量 ロームブロック少量 埴土
- 3 暗褐色土 ローム粒多量
- 4 暗褐色土 ローム粒少量 ロームブロック含む
- 5 暗褐色土 ロームブロック多量



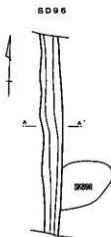
SD89

- 1 赤土 砂作土
- 2 灰褐色土 焼土粒・ロームブロック少量 埴土
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量 ローム粒含む 埴土
- 4 褐色土 ローム多量 埴土



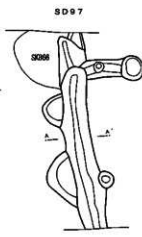
SD95

- 1 灰褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
- 2 暗褐色土 ローム粒含む
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量

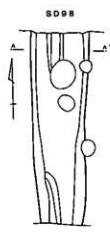


SD96

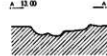
- 1 灰褐色土 ローム粒多量
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量



A 12.00



A 12.00



第134図 溝跡

(4) 溝跡 (第134図)

薬師堂根遺跡第5次調査では、12条の溝跡が検出された。いずれも調査区を南北に走るために、全長が判るものはない。

第87号溝

M-105グリッドに位置し、第12号伊穴を壊している。幅2.2mで底面に二条の溝底が認められる。深さは0.3~0.45mである。

第88号・90号溝

M-104~105グリッドに位置する。第88号溝は湾曲し第90号溝を壊している。溝幅は0.5~0.65mで、深さは0.23mである。

第90号溝も溝幅や深さが、ともに第88号溝にほぼ等しい。両溝は東西方向の第91号溝と南北方向の第92号溝と連結しているが、全容は不明である。

第89号・93号・94号溝

M-103グリッドに位置する。南北に走る第89号溝から東西両側に湾曲して、第93号と第94号溝が延びている。第89号溝は幅が0.7~0.9m、第93号溝は、幅0.28~0.45m、第94号溝は、幅が0.3m前後である。

掘り込みはいずれも0.1mと極めて浅い。

第95号溝

M-103グリッドに位置する不定形の溝で、小ピットを有する。幅は0.4~1.05mで、深さは0.3m程度である。

第96号溝

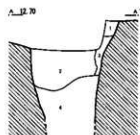
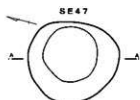
M-3グリッドに位置し、第89号土塊を壊している。溝幅0.4~0.6mで、深さは0.2m前後である。

第97号溝

M-4グリッドに位置する。溝幅0.6~0.8m、深さ0.4m前後で、段を持ち南北に走る。グリッド北端では東側に伸びる短い溝が検出された。

第98号溝

M-5グリッドに位置する。二条の重複からなるが、前後関係が不明確であった。重複部分での溝幅は1.4mであるが、グリッド北端での各々の溝幅は0.6mと0.8m程度であった。



- SE 47
- 1 黒褐色土 ロームブロック少量 灰褐色土含む 堀土
 - 2 黒褐色土 ロームブロック少量 埋土
 - 3 暗褐色土 ローム大ブロック少量 埋土
 - 4 黒色土 ローム粒少量



- SK 858
- 1 黒褐色土 ローム粒少量 灰褐色土含む
 - 2 炭層



第135図 井戸跡・火葬跡

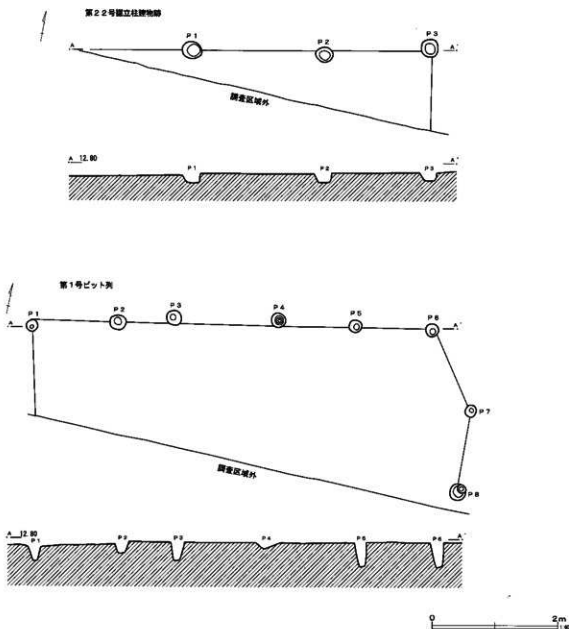
(5) 井戸跡・火葬跡 (第135図)

井戸跡

M-7グリッドに位置し、土壌群と重複している。径が1.45m×1.36mの楕円形で、すぼまり気味に掘り込まれている。底面まで完掘できなかった。

火葬跡

今回の調査で検出された唯一の火葬跡である。主体部は長径1.06m×短径0.63m、深さ0.2mで、灰が堆積していた。焚口部は長さ0.55m、幅0.34mで、主体部へと傾斜している。



第136図 第22号掘立柱建物跡・第1号ビット列

(6) 掘立柱建物跡・ピット列 (第136図)

第1号掘立柱建物跡

M-105グリッドに位置する。調査区域外に及び全形不明である。東西の柱間は1.8mと2.0mで、柱穴の深さは0.15m前後であった。時期不詳のピットが数多く検出されているが、ピットの配置や覆土から、古代の遺構と認定した。

3. グリッド出土遺物

グリッド出土土器 (第137図1~26)

1~14は条痕文系土器で、このうち1~4が有文土器である。1は多截竹管による格子目状のモチーフ、2は同様の工具あるいは貝殻によるモチーフ間に単沈線が充填されたものであろう。3は棒状工具による沈線文、4はヘラ状工具による細い沈線文間に単沈線が充填された土器である。

5以下に条痕施文のみの土器をまとめた。5~8が口縁部破片で4は波状口縁である。

15~16は阿玉台系土器である。15は器面に鬚状圧痕があり、断面三角形の隆帯が垂下している。16は口唇端部が外傾し、内面に稜をもつ無文土器である。いずれも胎土に雲母を含んでいる。

17~19、21、24は加曾利E系土器で、キャリパー

第1号柱穴列

M-1~2グリッドに位置する。当初は掘立柱建物跡と考えていたが、柱穴の間隔や配列が一定していないため、柱穴列と改めた。東西径は6.9mで、柱間は0.9m、1.3m、1.7mとばらつきが大きい。中世以降と考えられる。

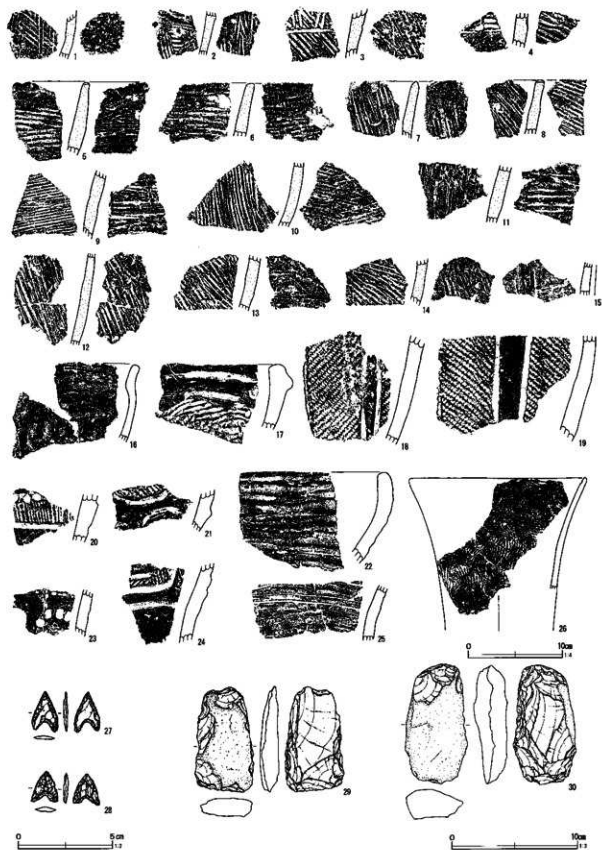
形の口縁部と胴部破片である。20は連弧文系土器である。

22、25は後期段階の土器であろう。ヘラナデが顕著で、25には細い沈線文が横走する。23も胎土や整形からこの時期と考えられる。

26は外反気味に開く壺之内2式の深鉢であろう。器面には原体Rが斜位回転施文されている。内面は口唇直下に沈線が廻り、ヘラナデが施されている。推定口径15.0cm、現存高9.2cmである。

グリッド出土土器 (第137図27~30)

27~28は抉りをもつ無茎石織、29~30は打製石斧で、30は自然面を大きく残し、調整剥離は裏面に限定されている。



第137回 グリッド出土遺物

第13表 薬師堂根遺跡第4次調査土壌計測表

土壌番号	所在グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)	主軸方向
S K 844	H-9	130	70	13	N-22°-E
S K 845	H-10	70	58	11	N-32°-W
S K 846	H-10 1-10	50	44	4	N-19°-E
S K 847	I-9・10	194	192	33	—
S K 848	I-10	128	122	92	N-35°-E
S K 849	I-10	274	154	10	N-33°-E
S K 850	J-10	68	32	81	N-7°-E
S K 851	K-9・10	108	80	9	—
S K 852	K-10	158	106	34	—
S K 853	K-10	104	62	9	—

第14表 薬師堂根遺跡第5次調査炉穴・土壌・溝跡・井戸跡計測表

番号	所在グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)	主軸方向
F P 12	M-105	500	458	30	a N-44°-E b N-60°-W c N-89°-E
F P 13	M-101・102	410	286	11	N-73°-W
F P 14	M-1	400	400	13	N-80°-E
F P 15	M-2	520	420	140	N-80°-E
F P 16	M-2	248	198	18	N-89°-E
F P 17	M-3	450	386	41	N-32°-E
S K 855	M-105	208	66	6	N-85°-E
S K 856	M-105	136	50	26	—
S K 857	M-105	200	64	18	N-72°-E
S K 858	M-105	120	102	15	N-12°-E
S K 859	M-105	92	66	5	N-88°-E
S K 860	M-101・102	250	70	22	N-85°-E
S K 861	M-101	220	60	5	N-66°-E
S K 862	M-0	188	68	7	N-86°-E
S K 863	M-0	128	66	10	N-8°-E
S K 864	M-3	220	84	50	N-2°-E
S K 865	M-3	130	100	24	N-4°-E
S K 866	M-4	152	114	20	N-17°-W
S K 867	M-4・5	260	62	6	N-84°-E
S K 868	M-5	112	68	13	—
S K 869	M-5・6	66	46	58	—
S K 870	M-6	130	70	21	—
S K 871	M-6	126	74	37.5	N-14°-W
S K 872	M-6	120	70	45	N-68°-W
S K 873	M-6	130	64	10	N-62°-W
S K 874	M-6	190	112	18	N-68°-W
S K 875	M-6	114	72	19.5	N-73°-W
S K 877	M-6・7	180	74	30	N-63°-W
S K 878	M-6・7	234	92	4	N-65°-W
S K 879	M-7	208	64	3	N-65°-W
S K 880	M-6	66	44	12	N-87°-E
S K 881	M-7	90	78	11	N-1°-W
S K 882	M-7	84	80	16	N-71°-W
S K 883	M-7	214	64	25	N-62°-W
S K 884	M-7	58	48	13	—
S K 885	M-7	192	76	30	N-83°-W
S K 886	M-7	218	130	21	N-31°-E

番号	所在グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)	主軸方向
S K 887	M-7	146	72	3	N-70°-W
S K 888	M-6・7	138	56	15	N-65°-W
S K 889	M-7	140	114	29	N-23°-E
S K 890	M-7	134	62	23	N-18°-E
S K 891	M-7	80	40	14	-
S K 892	M-7	140	62	48	N-76°-W
S K 893	M-7	214	80	31	N-72°-W
S K 894	M-7	80	52	6	N-85°-W
S K 895	M-7	160	90	20	N-75°-W
S K 896	M-7	138	60	13	N-82°-W
S K 897	M-7	70	60	15	N-19°-E
S K 898	M-3・4	204	120	25	N-28°-E
S K 899	M-2	196	124	22	N-4°-E
S K 900	M-14	84	82	11	-
S K 901	M-14	86	42	11	-
S K 902	M-4	166	74	24.5	N-12°-W
S K 903	M-4	86	58	14.5	N-7°-W
S D 87	M-105	535	216	37・26	N-10°-E
S D 88	M-104・105	590	70	49・38	N-37°-E
S D 89	M-103	510	210	24・19	N-4°-E
S D 90	M-104・105	410	56	28	N-14°-E
S D 91	M-104	252	36	24・13	N-87°-W
S D 92	M-104	130	120	47・21	N-13°-E
S D 93	M-103	260	24	30・12	N-72°-W
S D 94	M-103	480	56	22・12	N-40°-E
S D 95	M-103	366	140	32・26	N-6°-E
S D 96	M-3	520	54	23	N-9°-W
S D 97	M-4	530	70	47	N-9°-W
S D 98	M-5	506	140	31・26	N-37°-W
S E 47	M-7	140	132	134	-

第15表 薬師堂根遺跡第5次調査ビット計測表

ビット番号	所在グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)
P1	M-2	32	24	26
P2		28	28	21
P3		38	34	49
P4		34	30	22
P5		36	34	67
P1	M-3	38	38	25
P2		28	26	39
P3		84	78	22
P4		56	36	64
P5		78	70	21
P6		36	36	23
P7		32	30	36
P8		32	24	25
P9		70	38	24
P10		38	34	28
P11		36	34	52
P12		50	(30)	23
P13		59	42	39
P1	M-4	52	(34)	25
P2		66	65	10
P3		55	40	74
P4		47	28	70

ビット番号	所在グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)
P5	M-4	54	46	22
P6		48	30	78
P7		60	43	53
P8		48	26	71
P9		94	77	10
P10		32	28	8
P11		68	58	16
P12		42	40	19
P13		77	53	32
P14		45	38	11
P15		36	33	34
P16		58	57	153
P17		50	45	56
P18		28	26	70
P19		43	27	87
P20		42	33	81
P21		(50)	40	91
P22		47	45	24
P23		45	43	26
P24		40	38	15
P25		28	27	21

ビット番号	所在グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)
P1	M-5	34	30	19
P2		60	50	43
P3		94	72	53
P4		65	(52)	50
P5		44	42	26
P6		52	32	52
P7		44	36	52
P8		36	34	65
P9		40	37	58
P10		32	28	34
P11		42	41	26
P12		35	35	16
P13		38	36	10
P14		35	32	29
P15		77	65	29
P16		45	40	20
P17		60	50	66
P18		79	50	59
P19		55	53	32
P20		33	32	43
P21		55	38	45
P22		70	(32)	22
P23		40	40	26
P24		50	43	54
P25		48	47	12
P26		42	40	14
P27		47	44	43
P1	M-6	75	10	35
P2		75	60	60
P3		20	18	11
P4		25	(23)	12
P5		26	25	11
P6		36	33	10
P7		26	23	22
P8		37	30	29
P9		42	29	42
P10		32	30	16
P11		41	30	26
P12		25	24	15
P13		34	33	59
P14		42	30	54
P15		43	41	51
P16		41	36	30
P17		33	33	25
P18		38	32	45
P19		47	45	85
P20		36	34	29
P21		42	39	50
P22		33	31	5
P23		37	36	21
P24		35	28	12
P25		28	25	15
P26		73	58	37
P27		50	33	60
P28		42	30	66
P29		45	38	21
P30		70	(30)	20
P31		150	40	17

ビット番号	所在グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)
P1	M-7	52	(20)	25
P2		35	32	68
P3		58	53	42
P4		38	35	55
P5		52	50	18
P6		62	48	21
P7		28	25	29
P8		55	34	34
P9		53	20	30
P10		(62)	50	16
P1	M-8	46	44	57
P1	M-101	30	28	5
P2		26	24	11
P3		34	26	14
P4		36	34	8
P5		30	30	16
P6		50	50	17
P7		32	30	19
P1	M-103	28	26	25
P1	M-104	38	34	17
P2		38	32	18
P3		28	26	18
P4		44	34	15
P5		38	32	18
P6		44	38	16
P7		34	32	33
P1	M-105	40	36	13
P2		33	30	20
P3		35	28	17
P4		34	32	19
P5		31	28	7
P1	M-106	57	48	13
P2		38	36	15
P3		45	40	19
P4		36	36	20
P5		54	34	16
P6		42	38	15
P7		38	34	16
P8		43	38	22
P9		42	40	13
P10		44	38	13
P11		42	40	10
P12		50	35	20
P13		32	24	20
P14		46	34	18
P15	48	46	23	
P16	32	24	20	
P17	38	34	18	
P18	48	36	19	
P19	45	42	10	

第16表 栗師堂視遺跡第4次調査新旧対照表

新遺構番号	旧遺構番号
S K 844	S K 1
S K 845	S K 2
S K 846	S K 3
S K 847	S K 4
S K 848	S K 5
S K 849	S K 6
S K 850	S K 7
S K 851	S K 8
S K 852	S K 9
S K 853	S K 10

第17表 栗師堂視遺跡第5次調査新旧対照表

新遺構番号	旧遺構番号
S J 40	S J 1
S J 41	S J 2
S J 42	S J 3
S J 43	S J 4
S J 44	S J 5
S J 45	S J 6
S J 46	S J 7
S J 47	S J 8
FP12	FP1
FP13	FP2
FP14	FP3
FP15	FP4
FP16	FP5
FP17	FP6
S B 22	S B 1
S E 47	S E 1
S D 87	S D 1

新遺構番号	旧遺構番号
S D 88	S D 2
S D 89	S D 3
S D 90	S D 4
S D 91	S D 5
S D 92	S D 6
S D 93	S D 7
S D 94	S D 8
S D 95	S D 9
S D 96	S D 10
S D 97	S D 11
S D 98	S D 12
S K 855	S K 1
S K 856	S K 2
S K 857	S K 3
S K 858	S K 4
S K 859	S K 5
S K 860	S K 6
S K 861	S K 7
S K 862	S K 8
S K 863	S K 9
S K 864	S K 10
S K 865	S K 11
S K 866	S K 12
S K 867	S K 13
S K 868	S K 14
S K 869	S K 15
S K 870	S K 16
S K 871	S K 17
S K 872	S K 18
S K 873	S K 19

新遺構番号	旧遺構番号
S K 874	S K 20
S K 875	S K 21
S K 876	S K 22
S K 877	S K 23
S K 878	S K 24
S K 879	S K 25
S K 880	S K 26
S K 881	S K 27
S K 882	S K 28
S K 883	S K 29
S K 884	S K 30
S K 885	S K 31
S K 886	S K 32
S K 887	S K 33
S K 888	S K 34
S K 889	S K 35
S K 890	S K 36
S K 891	S K 37
S K 892	S K 38
S K 893	S K 39
S K 894	S K 40
S K 895	S K 41
S K 896	S K 42
S K 897	S K 43
S K 898	S K 44
S K 899	S K 45
S K 900	S K 46
S K 901	S K 47
S K 902	S K 48
S K 903	S K 49

VIII 相野谷遺跡第4次調査

1. 調査の概要

相野谷遺跡第4次調査は、埼玉新都市交通内宿駅の南東側の道路用地が対象となった。今回の調査地点は、上越新幹線建設に伴い調査された相野谷遺跡の北西端に隣接している。調査面積は710㎡である。

発掘調査は、事業地内の埋蔵文化財調査遺跡全体を覆うグリッド設定に従っており、10m方眼の大グリッドを基準としている。呼称は、グリッド枕の北西隅を基準に、北から南にアルファベット表示でDYからEFを、西から東に数字で85から90までが付加された。

2. 検出された遺構と遺物

(1) 土壌

相野谷遺跡で検出された土壌には、形態がA類一長方形で長軸が長いもの、B類一方形ないしは長方形だが長軸が短めのもの、C類一円形ないしは楕円形の土壌等の差異があり、特にB・C類は薬師堂根遺跡との類似性が窺える。

土壌が密集する範囲はEB～EC-89～90グリッドで検出された第4～7号溝の南西側であることから、墓城の可能性も考えられる。

ここでは、形態分類を優先し、重複するものはまとめて掲載した。

A・B類

第83号土壌 (第139図、第147図1)

EF-88グリッドに位置し、第1号溝と接している。西側が未調査区域に延びている。現存部の長径3.52m×短径0.96mで、深さは0.2mである。

遺物は第147図1が出土した。全面に鉄軸が施された小皿で、口径10.8cm、底径6.5cm、器高2.4cmである。

第20号土壌 (第139図)

EE-88グリッドに位置し、西側が未調査区域に延びている。現存部の長径1.28m×短径0.92mで、

遺跡は西に開析谷を臨む台地上にあり、標高が13.5～14.5mである。

調査は、重機によって表七などを除去した後に、人力による遺構確認を行った。その後、遺構精査の進捗にともない、適宜写真撮影・測量などによる記録を作成しながら調査を進めた。

今回の調査では、土壌66基、井戸跡4基、溝跡21条、欄跡1条である。溝跡は屋敷の区画溝の可能性がある。遺構の時期はいずれも中～近世のものと思われる。

深さは0.28mである。

第25・26号土壌 (第139図)

EE-86グリッドに位置する。A類の第25号土壌とB類の第26号土壌の重複である。第26号土壌は長径1.36m×短径1.04m、深さ0.46m、第25号土壌は推定長径1.8m×短径0.7mで、深さは0.54mである。

第21・22・23号土壌 (第139図)

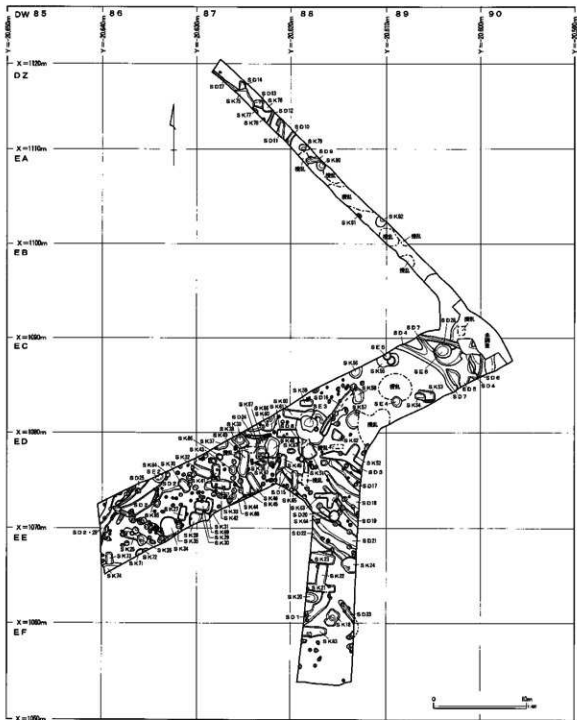
EE-88グリッドに位置し、第21号土壌は第26号溝と重複し、西側が未調査区域に延びている。第22号土壌は主軸方位を異にし、第21・23号土壌と直交している。第23号土壌は長径2.6m×短径1.1m、深さ0.3mである。

第32号土壌 (第139図)

ED-86～87グリッドに位置し、第18号土壌と重複している。西側が未調査区域に延びている。現存部の長径1.6m×短径1.06m、深さ0.23mである。

第27号土壌 (第139図)

ED-86グリッドに位置する。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。長径1.56m×短径0.72m、深さ0.33mである。



第138図 相野谷遺跡第4次調査遺構全体図

第36号土壌 (第139図)

ED-87グリッドに位置する。長径1.16m×短径0.66m、深さ0.2mである。

第37号土壌 (第140図)

ED-87グリッドに位置し、北側が未調査区域に延びている。現存部の長径は北壁際0.9m、深さは0.15mである。

第38・39・40号土壌 (第140図)

ED-87グリッドに位置し、第38号土壌北西端が未調査区域に延びている。B類第38・39号土壌が最も古く、第40号土壌が最も新しい。推定で第40号土壌は長径3.1m×短径0.56m、深さ0.34m、第38号土壌は、長径1.44m×短径1.36m、深さ0.31m、第39号土壌の深さ0.4mである。

第45・46号土壌 (第140図)

ED-87グリッドに位置する。第45号土壌は長径2.04m×短径0.88m、深さ0.22mである。第46号土壌は、長径1.6m×短径1.14m、深さ0.44mである。

第28・29・30・31・69号土壌 (第140図、第147図2)

ED-86-87グリッドに位置し、第28・31号土壌が調査区域外に延びている。第28号土壌は長径1.26m×短径1.1m、深さ0.44m、第29号土壌は長径1.46m×短径1.04m、深さ0.43m、第69号土壌は長径1.5m×短径0.86m、深さ0.22mである。第30・31号土壌は不明。

第147図2は第30号土壌出土遺物である。底部糸切のカワラケである。□径10.0cm、底径6.4cm、器高2.4cm。

第79号土壌 (第140図)

DZ-EA-88グリッドに位置する。長径1.14m×短径0.64m、深さ0.47mである。

第51号土壌 (第140図)

ED-88グリッドに位置し、第3号井戸跡と重複するほか、攪乱を受けている。遺存部位が少なく詳細は不明。

第52号土壌 (第140図)

ED-88グリッドに位置し、第3号溝を壊している。B類で長径1.7m×短径1.18m、深さ0.13mである。

第53・54号土壌 (第140図、第147図5～6)

EC-89グリッドに位置する。おそらく3基の重複であろう。第53号土壌は長径1.85m×短径1.0m、深さ0.4m、第54号土壌は、長径1.0m×短径0.74m、深さ0.28mである。いずれもB類。

第147図5は鉢の胴下部～底部破片で、沈線下にタタキ目が施される。6は植木鉢と思われ、型押による文様が施されている。

第33・41・42・45号土壌 (第141図)

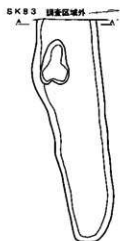
ED-86-87グリッドに位置する土壌群で、重複と遺構外のために、第44・68号土壌の形態は不明である。第33号土壌は長径2.36m×短径0.84m、深さ0.36m、第41号土壌は、長径1.24m×短径0.94m、深さ0.2m、第42号土壌は、長径2.1m×短径1.1m、深さ0.36mである。

第55号土壌 (第141図)

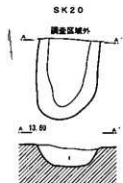
EC-88-89グリッドに位置し、北東壁寄りに浅い掘り込みをもっている。一部が調査区域外にあるほか、第5号井戸跡にも壊されている。長径2.32m×短径1.34m、深さ0.3mである。

第47・48・66・67号土壌 (第141図)

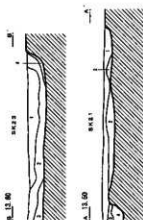
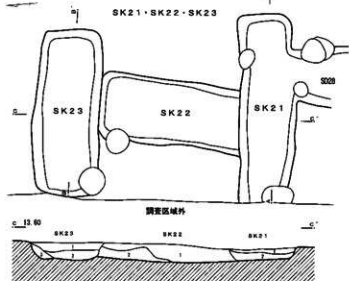
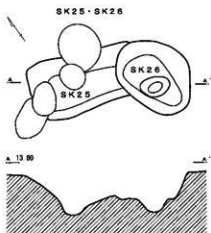
ED-87グリッドに位置する。第47・66号土壌は規模不明。第48号土壌は長径2.1m×短径1.44m、深さ0.5m、第67号土壌は、長径1.2m×短径1.14m、



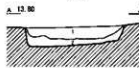
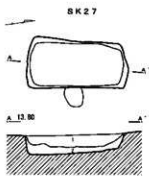
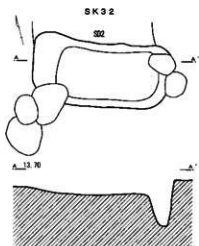
SK83
1 明褐色土 ロームブロック多量
2 明褐色土 ローム粒多量



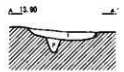
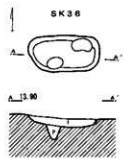
SK20
1 暗茶褐色土 ローム主体



SK21・22
1 暗茶褐色土 ローム粒多量
2 明褐色土 ロームブロック多量
3 ビット
4 暗褐色土 ローム粒少量
SK23
1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
2 暗褐色土 ロームブロック多量
3 暗褐色土 ロームブロック多量
4 暗褐色土 ローム粒多量



SK27
1 暗褐色土 ロームブロック少量
2 暗褐色土 ロームブロック多量



SK36
1 明褐色土 ローム粒多量



第139図 土壌 (1)

深さ0.36mである。

第59号土壌 (第141図)

EC-88グリッドに位置する。長径1.4m×短径0.67mで、掘り込みは極めて浅い。

第60号土壌 (第141図)

EC-87~88グリッドに位置し、第3号井戸跡と重複しているため、規模は不明である。短径0.94m、深さ0.2mである。

第61号土壌 (第141図)

EC~ED-87~88グリッドに位置し、第3号井戸跡と重複しているため、規模は不明である。短径1.0mで極めて浅い。

第62号土壌 (第142図)

EC~ED-88グリッドに位置する。長径1.24m×短径0.86m、深さ0.18mである。

第70号土壌 (第142図)

ED-86グリッドに位置する。長径1.5m×短径1.16m、深さ0.1mである。

第63号土壌 (第142図)

ED-88グリッドに位置し、2基の重複である。第63a号土壌は、長径2.54m×短径0.56m、深さ0.2m、第63b号土壌は第63a号土壌に直交し、短径0.62m、深さ0.2mである。

第73・74号土壌 (第142図)

EE-86グリッドに位置し、第74号土壌は調査区域外に延びている。規模などは不明である。

第65号土壌 (第142図)

ED-88グリッドに位置する。長径2.0m×短径0.7m、深さ0.1mである。

第75号土壌 (第142図)

DZ-87グリッドに位置し、大半が調査区域外に延びている。おそらく2基の重複と思われる。規模等は不明。

C類

第34・35号土壌 (第143図、第147図3~4)

ED~EE-86グリッドに位置し、第35号土壌と重複するが、前後関係は不明。長径2.16m×短径1.66m、深さ0.36mである。第35号土壌も形態は不明。

第147図3~4は第35号土壌出土遺物である。1は底部切り離しが雑で、段状になっているカワラケ。口径9.2cm、底径5.4cm、器高2.0cmである。2は鉄箱の小壺底部であろう。底径4.0cm。

第56号土壌 (第143図)

EC-88グリッドに位置し、約半分が調査区域外に延びていると思われる。東西径1.26m、深さ0.3mである。

第43号土壌 (第143図)

ED-87グリッドに位置する。長径0.96m×短径0.78m、深さ0.35mである。

第64号土壌 (第143図)

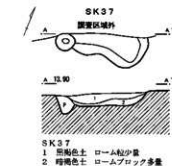
ED-88グリッドに位置する。長径1.1m×短径1.04mでほぼ円形の土壌。深さは0.3mである。

第57号土壌 (第143図)

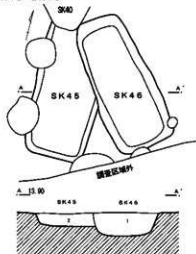
EC-88グリッドに位置し、南東部が攪乱を受けている。長径1.96m×短径1.22m、深さ0.16mである。

第71・72号土壌 (第143図)

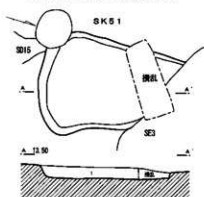
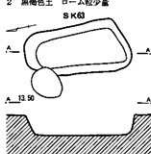
EE-86グリッドに位置する。現存部では2基の重複で、いずれも調査区域外に延びている。東西径は第71号土壌が0.64m、第72号土壌が0.42m、深さ



SK45・SK46

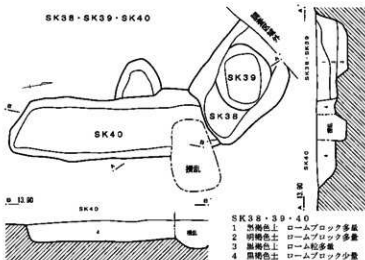


SK46
1 黒褐色土 ロームブロック多量
SK45
2 黒褐色土 ローム粒少量

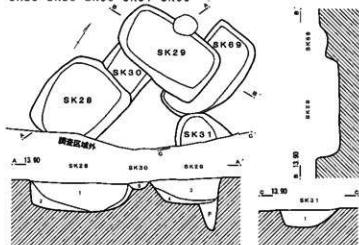


SK51
1 黒褐色土 ロームブロック少量

SK38・SK39・SK40

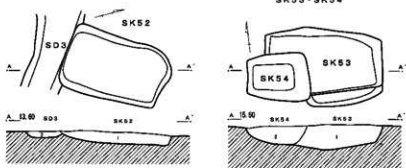


SK28・SK29・SK30・SK31・SK69



SK28
1 黒褐色土 ローム粒・炭化粒少量
2 黒褐色土 ロームブロック少量 炭化物や多い
SK29
3 黒褐色土 ローム粒多量
4 黒褐色土 ローム粒少量
SK30
5 黒褐色土 ローム粒少量

SK53・SK54

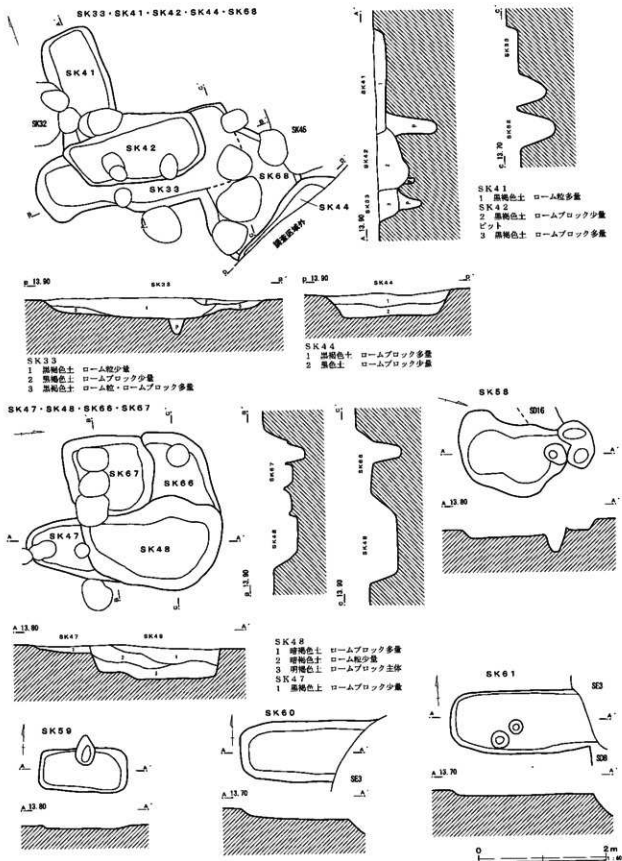


SK52
1 黒褐色土 ロームブロック少量 ローム粒多量
SK53
2 黒褐色土 ロームブロック多量

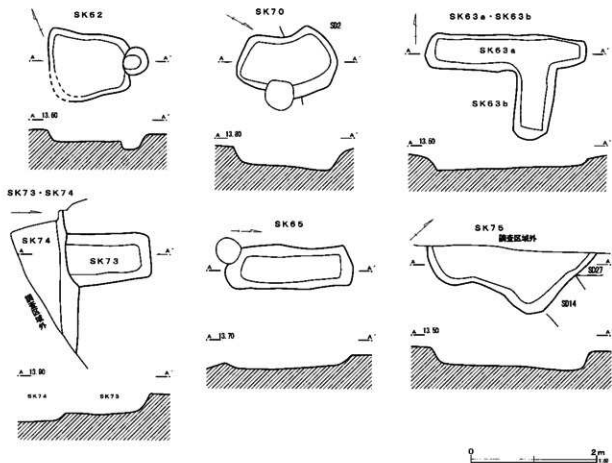
SK53
1 黒褐色土 ロームブロック多量
SK54
2 黒褐色土 ローム粒多量



第140図 土壌 (2)



第141図 土壌 (3)



第142図 土坑 (4)

0.36mである。

第76号土坑 (第143図)

DZ-87グリッドに位置し、調査区域外に延びている。現存部の東西径は1.0m、深さ0.3mである。

第80号土坑 (第143図)

EA-88グリッドに位置し、一部が調査区域外にある。長径0.92m×短径0.84m、深さ0.38mである。

第82号土坑 (第143図)

EA-88グリッドに位置し、調査区域外に延びている。現存部東西径は0.96mで、おそらくA類の土坑であろう。深さ0.54mである。

第18号土坑 (第143図)

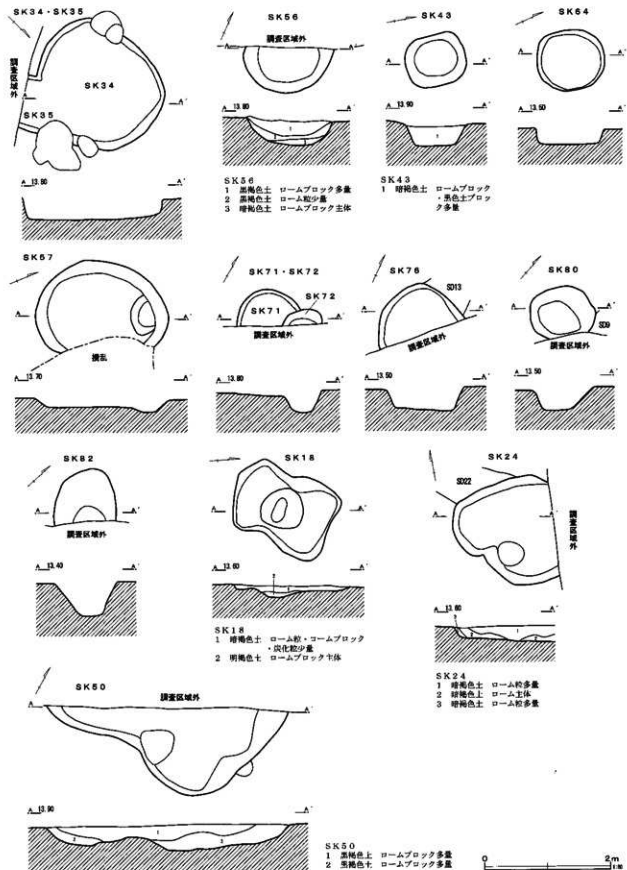
EE-EF-88グリッドに位置する。形態が不明確で、重複の可能性も考えられる。底部に浅い掘り込みをもつ。長径1.7m×短径1.3m、深さ0.2mである。

第24号土坑 (第143図)

EE-88グリッドに位置し、調査区域外に延びている。2基が重複した可能性も考えられる。長径1.7m×短径1.6m、深さ0.15mである。

第50号土坑 (第143図)

EC-87グリッドに位置し、多くが調査区域外に延びている。不整形で重複した土坑の可能性もある。東西径1.4m、深さ0.4mである。



第143図 土壌 (5)

(2) 溝跡

第1号溝跡 (第144図)

EE-88グリッドに位置し、南西部は調査区域外に伸び、北端は第21号土壌と重複している。幅が0.8~1.0m、深さ0.6mである。

第3号溝跡 (第144図)

調査区南西端のED~EE-85~86グリッドに位置し、南西部は調査区域外に伸びる。幅が0.6~0.9mで、極めて浅い。

第4・5・6・7・28号溝跡 (第144図)

調査区北東端のEB~EC-89~90グリッドに位置し、北西・南東側で調査区域外に伸びている。第4・28号が主軸方位を同じくし、第5・6・7号溝が主軸を変えて交差しており、交差部で第6号井戸跡と重複している。溝幅×深さは、第4号溝が0.75m×0.7m、第28号溝が0.6m×0.35m、第6号溝が2.1m×0.5m、第7号溝が0.7m×0.7mである。

第8・15号溝跡 (第144図)

ED-87~88グリッドに位置し、第39・65号土壌と重複し、攪乱を受けている。第8号溝との交錯が予想されるが明確にはできなかった。いずれも幅や深さなどは明らかではない。

第17号溝跡 (第144図)

ED-88グリッドに位置し、先端部で第3号溝と接している。幅は0.7~1.1m、深さは0.1m程度の浅い溝である。

第18号溝跡 (第144図)

ED-88グリッドに位置する。第17号溝と主軸方位を同じくし、先端部ですばまる溝である。幅0.4~1.1m、深さは0.1m程度の浅い溝である。

第19号溝跡 (第144図)

ED-88グリッドに位置し、第63号土壌と重複している。主軸方位は第17・18号溝と同じである。幅0.3~0.7m、深さは0.15m程度である。

第20・21号溝跡 (第144図)

ED~EE-88グリッドに位置する。第20号溝は第17~19号溝と主軸方位を同じくし、第21号溝と重複している。幅0.7m、深さ0.2mである。第21号溝は調査区域外を扶むが、ED-87グリッド周辺に該当する溝は検出できなかったため、他の溝と同様に収束するのであろう。幅0.7~1.3m、深さ0.2mである。

第22号溝跡 (第144図)

EE-88グリッドに位置し、東壁際で第24号土壌と重複している。西側で調査区域外に伸びるが、ED-87グリッド周辺に該当する溝は検出できなかった。幅0.7m前後の極めて浅い溝である。

第2・25・26号溝跡 (第145図)

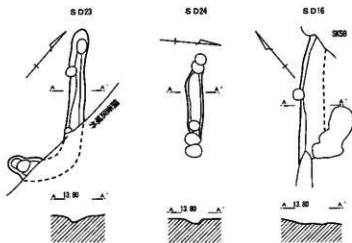
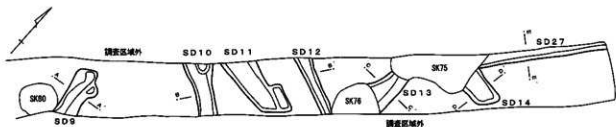
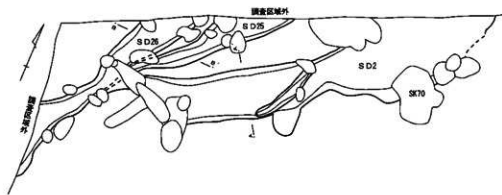
ED~EE-85~86グリッドに位置し、重複関係にある溝群である。第2号溝は第7号溝と直交する主軸方位を示す。南西端で第25号溝と近接し収束するようである。不整形で幅が1.2~2m前後と振幅が大きい。壁の立ち上がりは緩く、深さは0.14mである。

第25号溝は、主軸方位を第4号溝と同じくし、第26号溝と重複している。土壌との重複が多いが、幅は0.7m程度であろう。

第26号溝は、主軸方位を第17~19号溝と同じくする不整形の溝で、幅が0.6~0.9mと一定しない。第25・26号溝はともに掘り込みが極めて浅い。

第27号溝 (第145図)

DZ-87グリッドに位置し、第75号土壌を扶むため、第13号溝との関係が不明瞭であった。溝の長軸側が調査区域外になっており、詳細は不明である。



第145图 溝跡 (2)

第13号溝 (第145図)

DZ-87グリッドに位置し、第75・76号土壌と重複している。深さ0.26mである。

第12号溝 (第145図)

DZ-87グリッドに位置し、第76号土壌と重複している。幅0.3~0.4m、深さ0.2mである。

第11号溝 (第145図)

DZ-87グリッドに位置し、南東壁際で収束している。幅0.6~0.8m、深さ0.2mである。

第10号溝 (第145図)

DZ-87~88グリッドに位置し、枝溝をもつ。幅0.5m、深さ0.1mである。

第9号溝 (第145図)

EA-88グリッドに位置し、北東壁際で収束し、

(3) 井戸跡

第2号井戸跡 (第146図)

ED-86グリッドに位置し、北半分が調査区域外に延びている。開口部から漏斗状に掘り込まれ、以下は垂直な掘り込みである。径は開口部で1.45m、以下では1.0mである。

第3号井戸跡 (第146図)

EC-ED-88グリッドに位置する。第16号溝、第51・60・61号土壌と重複している。開口部は径が2.5mの円形に掘り込まれ、断面が漏斗状となっている。以下は径0.7mで垂直に掘り込まれている。

第4号井戸跡 (第146図、第147図7~8)

EC-89グリッドに位置する。径が1.0~1.15mの楕円形で、ほぼ垂直に掘り込まれている。覆土中からは板碑と内耳鍋の破片が出土した。

第80号土壌と重複している。幅0.6m、深さ0.2mである。

第23号溝 (第145図)

EE-EF-88グリッドに位置し、調査区域外でL字形に屈曲すると見られ、調査区内で両端が収束する。幅0.45m、深さ0.13mである。

第24号溝 (第145図)

ED-87グリッドに位置し、小ピットと第38・39号土壌と重複しているため、詳細は不明である。現存部では、幅0.4m、深さ0.1m程度である。

第16号溝 (第145図)

EC-88グリッドに位置し、第58号土壌と重複している。検出できたのは北壁のみであり、詳細は不明である。

第147図7~8は第4号井戸跡出土遺物である。7は緑泥片岩製の板碑で、頂部からキークまでの破片である。現存長25.8cm、幅26.3cm、厚さ2.2cmである。

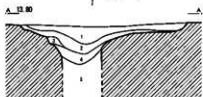
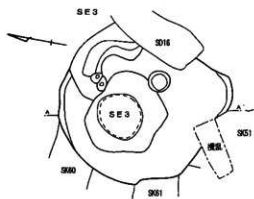
2は内耳鍋で、内面に孔をもつ突起が付されている。口径38.4cm、現存高5.5cmである。

第5号井戸跡 (第146図)

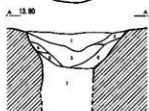
EC-88~89グリッドに位置し、第55号土壌を壊し、北半分が調査区域外に延びている。垂直に掘り込まれ、径は0.9m前後と思われる。

第6号井戸跡 (第146図)

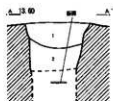
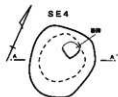
EC-89グリッドに位置し、第4~7・28号溝と近接している。径が1.3~1.5mで、漏斗状に掘り込まれている。



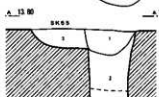
- SE3
- 1 黒褐色土 ローム粒・炭化粒多量
 - 2 黒褐色土 ロームブロック少量
 - 3 黒褐色土 ロームブロック主体
 - 4 黒褐色土 ロームブロック多量
 - 5 黒褐色土 ロームブロック微量



- SE2
- 1 暗褐色土 ロームブロック・炭化粒少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒多量
 - 3 黒褐色土 ロームブロック少量
 - 4 暗褐色土 ロームブロック多量
 - 5 黒褐色土 ロームブロック多量
 - 6 明褐色土 ロームブロック主体
 - 7 暗褐色土 ロームブロック主体

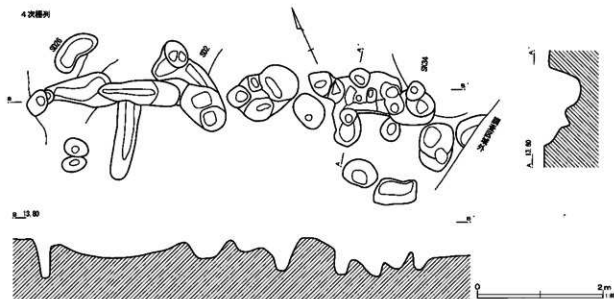


- SE4
- 1 暗褐色土 ローム粒多量
 - 2 暗褐色土 ローム粒多量



- SE5
- 1 暗褐色土 ローム粒少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒多量
- SK55
- 3 暗褐色土 ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒多量

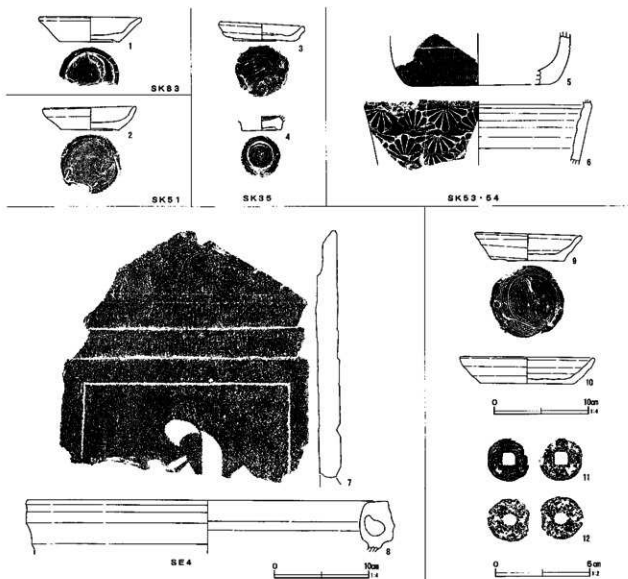
4次層列



A_13 80



第146図 井戸跡・ピット列



第147図 土壌・井戸跡・グリッド出土遺物

(4) ビット列

ED~EE-86グリッドに位置する。ビットが密集しながら北西に延びるもので、径や深さ、配列など

に厳密さは認められない。グリッド内で収束しているようである。

3. グリッド出土遺物

第147図9～12がグリッドから出土した遺物である。

9は厚手のカワラケで、底部は切り離し。口径11.3cm、底径7.6cm、器高2.8cm。

10も厚手のカワラケで、9よりも一回り大形である。口径14.4cm、底径6.0cm、器高2.8cm。

11～12は銭で、風化が著しく判別不能であった。

第18表 相野谷遺跡第4次調査土坑・溝跡計測表

土坑番号	所在グリッド	長さ (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)	主軸方向
S K 83	E F-88	352	96	19	N-87°-E
S K 18	E E-88 E F-88	170	126	16	N-25°-E
S K 20	E E-88	128	92	28	N-8°-E
S K 21	E E-88	296	90	21	N-80°-W
S K 22	E E-88	220	100	27	N-7°-E
S K 23	E E-88	260	110	30	N-15°-W
S K 24	E E-88	170	156	15	N-85°-E
S K 25	E E-86	180	70	54	N-50°-W
S K 26	E E-86	136	104	46	
S K 27	E D-86	156	72	33	N-5°-E
S K 28	E D-86・87	126	110	44	N-15°-E
S K 29	E D-86・87	146	104	43	N-14°-E
S K 30	E D-86・87	80	36	16	N-15°-E
S K 31	E D-87	64	50	26	N-40°-W
S K 32	E D-86・87	160	106	38	N-45°-W
S K 33	E D-87	236	84	16	
S K 34	E D-86 E E-86	216	166	36	N-0°
S K 35	E E-86	36	30	39	N-0°
S K 36	E D-87	116	66	22	
S K 37	E D-87	94	50	15	N-90°-E
S K 38	E D-87	144	136	31	N-55°-W
S K 39	E D-87	74	54	10	N-88°-W
S K 40	E D-87	310	56	34	N-5°-E
S K 41	E D-87	124	94	20	N-0°
S K 42	E D-87	210	110	36	N-88°-W
S K 43	E D-87	96	78	35	N-2°-W
S K 44	E D-87	50	34	16	
S K 45	E D-87	204	88	22	
S K 46	E D-87	160	114	44	N-30°-W
S K 47	E D-87	82	80	16	N-0°
S K 48	E D-87	210	144	50	N-0°
S K 49	E D-87	150	66	27	
S K 50	E C-87	144	130	40	N-64°-E
S K 51	E D-88	164	160	20	
S K 52	E D-88	170	118	13	N-26°-W
S K 53	E C-89	212	124	40	N-72°-W
S K 54	E C-89	196	72	28	N-60°-W
S K 55	E C-88・89	226	128	35	
S K 56	E C-88	126	92	31	N-42°-E
S K 57	E C-88	196	122	16	N-20°-E
S K 58	E C-88	176	106	11	N-22°-W
S K 59	E C-88	72	14	7	N-87°-E
S K 60	E C-87・88	170	94	20	N-80°-W

上乗番号	所在グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)	主軸方向
SK61	EC-87・88 ED-87・88	216	136	11	N-89°E
SK62	EC-88 ED-88	124	86	18	N-50°W
SK63	ED-88	254	170	21	N-90°W
SK64	ED-88	110	104	27	N-0°
SK65	ED-88	200	70	10	N-3°W
SK66	ED-87	100	88	27	N-89°W
SK67	ED-87	122	114	36	N-0°
SK68	ED-87	224	120	16	N-0°
SK69	ED-87	150	86	22	N-10°W
SK70	ED-86	150	116	12	N-34°W
SK71	EE-86	64	60	6	N-33°E
SK72	EE-86	42	26	36	N-33°E
SK73	EE-86	112	96	41	N-0°
SK74	EE-86	140	80	60	N-83°E
SK75	DW-87	128	90	42	N-31°E
SK76	DW-87	104	100	32	
SK77	DW-87	34	26	14	
SK78	DW-87	26	22	15	
SK79	DW-88 EA-88	114	64	47	
SK80	EA-88	92	84	38	N-40°W
SK81	EA-88	44	32	44	
SK82	EA-88	112	96	54	N-37°W
SD 1	EE-88 EF-88	760	102	32	N-37°E
SD 2	EE-85・86 ED-85・86	770	110	15	N-52°E
SD 3	ED-88	524	88	16	N-68°W
SD 4	EC-88	860	84	55	N-13°E
SD 5	EC-89	324	106	52	N-4°E
SD 6	EC-89・90	240	24	6	
SD 7	EB-89 EC-89	630	78	56・29	N-32°W
SD 8	ED-88	180	52	16	N-2°W
SD 9	EA-88	140	74	23	N-86°E
SD 10	DZ-87・88	142	64	14	N-33°E
SD 11	DZ-87	160	74	31・19	N-4°E
SD 12	DZ-87	160	40	20	N-26°E
SD 13	DZ-87	90	64	19	N-83°W
SD 14	DZ-87	116	66	24	N-3°W
SD 15	ED-87・88	160	90	17	N-56°W
SD 16	EC-88	580	40	25・9	N-35°E
SD 17	ED-88	500	90	12	N-68°W
SD 18	ED-88	524	92	16	N-45°W
SD 19	ED-88	540	50	16	N-46°W
SD 20	ED-88	348	88	19	N-48°W
SD 21	ED-88 EE-88	536	144	20	N-58°W
SD 22	ED-88 EE-88	490	66	21	N-54°W
SD 23	EE-88 EF-88	506・330	40	21	N-17°W
SD 24	ED-87	270	40	13	N-88°E
SD 25	ED-86	320	70	12	N-51°E
SD 26	EE-85・86 ED-85・86	210	58	19	N-52°E
SD 27	DZ-87	320	26	58・29	N-50°W
SD 28	EB-89・90 EC-89・90	280	60	35	N-13°E

第19表 相野谷遺跡第4次調査ビット計測表

ビット番号	所在グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)
P1	D W-87	33	28	18
P2		38	(23)	22
P1	E C-87	40	28	28
P2		30	18	25
P3		28	14	36
P4		54	50	31
P5		32	28	40
P6		26	24	34
P7		(60)	32	20
P8		30	(16)	13
P9		32	28	16
P10		30	24	36
P11		24	21	8
P12		32	30	39
P13		24	20	28
P1	E C-88	46	30	22
P2		34	26	15
P3		64	(30)	24
P4		26	22	24
P5		28	28	13
P6		30	28	16
P7		44	34	20
P8		48	34	47
P9		40	38	19
P10		78	48	17
P11		32	26	28
P12		30	28	4
P13		36	34	16
P14		44	36	20
P15		46	34	39
P16		28	22	36
P17		30	29	14
P18		28	26	22
P19		44	36	24
P20		34	28	22
P21		24	22	15
P22		30	18	27
P23		38	33	47
P24		40	34	14
P25		42	32	17
P26		56	36	9
P27		64	40	34
P28		50	44	63
P1	E D-86	34	23	29
P2		38	28	51
P3		(34)	32	14
P4		50	(28)	18
P5		54	38	26
P6		40	26	9
P7		32	18	9
P8		26	20	21
P9		60	44	51
P10		36	23	19
P11		62	44	10

ビット番号	所在グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)
P12	E D-86	56	30	29
P13		26	22	18
P14		90	56	25
P15		44	36	22
P16		38	30	55
P17		38	28	47
P18		44	32	23
P19		38	36	38
P20		44	34	47
P21		64	50	32
P22		64	54	13
P23		44	44	65
P24		62	52	83
P25		38	34	33
P26		38	30	40
P27		34	28	22
P28		28	22	23
P29		32	30	10
P30		26	24	18
P31		42	28	26
P32		38	32	42
P33		38	38	54
P34		34	32	52
P35		32	28	44
P36		26	18	16
P37		44	36	41
P38		26	20	33
P39		50	50	30
P40		26	24	30
P41		38	28	29
P1	E D-87	32	20	17
P2		24	14	18
P3		26	26	13
P4		24	18	20
P5		50	40	36
P6		30	24	25
P7		24	14	21
P8		40	38	29
P9		60	48	15
P10		26	22	14
P11		28	12	10
P12		22	12	8
P13		30	28	26
P14		34	24	18
P15		28	25	38
P16		40	30	78
P17		44	36	59
P18		28	28	21
P19		38	34	44
P20		50	46	42
P21		52	42	14
P22		22	22	51
P23		42	40	14
P24		50	32	35

ビット番号	所在グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)
P25	E D-87	50	44	50
P26		26	20	27
P27		26	22	22
P28		34	28	6
P29		44	34	71
P30		38	36	59
P31		34	14	16
P32		56	38	82
P33		60	51	70
P34		34	32	18
P35		26	24	50
P36		60	28	38
P37		20	18	13
P38		26	16	16
P39		32	18	18
P40		28	22	31
P41		24	16	9
P42		25	24	7
P43		34	26	7
P44		28	28	22
P45		42	33	46
P46		19	17	23
P47		42	(18)	18
P48		42	32	60
P49		30	(12)	36
P50		16	16	9
P51		56	42	25
P52		40	36	55
P53		34	(14)	5
P54		40	(18)	27
P55		46	(20)	53
P56		50	48	28
P57		30	22	28
P58		28	18	18
P59		60	24	60
P60		56	54	44
P61		56	28	47
P62		52	44	62
P63		38	28	26
P64		30	28	12
P65		28	24	16
P66		30	28	36
P67		28	26	23
P68		56	54	73
P69		38	34	25
P70		34	30	31
P71		54	52	54
P72		36	30	27
P73		30	18	17
P74		38	36	18
P75		42	34	16
P76		32	26	17
P77		36	36	43
P78		26	24	18

ビット番号	所在グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)
P79	E D-87	24	22	21
P1	E D-88	42	40	21
P2		34	32	33
P3		54	50	66
P4		48	46	58
P5		44	32	51
P6		22	20	21
P7		62	56	28
P8		28	24	20
P9		90	54	15
P10		30	28	95
P11		30	16	0
P12		54	42	19
P13		32	30	11
P14		18	16	10
P15		46	42	32
P16		22	22	17
P17		30	30	30
P18		24	22	32
P19		22	20	20
P20		40	38	10
P21		50	38	26
P22		46	40	29
P23		26	18	16
P24		36	34	61
P25		24	14	10
P26		42	38	27
P27		26	18	29
P28		36	28	24
P29		40	28	58
P30		38	28	40
P31		24	20	24
P32		20	18	26
P33		42	40	39
P34		60	48	29
P35		60	46	24
P36		42	38	25
P37		55	40	16
P38		26	24	42
P39		44	36	24
P40		50	21	48
P1	E E-86	72	40	15
P2		32	30	22
P3		36	28	31
P4		52	50	47
P5		22	22	10
P6		28	26	31
P7		24	24	16
P8		30	28	38
P9		46	40	18
P10		50	48	24
P11		42	36	15
P12		88	62	23
P13		58	46	42

ビット番号	所在グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)
P14	E F-86	30	28	14
P15		34	28	19
P16		48	34	36
P1	E E-88	18	16	25
P2		30	28	34
P3		66	28	50
P4		30	24	18
P5		50	(24)	6
P6		36	30	28
P7		54	38	45
P8		24	22	13
P9		30	24	45
P10		50	(26)	35
P11		40	38	30
P12		48	46	14
P13		40	38	42
P14		42	30	63

ビット番号	所在グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)
P15	E E-88	40	34	34
P16		40	38	37
P17		50	44	32
P18		40	30	45
P19		60	54	22
P1	E F-88	26	26	23
P2		26	24	49
P3		52	24	57
P4		48	34	34
P5		38	36	30
P6		30	28	28
P7		40	36	45
P8		(50)	40	23
P9		70	44	38
P10		(44)	32	59
P11		(68)	48	80
P12		70	40	80

第20表 相野谷遺跡第4次調査遺構新旧対照表

新遺構番号	旧遺構番号	新遺構番号	旧遺構番号	新遺構番号	旧遺構番号
S K 83	S K 1	S K 52	S K 36	S D 1	S D 1
S K 18	S K 2	S K 53	S K 37	S D 2	S D 2
欠番	S K 3	S K 54	S K 38	S D 3	S D 3
S K 20	S K 4	S K 55	S K 39	S D 4	S D 4
S K 21	S K 5	S K 56	S K 40	S D 5	S D 5
S K 22	S K 6	S K 57	S K 41	S D 6	S D 6
S K 23	S K 7	S K 58	S K 42	S D 7	S D 7
S K 24	S K 8	S K 59	S K 43	S D 8	S D 8
S K 25	S K 9	S K 60	S K 44	S D 15	S D 15
S K 26	S K 10	S K 61	S K 45	S D 16	S D 16
S K 27	S K 11	S K 62	S K 46	S D 17	S D 17
S K 28	S K 12	S K 63	S K 47	S D 18	S D 18
S K 29	S K 13	S K 64	S K 48	S D 19	S D 19
S K 30	S K 14	S K 65	S K 49	S D 20	S D 20
S K 31	S K 15	S K 66	S K 50	S D 21	S D 21
S K 32	S K 16	S K 67	S K 51	S D 22	S D 22
S K 33	S K 17	S K 68	S K 52	S D 23	S D 23
S K 34	S K 18	S K 69	S K 53	S D 24	S D 24
S K 35	S K 19	S K 70	S K 54	S D 25	S D 25
S K 36	S K 20	S K 71	S K 55	S D 26	S D 26
S K 37	S K 21	S K 72	S K 56	S D 27	S D 27
S K 38	S K 22	S K 73	S K 57	S D 28	S D 28
S K 39	S K 23	S K 74	S K 58	S D 14	S D 30
S K 40	S K 24	S K 75	S K 59	S D 13	S D 31
S K 41	S K 25	S K 76	S K 60	S D 12	S D 32
S K 42	S K 26	S K 77	S K 61	S D 11	S D 33
S K 43	S K 27	S K 78	S K 62	S D 10	S D 34
S K 44	S K 28	S K 79	S K 63	S D 9	S D 35
S K 45	S K 29	S K 80	S K 64	SE 2	SE 1
S K 46	S K 30	S K 81	S K 65	SE 3	SE 2
S K 47	S K 31	S K 82	S K 66	SE 4	SE 3
S K 48	S K 32	S K 84	S K 67	SE 5	SE 4
S K 49	S K 33	S K 85	S K 68	SE 6	SE 5
S K 50	S K 34	S K 86	S K 69		
S K 51	S K 35	S K 87	S K 70		

IX 向原遺跡第12次調査

1. 調査の概要

向原遺跡第12次調査は、第1次調査区と第10次調査区に接し、直線的に延びる道路用地が対象となった。調査面積は384㎡である。

発掘調査は、事業地内の埋蔵文化財調査遺跡全体を覆うグリッド設定に従っており、10m方眼の大グリッドを基準としている。呼称は、グリッド杭の北西隅を基準に、北から南にアルファベット表示を、西から東に数字を付しており、向原遺跡第12次調査では、AO～AR-47～52のグリッドを設定した。

2. 検出された遺構と遺物

(1) 土壌

第588号土壌 (第150図)

AQ～AR-51グリッドに位置する。長径1.2m×短径1.0m、深さ0.1mである。遺物が出土しなかったため確定はできないが、覆土の状況から、あるいは縄文時代に関する可能性がある。

第589号土壌 (第150図)

AQ-49グリッドに位置する。長径3.3m×短径

向原遺跡は綾瀬川とその支谷を望む台地上にあり、標高は13m前後で、低地との比高差は約3mである。

調査は、重機によって表土などを除去した後に、人力による遺構確認を行った。その後、遺構精査の進捗にともない、適宜写真撮影・測量などによる記録を作成しながら調査を進めた。

今回の調査で検出された遺構は、土壌3基、溝跡3条、ピット等である。

0.66mの長方形で、深さ0.07mと極めて浅い土壌である。遺物は出していないが、覆土や形態から中世以後と考えられる。

第590号土壌 (第150図)

AP～AQ-49グリッドに位置する。長径2.14×短径0.66m、深さ0.2mの長方形土壌である。覆土や形態から、中世以後と考えられる。

(2) 溝跡

第239号溝跡 (第149図)

調査区南東端のAR-52グリッドに位置し、調査区を横呈する。幅0.7～0.9m、深さ0.45mで壁は垂直に立ち上がる。遺物は出土しなかった。

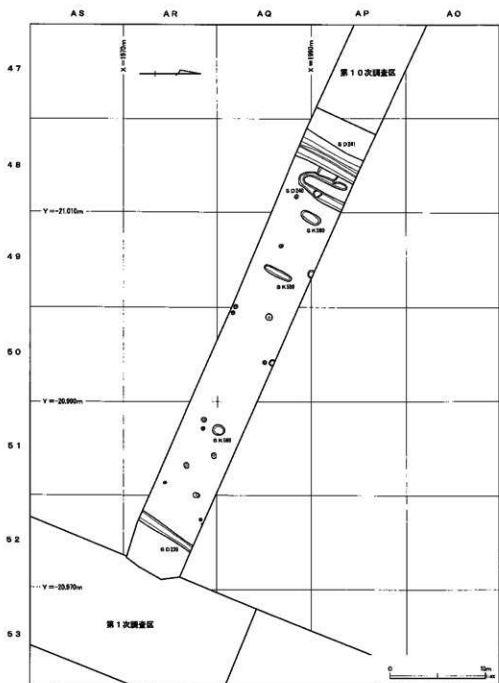
第240号溝跡 (第149図)

AP～AQ-48グリッドに位置する。調査区北東壁から延び、AQ-48グリッドでU字状に曲がる溝である。第241号溝とは、浅い土壌状の掘り込みを介して繋がるが、両者の関係は明らかにし得なかった。幅0.3～0.9m、深さ0.6mである。遺物は出土しなかった。

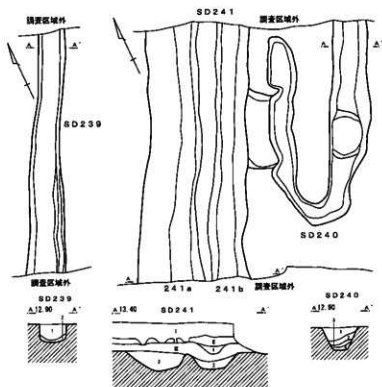
第241号溝跡 (第149図)

AP～AQ-48グリッドに位置する。調査区を横断し、第2号溝と浅い土壌状の掘り込みを介して繋がる二条の溝である。表土下には浅間Aと思われる火山灰を含んだ土層が堆積していた。

第241a号溝は埋め戻されたような覆土で、第241b号溝上面の土層に窪んだ形跡があることから、第241b号が新しいことが判る。遺物は出土しなかった。



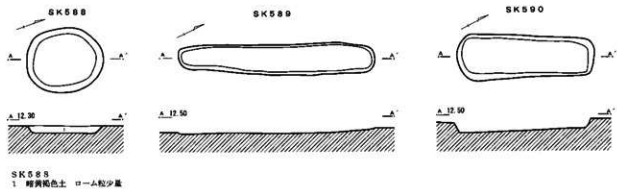
第148図 向原遺跡第12次調査遺構全体図



- SD 239
 1 黒褐色土 ローム小ブロック少量 ローム粒含む
 2 黒褐色土 ロームブロック含む ローム小ブロック多量
- SD 240
 1 黒褐色土 ローム粒少量
 2 黒褐色土 ローム粒少量 泥土粒少量
 3 黒褐色土 ローム粒多量 ロームブロック少量
 4 黒褐色土 ロームブロック多量
- SD 241
 I 表土 掘削作土
 II 緑灰色土 ローム粒少量 白色粒 (炭灰A?) 少量
 III 暗褐色土 ローム粒少量 泥土粒少量
 1 緑灰色土 ローム粒少量 白色粒 (炭灰A?) 含む
 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
 ※ 3層は埋め戻し土か?
 2層の方が3層を切り込み、新旧関係にある。



第149図 溝跡

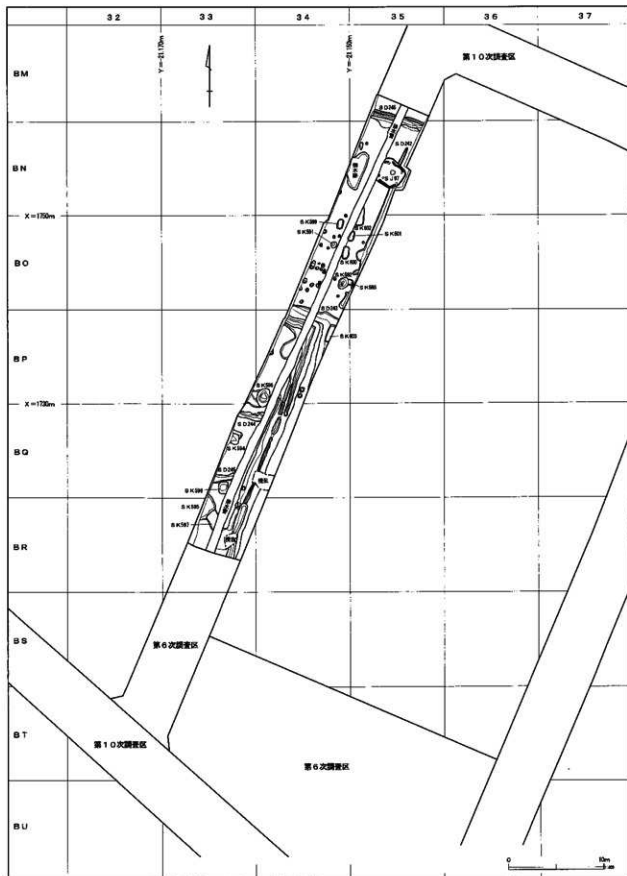


- SK 588
 1 緑褐色土 ローム粒少量



第150図 土壇

X 向原遺跡第13次調査



第151図 向原遺跡第13次調査遺構全体図

1. 調査の概要

向原遺跡第13次調査は、第6次調査区と第10次調査区に接し、直線的に延びる道路用地が対象となった。調査面積は405㎡である。

発掘調査は、事業地内の埋蔵文化財調査遺跡全体を覆うグリッド設定に従っており、10m方眼の大グリッドを基準としている。呼称は、グリッド杭の北西隅を基準に、北から南にアルファベット表示を、西から東に数字を付しており、向原遺跡第13次調査では、BM-BR-33~35のグリッドを設定した。

向原遺跡第13次調査地点は台地上の平坦部にあり、

標高は13.6mである。

調査は、重機によって表土などを除去した後に、人力による遺構確認を行った。その後、遺構精査の進捗にともない、適宜写真撮影・測量などによる記録を作成しながら調査を進めた。

今回の調査で検出された遺構は、古墳時代前期の住居跡1軒、土壇13基、溝跡4条、ピット30本である。

今回の調査地点は台地の奥まった場所にあたるためか、住居跡の分布は希薄であった。

2. 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

第97号住居跡 (第152図)

BN-35グリッドに位置し、北西壁に攪乱を受けていた。一辺が2.85~3.0m程度の隅丸方形の住居跡である。平坦な床面で、確認面からの深さは0.17mである。

壁に接して廻る周溝は、北東壁と南西壁側で長く、南東壁では検出できなかった。北西壁際では短い周溝が間隔を空けて廻るようである。

住居のコーナー寄りで4本の支柱穴が検出された。径は0.3m前後の円形ないしは楕円形で、床面からの深さは0.15~0.2mである。

これは床面の中央部からやや北西壁寄りで見出された。径が0.5m前後の楕円形で、床面からの深さが0.1m程度である。

床面下の精査を行ったところ、貼り床下に掘り方が検出された。壁寄りに一段深く掘り込まれ、北東壁寄りが半島状にやや高まっている。土層観察では、荒掘り後に支柱穴を立て、その後に床面を貼った形跡が窺えた。

住居跡からは、古墳時代前期の土器片が少量出土しただけであったが、以前の調査成果に照らして、この住居跡を古墳時代前期に位置付けた。

(2) 土壇

第591号土壇 (第153図)

BO-34グリッドに位置する。長径0.7m×短径0.58mの楕円形で、深さ0.37mである。遺物は出土しなかった。

の深さは、床面まで0.5m、ピット底面まで0.7mである。

第593号土壇は深さが0.1m程度の浅い楕円形の土壇である。いずれの土壇も遺物は出土しなかった。

第592・593号土壇 (第153図)

BO-34グリッドに位置し、第593号土壇は第592号土壇によって壊されている。第592号土壇は、長径1.32m×短径1.02mの楕円形で、底面に長径0.3m×短径0.45m程度の小ピットをもつ。確認面から

第594号土壇 (第153図)

BQ-33グリッドに位置する。調査区域外に延びるため、全容は不明である。不定形であるが、土層観察では2基が重複していた可能性がある。最深部で確認面から0.89mで、壁際では垂直に近い立ち上

第599号土壙 (第153図)

BO-34グリッドに位置する。長径1.06m×短径0.62m、確認面からの深さは最深度でも0.1m程度の浅い土壙である。遺物は出土しなかった。

第600号土壙 (第153図)

BO-34グリッドに位置する。長径1.36m×短径0.7m、確認面からの深さは0.07mと極めて浅い土壙である。遺物は出土しなかった。

第601号土壙 (第153図)

BO-34-35グリッドに位置する。攪乱を受けているが、長径1.2m×短径0.6m程度の長方形と思われる。確認面からの深さが0.07mの浅い土壙である。

(3) 溝跡

第242号溝 (第154図)

BN-35-BO-34グリッドにかけて検出された。調査区南東壁と並走し、調査区域外に延びている。全長13.7m、幅0.6m、深さ0.07mと極めて浅い溝である。

第243号溝 (第154図)

BO-34-BR-33グリッドにかけて検出された。調査区南東壁と並走し、BO-34グリッドで北西に直角に折れている。南西部は調査区域外に延びており全容は把握できなかった。幅は平均2.5mで屈曲部は幅3.0mと広がっている。確認面からの深さは南東壁際で0.9m、北西壁際が0.3m程度で、北に進むにつれて徐々に浅くなっている。何らかの区画溝と思われるが、性格は判然としない。遺物が出土しなかったため、時期不詳である。

第244号溝 (第154図)

BQ-33-34グリッドにかけて検出された。第596

遺物は出土しなかった。

第602号土壙 (第153図)

BN-BO-35グリッドに位置し、北西壁が攪乱を受けて失われていた。長径2.04m×短径0.9mの長方形土壙と推定される。確認面からの深さが0.07mの浅い土壙である。遺物は出土しなかった。

第603号土壙 (第153図)

BP-34グリッドに位置する。長軸側の東半分が調査区域外にあり、西側は第243号溝と重複しているため、全容は不明。南北径が1.9m、深さ0.2mである。

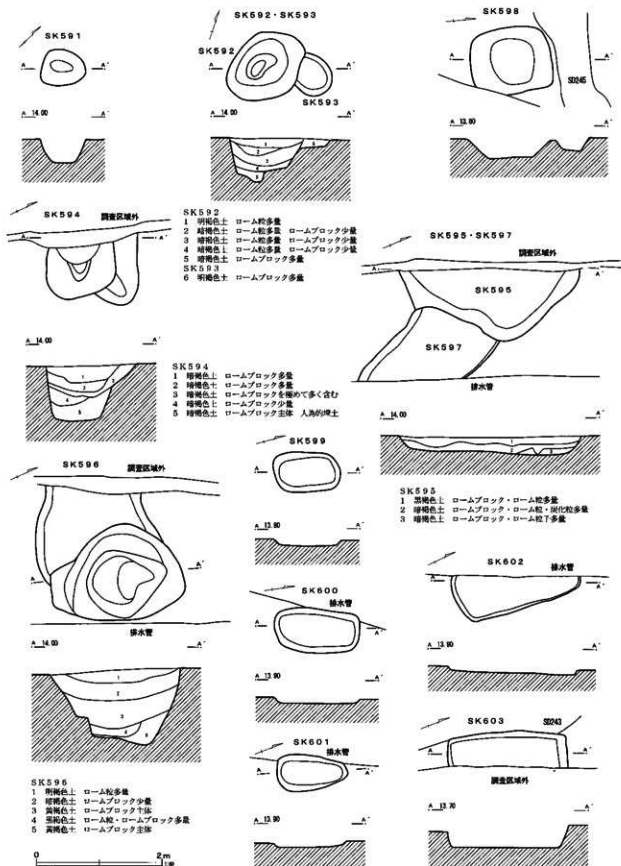
号土壙と重複し、第243号溝に接すると思われる。調査区域外に延び、全容は不明。幅0.7m、深さ0.2mである。遺物は出土しなかった。

第245号溝 (第154図)

BQ-33グリッドで検出された。第244号溝と若干主軸を異にし、第244号溝に接すると思われる。調査区域外に延び、全容は不明。幅0.6m、深さ0.2mである。遺物は出土しなかった。

第246号溝 (第154図)

BM-BN-35グリッドで検出された。第10次調査で検出された第197号溝に隣接し、第243号溝の屈曲部と併せて同一主軸をもつ溝である。幅は1.0-1.1m前後で、段を持ちながら底部に至る。深さは0.2-0.24mとほとんど一定で、第197号溝の約半分の深さであった。遺物は出土しなかったが、中-近世以降の溝であろう。



第153図 土壌

第21表 向原遺跡第12次調査土壌・溝跡計測表

土壌番号	所在グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)	主軸方向
S K 588	A R-51 A Q-51	120	100	10	
S K 589	A Q-49	330	66	7	N-28°-E
S K 590	A Q-49 A P-49	214	66	20	N-28°-E
S D 239	A R-52	640	90	60・54	N-32°-E
S D 240	A O-48 A P-48	1060	110	50・18	N-26°-E
S D 241	A P-48 A Q-48	700	266	43	N-26°-E

第22表 向原遺跡第12次調査遺構新旧対照表

新遺構番号	旧遺構番号	新遺構番号	旧遺構番号	新遺構番号	旧遺構番号
S K 588	S K 1	S K 590	S K 3	S D 240	S D 2
S K 589	S K 2	S D 239	S D 1	S D 241	S D 3

第23表 向原遺跡第13次調査土壌・溝跡計測表

土壌番号	所在グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)	主軸方向
S K 591	B O-34	70	58	37	N-45°-E
S K 592	B O-34	132	102	60	N-25°-E
S K 593	B O-34・35	58	56	10	N-73°-W
S K 594	B Q-33	140	78	88.5	N-70°-W
S K 595	B Q-33 B R-33	296	126	22	N-60°-E
S K 596	B P-34 B Q-34	206	158	120	N-29°-W
S K 597	B R-33	130	114	10	
S K 598	B Q-33 B R-33	126	106	35.8	N-90°-E
S K 599	B O-34	106	62	8	N-9°-E
S K 600	B O-34	136	70	7	N-10°-E
S K 601	B O-34・35	116	54	8	N-23°-E
S K 602	B N-35 B O-35	204	64	7	N-90°-E
S K 603	B P-34	190	56	20	N-18°-E
S D 242	B N-35 B O-34・35	1370	56	7	N-17°-W
S D 243	BO-34 BP-34 BQ-33・34 BR-33	3098	250	50・34	N-68°-W・N-23°-W
S D 244	B Q-33・34	250	68	20	N-12°-W
S D 245	B Q-33	192	60	20	N-6°-E

第24表 向原遺跡第13次調査遺構新旧対照表

新遺構番号	旧遺構番号	新遺構番号	旧遺構番号	新遺構番号	旧遺構番号
S J 97	S J 1	S K 596	S K 6	S K 602	S K 12
S K 591	S K 1	S K 597	S K 7	S K 603	S K 13
S K 592	S K 2	S K 598	S K 8	S D 242	S D 1
S K 593	S K 3	S K 599	S K 9	S D 243	S D 2
S K 594	S K 4	S K 600	S K 10	S D 244	S D 3
S K 595	S K 5	S K 601	S K 11	S D 245	S D 4

XI 北遺跡第2次調査

XI 北遺跡第2次調査

1. 調査の概要

北遺跡第2次調査は、上越新幹線建設に伴い実施された調査区の西側にある。調査地点は南北に伸び、綾瀬川に注ぐ支谷に面した台地の東側縁辺部にあたる。調査面積は805㎡である。

発掘調査は、10m方眼の大グリッドを基準とし、グリッド杭の北西隅を基準に、北から南にアルファベット表示でAからJ列を、西から東に数字で1から2のグリッドを設定した。

北遺跡第2次調査地点は、標高が12~13mで、西

に向かって緩やかに傾斜している。調査は、重機によって表土などを除去した後に、人力による遺構確認を行った。その後、遺構精査の進捗にともない、適宜写真撮影・測量などによる記録を作成しながら調査を進めた。

今回の調査で検出された遺構は、土壌1基、溝跡5条、ピット4基である。縄文時代の遺構は検出されなかったことから、北遺跡の縄文時代集落の西限が確認できたことになる。

2. 検出された遺構

(1) 土壌

第136号土壌 (第156図)

検出された土壌は1基のみであった。C-2グリッドに位置し、長径1.4m×短径1.06mで、深さ0.13

mである。覆土や形態から見て、中世以降の所産であろう。

(2) 溝 (第156図)

第1号溝

C-2~H-2グリッドにかけて検出された。調査区の東壁に沿って南北に走り、D-2グリッドで第2号溝と接している。H-1~2グリッドで再び第2号溝と接し、南側では明確な立ち上がりが見出せない。主軸方向はN-2°-W、幅0.46m、深さ0.4mである。遺物は出土しなかった。

号溝に並行し、北側が調査区域外に伸び、南側はF-2グリッドで収束している。主軸方向はN-2°-W、幅1.2m、深さ0.3mである。遺物は出土しなかった。

第2号溝

D-2グリッドで第1号溝から分かれ、南にむかって第1号溝と並行している。第1号溝よりも幅広いが、補修のため、部分的に掘り返されたようである。主軸方向はN-2°-W、幅1.0m前後、深さ0.35mである。

第4号溝

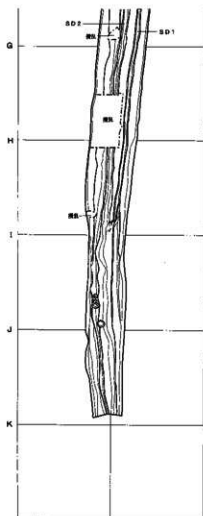
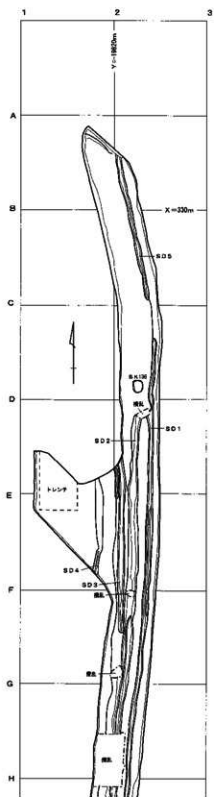
北西側に伸びるD~F-1グリッドで検出した。調査区域に限定され、範囲などは不明。他の溝と並行すると思われる。主軸方向はN-2°-W、幅0.46m、深さ0.27mである。遺物は出土しなかった。

第5号溝

A~C-2グリッドで検出した。調査区に並行する溝で、北側は調査区域外に伸びている。主軸方向はN-5°-E、幅0.64m、極めて浅い溝である。遺物は出土しなかった。

第3号溝

D~F-1~2グリッドで検出された。第1~2



第155図 北遺跡第2次調査遺構全体図

第25表 北遺跡第2次調査土壌・溝跡計測表

上層番号	所在グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)	主軸方向
SK136	C-2	140	106	13	N4°-W
SD1	D・E・F・G・H-2	5400	46	43	N2°-W
SD2	D・E・F・G-2 H・I・J-1	6100	104	35	N2°-W
SD3	D・E・F-1	1800	120	26	N2°-W
SD4	D・E-1	1000	46	27	N2°-W
SD5	A・B・C-2	1550	64	6	N2°-W

Ⅺ 調査の成果と課題

1. 縄文時代早期条痕文期の住居跡について

戸崎前遺跡や薬師堂根遺跡の数回にわたる発掘調査で、縄文時代早期条痕文期の住居跡が8軒発見された。縄文時代早期の住居跡は大変貴重な発見であるとともに、その検出が大変難しく、遺構の構築もしっかりしていないものが多いことを特徴とする。特に、住居跡認定としての必要条件である炉の存在は不明瞭なものが多く、その他遺構のプランは明確にし難いことが一般的である。

そのような条件の中で、今回の報告で5件、前回の1998年の報告(水口1998)で3件が住居跡として認定された。個々の住居跡を再検討し(第157図)、県内における類例(第158・159図)との比較検討を行い、発見が特筆される大型住居跡については、他県の類例(第160・161図)との比較検討を行うこととする。

(1) 戸崎前遺跡・薬師堂根遺跡の早期住居跡

戸崎前第96号住居跡(2004)

プランは不明瞭であるが、隅丸方形もしくは楕円形を呈するようである。調査範囲内では長径4.6m、短径3.5mを測り、掘り込みは浅い。柱穴は各コーナー近くに存在するものと思われ、中央部やや東寄りに炉が位置する。遺物は炉内より子母口式から野島式の前段階にかけての土器が出土しており、遺構の構築時期もその時期に比定される。

戸崎前第113号住居跡(2004)

長径が現存で12.33m、短径3.96mを測る大型住居跡である。南側半分は柱穴と思われるピットが集中し、明確ではないが桁行側に並列する対ピット構造を想定できる。北側は中央部やや西側に列状のピットが並ぶ。東側のピット列が未検出の場合も想定されるが、中央部長軸上列状ピットの承認も想定される。また、ピットの集中する南半分が住居跡で、北側が掘り過ぎの可能性もある。炉が検出されないこ

とも否定的な要因となるが、遺物が遺構内全体に分布することやピットの配列等から、大型住居跡のロングハウスとして把握した。長楕円形のプランが特徴的で、遺物は野島式終末期の土器群が出土している。

戸崎前第97号住居跡(2004)

長軸の西側一辺が調査区外にあたるが、長方形を呈する大型住居跡で、長軸10.2m、短径5.02mを測る。壁柱穴が一周し、確定的ではないが桁行方向に並列する6本の柱穴が想定される。炉は確認されていない。長軸の南端では0.2m程のしっかりとした掘り込みを持ち、遺物も全体から出土するため大型住居跡として把握した。ロングハウスの影響を受けた、ビッグハウスという様相である。野島式最新段階から瀬島台式までの土器群を含んでおり、本住居は瀬島台式期の所産と推定される。

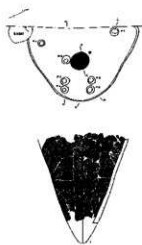
薬師堂根第45号住居跡(2004)

長方形住居跡の2コーナーが調査区外にあたるが、全体形を知りうるもので、長径7.25m、短径6.2mを測るやや大形の住居跡である。炉は中央部の南壁側寄りに位置し、壁柱穴は一周する。桁行側に並列する6本主柱構造と思われる、瀬島台式土器が出土する。本住居も瀬島台式期の所産と推定される。

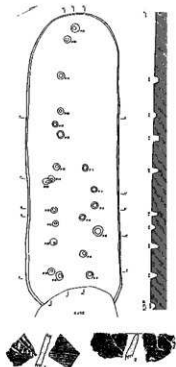
薬師堂根第47号住居跡(2004)

住居跡の約半分が調査区外にあたり、壁がどの程度伸びるかは不明であるが、長方形のプランを呈するもので、調査範囲内で長径7.5mを測る。第45号住居跡と同様の大形の住居と思われるが、両者は約60m離れている。炉は検出されず、壁柱穴はまばらに廻る。壁内側に主柱穴らしきものが存在するが、間隔が開いている。遺物は条痕文のみ施文するもので、時期不詳であるが、その特徴からおよそ瀬島台式に比定されよう。

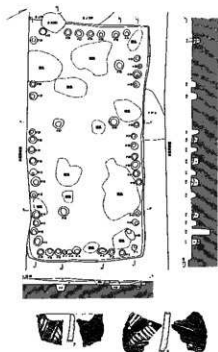
戸崎前遺跡 第96号住



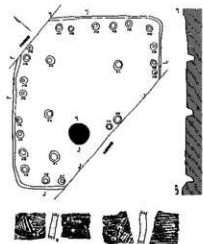
戸崎前遺跡 第113号住



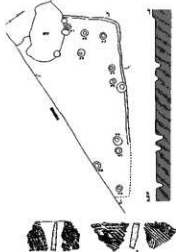
戸崎前遺跡 第97号住



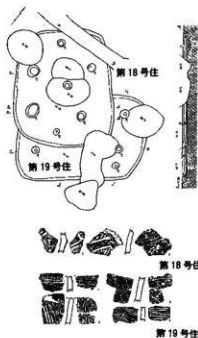
葉師堂根遺跡 第45号住



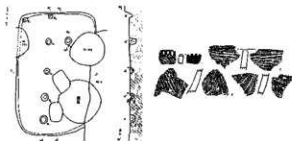
葉師堂根遺跡 第47号住



葉師堂根遺跡 第18・19号住 (1998)



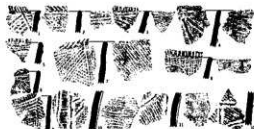
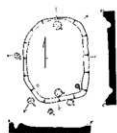
葉師堂根遺跡 第20号住 (1998)



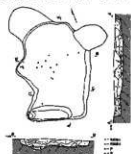
第157図 戸崎前遺跡・葉師堂根遺跡の早期条痕文期の住居跡

S=1/160

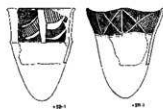
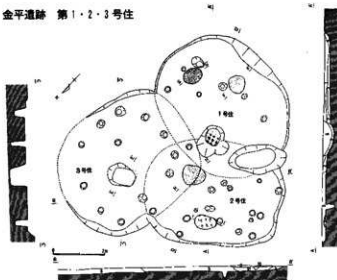
諏訪山遺跡 第15号住



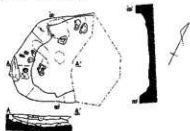
明花向遺跡A区 第1号竪穴



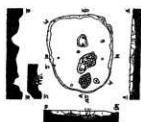
金平遺跡 第1・2・3号住



天沼遺跡 第1号住



殿山遺跡 第4号住



第1号住



第2号住

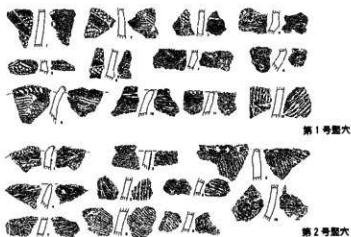
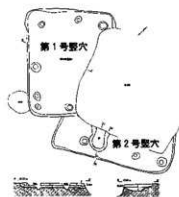


第3号住

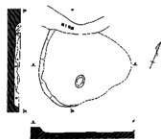
Scale bar: 1/100

第158図 埼玉県内の早期弥生期の住居跡 (1)

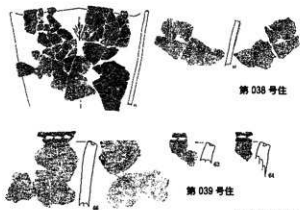
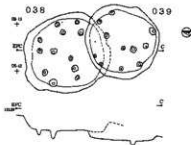
稲荷台遺跡 第1・2号竪穴



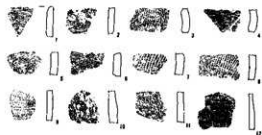
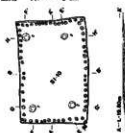
呼吉遺跡 第2号住



新井花和田遺跡 第38・39号住



今城遺跡 第10号住



円形住居と長方形住居の系列

第159図 埼玉県内の早期弥文期の住居跡 (2)

S=1/160

業師堂根第18・19号住居跡（1998）

1998年度に報告された住居跡で、2軒が重複している。切り合いから第18号住居跡が新しく、長径4.9m、短径4.1mの隅丸長方形を呈し、第19号住居跡は長軸が直交し、長径5.5m、短径3.6mの隅丸長方形を呈する。両住居跡とも炉は不明で、壁柱穴は確認されない。第18号住居跡は4本柱に長軸上の2本柱を加えた6本上柱と思われ、第19号住居跡は主柱が不明である。遺物は第18号住居跡からは野島式最新段階の土器群が、第19号住居跡からはやや古相を帯びた土器群が出土していることから、重複関係と矛盾しない様相を呈する。

業師堂根第20号住居跡（1998）

ほぼ長方形の住居跡で、長径5.14m、短径3.3mを測り、桁行側に列状のピットが並び、並列してピットが存在した可能性が高い。時期を判別する遺物は出土していないが、条痕文の特徴や、口唇上の刻みの特徴から、野島式終末から鶴ガ島台式に比定される土器群が出土している。

戸崎前遺跡と業師堂根遺跡は綾瀬川方向の東に張り出す谷を挟んで並列する舌状台地上に位置し、約350mの間隔を置いて対峙する遺跡群である。両遺跡とも、野島式終末から鶴ガ島台式期の住居跡が発見されていることから、同時期並存の可能性が高い遺跡群である。時期の異なる移動集落であるとしても、大型住居を構築する集落と、周辺地域の遺跡群とのセトルメントの把握は、移動を専らとする集団としてのイメージの強い条痕文期の居住様式の解明に欠かせないものである。本遺跡群がその一端を垣間見せている可能性もあることから、大胆な推測をも導入して、その可能性を探ってみたい。

上記において、これまでに発見された8軒の住居跡の特徴を検討してきた。少ない例ではあるが、等地域における幾つの特徴を、以下の様に指摘することが可能である。

①子母口式から野島式の古段階にかけての住居は、楕円形かもしくは隅丸長方形の小形を呈し、ピットが

散在する。

②野島式の新段階で長楕円形のプランで並列ピット構造を持つ大型住居のロングハウスが存在する。

③野島式終末から鶴ガ島台式にかけて、住居のプランが長方形化し、壁柱穴が廻るようになる。

④鶴ガ島台式の段階で、やや人形の住居と構造的に類似し、ロングハウスとの中間的な様相を持つ大型住居（ビッグハウス）が存在する。

⑤野島式の終末から鶴ガ島台式にかけての段階で、住居の検出率が飛躍的に増加する。

さらに要約すると、古い住居は楕円形で、新しくなるに連れて長方形になる傾向を指摘でき、当地域で大型住居が出現する段階では、すでに並列ピット構造のロングハウスとして出現している。

（2）県内の条痕文期の住居跡との比較

県内で検出されている条痕文期の住居跡と、これ等の特徴を比較検討してみる。大型住居跡に関しては戸崎前遺跡が初見であるため、後に他県との比較において触れる。

まず、県内では子母口式期の良好な住居跡は検出されていない。そのため代表例として、第159図下段にその時期の住居とされる千葉県市原市新井花和田遺跡（牧野2001）の第38・39号住居跡、茨城県守谷町今城遺跡（和田1981）第10号住居跡を挙げた。両遺跡とも子母口式期の良好な集落で、同形態の住居が多く検出されている。新井花和田遺跡は小形円形もしくは楕円形住居の典型例で、同一集落内に方形の住居跡は存在しない。また、今城遺跡は長方形住居の典型例で、同一集落内に円形もしくは楕円形の住居跡は存在しない。両形態の住居跡は子母口式の典型例とされているものであるが、両者が存在するとすれば形態の差異は系統差と考えられる。また、子母口式期の今城遺跡の長方形住居が鶴ガ島台式期の戸崎前遺跡第45号住居跡と近似した様相であることも考慮しながら、県内の類似例との検討を行う。

戸崎前遺跡第96号住居跡が、新井花和田遺跡の円形住居跡と類似することは言を待たない。県内で野

野島式期の集落遺跡として著名な岩槻市諏訪山遺跡(横川1971)では、およそ野島式中段階以降の住居跡が検出されており、そのプランは楕円形を主体として不整形が多い。第158図に例示した住居跡は単独で整然とし、楕円形のプランを特徴とする。ピットも散在しているが、長軸上に棟持状ピットが存在する。時期は野島式中段階以降に比定されよう。

また、野島式中段階の土器群を出土した浦和市明花向遺跡A区第1号竪穴(金子1984)は、住居跡としての付属施設がなく、不整形の楕円とも長方形とも判断のつかぬ形態である。

嵐山町金平遺跡(植木1980)では野島式終末期の住居跡3軒が、重複した状態で検出された。プランは楕円形を呈し、炉穴と重複するが、明らかな地床炉を持ち、土器を多量に出土した。しかし、3軒の時期差は、出土土器からでは判断されない。

上尾市天沼遺跡(赤石1984)は不整形の竪穴状の住居跡が検出されており、野島式最終末の土器が出土している。住居跡であるとするば、楕円形のプランが想定される。

鶴ガ島台式期では上尾市観山遺跡(山崎1991)で長方形の住居跡が検出されている。また、同市内の稲荷台遺跡(大塚2000)では方形で壁柱穴の廻る住居跡が、2軒重複して検出されている。また、同市畔古遺跡(小宮山1994)でも鶴ガ島台式期の住居跡が検出されているが、全体形は不明である。

以上、少ない類例からの検討ではあるが、野島式から鶴ガ島台式にかけての時期に、住居跡数が飛躍的に増加し、戸崎前遺跡での検討と同様に、住居跡の形態が方形化していく様相が窺われた。また、子母口式期の住居跡もしくは野島式占段階の住居跡は検出例に乏しく検討に値しないが、広範囲に見渡しても今城遺跡に見られる長方形で壁柱穴の廻る例は例外的と言わざるを得ない。ここでは、将来的に長方形住居跡が検出されることを期しながらも、今城遺跡の住居跡形態に疑義を呈して置きたい。しかし、出土土器が子母口式であることに対しては、異論が

ないところである。

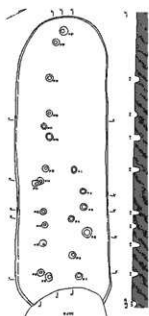
(3) 野島式期的大型住居跡について

戸崎前遺跡からは、野島式期と鶴ガ島台式期の2軒の大型住居跡が検出された。この大型住居は、一般的な住居の時間的な構造変化と同様に、楕円形から長方形へ、また、壁柱穴を持つ構造へと変遷していることが認められる。しかし、基本的にはロングハウスとしての並列柱穴構造を踏襲するもので、鶴ガ島台式期にビッグハウスのな折衷形態が出現するものと認識された。県内では該期的大型住居跡の検出例は無く、検出例の多い房総方面との比較検討が必要となる。条痕文期的大型住居については高橋誠氏が城山ノ作遺跡の報告(高橋2002)で、類例を集成し、詳細な検討を加えている。ここでは集成された類例を基に、戸崎前遺跡例との比較を行い、特に野島式期的大型住居について検討する。

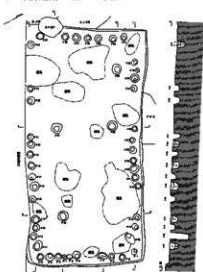
高橋氏によれば、長軸8m以上の住居跡を大型住居と認定した場合、千葉県内において15遺跡25棟の大型住居跡が確認されているという。内、沈線文期の2棟を除くと、23棟が条痕文期となる。また、15遺跡の中で報告されているのは7遺跡のみであり、全体を検討するには時期尚早の感があるものの、出土遺物などから野島式期に認定される4棟(第160図)について比較検討したい。

子母口式段階の大型住居の実態が不明瞭である以上、推測に頼らざるを得ないが、野島式でも古段階の土器群を出土する城山ノ作遺跡第2号住居跡(高橋2002)が、条痕文期の最も古い段階の様相を示しているものと判断される。この住居の柱穴配置は不規則ではあるが、ほぼ中央部の短軸上に並列する対ピットが特徴的である。その他、桁側側に並列するピットを探し当てることも可能であるが、およそ中央部長軸上にピットが散在している傾向を指摘できよう。この中央部短軸上対ピットは大綱山田台遺跡№4第206号住居跡(青木1994)に見られ、さらに同住居には長軸上に棟持状の対ピットが存在する。従って、城山ノ作遺跡第2号住居跡と大綱山田台遺

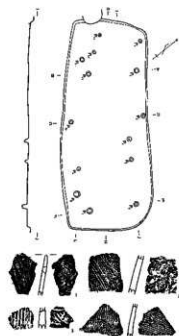
戸崎前遺跡 第113号住



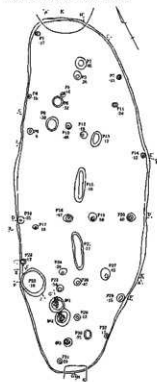
戸崎前遺跡 第97号住



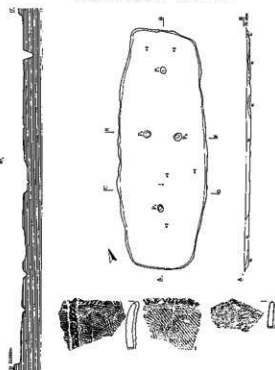
駒込遺跡 第10号住



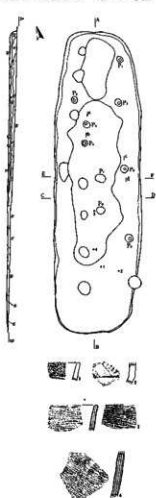
城山ノ作遺跡 第2号住



大網山田台遺跡No.4 第206号住



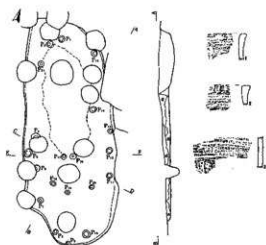
大網山田台遺跡No.2 第020号住



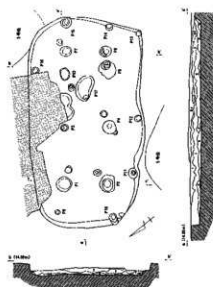
S = 1/160

第160図 早期条痕文系野鳥式期の大型住居跡

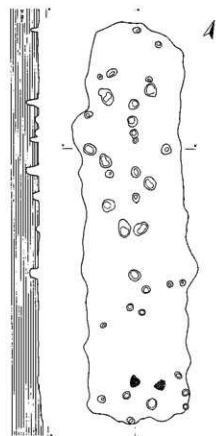
大橋山田台遺跡No3 第251号住



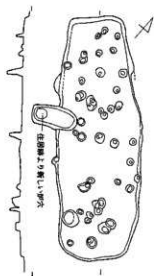
飛ノ台貝塚4次 第4号住



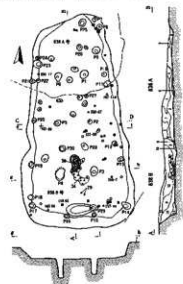
石橋遺跡 第017号住



奥男台遺跡 第31号住



草刈六之台遺跡 第838A・B号住



S = 1/160

第161図 早期各時期の大型住居跡

跡No 4第206号住居跡は、基本的に類似する上柱構造を持つものと思われる。

その観点から、戸崎前遺跡第113号住居跡を見ると、中央部短軸上に並列する対ピットが存在している。また、北側部分に長軸上列状ピットと、棟持柱状ピットも存在する。さらに、先にも分析したように、南側部分では明確ではないが並列する対ピット構造も想定できることから、戸崎前遺跡第113号住居跡は、城山ノ作遺跡第2号住居跡や大綱山田台遺跡No 4第206号住居跡と共通する構造と、桁行側並列対ピット構造とを持ち合わせている折衷的な構造の住居であると理解することが可能である。

さらに、その推論を補強するために、住居の時間的な推移を検討すると、城山ノ作遺跡大2号住が野鳥式の古段階であることは明らかであるが、大綱山田台遺跡No 4第206号住居跡出土土器の時間的位置付けが難しい。刻みを施す隆帯が垂下するのみの文様構成は時期比定が難しく、ここでは野鳥式の後半期に位置付けられるものと仮定したい。となれば、城山ノ作遺跡第2号住居跡→大綱山田台遺跡No 4第206号住居跡→戸崎前遺跡第113号住居へという時時間的な流れとともに、住居構造も中央短軸上対ピット及び長軸上列状ピット構造の成立→確立→桁行側並列対ピット構造への変化という時間的な変遷と符合することとなる。そして、野鳥式から鶴ガ島台式への変遷期に、住居構造が桁行側並列対ピット構造のいわゆるロングハウスが確立する様相を指摘できる。戸崎前遺跡第113号住居跡はまさにその渦中の様相として捉えられるのであるが、桁行側並列対ピット構造のロングハウスが内在的変化として先の変遷上に出現してきたのか、外来的な要素として受け入れられて成立したかは明確にし得ない。戸崎前遺跡第97号住居跡のように一般的な住居跡を大きくしたような大型住居が存在することも、その両者の可能性を示唆している。

さらに、条痕文期より古い時期の沈線文期では、高橋氏も注目した青森県中野平遺跡第105号住居跡

(三浦1990)が特徴的な様相を示している。本住居跡は長径12.5m程の長方形に近い長楕円形を呈し、中央部長軸上に列状にピットが並ぶ構造である。この長軸上の列状ピット配置が相型となり、城山ノ作遺跡第2号住居跡と大綱山田台遺跡No 4第206号住居跡の長軸上列状ピットへと系譜的に継承され、さらに戸崎前遺跡第113号住居跡へと残存的に継承されるのであれば、時間的な流れと系譜関係は符号することになるのである。

他の野鳥式期とされた大型住居跡である駒込遺跡第10号住居跡(村山1986)は、時期も判定しきれず、方形プランで柱穴も壁柱穴状を呈する。総合的に判断すれば、野鳥式の新段階もしくは鶴ガ島台式に近い位置付けを想定できよう。大綱山田台遺跡No 2第020号住居跡は鶴ガ島台式に近い土器が出土しており、桁行側並列対ピット状構造が推定される。

さらに、野鳥式期以外で条痕文期とされているもの(第161図)を検討すると、大綱山田台遺跡No 3第251号住居跡が、最古段階の沈線文期に比定されている。出土遺物が少なく時期比定が難しいが、プランが長楕円形で、柱穴配置が長軸上の列状とも桁行側並列対ピットとも推定され、不確定要素が多い。また、草毛Ⅱ遺跡(越川1991)では、未報告であるが田戸上層期の大型住居跡が検出されており、プランが長方形で、長軸上列状ピット構造であると紹介されている。東北地方沈線文期の柱穴配置構造と類似するものであるとともに、子母口式期における長方形住居の存在の可能性を期している所以ともなっている住居である。石揚遺跡第017号住居跡(安井1994)は、報告書では前期に位置付けられており、出土した条痕文土器は流れ込みと解釈されている。条痕文期の大型住居であるとしても、出土土器からではその時期を特定できない。柱穴配置は中央短軸上対ピット及び長軸上列状ピットの構造と看做すことも可能であり、城山ノ作遺跡第2号住居跡に類似する。プランが長楕円形を呈することから、野鳥式期の前半段階の所産であるとなれば、好都合の資料

である。奥房台遺跡第31号住居跡（築瀬2001）は概報段階で詳細は不明であるが、長軸上列状ピットと左右に振り分けられるピットが存在し、中央の対ピットは不明瞭であるが、類似した構造と捉えられる。以上が、構造上野島式期に位置付けられるであろうと推定される大型住居である。

一方、房総方面で明確な鶴ガ島台式期の大型住居は不明瞭であるが、茅山下層式期では飛ノ台貝塚4次第4号住居跡（中村1999）、茅山上層式期では草刈六之台遺跡第838A・B号住居跡（白井1994）が挙げられている。飛ノ台貝塚4次第4号住居跡は桁行側並列対ピット構造が確立しており、プランも長方形状である。草刈六之台遺跡第838A・B号住居は報告書では2軒の重複したものとして報告されており、大型住居として認定されるかどうか疑わしい。

さらに、これ等の大型住居が何棟かで集落を構成している遺跡に、台阿らく遺跡（越川1991）と諏訪台遺跡（浅利1988）がある。台阿らく遺跡では、長軸上列状ピットを有する長楕円形の大型住居3棟が検出されており、2棟が同軸方向に並列し、1棟が軸方向を90度違えて構築されていた。未報告であり、詳細は不明であるが、住居の構造上から判断して野島式の前半段階の所産であることが想定される。

また、諏訪台遺跡では長台形状の大型住居が8棟検出されており、高橋氏は桁行側並列対ピット構造を推定している。やはり、長軸方向を異にする住居が存在するため、何時期かに亘る継続集落と考えられる。未報告のため詳細は不明であるが、氏が推定するように住居跡のピット配列が明確な桁行側並列対ピット構造であるとすれば、今まで述べてきた理由から、鶴ガ島台式以降に比定される大型住居の集落であることが推測されるのである。

戸崎前遺跡の大型住居を視点に、房総方面の大型住居との関連を検討してきた。戸崎前遺跡は下総台地に隣接している大宮台地に位置するからこそ、条痕文期の大型住居の分布圏に含まれ、大型住居の構造も類似するものと思われる。今後、大宮台地にお

いてさらなる大型住居の検出が期待されるのである。

縄文早期における大型住居跡は、炉など明確な住居付属施設を持つものを除けば、不明瞭な輪郭を調査し、結果的に大型住居跡になったものが存在する可能性も否定できないであろう。実際、戸崎前遺跡の大型住居跡もその例に漏れず、積極的に大型住居として認定される根拠に乏しいものである。それを前提とした上で、検討を加えてきた訳であるが、早期の大型住居の研究は、その真偽の検討も重要な課題であるが、まずは、類例の希少性から、現在様々な可能性を検討する段階にあるものと思われる。ましてや、上層構造やその機能および意味についてはさらに踏み込んだ解釈を必要とするため、軽々には検討不可能である。しかし、様々な可能性が提示され、類例の増加とともに、可能性が絞り込まれて、実態の把握へと繋がるのが望ましいと考える。その意味では、戸崎前遺跡の大型住居と認定した遺構は、多くの情報を提示している。また、それをどの様に読み込むかは、分析者によって異なるものであり、また別の見方も存在するはずである。狭い見識から推論を重ねて検討を加えてきたが、可能性の一端をも掘り起こすことができたのであれば、報告者としての責務を果たせたことになろう。

紙数の制限もあり、土器群の変革期との関係については触れ得なかった。高橋氏が指摘するように、条痕文系土器群の成立期、特に野島式の成立期と鶴ガ島台式への変遷期に大型住居が確立、変容する点について大きな意義を認めて置きたい。野島式の成立には各地域の系統要素が糾合されていることを論じた（金子2000）が、その基幹の一つに東北地方沈線文系土器群に脈々と受け継がれてきた要素を指摘した。それらの関係性からみても、住居構造への東北地方からの系統性も十分想定される場所である。また、住居構造にも様々な系統性が守守されるものと推測されるが、それらについては稿を改めて論じたいと考えている。

2. 原遺跡の集落変遷

原遺跡は今回報告分を含め、既に7次にわたる発掘調査が実施されている。未調査部分を多く残すものの、おぼろげながら中期集落の様相が明らかにされつつある。ここでは、今までの調査成果を総合し、集落変遷を辿ってみることとする。

第157図は、原遺跡の遺構群を時期別に区分したものである。時期決定に当たっては、概ね1997年度に報告された土器編年に準拠した。

原遺跡の南側は、南側に綾瀬川に注ぐ支谷に面した台地上に形成されている。遺跡内では谷地形が検出されており、これが各時期の遺構配列に意味をもっていた可能性がある。

第Ⅰ段階とした住居跡は、阿玉台Ⅱ式と並行し、原遺跡における集落形成の開始期にあたる。第22号住居跡が該当し、第97号住居跡もこの時期の可能性がある。谷の西側に位置し、集落全体でみるとほぼ中央部分に相当する。原遺跡の対岸にある北遺跡でも、この時期の土壌が検出されている点は、集落形成段階において既に有機的な関連性があることを示していると考えられる。

第Ⅱ段階は井戸尻Ⅰ式から井戸尻Ⅱ式に相当する時期に当たる。このなかで、井戸尻Ⅰ式期の住居跡は、第1次調査第3号住居跡、第7号住居跡、及び第99号住居跡で、井戸尻Ⅱ式段階が、第13号住居跡下層、第96号住居跡で、第99号住居跡覆上出土土器の大半がこの段階のものである。

第1次第3号住居跡は阿玉台Ⅲ式を出土しており隆帯上の整形手法などにか次期に通ずる手法が認められる。第7号住居跡の炉体土器もこの時期と判断した。

井戸尻Ⅰ式からⅡ式にかけての住居跡は、谷地形の西側に展開しており、第1次調査の第3号住居跡が南端にあたる。おそらく、ここで形成された住居域の配置が、後続する第Ⅲ段階、第Ⅴ段階、第Ⅵ段階の居住域を規制していたと考えることもできるだ

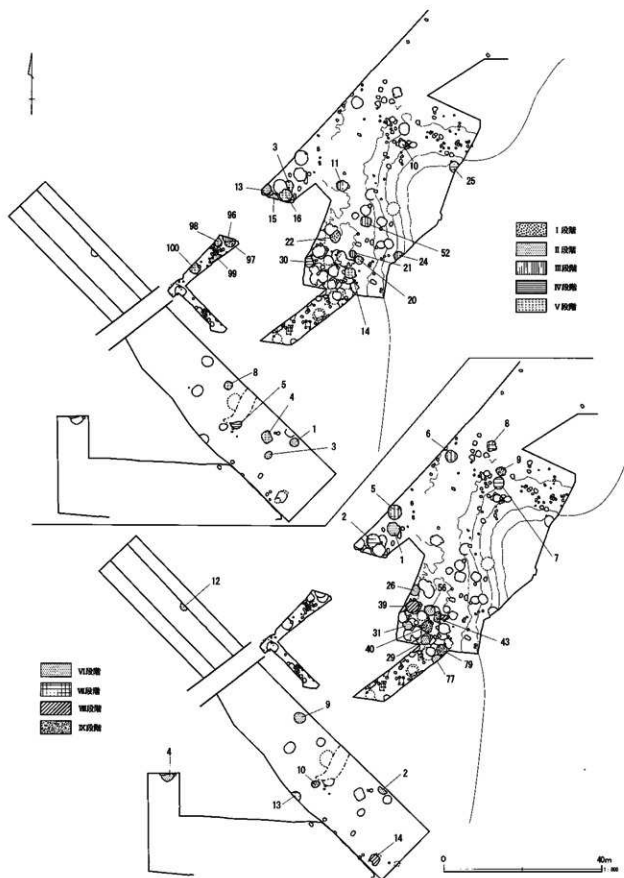
ろう。

第13号住居跡は、掘り込みが深く、覆土内の資料が間層を挟んで新旧2時期に区分されている。下層がこの段階で、上層資料は第Ⅳ段階である。第7次調査資料は大半がこの段階の資料で、阿玉台Ⅳ式と並行し、中峠式や三原田式、焼町土器の出現期にあたる段階と考えられる。

第Ⅲ段階は、加曾利E式の出現期にあたる段階である。関東西部では多喜窪タイプが顕現すると同時に、東関東から北関東方面では中峠式、北関東地域の三原田式、焼町タイプなどのやや新しい土器群が視野に入る段階である。基準とした加曾利E式の最も古い土器は、勝坂的色彩を色濃く残す土器群である。原遺跡では未調査区域を残すために、あくまでも想定にすぎないが、この時期の住居配列も原則として第Ⅱ段階の範囲を超えることはないようである。第Ⅵ次調査では、この時期の土壌と掘立柱建物跡も検出されていることからみても、同様の建物跡は、住居域と同じくする第Ⅱ段階以降・第Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ段階のものが存在する可能性が考えられる。土壌や掘立柱建物跡は、恐らく住居のやや内側に形成されたのであろう。第99号住居跡は、炉体土器が第Ⅱ段階で、覆土中の資料がこの段階に比定される住居跡である。

対岸の北遺跡第50号住居跡は、原遺跡の第21号・24号・25号住居跡とともに型式学的には加曾利EⅠ式最古段階の資料を含み、時間的に下降する可能性もあるが、関東西部・下総方面を対比すると、この段階に含まれ、東関東的な色彩が強い土器組成として、原遺跡とは背景を異にするようである。

第Ⅳ段階は、加曾利EⅠ式の古い部分で、いわゆる確立したEⅠ式段階とも言い換えられる時期の住居跡である。かつて、前段階を含めて加曾利EⅠ式古段階を設定してきたが、上記の経緯から区分して考えるべきであろう。



第162号 原遺跡の集落変遷

第Ⅰ段階から第Ⅲ段階にかけての住居域が、谷地形の西側に展開していたのに対し、この時期では一転して谷地形を取り囲むように住居が配置されており、それまでと集落配置が相違することは明らかである。

第Ⅴ段階は加曾利EⅠ式の新しい時期に相当する。加曾利EⅠ式の古い部分とは遺構配置を異にし、それまでの住居域に戻っているようにもみられ、第Ⅱ段階とほぼ等しい範囲に住居が散在している状況であるが、部分的には近接した範囲で同時期と考えられる住居跡が検出されていることから、比較的短期間に建て替えが行われた可能性を示している。またこの部分は、後続するⅥ期以降に住居跡が集中する部分でもある。特にこの段階の集中区域は第Ⅲ段階の住居配置よりも内側に形成されていることに注目したい。

第Ⅵ段階は加曾利EⅡ式の古い部分に相当する段階である。この時期の住居跡も谷地形の西側に展開しているが、調査範囲で検出された最北端にあたる第2次調査第12号住居跡や、最西端の第4号住居跡の存在に見られるように、住居配置がそれまでと比較して大きな広がりを見せている。住居跡内からの出土遺物に恵まれ、時期が確定した住居跡が多いことも特徴である。もっとも、全体でみると住居跡の密度は、さほど濃密とはいえない。第6次調査区域と接するAN~AP-15~17グリッド間ではやや住居跡が集中する傾向が見られるが、この範囲以外では第Ⅴ段階と同様に密度は希薄であった。もっともこの範囲には時期が確定できなかった住居跡や土壌が数多く存在するため、前後の時期での有機的な関係を把握することが難しい。

第Ⅶ段階は加曾利EⅡ式の新しい部分で、連瓦文土器を伴出する段階である。第1次調査第13号住居跡は、第Ⅲ段階相当が混在しており、扱いが難しいが、この段階に相当するとすれば、住居跡の配置は

前段階とは再度様相を変え、谷地形を挟んで調査区域全体に散漫な広がりをもっていることになる。この段階で、谷の西側を中心にした環状集落の形態が崩れてきたことがわかる。

第Ⅷ段階は磨消縄文を特徴とする土器群で、加曾利EⅢ式の古い部分に相当する段階である。住居域は同様に谷地形の西側に3軒の住居跡が散見するのみで、原遺跡ではそれまでの集落形成が、この段階にいたって急速に分散化していった傾向が窺える。今回報告した戸崎前遺跡や築師堂根遺跡では、この時期の住居跡が発見されている。向原遺跡でもこの時期の住居が報告されているほか、戸崎前遺跡では、前回報告の資料を総合すると、この時期を主体とした遺跡であり、原遺跡での住居数の縮小化と周辺遺跡での出現とが歩調を合わせているようである。対岸の北遺跡でも、調査範囲が環状集落の西縁に限られているとはいえ、この傾向が窺える。

第Ⅸ段階は中期末様から後期初頭を含む段階である。4軒の住居跡が検出されているが、住居域は前段階とほぼ同じ範囲といえる。

谷地形の東側で検出された土壌は、遺物も少なく時期決定が難しいが、この中には堀之内Ⅰ式期の土壌が存在する。同時期の住居跡は、原遺跡では未検出で、わずかに戸崎前遺跡で検出されたに過ぎないことを付け加えておきたい。

原遺跡の住居変遷について簡単なまとめを行った。中~後期の遺構が分布する範囲は約100~120m程度であり、最終的な姿は、比較的規模の大きな環状集落ともいえる。しかし、各段階での住居配置には規模の大小や占地のズレなどが認められており、住居間の前後関係を微妙な時期差が介在するとしても、特に勝坂式末葉から加曾利EⅡ式期にかけては、中央に土壌や掘立柱建物跡を配した、計画的な住居配置を想起させる。今後、調査が進展することを期待して、事実関係の記述に留めたい。

3. 原遺跡出土土器について

1 加曾利E I式前後の土器群

今回の調査で検出された8軒の住居跡のうち、出土土器から時期が明確となるのは、わずかに3軒に過ぎない。このうち、第96号住居跡と第99号住居跡から出上した土器組成は、勝坂式から加曾利E式に移り変わる境目となる土器群であった。

既に触れたように、原遺跡は今回の調査で既に7次を数えており、6次までの調査部分については報告書も刊行されている(細田 1985、村出 1997、黒坂 2001)。ここでは、今までの調査成果を加味するとともに、対岸に位置する北遺跡の資料を併せて、この時期の土器群に関して、簡単にまとめることにしたい。

第163図に今回の調査で出土した第96号・99号住居跡出土土器を中心に、前後の時期と考えられる既報告の第1次調査3号住居跡、及び第5次調査13号住居跡、北遺跡第50号住居跡出土土器を掲載した。

原遺跡では、今までの調査区域と出土土器からみて、おおよそ阿玉台Ⅱ式段階から集落が形成され始めることが判っている。続く阿玉台Ⅲ式段階でも住居跡の軒数は極めて少なく、第158図1～3に示した第1次調査第3号住居跡出土土器群、及び藤内Ⅰ式段階とされた第7a号住居跡の2軒だけである。

今回問題とされるのは、第13号住居跡下層、第96号・99号住居跡と第13号住居跡上層出土土器群にみられる組成とそれらの時間的な前後関係である。

第158図5～10が第13号住居跡下層出土土器、同図11～21が第99号住居跡、22～25が第96号住居跡出土土器である。

第13号住居跡出土土器は、5～6のように、口縁無文部幅が広く、下方から巻き上がる渦巻文や、6のような大木8a式と関連する横S字状文の土器と共に、左右非対称突起の系統をもつ円筒系の土器や、同じ文様構成で鉢形の8がある。9の交互刺突文と渦巻文が配されたモチーフは、浅鉢形土器の口縁部

や胴上半部に多用されており、円筒形の深鉢形土器では縦位区画内や、主文様間の充填文としても採用されている。東関東では、勝坂色の強い、中峠式とされる幅狭い口縁部をもつ土器では、口縁部の眼鏡状突起間に施文される主要なモチーフのひとつとなっている。

第99号住居跡出土土器のうち11は炉体土器で、胴下部が欠損しているが、文様形態等から、阿玉台Ⅲ式並行期と見られる。

12～21は全て覆土内から出土した土器群である。12は口縁部が強く張る4単位波状のキャリパー形土器で、隆帯区画間に鋸歯状と楕円文を組み合わせた隆帯文で文様構成された土器である。文様構成は第6次A Q-15グリッド土器集中区出土土器に等しい。13は非常に幅の狭い口縁部文様帯の土器で。器形は阿玉台式を想起させる深鉢である。ほとんどの資料が後述する白耕地(Ⅰ)遺跡第34号住居跡の範疇に含まれる組成と考えられるが、覆土内からは、小破片ながら加曾利E I式古段階の資料もあることから、17のような資料が、型式学的にみて下る可能性がある。

第96号住居跡出土土器も第99号住居跡と同じような様相を示し、円筒形の22～23の資料と、24のいわゆる多喜窪タイプとされる土器を含む組成である。24はタイプが異なる土器で、第99号住居跡12に類似し、狐塚遺跡第3号住居跡(服部 1971)にも近い様相をもった土器といえよう。25の資料は隆帯が沈線に置き換えられた文様である。隆帯文では十字状のモチーフをもつ土器がしばしば認められる。まます上遺跡第5c号住居跡(金子 2001)、行司免遺跡第296号住居跡(植木 1988)、膳棚遺跡第12号住居跡(岩井ほか 1970)で出土しており、後述するように、加曾利E I式出現期と絡む土器である。

隆帯の沈線化には、大木式の影響を考慮すべきであろう。

第163図24に類似した資料には、関東西部で加曾利EⅠ式古段階の資料を伴い、多喜窪タイプが出土する組成に酷似した資料がある。松ノ木遺跡第30号住居跡出土土器(荒井ほか 1980)には、円筒形の胴部で口縁部がラッパ状に開く、加曾利EⅠ式古段階の土器を伴っていることから、時期的に下がる可能性があるといえる。

原遺跡は、加曾利EⅠ式古段階の良好な一括資料にも恵まれている。27が第24号住居跡、28～31が第21号住居跡出土土器、32～35が第25号住居跡出土土器である。27～29はいずれも背割れ状の隆帯によって横S字状の連接からなる文様構成で、たとえば第13号住居跡下層出土の6に、系統的にも後続することは明らかである。第25号住居跡はまた組成や系統が異なっており、32は器形では13からの連続性がうかがえるものの、口縁部文様は9の省略とみられる。胴部文様は円筒器形の系統にある34と同様に大木8a式系の田の字状文で、岩の上遺跡第24号住居跡出土土器の組成中に含まれ、時期的にも同じ段階と考えられる。35にある無文頸部は個体差と考えられ、時期区分の示標とはなり得ないことは、この時期前後の土器群の変遷過程からも明らかである。

原遺跡の対岸にあたる北遺跡第50号住居跡出土土器(金子 1987)は、原遺跡とはまた異なった組成を持つことで注目される。

第160図20～29が北遺跡第50号住居跡出土土器である。22の口縁部文様は第158図28の原遺跡第21号住居跡出土土器との類似性が強く、この個体については同時期と考えて差し支えないであろう。原遺跡出土土器がやや関東西部寄りの様相であるのに対し、北遺跡第50号住居跡出土土器は、26の三条1単位の隆帯による横S字文の描出手法や27～29の土器に見られる突起や幅広い口縁部などには、北関東的あるいは東関東的な様相が窺える。図示していないが、原遺跡第1次調査第8号住居跡出土の炉体土器(細田 1985)は、突起の形態が北遺跡第50号住居跡出土土器の一部と酷似していることから、この段階と

考えられるが、伴出土器や他地域の状況を見ると、時期的にさらに下降する可能性も考えられる。

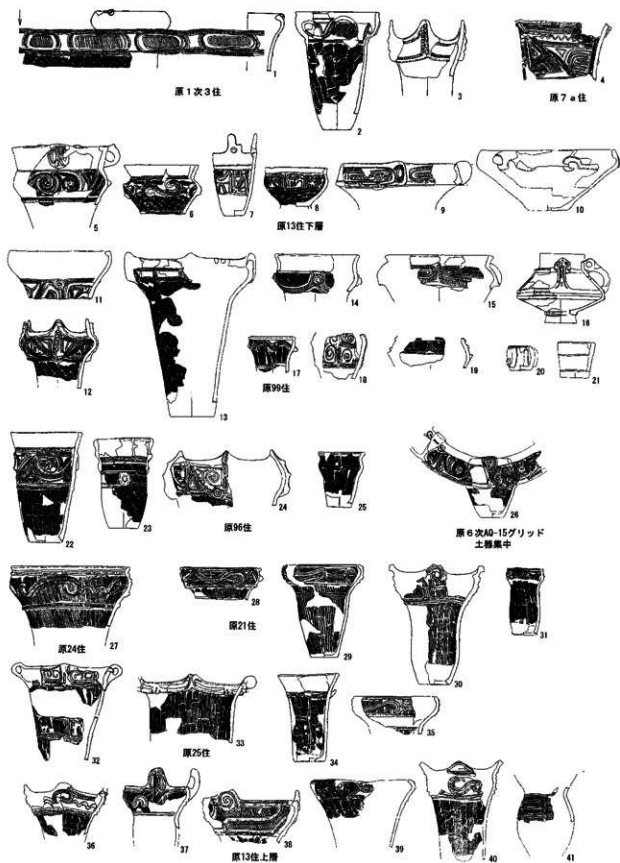
20は中鉢式を構成する北50住型とされる土器(大村 1998)であるが、三原田式の変遷上に位置付けられるべき資料で、たとえば三原田遺跡8-9号住居跡出土土器(赤山 1980)との関連で考えられる資料であろう。25の土器は連続する鋸歯文間に渦巻き文と単沈線文が施文された土器で、文様構成は加曾利EⅠ式古段階と伴出した、まます遺跡第5c号住居跡(金子 2001)出土の勝坂系深鉢形土器に類似し、櫛曲文前段階に位置することは明らかである。この文様構成が、第160図13の子和清水貝塚第240号住居跡出土土器に酷似している点は重視されるべきであろう。

第163図36～41が第13号住居跡の上層から出土した組成で、原遺跡では他に比較できる資料がない。38は東関東的加曾利EⅠ式で、41の曾利Ⅰ式を含め、隣接する花積貝塚2A号住居跡(下村 1970)に通じる組成を示すことから、第21号・24号・25号住居跡出土土器群に後続する位置づけが与えられる。

ここでは図示していないが、今回の調査で出土した第100号住居跡出土土器も、概ねこの段階と考えられる。

2 周辺地域の様相

原遺跡出土土器のうち、阿玉台Ⅲ段階について比較してみよう。第3号住居跡出土土器は偏りが強く比較素材としての適正さを欠く。隣接する北遺跡ではこの時期の資料が少ない。隣接地域では下加遺跡第16号住居跡出土土器が明確である。2号ピットの組成は阿玉台Ⅲ式を含み、貫井南遺跡6号住居跡(我孫子 1974)、湯坂遺跡T1-V区土壌(海老原 1979)、大谷津A遺跡65号住居跡(鈴木ほか 1985)に連なる段階設定が可能で、4単位大波状口縁と胴部文様の形態などから、同一段階としての把握が可能となり、当該地域では、これらに後続する土器群の把握が問題となる。



第163図 原遺跡出土土器

南関東ではこの時期以降では、遺跡・遺構ごとに変容の幅が大きく、いわば加曾利EⅠ式出現前夜にかけての勝坂式の大きな変容期であるともいえる。

かつて、中期の土器群を検討した際に、阿玉台Ⅲ式併行期を井戸尻Ⅰ式、勝坂終末期を井戸尻Ⅱ式として時期区分を行った（谷井ほか 1982）。現在でもこの段階設定が大きく異なることはないと考えられるが、加曾利EⅠ出現期における多喜窪タイプの出現や勝坂系の残存、北一東関東での焼町・三原田・中峠式の出現とその後の変遷にかかわる時間的な前後関係の整合性など、今日においても多岐にわたって課題が山積している。

第164図1～14の台耕地（I）遺跡第34号住居跡出土土器（鈴木 1983）は、加曾利E式直前の井戸尻Ⅱ式段階の土器群である。原遺跡第13号住居跡下層出土土器に対比される良好な組成をもっており、勝坂式終末期における、三原田式や中峠式あるいは焼町土器を語る上での基準資料である。この中には、口縁が無文で胴部にパネル系区画文を持つ樽形土器や、口縁部に文様を持つキャリパー形土器、円筒形土器などがあり、台耕地型や中峠0地地形に近い土器が含まれている。口縁部文様には、接続部が渦巻状に突出するS字状文、単独のS字状文、下方から巻き上がる渦巻文など多様である。文様構成上ではいわゆる中峠式に関連性が強いと考えられる。これらの土器と共に、焼町タイプや阿玉台式などの影響によって変形した文様構成を持つ土器などがあり、個体や組成上でも複雑である。原遺跡出土第158図6が、台耕地（I）遺跡第159図8～9と器形を同じくするものの、文様配置や描出手法に系統差を感じさせる部分である。

群馬県を中心とする北関東地域では、比較対照となる一括資料に恵まれていることから、三原田式の変遷過程が追及されており（山下 1998）、台耕地（I）遺跡出土土器群と対比するとすれば、向吹張遺跡J8A号住居跡（羽鳥 1987）、三原田遺跡2-33号住居跡や行幸田山遺跡B区9号住居跡出土土器

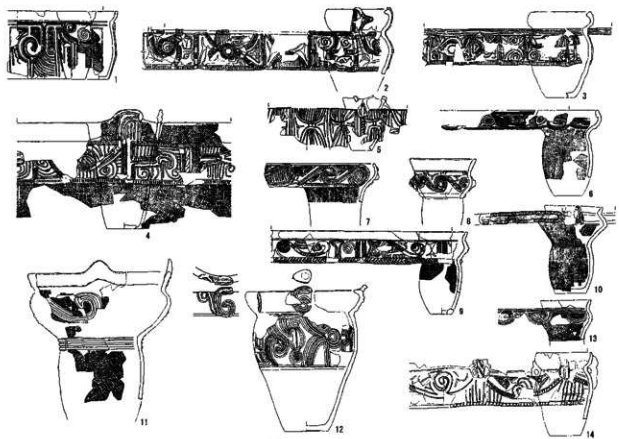
群（大塚ほか 1987）などが並行期の資料と考えられる。

関東西部の同時期と考えられる資料は多いが、一例として、第164図15～22に貫井南遺跡第5号住居跡の資料を掲載した。楢円区画文系の土器や樽形器形で胴部文様の土器、横S字状文が勝坂風に変形した土器などの組成である。勝坂式土器の胴部文様には、第164図17の胴下部の文様描出があり、台耕地（I）遺跡第159図14と同様に、中峠式や、焼町土器の古い部分の、充填施文を差し引いた骨格となる文様構成とも共通する部分がある。

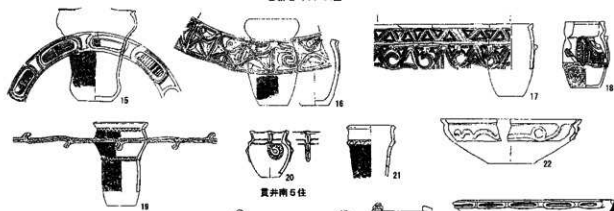
このなかで、口唇部から垂下する鎖状の隆帯をもつ20は、原遺跡第96号住居跡からも出土しており、いわゆる多喜窪タイプとされる土器の口頸屈曲部にしばしば施される鎖状の隆帯と共通する形態をもっている。系譜関係は判断しがたいが、先に触れた十字状の隆帯文をもつ土器の口唇部や、多喜窪タイプの口縁屈曲部に多用されることから、新しい要素と考えられるが、その時間差は僅少であろう。

行司免遺跡272号住居跡出土土器は、この点で興味深い組成である。一般的な円筒形深鉢形土器と、無文の口唇下が球形に張る土器があり、三原田式の最古段階とされる横S字を基調とした中空突起を有する土器とも共通する部分がありそうである。

新宮遺跡第89号土壌出土土器（志河内 1995）からは、3点の大型深鉢形土器を含んだ非常に興味深い土器組成である。第161図17～21が第89号土壌出土土器である。17は「く」の字状に屈曲する口縁部と外反する頸部をもつ深鉢で、口唇部には、環状や横S字状で4単位に配置される中空突起をもっている。系統関係はひとまず置くとして、湯坂遺跡TⅠ-V区土壌出土土器の組成中にみられるように、横S字文は木7b式～8a式古段階に主文様として定着していることから、17の資料は木7b式であると同時に、器形や分帯構成には阿玉台式が、立体的な装飾には三原田式が、頸部の接続した横S字文構成には原遺跡第13号住居跡下層出土土器のような



台棚地 (I) 34住



夏井南5住



東町二丁目

黒瀬12住

第164図 周辺地域の土器群 (1)

タイプが関与したものと考えられる。18は勝坂式終末に見られる器形で、屈曲した肩部に施文された文様は浅鉢に特有のものである。19の胴部破片は、台耕地（Ⅰ）遺跡第34号住居跡出土の、第164図12に酷似していると同時に、隆帯上に施された縄文には、阿玉台Ⅳ式との関連が考えられる資料である。

新宮遺跡では、図示した資料以外にも住居跡や土壇から良好な一括資料が出土している。13号住居跡から出土した土器群は、外反する幅広い無文部をもつ樽形の土器を含み、背割れ状の隆帯に刻み目や縄文が施文された資料がある。主文様間の充填も傾斜で、第89号土壇に類似した要素も認められることから、第23号住居跡に先行する位地付けが考えられるが、両者の時間差は僅少であると思われる。なお、第23号住居跡からは、焼町土器が出土しているが、組成的にも台耕地（Ⅰ）遺跡に後続することは明らかである。木曾呂表遺跡第2号住居跡（並木 1980）の時間的な位置をも問題とする資料である。

栃木県や茨城県にかけての関東北東部から東関東にかけては、阿玉台Ⅳ式と加曾利EⅠ式をつなぐ土器群として、中峠式が設定されてきた。栃木県では寺野東遺跡から中峠式とされる一括資料が報告されており、資料的にも充実しつつある。

ところでこの地域では、地理的な状況も反映してか、阿玉台Ⅳ式と中峠式とが共存する資料は多いとはいえない。しかしこの状況が直ちに時間差を明示する訳ではないことは、今までの資料からも推測されるところである。

第166図8～11は、添野遺跡34号土壇出土（1974）の一括資料で、8の阿玉台Ⅳ式と9と中峠式が共存した基準資料として評価されている。10はこの時期にしばしば伴う資料で、9の器形と文様構成を基準に、大木の隆帯を配したもので、阿玉台的な口縁部文様帯下端区画の突出傾向との共通性も窺える。11の資料も、新宮遺跡第89号土壇出土土器を介して同一段階の組成とみて差し支えないであろう。

寺野東遺跡第333号土壇（江原 1999）から出土

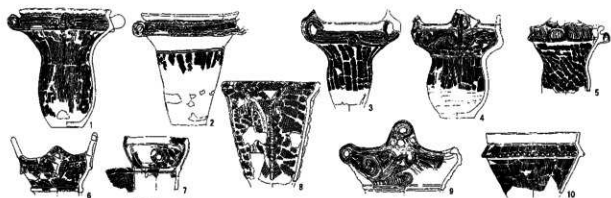
した土器群は多様で、この地域での状況をよく反映しているように思われる。第165図1～8が同土壇からの出土土器群である。原遺跡13号住居跡下層出土の第158図9と同様の文様が描かれた土器でも、4単位の眼鏡状突起を配し、突起間に対向する2単位の突起を配し、頸部に無文部をもつもの、口唇無文部から口縁部文様帯に連なる大突起間に、渦巻状の小突起を配したのもなど、突起と器面分割には大きく2つの傾向があり、第159図23の東町二丁目出土土器（濱野 1997）もこれらの系譜上にある土器といえよう。

この土壇から出土した6のY字状隆帯は、阿玉台式のL縁突起部の懸垂文に由来し、口縁部区画が省略されたものと思われ、阿玉台Ⅳ式との並行関係を暗示する部分であろう。ただし6にみられるように、大小を対向する把手の配置には、勝坂的な変形を受けていると考えられ、この土器が生成された背景が単純ではないことも物語るものといえる。

第165図9～10は、第443号土壇出土土器である。L縁部の文様構成充填手法などからみて、概ねこの段階の資料と思われるが、なお検討が必要である。

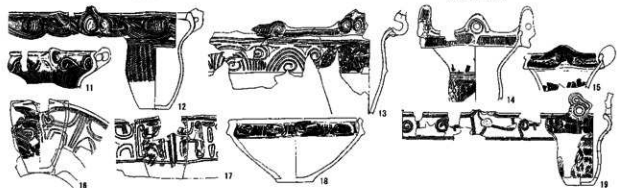
関東東部では、大谷津A遺跡第65号住居跡が阿玉台Ⅲ式段階の基準資料として知られており、伴出した大木系の土器には、表出手法は異なるものの、幅広い口縁部文様帯に4単位の横S字状隆帯文を配した土器が、湯坂遺跡TⅠ～Ⅴ区土壇出土土器と対比可能な資料と評価できる。実際、阿玉台Ⅲ式とⅣ式の区分には、個体や技法を中心とすると解釈が難しい場合も多いが、今回の資料で示した原遺跡第13号住居跡下層、第99号・96号住居跡出土土器に並行する井戸尻Ⅱ式段階を阿玉台Ⅳ式に、先行する井戸尻Ⅰ式段階を阿玉台Ⅲ式期と捕らえることで大枠は確定できるといえよう。第166図14～16は塩釜遺跡088号土壇出土土器（本田ほか 1979）であるが、15は楕円区画内に描かれたモチーフから、この時期の一括資料と判断した。

一般的に、阿玉台Ⅳ式に位地付けられる資料群で

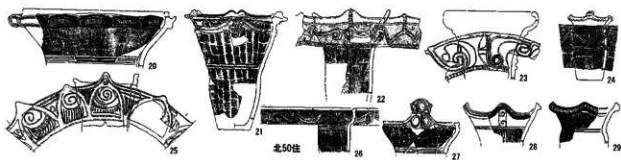


寺野東 S K333

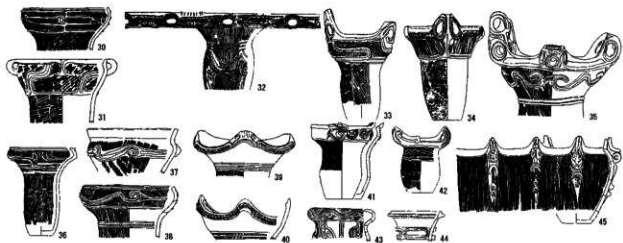
寺野東 S K443



子和清水240住



北50住



花糖2 A住

第165頁 周辺地域の土器群 (2)

は、大型の把手に比重が高く、口縁部文様帯幅が極めて狭く、下端区画の隆帯を下方にせり出すことによって均衡を保っている印象づけられる資料が多い。この点ではいわゆる三原田式や中峠式あるいは新宮遺跡第89号土壇出土土器などにも共通する部分があるといえる。また、口縁部文様帯に配置される文様が、同時期関東西部勝坂式の浅鉢形土器の文様と共通性が強いことも、文様帯幅が狭いために選択的に採用された可能性も考えられる。

阿玉台Ⅳ式と勝坂系の様相を色濃く反映した中峠式が共存関係に乏しい現象は、関東東部地域でも広く認められるようである。前田村遺跡は、阿玉台Ⅲ式から加曾利Ⅴ式にかけての大規模な集落である。浜野遺跡第34号土壇と対比する部分として、第161図12~13にG・H・I区—2862号土壇出土土器（吹野ほか 1999）を掲載したが、このほかにも同時期の多くの遺構出土資料がある。C・D・E区—1092号土壇出土土器（横堀 1997）はやや特異で、阿玉台式の基本的な文様帯構成をもちつつ、口縁部文様帯が、把手下で楕円区画を形成する個体があり、槻木沢遺跡17H炉下ピット出土土器（海老原 1980）を通して、いわゆる三原田式へ接近する系譜関係を暗示するともいえる組成を持っている。実際、阿玉台Ⅳ式とされる土器には、口縁部に4単位と想定される突出傾向の強い楕円区画が配される例が多いことは注意すべき現象であろうし、同時に北関東での中空突起の作出技法にも、横S字状と楕円の二つのタイプが存在していることから、大木式を介した勝坂式や阿玉台式との系統関係を改めて整理してゆく必要がある。

御城田遺跡第217号土壇出土土器群（芹澤 1986）は、阿玉台Ⅳ式、勝坂式、大木8a式、中峠式などの組成からなり、浜野遺跡出土土器と共に、この地域での並行関係を明瞭に示す組成である。

御城田遺跡第463号土壇出土土器は、第217号土壇に後続するものと考えられ、周辺地域の状況をも勘案する必要があるようである。

阿玉台Ⅳ式では沈線により分割した背割れの隆帯はほとんど認められないが、中台遺跡804号土壇出土土器（吉川ほか 1995）は、部分的にこの手法を持っており、刻みを施す点など、寺野東遺跡第333号土壇出土土器と近い印象を受ける資料がある。

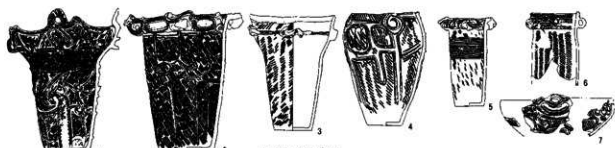
鍛冶台遺跡第7号土壇出土土器（風間 1993）、同遺跡第19号土壇出土土器には、寺野東遺跡第333号土壇出土土器に酷似した資料を含むことから、ほぼ同じ段階の資料と考えて差し支えないであろう。また、阿玉台Ⅳ式の口縁部にしばしば施される縦位沈線も、両者の時間的な近似性をうかがわせる部分である。

村田貝塚出土土器は阿玉台Ⅳ式設定の基準資料となった資料（西村 1984）で、浜野遺跡第34号土壇出土土器に酷似しているが、以上の検討結果からみて、加曾利Ⅴ式直前段とⅤ式の最も古い段階に並行する資料が含まれていることは確実であろう。

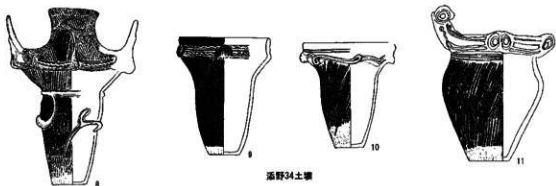
このような観点から、広義の中峠式とされる土器には、勝坂式終末である井戸尻Ⅱ式段階に並行する部分があることは確実である。

ここで問題となる資料が、第166図11~19に示した、子と清水貝塚第240号住居跡出土土器（松戸市 1978）である。この資料には、12のような古いと思われる要素をもつ土器があり、すべてを同時期と捉えることにも問題を残しているが、たとえば北遺跡50号住居跡出土の165図25と同図の子と清水貝塚13の胴部文様、同図北遺跡27と子と清水13の突起の類似性、原遺跡第13号住居跡下層出土土器を中心とした、原遺跡第21号住居跡や北遺跡第50号住居跡との型式学的距離をみると、子と清水貝塚出土土器と寺野東遺跡第333号土壇出土土器との時間差を想定せざるを得ない。同様に寺野東遺跡第333号土壇と第385号・530号土壇出土土器との差異も問題となろう。

14は阿玉台式の系統上にあると考えられ、一例とした塩釜遺跡第088号土壇出土の第161図14と、器形や文様帯配置に近似性が伺える資料であるが、組成から見れば同時期とみなすことには無理であろう。



瀬戸17H炉下ピット

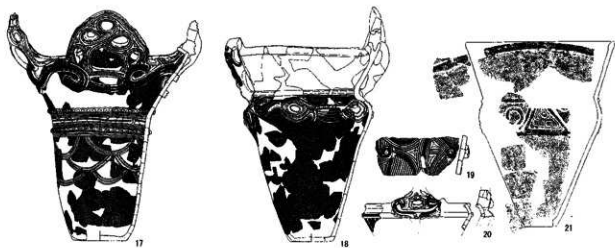


浜野34土壙



前田村G・H・I 2862土壙

塚番088土壙



新宮80土壙

第166回 周辺地域の土器群 (3)

また、子和清水貝塚出土の13のように、胴中で屈曲する器形は、加曾利EⅠ式に伴うものと考えられ、19の口縁部文様も、同種の胴部上半のモチーフや、北遺跡23に近いことから、蓋然性が高いと考えられる。実際、関東東部でも、阿玉台Ⅳ式と加曾利EⅠ式を除くと、広義中峠式の範囲で捉えられる資料が多く、この範囲での時間差を想定できる資料が少なからず存在するようと思われる。なお、関東東部では、子和清水貝塚第55号住居跡や、中台遺跡482号土塊、718号土塊出土土器、寺野東遺跡第578号土塊出土土器のように、交互刺突文をもち、区画内に密な縦沈線を充填したり三叉文を施文するなど、手法的に古相の土器群が伴っているが、混在とは考えにくく、共存資料などからみても、花積2A号住居跡段階まで存続することは確実である。

武蔵野台地にある膳棚遺跡第12号住居跡出土土器(岩井ほか 1970)は、炉体が中峠式で、覆土出土土器が勝坂終末期の土器群と捉えてきた。加曾利EⅠ式を含まないことから、この地域での勝坂式終末を代表する組成と考えられている。しかし覆土出土土器に北遺跡第50号住居跡や岩の上遺跡第24号住居跡と類似する部分があり、総じて前段階の土器群とは組成が大きく異なっていることは明らかである。炉体土器の時期に問題は残るが、加曾利EⅠ式古段階に下がる可能性が指摘されている(金子 2001)。

膳棚遺跡第12号住居跡炉体土器に良く似た資料として、御城田遺跡第463号土塊出土の2個体の土器があげられる。関東西部で類似資料を検索すると、行司免遺跡をはじめとして、井戸尻Ⅱ式段階から外れた土器群である。同遺跡では、第217号土塊からも良好な組成が報告されており、後者には阿玉台Ⅳ式や中峠式、勝坂式、大木8a式が含まれていることから、時期的に揃った良好な一括資料と言える。両土塊出土土器との間に時間差が存在するならば、膳棚遺跡第12号住居跡出土土器群も、新しい段階に下がる可能性が高い土器といえる。実際、炉体土器に見られる箱状突起を、井戸尻Ⅱ式段階に位置付け

るには困難を伴うように思われる。ここでいう新しい段階とは、加曾利EⅠ式の最も古い段階を指し、かつて中期土器の再編を考察した時点で設定された中期第Ⅰa期から、新しい様相を示す花積貝塚2A号住居跡出土土器を差し引いた段階と捉えることができよう。最古段階を加曾利EⅠ式に含めるか否か問題も残るが、中峠式や三原田式とされる土器群に時間差を伴う一括資料があり、かつ井戸尻Ⅱ式とその直後段階に区分される可能性が高いことから見ても、それらの起源を加曾利EⅠ式からと捉えることには無理が生じる。

原遺跡出土土器を素材として、周辺地域の様相を遺構一括資料をもとに検討してみた。その結果、広義中峠式とされる土器群には、勝坂式終末と、加曾利EⅠ式と並行する部分とに細分される可能性が考えられた。

先に触れたように、原遺跡第13号住居跡下層出土土器と、今回報告した第99号・96号住居跡出土土器に後続し、従来加曾利EⅠ式と設定してきた土器群には、北遺跡第50号住居跡出土土器を加味して、2段階に区分し、第13号住居跡上層出土土器が、花積貝塚2A号住居跡に並行するものと考えられる。従って加曾利EⅠ式最古段階のキャリパー形土器では、関東全域に普遍化しておらず、殆どが井戸尻Ⅱ式段階の勝坂的な要素を引き継いでおり、遺構内では混在も認められることから、区分が難しい。

花積2A号住居跡段階でクランク文の土器が広く定着しており、土器組成でも類似性が強いことから、ここから加曾利EⅠ式として普遍化する段階といえよう。大村が指摘した加曾利EⅠ式(大村 1998)は、この段階と考えられる。大村では浄法寺タイプ(塚本 1997)もこの段階からといえる。

今回の検討に当たっては、遺構一括資料を基準として検討を加えた。資料中には時期差と考えられるものも存在し、すべてが同一時期と捉えられないことは明らかで、更なる検討が必要である。対象とした僅かな資料でも、多様な要素に翻弄され、焦点を

絞りきれない状態で、改めて加曾利EⅠ式成立期前 課題も多く、機会を改めて検討してみたい。
後の複雑な状況を再確認した次第である。残された

引用・参考文献

- 青木幸一 1994 「大瀬山田台遺跡群Ⅰ—縄文時代編—」山武郡市文化財センター発掘調査報告書第16集
- 赤石光資 1984 「八沼遺跡—第1～3次調査—」上尾市文化財調査報告書第21集
- 赤山啓造 1990 「三原田遺跡」群馬県企業局
- 浅利幸一 1988 「諏訪古墳群」市原市文化財センター年報昭和61年度
- 我孫子昭二 1974 「貫井南遺跡」小金井市貫井南遺跡調査会
- 荒井幹夫ほか 1980 「松ノ木遺跡第2地点発掘調査報告書」富士見市遺跡調査会
- 伊藤博司ほか 1998 「駒木野遺跡発掘調査報告書」青梅市遺跡調査会
- 岩井住男ほか 1970 「膳櫃」「鳳翔」7 埼玉大学考古学会
- 橋本 弘 1980 「埼玉県比企郡嵐山町金平遺跡」嵐山町教育委員会
- 橋本 弘 1988 「行司免遺跡」嵐山町遺跡調査会報告5
- 江原 英 1999 「守野東遺跡Ⅱ」栃木県埋蔵文化財調査報告書第234集
- 海老原郁夫 1979 「湯坂遺跡」栃木県考古学会
- 海老原郁夫 1980 「槻沢遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告書第34集
- 大塚昌彦ほか 1987 「行幸田山遺跡」渋川市発掘調査報告書第12集
- 大塚道則 2000 「稲荷台遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第239集
- 大村 裕 1998 「中峠式土器の再検討」第11回縄文セミナー資料集
- 風間和秀ほか 1993 「鹿島神宮駅北都埋蔵文化財調査報告Ⅴ 鍬治台遺跡」鹿島町の文化財台76集
- 金子直行 1984 「明花向・明花上ノ台・井沼方馬塚・とうのこし」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集
- 金子直行 1987 「北・八幡谷・相野谷」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第66集
- 金子直行 2000 「野崎式土器の成立について—一条旗文系土器群成立期の型式学的な系統整理を中心として—」土曜考古第24号
- 金子直行 2001 「まま上遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第242集
- 栗原文蔵ほか 1973 「岩の上・雉子山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第1集
- 黒坂節二 2001 「原遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第269集
- 恋河内昭彦 1995 「南共和・新宮遺跡」児玉町遺跡調査会報告書第6・7集
- 越川敏夫 1991 「草毛Ⅱ遺跡」昭和63年度・平成元年度事業報告Ⅰ 香取郡市文化財センター
- 越川敏夫 1991 「白阿らく遺跡」昭和63年度・平成元年度事業報告Ⅰ 香取郡市文化財センター
- 小宮山克己 1994 「呼古遺跡—第2次調査—」上尾市遺跡調査会調査報告書第13集
- 下村克彦 1970 「花積貝塚発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告15
- 白井久美子 1994 「草刈六之台遺跡」千原台ニュータウンⅥ 千葉県文化財センター調査報告第241集
- 鈴木敏昭 1983 「台耕地（Ⅰ）」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第27集
- 鈴木春治ほか 1985 「大谷津A遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告書第28集
- 芹澤清八 1986 「御城田」栃木県埋蔵文化財発掘調査報告書第68集

- 高橋 誠 2002 「城山ノ作遺跡」印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第196集
- 谷井 彪ほか 1982 「縄文中期上器群の再編」埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要1982
- 塚本師也 1997 「浄法寺遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第196集
- 中村寛弘 1999 「飛ノ台貝塚第4次発掘調査報告書」船橋市教育委員会
- 並木 隆 1980 「木曾呂衣遺跡」川口市教育委員会
- 長谷川福次 1997 「六反田遺跡Ⅱ」北橋村埋蔵文化財発掘調査報告書第22集
- 長谷川福次ほか 2001 「道訓前遺跡」北橋村埋蔵文化財発掘調査報告書第30集
- 西村正衛 1984 「石器時代における利根川下流域の研究」早稲田大学出版部
- 服部敬史 1971 「東京都狐塚遺跡の調査」『長野県考古学会誌』11
- 羽鳥政彦 1986 「向吹張・岩之下・田中・富居遺跡」富士見村教育委員会
- 埴 静夫ほか 1974 「添野遺跡の研究」市貝町教育委員会
- 清野美代子 1997 「東町二丁目遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第186集
- 吹野富美夫ほか 1999 「前田村遺跡G・H・I区」茨城県教育財団文化財調査報告第146集
- 細田 勝 1985 「原・丸山」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第42集
- 本田 勉ほか 1979 「狐塚遺跡発掘調査概報」鹿島町の文化財第9集
- 牧野光隆 2001 「市原市新井花和田遺跡」市原市文化財センター調査報告書第74集
- 松戸市教育委員会 1978 「了和清水貝塚」松戸市文化財調査報告第8集
- 三浦圭介 1990 「中野平遺跡」青森県教育委員会
- 水口由紀子 1998 「榮師堂根遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第200集
- 宮崎朝雄ほか 1972 「加倉・西原・馬込・平林寺」埼玉県遺跡調査会報告第14集
- 村田章人 1997 「原/谷畑」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第179集
- 安井健一 1994 「沼南町石掘遺跡」千葉県文化財センター調査報告第255集
- 山崎洋一ほか 1988 「下加遺跡発掘調査報告」大宮市遺跡調査会報告第21集
- 山下歳信 1998 「群馬県の中期中葉から後葉の様相」第11回縄文セミナー資料集
- 築瀬裕一 2001 「奥房台遺跡」千葉市文化財調査協会年報13
- 山崎広幸 1991 「順山遺跡—第2次調査—」上尾市文化財調査報告第36集
- 山村好文 1985 「平賀」平賀遺跡群発掘調査会
- 横川好富 1971 「諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡発掘調査報告」埼玉県遺跡調査報告第8集
- 堀 孝徳 1997 「前山村遺跡C・D・E区」茨城県教育財団文化財調査報告第116集
- 吉川明宏ほか 1995 「中台遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告第102集
- 相田雄次 1981 「南守谷地区上地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財団文化財調査報告書